續隨筆明治文學

柳田泉著

春秋社版

はしがき

隨筆明治文學を出すときに、そのうち續篇を出すかも知れぬといつて置いたが、私のつもりでは、出すにしても『政治小說研究』の下卷を出してからにしたいと思つてゐた。ところがその下卷がなかなか進捗せず、今年一杯かゝりさうな形勢である。そこで考へ直して此の篇を先に出すことにした。

內容の分類も、正編と同じやうに、政治、文學、人物と三部立てにしたいと思つたが、政治の方が少し此の篇に入れかねるものが多かつたのと、紙數の關係とで思ひきつて政治篇を止めにし、そこで文學篇を研究篇と改めて、研究篇、人物篇の二部立てにしてみた。正編の時入れるべくして入れ遺したものも少しあるが、大體は正編刊行後執筆したものが多い。

研究篇所收のものにしても、人物篇の人物關係の資料にしても、それを執筆してから後に多少考への變つたところもあり、追加をする必要の生じたのもあり、又新資料を入手したのもある。從つて、或るものは、發表當時に比して見違へる程訂正したものもある。人物傳で、例へば鳥山啓の傳の如きは、その後いろいろな事柄を敎はつたり見付けたりしたので、書き直した方がいゝのだが、もう間に合はぬので、大體元のまゝにしてある。かういふものは、何かの機に訂正增補することにしたい。

『政治小說』下卷も、最近福地櫻痴の項を執筆し終つたので、もうヤマを越した。櫻痴だけでも約四百枚になる。それに櫻痴執筆の途中で、餘儀ない事情から坪内逍遙傳の方にかゝつた爲め、折角頭の中に蓄へてあつた小說の筋書なども忘れたものが多く、荒筋のノートを取り直したり、作物を讀み直したり、二重手間をしてゐるうち時間ばかり經つてしまつたので、上、中兩卷の愛讀者諸氏には大變失禮したと思つてゐる。然しさう云ふ次第で、もう櫻痴を終つたから、峠が見えた、あと幾干もなく脫稿することは、受合ひである。こゝ暫らく御猶豫を乞ふ。そこでその間の退屈しのぎに、この續隨筆明治文學を御愛讀下されば、著者の幸甚、何ものか之に如かんやである。

昭和十三年夏七月

柳　田　泉識

目次

研究篇

人物篇

研究篇

「百學連環」に現れたる文學知識

一、西周と「百學連環」

西周が西洋哲學移入の先驅者として明治哲學界に多大の貢献をしたのは、世間定評のあることで、事新しくいふまでもないが、彼は實に多方面な人物で、その專門といふべき哲學法學經濟學の外に、文學知識の移入についても種々の功績があり、明治初期文學發達史上、到底彼の名を逸することが出來ない。それは嘗て拙著『飜譯文學の研究』中の西周關係の項でもその一斑を說いて置いた。又彼の「美妙學說」の論は最近全文が發見せられて吾等を驚かしたものである。今こゝで紹介しようといふ「百學連環」中の文學知識の如きも亦、西周の文學的貢献の最大なるものゝ一つでなければならない。

私の意では、「百學連環」中の文學關係の條をそのまゝ文献として紹介したいのであるが、その前に、解題代りに此の「百學連環」といふ著作について數言したい。

「百學連環」などゝ難しくいふと大變奇妙なグロテスクな題名にうけ取られるが、然しこれは英語のエンサイクロペヂアの譯名だといつたら、諸君は吃驚するであらう。然しエンサイクロペヂアといつ

ても、普通見られる大百科辭典式のエンサイクロペヂアとは少々趣きを異にしてゐる。これは西周が獨自の立場から自分の頭で「百學」を系統づけて「連環」式に纒め上げて、オーギュスト・コムトの向ふを張る程の意氣を示したものである。

「百學連環」を說明するには、何うしても西周の私塾育英舍のことを說かなければならない。

西周は幕府瓦解後、德川氏と共に靜岡に移り、沼津兵學校を主宰してゐたが、明治三年新政府に召されて東京に移り（兵部省出仕）、十月居を淺草鳥越にトした。然るに沼津時代の門生その他の彼を慕つて來り學ぶ者が漸く多くなつたので、遂に公務の傍私塾を開いて、集つて來る青年子弟を團體的に敎育しなくてはならなくなつた。そこで此の年十一月に入つて私塾開設の運びもつき、こゝに育英舍なるものが出來上つたのである。西周はこゝで青年に理想的敎育を施さうと考へ、漢學、英語、筆算等の諸科を整然と備へ、敎育といふものゝ主旨を明示して、嚴重な訓練を施したものである。彼は所定の學科の外に、別に每月六回特別講義を開き、西洋文明の粹たる諸學について鳥瞰圖的な概念を與へようとかゝつた。この講義が卽ち「百學連環」なるものであつた。勿論、刊行されたものではなく、講義の筆記であるから寫本で傳はつてゐる。聞いた人が多勢だけに、その寫本も種々な人の手になつたものが幾通りかあるといふが、先づ最も完備してゐるものが、西の高弟格たる福井藩士永見裕の筆記であるといはれてゐる。育英舍は明治三年から六年頃まで續いたといふから、「百學連環」も此

間に成つたものであらうことが推察される。

此の「百學連環」は、部分的に離していへば、西洋諸學科の不完全な紹介といふだけであるが、その一個の體系的な知識を示したものとしては、西周の知識の總目錄であり總索引であり、從つて西周の業績と發展を辿るためには、實に貴重な資料であるばかりでなく、當時の啓蒙時代に西洋文明の新知識を系統的集積的に紹介した點で、小規模ながら「第十八世紀フランスのアンシクロペヂストの事業と、本質に於て同樣の意義を有する。先づ第一に兩者は共に啓蒙的である。知識の範圍も愕くほど廣汎に亘つてゐる。さまで深くはなくても一切を網羅しようとしてゐる。最後に方法的にも兩者は共に粗笨ながら唯物的傾向をとつてゐる。これ等の諸點は兩者の根本的類似性を顯はすものと見ることが出來る。（中略）斯る厖大な企圖が一個人の仕事として果されてゐたことは一つの驚きに値するであらう」（『西周哲學著作集』解說、麻生義輝氏）。

「百學連環」はエンサイクロペヂア（Encyclopaedia）の譯であることは、前記の通りであるが、西周はこの講義を準備するに當つて、英國出版の Encyclopaedia of Political Science に據るところがあつたらしく暗示してゐる。然し「百學連環」はこの英書の譯述といふのではない。東洋の事例が澤山入つて、西周獨自の立場から系統立てられたことが明瞭に分つてゐる。然し本文に引用してゐる諸學の定義の英文などは、或は右の Encyclopaedia のをそのまま引用してゐるかも知れない。勿論西

周がこの Encyclopaedia を使つたにしても、そればかりによつたものではなく、他に幾多の參考書を利用したことは、いふまでもなからう。左に「百學連環」の全系統の組織を示して置く。

百學連環（Encyclopaedia）

總　論（Introduction）

第一編　普通學（Common Science）

第一章　歴　史（History）

正　史（History）

編年史（Chronicle）

年歴箋（Annals）

（附載）第一、傳（Biography）

第二、年表（Chronology）

第三、年契（Synchronology）

第四、稗史（Romance）

第五、小説（Fable）

諸　語（Apologue）

蒭　辭（Parable）

第六、古傳（Mythology）

史　料（記錄、傳）

記　錄（Document）

傳　（Anecdote）

萬國史、各國史

古史、中世史、輓近史

通古學（考古學）Archaeology

第二章　地理學（Geography）

數學上地理學（Mathematical Geography or Astronomical Geography）

物理上地理學（Physical Geography）

政事上地理學（Political Geography）

第三章　文章學（Literature or Belle-Lettres）

語典（Grammar）

一、音法（Orthography）

二、語法（Etymology）

三、句法（Syntax）

四、韵法（Prosody）

形象學（Hieroglyphy）

一、會意

二、諧聲

三、轉注、處事

死語、生語

文辭學（Rhetoric）

一、指斥體（Demonstrative）

二、深慮體（Deliberative）

三、辨斥體（Judicial）

鑒裁術（Criticism）

語原學（Philology）

詩　學（Poetry）

一、詩　篇（Verse）

二、雅、頌、風、賦、比、興

三、賦詠體（Epic）

風騷體（Lyric）

雜　體（Lyrico-Epic）

循環體（Dramatic）

四、頌（Psalm）

偈（Hymn）

詩　餘（Ode）

狂　詩（Satire）

五、擬　似（Imitation）

第四章　數　學

單純數學（Pure Mathematics）

適用數學（Applied——）

算　術（Arithmetics）

幾何學（Geometry）

三角法（Trigonometry）

分解學（Analysis）

第一、點　竄（Algebra）

第二、分解法上幾何學（Analytical Geometry）

第三、微分算法（Differential Calculus）

第二編　殊別學（Particular Science）

第一章　心理上學（Intellectual Science）

神理學（Theology）

一、日　本

二、支　那

三、天　竺

四、百兒西亞

五、小亞細亞

六、耶蘇教

七、回々教

哲　學（Philosophy）

一、致知學（Logic）

二、性理學（Psychology）

三、理體學（Ontology）

四、名教學（Ethics）

五、政理家哲學（Political Philosophy）

六、佳趣論（Aesthetics）

七、哲學歷史（History of Philosophy）

八、實理上哲學（Positive Philosophy）

政事學（Politics）

一、萬國公法

二、萬國私法通權

三、確定國法

四、國法私權

a、人身上權

b 物件上權

五、政法公權

a 立法之權

b 行法權

c 斷定權

六、制產學（Political Economy）

a 制產學大略の箇條

第一 社 (Society)

第二 產業 (Production)

第三 產 (Products)

第四　直　（Value）

第五　價　（Price）

第六　交　易（Exchange）

第七　泉貨通用（Money Circulation）

第八　元　（Capital）

第九　楮　鈔（Paper Money）

第十　租　税（Taxation）

第十一消　費（Consumption）

b　道理上に適せざる數條

第一　專　賣（Monopoly）

第二　行　家（Guild）

第三　保護税（Protectionism）

第四　制限竝禁制之法（Restrictive and Prohibiting System）

第五　金銀爲利之法（Mercantile System）

第六　制利息之法（Usury Law）

第七　裁抑奢侈之法（Redression of Luxury）
第八　政府居間之法（Interference of Government）
第九　會社之說（Socialism—Owen）
第十　通有之說（Communism—Saint Simon）
第十一　フーリエリズム

c　制產學の大本

七、計誌學（Statistics）

a　源由、比較

b　計誌學の箇條

第一　州縣郡鄉の類
第二　人口
第三　居業の別
第四　開化之度
第五　獄訟
第六　醫術

第七　氣學上之計誌（Meteorological Statistics）

第八　御圖帳（Cadastels）

c　和蘭國學生の學科

第二章　物理上學（Physical Science）

格物學（Physics）

一　器械學

二　靜學、動學

三　流體學

四　氣體學

五　音論（音樂のこともあり）

六　熱論

七　視術

八　光論

（以下永見氏筆記になしといふ）

一 電論

二 磁論

三 氣界學

四 天文學

a 環年

b 行星

c 太陽圜區

d 暦

e 占象學

五 化學

a 機性體化學

b 無機性體化學

c 元質之考

d 親和力

六 造化史（Natural History）

「百學連環」の構成の大體は以上の如きものである。明治の極々の初期に兎もかくもこれだけ西洋の學術を咀嚼してこれを一の體系的知識として傳へようと試みた西周は、たとひコムトの方法を模した痕が見えるにしても、明治新學の祖師の最大な一人として、今日歴史的に十分その功績を記憶されていい。

先に『西周哲學著作集』を公にして吾等に嘉惠を與へた麻生義輝氏は、今や更に大規模な『西周全集』を編纂しつつある。「百學連環」の全文は勿論この全集中の一部として重きをなすであらうが、然し計畫が大きいだけに早急の實現も豫定されてゐないらしい。それで暫らく同氏に請ふて、私の手で「百學連環」の本文中から文學關係の條だけ抄出して、發表することを許して戴いた。それは、全文の入手は他日に期するとしても、明治初期の文學界にこれ程の收獲があつたといふことを一日も早く報告して、その一斑を髣髴たらしめることは、吾等明治文學研究家の冥加であらうと信じたからだ。

紹介される「百學連環」の本文は、總論全部、第一編第一章歴史の條、稗史小說に關するところ、第三章文章學全部、第二編第一章の中、哲學の條から佳趣論だけ、以上四種である。次の(一)は即ち直ちにその本文から始める。

二、「百學連環」中に現れたる文學知識

〔第一〕

百學連環（Encyclopaedia）　總論（Introduction）

文と道とは元と同一なるものにして、文學開くときは道亦明かなるなり。故に文章の學術に係はる大なりとは、凡て世に文章家たるものは殆んど其道に近きに似たり。韓退之云へり「文は貫道の器なり」と、文盛むならずんば道開くるの理なし。（註、貫道の器とは凡て文章たるもの丶道を達貫して後世までも傳へるを云ふなり。）

Literature 卽ち文章なるものは學術に大に關係するものなるが故に個條に依つて人を撰ばざるべからず。古來漢に於いては詩文章に就て人を撰擧せり。後宋の時代に至り其議論も種々起れりと雖も尙ほ文事に依て人を撰ぶに至れり。本朝にても古昔の役人たるものは、多く菅江の兩家に取れり。是卽ち文章あるに依る所なり。後王室衰へ文章地に墮ち傳らずと雖も、楠公の如きは聊かの文章ある人なるべし。故に名將の名を得るに至れり。卽ち楠公の語に非理法權天と云へり。此五字に至りても楠公素より纔の文章あるのみなるが故に、更に語をなさずと雖も、其意に至りては實に千古の金言と云ふ

べし。凡て天下の事皆文章に係らざるはなし。文章に係はる是卽ち學術に係はるなり。西洋古は學術を七學と定めたり。Seven Sciences (Grammar, Logic, Rhetoric, Arithmetic, Geometry, Astronomy, Music) 右七學は上古希臘より定め傳はるなれば、學術も古く此時に創るを知るべし。其中最も文章に係はるは、語學、音樂學等を主とし、其他を餘派とす。當今に至りては其學科悉く彌々盛なりと云へども、古への如く七學と定めあることなし。

西洋に Belle-Lettres と云ふあり。卽ち英語に之を Humanities 或は Elegant Literature と稱せり。此の如く英國にて文學を人道と云ふ意は卽ち mental civilization なる意にして凡そ文學なるものは心を開くものなるが故に、文學を人道とも云ふに至れり。心の開くは是れ道の明かなるなり。その心の開く所は文學に關係する最も大なりとす。

文章に五つの學あり。Rhetoric, Poetry, History, Philology, Criticism. 凡そ Belle-Lettres を學ぶものは此五學をなさゞるべからず。又語原學は Classic language, Greek and Latin 此の二語の中何れにても學ぶことを可とす。其他 Sanscrit, Hebrew, Arabic カラシックなる希臘、羅甸の二語を學ぶの上に、當今尙ほ此の四學を爲さゞるべからず。

凡そ西洋の源は天竺にあるの故に、當時の言語は皆サンスキリツトより出でたり。併し當時各國言語の變化ありと雖ども、其源は皆一なり。故にサンスキリツトは其語源を正すの學なり。各國之と言

語の一つなる證しは英語 father 蘭語 vader 佛語 père 希語 peter 天竺語 Patri の如く古昔より言語の源一つなるの故に、今尚ほ其語を略同ふせり。是を正さんが爲めに當今はサンスキリツトまでも學を極むるを主とす。

右說く所は文章の學術と關係する最も大なるものなるの故に、文章あるにあらざれば學術開くの道なしといへども併し文章は學術なるものにあらず。即ち文事の用をなすなり。End means measure medium にて凡そ何事をなすにも必ず目的なかるべからず。其目的立て、之を行ふ則ち方略なり、策なり、媒なり、故に學術は元來別なるものにして文事を以て學術と云ふにはあらざるなり。其目的を行ふ即ち學術にして、方略及び策、媒、となるべきは文事なり。故に文事なきときは學術の資けあることなし。(中略)

即ち定義に「Literature, instruments, institution: these all are the means of investigating one end and the one end is called Truth」前にも云へる如く眞理の目的を達するは文章及び器械、設等にして大に學術を助けて眞理を見出すの方略となり、媒となり、終に眞理の目的に達するを得ると雖ども、又徒らに文事に沈溺するときは却て眞理を見出すの害となることあり。それ故に達磨梁武帝時代天竺より入來るの說に不立文字といふ語あり。此の語の依て來る所恐らくは右の釋迦の前に婆羅門(註釋迦に至りて此說を破れり)なる宗旨ありて其學に八千頌といふ種々の詩文の如きもの許多ありし

が是等は却て煩雜眞理を見出すの害となるを知るに依る所なるべし。然れども全く不立文字と達磨の說あかしも既往將來の工夫もなく餘りに過ぎたる語にして適宜ともなしがたかるべし。然れども達磨以來往々眞理を講究するの人出で來り、其の後ち隋の王通（文中子）の如きは、聊か眞理を知るものといふべし。其他以前の儒者たるもの唯徒らに書籍上の論のみにして更に眞理に就くもの鮮しとは、蘇長公及び周茂叔の如きは全く佛にして即ち語錄の學派なり。（[註]語錄なるものは不立文字の意より起りて文事に就て論ずることなく眞理を講究せし語を錄せしものなり、程子の如きに至りては語錄なるものを大に制せり。）後ち明の薛瑄及び陽明の如きも亦其餘派とす。我が國にては中江藤樹、熊澤蕃山、其他新井白石、貝原篤信の如きは又其餘派とす。又物徂徠、伊藤長胤、室鳩巢の如きは學派を異にし文章を以て重んずるに至れり。其後ち三助先生（[註]古賀彌助、尾藤良助、柴野彥助の三人）且つ山陽先生の如きに至りては、眞理文章相合するの學といふべし。然れども尙ほ腐儒の境界を脫すること能はず。若し山陽先生實に眞理を知るの人なるときは、其著はす所の書籍などは和文もて記すべきに何故にか徒らに苦しみて漢文を以て記せしや。其漢文を記せるの故に、自からも大なる辛苦を得、之を讀者も亦多くの勞を費し、且つ漢文に暗きものは更に何等のものたるを知ること能はず。若し和文を以てなすときは廣く萬民に通じて其益大なるべし。故に成國以來文章を書く者は、苟も和文を以てせざるべからず。併しながら學者漢文を知らずして可なりといふにあらず。必ずしも學び得て漢文も亦記し得

ることを要せざるべからず。唯だ著はす所の文章などは諸民の解し易きを以て主とするの故に漢は卽ち漢の文字を以てし、英吉利の文字を以てし、法朗西は法朗西、我が國は我が國の文字と唯だ其國民の解し易きを以て肝要とせざるべからず。西洋にても古昔の Bacon（英の大儒者）Hugo de Groot（和蘭の大儒者）Montesquieu Groceus（佛の大儒者）の如きも羅甸の文字を以て文章を書せり。猶我が國の山陽先生に至るまで儒者たるものは漢文を重むじ用ゆるが如し。さて眞理を見出すの方略になるべきは、文章、器械、設け等種々ありと雖も是を如何して講究し見出すべきやを知らざるべからず。其は茲に新致知學の一法といふあり。（以下論理學に入る也略之）

〔第　二〕

百學連環　第一編　普通學（Common Science）

等一章　歷　史（History）

Common Science 卽ち普通の學の性質なるもの四つあり。第一 History 第二 Geography 第三 Literature 第四 Mathematics 是なり。此の四學は普通の性質たる如何となれば、第一 History なるものは古來ありし所の事跡を擧て書き記し、所謂溫故知新の道理に適ふを以て普通とす。學者苟も今を知るを要せんには、必ず先づ之を古に考へ知らざるべからず。（以下略之）

正　史（本文略之）

編年史（本文略之）

年歴箋（同）

右擧る所の三種の歴史の外なほ之に類似するもの種々あり。

第一　傳（本文略之）

第二　年　表（同　）

第三　年　契（同　）

第四　稗　史

第四、稗史（Romance）此史は古昔羅馬の時代に記出せしものなるが故にかくローマンスと稱し、能く歴史に類似せるものにて一種異なるものなり。譬へば通俗三國志或は水滸傳の如き一種の小說物にして、其實事よりも其形容を大に飾りて記載せるものなり。前漢の藝文志に小說謂之稗說と言へり。

第五　小　說（諧語、喩辭）

第五、小說（Fable）卽ち羅甸の話（fari）なる字なり。凡そ歴史に似たるものを以て稗史として話になしたるものを以て小說とす。小說の類は普通なるものにあらず。唯だ歴史に似たるものといふのなり。此小說に二つの區別あり。諧語（Apologue）及び喩辭（Parable）是なり。

諧語とは總て實跡なきことにて唯だ其情態と道理とを生活なき木石の類に比喩して話せるものを言

ふなり。譬へば我が國俗の小兒の話に桃太郎或は蟹の仇討の說あるが如き是なり。

匆辭とは唯だ僅かの據りどころより其他種々の實跡なきことを以て書き記せしものにて、譬へば我が草双紙或は源氏物語の如き是なり。

此の如く皆實跡なきことを以て記せるが故に、更に不用に屬するに似たりと雖も亦知るにしかずとす。假令ば我が國文を學ぶものは必ず源氏物語に據らざるべからざるが如し。

第六　古傳（本文略之）

史料（記錄、傳）（同　）

萬國史、各國史（同　）

古史、中世史、晩近史（同　）

通古學（同　）

第二章　地理學（本文全章略之）

〔第　三〕

第三章　文章學（Literature）

Literature なる語は羅甸語の Letera にして、後世英の Letter なる字なり。既に總論に說きしが如く、一つに之を Belle-Lettres と言へり。此の如く呼びなすときは甚だ狹くして Literature と稱

するときは最も廣く關渉するなり。又一つに之を Humanity と稱す。（總論に詳なり。）

語　典

此文學なるものは如何なることより始り、如何なることに止る、といふを論ぜんには即ち語典（Grammar）なるものあり。（語典なるものは從來話シなるが故に、世に文典と譯するは切ならずとす。凡て文の原とは話しなり。其話しに就て書くものは文なり。故に世の英語を學ぶを以て英學と稱し、佛語を學ぶを佛學などと稱するは誤りなり。）

Grammar なる語は希臘の γραμμα にして、英の Letter なり。此語典なるものゝ定義に「Grammar is the art of speaking and writing with propriety according to a established usage of any language.（語典ハ或ル國語ノ一定シタル用法ニ從テ正當ニ話スコト書クコトノ術也）と言へり。此の如く語典なるものは古來定りたる用ひに從ふて、常に、當り前に話すこと、及び書くことの術なるものとす。此語典を區別して四つとなせり。

一、音　法

第一、音法（Orthography）即ち發音の法なり。文字に子音（Consonants）及び母音（Vowelles）の二種あり。母音なるものは唯だ五文字（イ、エ、ア、オ、ウ）の如く喉より舌を通りて出るものなり。西洋は二十六文字を用ひ、五文字の外に二十一文字を以て子音とせり。韵觸とて子音なるものは皆五つの母音に觸れて始めて音をなすものにして、假令ば Ka Ki Ku Ke Ko 即ちカァ、キィ、クゥ、ケェ、コ

オの如し。

熟字（Syllable）なるあり。即ち文字の組立法なり。假令ば我が國にて歌、此ウタの下にフを加へるときは、働く文字の歌となり、或は流ルのルを除きてスを加へるときは働く文字になるが如し。

又Spelling即ち命字なるあり。所謂適當の文字を命ずるものにして、最も肝要のものなりとす。我が國之をツヾリと言ふ。譬へば歌にして歌にあらざるが如く、即ち我が國のかな綴の如し。

又Pronunciation即ち呼法なるあり。所謂讀法なるものにて、世の洋語を學ぶ者未だPronunciationの出來ざるを稱してSpellingの出來さるなど稱す事は誤りなり。假令ば行而來をイツテキタと言ひ或は蝙蝠をカウモリと言ひ、用をモチユ、植をウユと言ふが如き皆呼法の相違したるものなり。なほ漢音の東同を我が國にてトヲトヲとなせしが如し。

二、語　法

第二、語法（Etymology）此語法なるものは、根元の語及び其變化に關はるものにて、之に屬するにSort及びDerivation且つModificationの三つあり。

Sortなるものは實名詞、形容詞、副詞等の文字の種類にして、譬へば黑シ、赤シ、白シ、或は黑キ、赤キ、白キ、或は黑ク、赤ク、白ク等大略此の如きものにてなほ烏黑シ、黑キ烏、烏有ㇾ黑ト言ふが如し。Derivationなるものは語の變化にして、名詞より變じて形容詞となり、形容詞より變じて副詞となる等のものなり。譬へば我が國の行ク、行ケ、行コ、行キ等の如く皆五音の相通して變化

するものなり。又我國の行(ユカム)は行(ユカネ)にあらず。マミムメなるメの働きなる通韵にして行(ユカノ)と言ふに同じ義なり。又手(テ)より働きに變じて取るとなり、或は日(ヒ)より干(ヒル)となり、(干は中性)或は日(ヒ)の働きなる通韵にして干(ホス)と變ずるが如き、皆我が國語(クニコトバ)の Derivation なるものなり。

Modification なるものは變化せる語の成り終りたるものを言ふなり。

三、句　法

第三、Syntax 即ち句法なるものは、文字を重ねて語となし、語を重ねて句となす、其語を積むで一つの意味をなす、之を句（Sentence）と言ふ。其の句に屬するは位置 Arrangements 及び一致 Agreement の二つなり。

位置とは文字の極りたる位置にして、譬へば I am loving は其位置をなすものにして、am loving は位置をなさざるが如し。或は天命之謂性にして天性之性にあらざるが如し。其位置の定りありて動かすべからざるものなり。

一致とは譬へば I go, he goes の如く西洋にては文字の單複あるが故にその單複に依て一致せざるべからざるなり。

我が國の如きは其單複なるものなしといへども、句の中語の一致に於てはコソ、ケレ、ソ、キの如く「是コソ」といふときは之を受けて「善ケレ」と言ひ或は「是ゾ」といふときは「善キ」と受るが

如き皆文字の一致なるものなり。

凡そ言語なるものは各國唯だ用ひの違ひあるのみにして道理に至りては更に異なることなし。假令ば和歌に、

海(わた)の原八十島かけてこぎ出ぬとは人には告げよあまの釣船

此釣船は第二人稱にして、人は第三稱なり。其辭義は、かく我は八十島かけて海原にこぎ出でしことを人に告げてくれ釣船よ、といふ意にして、よの字を告げよと用ひしものなり。

御垣守衛士の焚く火の夜は燃えて晝は消えつゝものをこそ思へ

此歌を世に御垣守りと言ひなすは非なり。我が國に於て同格なる語の用ひはあらざる所なるが故に、御垣守ると動詞になして言ひなすを可とする。

四、韵　法

第四 Prosody 韵法は讀法(ヨミカタ)及び詩術に係はるものにて、讀法に依るものを口調 (Accent) とす。譬へば Accord 或は Acknowledgement の如く所謂讀法の口調なり。

通常の文を散文 Prose と稱し、詩を Verse と稱す。詩に係はるものは句調(Versification)なり。此句調なるものは句の中に於て語の極り及び韵ありて謡ふ所の調子に適ふものなり。譬へば唐詩の平仄及び韵あるが如し。

唐詩の中に於ても詩餘なる體は謠ふ所の調子に最も適ふとす。なほ我が國の歌に五七五七七及び七五七五の句調あるが如し。

右 Grammar の一條は學なるものにあらずして、皆術に屬するものなり。西洋の書を讀む者は都て知り得る所なるが故に唯だ大體を擧て說き示すのみ。

形　象　字

古昔は文字に二つの區別あり。形象字（Hieroglyphy）及び書字（Letter）是にて、卽ち此の形象字を用ゐし國は古埃及、支那、墨西哥等なり。

又此形象字を分つて二つとせり。Ideography 及び Hieroglyphy なり。Ideography なるものは全くの形象字にして、物に文(アヤ)とり想像して作りしものなり。假令ば支那の[illegible]の如く、或は埃及の[illegible]を以てAの字となせしが如し。（太古は此の如き圖を用ひしが漸くに變じて今の字に至る。）

形象字（Hieroglyphy）なるものは埃及の鷹の圖を以て誠といふ字に用ひ、なほ漢の兎の圖を以て卯の字に代へ、鼠の圖を以て子の字に代へるが如し。

漢字は大概此形象字より成立ちしものにて、其他都て六義あり、六義とは、形象、會得、諧聲、轉注、處事、假借等なり。（漢文義といへども大概形象、會意、諧聲の三ツにして其他は此中に屬するものなり。）

一、會　意

會意とは武は干戈を止むるものなりと意を會せしより、戈の下に止の字を加へしが如きものを言ふ。

二、諧聲

諧聲とは工と江或は可と河と同音なるが故に、水を加へるものは即ち水の江、或は河なりといふ區別して知らしめ、或は英の字に口を加へて暎吉利の暎となすが如く、唯だ同音に諧ふを以て文字の形ちを變じて區別せしものなり。

三、轉注、處事

轉注とは老考の字の如く、處事とは上下の如く經界して、其より上の人を上の字とし、其より下の人を下の字とするが如きもの、假借とは假り用ひるものにて、縱(タトヒ)の字の如く、糸に從の字を合したるものなるが故に糸を付て試みに放ち行ふの義なり。或は焉の字の如く、此焉の字は元來鳶の字より來るものにて、文の終りに焉の字を置く時は常に上に戻り上るの意味をなす。此の如き文字は皆假借なるものなり。其他古昔より文字ある所の國々は我が日本假名及び日文朝鮮ゲン文 滿洲文滿洲 天竺悉曇、亞羅比亞、猶太、魯西亞等にして、歐羅巴は總て letter なるものなり。

Grammar 即ち語典なるものは古來漢土に於てはあらざる所たり。然れども最も早き時代より文化大に開け爾雅なるものあり。夫れよりして辭書なるものを作り出せり。併し此辭書あるのみにて別に西洋の如き文法はあらざる所なり。

我が國の文字は總て漢土より來るが故に、語典なるもの古來あらざる所なり。然れども近來本居、平田の二氏より國學なるもの大に開けて、漸々に我が文字を以て文書くことに至れり。しかしながら近來の國學者と稱するものゝ弊たる二つあり。一つは徒らに古昔の言語及び其他の事を穿鑿して、今を知ること薄く、一つは徒らに和歌に流れて文章を知らざる是なり。

我が國の言語及び文章に聊か便りするものは和字正濫抄及び古言梯なる書ありて、彼の Orthography に當るものなり。

又彼の動詞の變化に當るものは、辭の玉の緒及び詞の八衢なるあり。又和訓栞及び雅言集覽なるありて、彼の Augment に當るものなり。

我が國の言語及び文章を學ぶものは右の書に就て正さば大概恐らくは可なるべし。

西洋文化の盛むなりし根源は紀元前二十九年（我が垂仁天皇時代） Dionysius（希人）なる人希臘なり羅瑪に入り來りて盛むに文法を以て國民に教へたり。是より以前アリキサンドリアに於て學校を設けて希臘及び羅瑪等の諸國の儒者を集めて大に開けゝるが（古昔アリキサンドリアに於てプトロメーなる人學校を設け後ち三代に至りて大に盛むに開けり。希臘のマセドニーよりアリキサンドルなる人起りて各國を打從へ、埃及に於て都府を建て之をアリキサンドリアといふ。）デヲニシユースなる人の入り來りて文法を教へしより、益々盛むなるに至り、其學各國に漫延せるに及べり。故に方今に於ても希臘及び拉丁の二語を知らざれば上等の語にあらずとせり。（拉丁は羅瑪中の一小國にして拉丁語と稱するものは即ち羅瑪語なり。）

古昔は西洋一般に希臘及び拉丁の字を用ひて文章を書きしが一千七百年來、各自國の字を用ふるに至れり。其國々は伊大利亞、佛蘭西、英吉利、是波爾亞（イスパニヤ）、獨逸等なり。獨逸國中高低二つの區別あり故語も亦二つに分れり。低獨逸の語は卽ち今の和蘭語なり。

魯西なる國は近來まで總て佛語を用ひけるが、一千八百五十年來漸く自國の文字を用ふるに至れり。故に我が本朝の國語を以て文章を書くことを今より始むるも亦晩からむべし。

死語、生語

言語に死語 Dead language 及び生語 Living language の二つあり。死語とは古昔の文字あるのみにて方今常の話に用ひたがたきもの、希臘及び羅馬語の如き是なり。此等はなほ我が國に漢文あるも平常の談話に用ひがたきが如く、或は我が神代の文語の如き、今談に用ひざるが如きものは皆死語なり。

生語とは常に談話に用ふる所の言語を云ふ。凡そ西洋中常に話す所を以て書くときは、直に文章となり。文章は卽ち話なるものなり。我が國の如き、常の話と書き記せる文と異なるが如きは苟もあらざる所なり。

文　辭　學

右の語典を經て後ち文辭學（Rhetoric）なるものに入るを要す。文辭學と譯すといへども術にして學たるものにあらず。此の

Rhetoric なるものは希臘語の Teo にして英語の話シ（to speak）なり。或は之を說術（Oratory）と言ひ、或は明辭術（Eloquence）といふなり。Oratory なるものは拉丁の Orare にして今の to speak なり。Eloquence なるものは拉丁の eloquens にして、今の「話シ出ス」(to speak out)なり。是等は各によりて譯の違ありと雖ども、皆大概言を同ふして別あるものにあらざるなり。Rhetoric の中に口上（Oral）及び書（Writing）の二つあり。Oral とは口上にて話す所のものを言ひ、Writing とは書き記す所のものなり。凡そ西洋に於ては口說と文章と一致にして、常に話す所の言語皆文法の規則に適するが故に、辯に長するものは必ず文に長じ、文に長ずるものは必ず辯に長ぜしものなり。我が國の如きは、更に常の言語と文書と一致することなし。其他我が國にありて西洋になき事あり、漢の諷誦と佛家の經誦の如き是なり。西洋にては歌の外更に節を付て讀誦することなく、唯だ讀書するも人と談話するも、同じくして、諷誦及び經誦の如き節を以て讀むことはなきことなり。此の Rhetoric を學むで談論に達し、文章に達するの用たる所は二つあり。會場（Bar）及び講座（Pulpit）是なり。會場とは國民の會議する所にして其中に Candidate なる者ありて、（註、譬ば一國の中にて人數の高に應じて撰び出してカンジダートとなすなり。此カンジダートなるものは惣代になるの前にて終りには惣代にもならんと欲するものなり。總て何官にもあれ其望ありて未だ其官に至らざるものをカンジダートといふなり。）衆議の一決する樣諸人を解說する者、或は講座に在りて萬民を教諭する僧等の如きは必ず Rhetoric を學ばざる可からず。前に擧げし所の散文（Prose）及び詩（Verse）の如きも Rhetoric なるものにして、況

て今の文章は總て散文なるが故に必ずしも Rheto ic を學ぶを以て要用とせざるべからず。又此散文に二つの種類あり。議論文及び叙述文なり（漢文の區別。議論文はレトリッキにして叙事文は歴史なり。）議論文とは所謂文辭學にして事物に就て是非を論ぜし文なり。叙事文とは唯だ有り來りし事を叙て書きし所の文なり。歴史中に入るべき文章なり。又此議論文に三つの體あり。現在過去未來是なり。

一、指斥體

第一、現在なるものを Demonstrative と言ひ、之を指斥體と譯するものにして、凡そ事物に就き指す所ありて是非を辨解する所なり。其詞體は葬詞 (Funeral Oration) 或は褒詞 (Panegy ics) 或は譏詞 (Inoculative) 等なり。葬詞とは死後にて生涯の功徳を擧て褒めし所の詞にして碑文の如きものを言へり。譬へば祭十二郎文（韓退之）の如き是なり。褒詞とは天子より諸民（庶カ）の功あるものを擧て賞與する所の詞にて譬へば柳子厚の平淮西碑及び温公の神道碑の如き是なり。譏詞とは所謂誹譏する詞にして、譬へば蘇老泉の辨姦論の如きものなり。（宋記王安石性不好華腴自奉至儉或衣垢不浣面垢不洗世多稱其賢蘇洵獨曰是不近人情者也作辯姦論以刺之。）西洋此譏詞の一つに非立伯 (Philippics) と稱するあり。非立伯とは古昔の人名にして其人 Athene より起りて各國を討亡し、既に Thessalia まで押領せし時、希臘に Demosthenes なる儒者ありて、非立伯を譏りし詞を作り、國民に說き示して大に非立伯の妨をなせし事あり。夫よりして後世人を指して譏る文を指して非立伯といふなり。此譏詞なるものは何國に於てもあるものにして、其他漢土に於て多くあ

る所なり。胡銓の封事（宋末の胡銓、上疏）明の楊繼盛の上疏、明の沈練の劾嚴嵩等の如き漢土之を忠義大文章と稱するといへども、皆西洋の非立伯なるものなり。

二、深慮體

第二、未來の體とは謀慮體（Deliberative）にして、未來の事を謀る所の詞なり。其詞體は諫（Exhort）及び諍（Dissuade）或は講說（Lecture）或は僧の說法（Sermon）等の如きは、皆此體を用ふ。其他孔孟の教誡、或は釋迦の經文或は基督の教へも亦此の類なり、蘇老泉の審勢審慮の類も未來の爲めに書きし所なり。

三、辨拆體

第三、過去なるものは辨拆體（Judicial）にして既に過し事を辨別する所の體なり。是に二つの種類あり。擯斥（Accusation）及び保護（Defence）にして、凡そ何事にもあれ、擯斥するか或は保護するかの二つに外なることなし。訟獄辭及び讞獄辭に至りても、必ず右の二つの間に落るものなり。孟子萬章論の如きは所謂保護にして、東坡の荀卿論、管仲論、項羽論の如きは所謂擯斥なるものなり此 Rhetoric 即ち文辭學なるものは西洋の古昔に創る所にして始めて此規則を定めし者は希臘人 Aristotle なり（紀元前+384、−322）其他文辭學に通達して有名なる人は Demosthenes（希の人+385 −322）及び羅馬人の Cicero（+106 −43）なり。Cicero の Antony なる人を譏りし文あり。近來最も有名なるものは英の Whately（+1787 −1863）及び獨逸

の Spelding +1762 −1811 等なり。

鑑裁術

Rhetoric の中に又一つの學あり。之を鑑裁術（Criticism）といふ。総論中之を明辨術と譯せしは非なり。即ち看定（メキキ）と云ふことにして、文字を目利（メキキ）し、是非を辨別して、文に書く所の學なり。此文章は一種の別なるものにて、散文及び詩の如きものにあらず。試本（Essay）及び題跋（Review）等を書く所の學にて、皆此 Criticism なるものより出る所なり。

語源學

さて Literature なる種々の學を經て、其終りの學問なるものは語原學（Philolog）なり。此語原學なる語は希の Philo にして英の fond of なり。此 Philology なる學を其他種々に呼名して或は比較（Comperative）或は語法學（Sci atifio Etymology）、或は音聲學（Phonology）或は Glossology 或 Glossagrophy と言へり。比較とは各國の學を比較して語原を正すを言ふなり。其他語法學と言ひ、音聲學と言ひ、或は Glossology 或は Glossography と言ふも皆語原學といふ意に異なることなし。此語原學なるものは西洋一千八百四五十年代の近きに創るが故に、其以前は此の如く種々に呼なせしものなり。且つ近世に創むるが故に、未だ學域の極りもあらず。唯だ自國元來の語、或は外國より入り來る語等を辨別して、其源を正す所の學なり。近代始めて此學を Philology と極

りを建てし人は獨逸の Schlegel +1772 −1829 なる人なり。

西洋今の言語の源は皆天竺より來りしものなり。古昔は之を猶太より來るものなりとせしが、後ちに至りて次第に之を講證せしに、語源及び人種に至るまで明かに天竺より出でしことを發明せり。故に近世の總ての言語を稱して印度 Indo 獨逸 Germanic と云へり。其故は最初印度より獨逸に來りて夫より擴りしに依る所なり。其印度より移り來るに地形に依りて和蘭、英吉利、日耳曼、瑞甸、嗹國等は大概一致に移り來り、又佛蘭西、是斑牙、意太利、拉丁、希臘等は又地形に依りて入り來るものなり。地形に依り入り來る各國は大概言語を同ふせり。太古天竺にバラモンなる教書に聖書 Sanscrit なるものあり、伏羲神農の時代なるべし。釋迦より古へにありて漢土に渡り得ざるものなりと見えたり。西洋中今の言語は總て此 Sanscrit より出でたるものにして、各國に於て種々に變ぜしものなり。其一二を擧るに、英國にて今の Men といふ語を Nirok（聖書）、Vaira（Zand 天竺の一小國なり）、geros（希臘）、bir（拉丁）、gens（佛蘭西）、或は英にて今の Father とい語を Piter（聖）、Paitar（Zand）、: Perer（希）、Peter（拉）、Père（佛）、Pader（日）、vader（和）、bat（Slavonic）、fadrein（Gothic）或は今の Mother といふ語を mater（聖）、matar（Zand）mater（拉）、mère（佛）、mutter（日）、moeder（和）等の和く各國に於て僅かの違ひありと雖も皆源を同ふするが故に、唯だ大同小異あるのみなり。且つ我が國及び漢土に於ては、古來曾てあらざることにして、彼の言語の間に悉く男女の性を別つて言ふことは、古く Sanscrit に始まるものな

り。又西洋今の人種を Hebrew と唱へるあり。或は Arabian と稱するあり。亞剌比亞及び猶太の人種は又別々なるものにして、天竺より來りしものにあらずとせり。太古 Shem なる人此地方に入り來りしといふよりして、言語を Semitic と言へり。又群島語 Polynesia なる一種のものあり。南洋群島なる Moloye Tarro にて用ふる語にして、此語は大概 Sascrit 及び Persia の二語を用へり。此人種をマレーランドいふ。マレーランドなる地は天竺の脇なる一小國なり。

漢、日本、アメリカ銅人等の言語は印度より來るものにあらずして、更に一種の別なるものなり。然れども亦其根源を知ること能はず。從來歐羅巴の語は一熟音 Monosyllable にて、文字を合して一語をなすものなり。漢土に至りては寒(カン)、陳(チン)、東(トン)の如く多くは二音なる一字を以て意味をなすり。是を以て遙か古より文化の開けしを知ると雖も未だ其源を知ること能はず。（漢音僅に四百音にして八百有餘の文字に通ず。）又我が日本の言語たる更に其源を知ること能はず。實は古來獨立國と稱するも不可ならざるに似たり。然れども我が日本の如き一島の中に自然に人の生ずることもあらざれば、極めて之を講證なさむには必す人種及び言語の源を知るに至るべし。夫れ我が日本の言語は世界中一種の別なるものにて、唯だ一音一字を以て意味をなせり。譬へば「ツ」と言ふときは常につながる意味のみにして、夫れよりツヅクツナガル、ツク、ツグ、ツム、ツメル、等の如し。此義理を分てば一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ九ツ十(トヲ)の如きは（○◎△は五音の通して相對するなり。）一より二、二より三と皆次第につながる意味に依て一ツ二ツ等

の如く「ツ」といふなり。終りの十なるものは又始めの一に廻るの終りにして、十のつまりて小さくなりしものゝ故に十となり、且つ尙つづまりて十となりしものなり。五といふイは常に裏に當る意味にて、十の裏に當るが故にイツツ（十）といふなり。其れ故に來の裏を行といふ。又寐といふヌは無くなる意味にして、彼の國の no に同じなるべし。夫故に死、塗、濕等の如くシはしめるの意にて死するものはしまりて無くなるとの意なり。其他シボル、シメル、シヅメル等の如く、シは皆ひきしぼるの意なり。塗はヌの無くなる意味にて凡そ物を塗るときは其生地のなくなるよりして、此の如く言ひ、濕も同じく物の濕るるときは其目の無くなるより言ふ所の語なり。又漢土より入來る所の言語甚だ多し。其一二を擧るに考、香、馬、梅、埋、目等の語は必ず漢音より變ぜし所の語なるを知るべし。

詩學

又、文學（Literature）の終りに於て一種の別なるものあり。詩學（Poetry）なり。詩學なるものは、句法なる結構（metrical composition）とて句を組立てしものなり。句（Prose）なるものは文章學（Rhetoric）に書く所の散文にして、句（Verse）なるものは卽ち詩に用ふる所の極りあるものなり。其極りを尺（Meter）量（Quantity）とて、句の短の極りあるなり。大概何國の詩歌に於ても、十二語より長きを用ふることなし。譬へば I can not say a b c の如く、猶我が國の歌に五七五七七

或は五七五等の極りあるが如し。其他一つの法あるは押韻（Rhyme）なり。此押韻なるものは詩歌に於て必しもあらざるときは、更に口調に適せざるものなり。猶唐詩の押韻あるが如し。漢土は古昔より文化大に開けたる國なるが故に、常に話る（カタル）處の言語も自から押韻をなすに至れり。夫れ故に書の大禹謨中舜の語に、天之暦數在汝躬、允執厥中、四海困窮、天祿永終の如く自から韻を蹈みて口調をなせり。其中に人心惟危道心惟微等の句あるは後ちに至りて朱子の私に加へたるものなるべし。或は堯舜時代に壹人の歌に日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力、何有於我哉の如く（徂來說に作息食力の押韻なるが故に帝力を以て一句となすものなりと從ふべし。）或は舜の德を頌する南風の詩に南風之薰兮、可以解吾民之慍兮、南風之時兮、可以阜吾民之財兮の如く、或は漢の高祖儒者を好まず儒冠を着ける者を見るときは其冠を解かしめて、其中に溲溺すると言ひし人なりと雖も、黥布を破りしとき酒席の歌に大風起兮、雲飛揚、威加海內兮、歸故鄉、安得猛士兮、守四方、或は項羽の歌に力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何等の如く皆押韻あるなり。漢土古昔は韻字の極りなくして、大概通韻を用ひしものにて、後、梁の沈約なる人に至りて始めて今の韻法を極めしものなり。又西洋古昔希臘及び羅瑪等の詩に無韻句（Blank verse）とて、韻を蹈まざるもの多し。紀元後四百年代 Goth? なる人出で來しより韻を蹈むことに一定せり。近代英國の Milton なる人の說に詩は古體の如く無韻なるも亦可なりと、自分は無韻の詩を大に作れり。我が國の和歌に於ては更に押韻の法なく、然れども之

に代へるに縁語（モジリ）といふありて、語の口調をなすに及べり。譬へば浪華江のあしの假寢（刈根）の一夜ゆゑ身を盡し（水際標）てや戀わたるべき、或は鹽汲む海人の行平を戀せし時の語に、月は一つ影は二つ三つ見られつも雲のうへ、或は世俗に謡ふ所の仙臺萩と稱するものゝ如きも、縁語を用ひて跡見送りて正岡が正なきことも氣にかゝる、といふが如し。

一、詩　篇

右に說く所の句（Verse）なるものは、口調長短の極りありて韻を蹈みしものなりと雖ども唯だ之を以て詩と稱するにはあらず。此 Verse なるものは詩中の句にして、此句を連ぬるを詩となす。是を詩篇（Poem）といふ。漢土古體は詩體の長くして、屈原離騷の如きものありと雖も、唐より以來詩の體裁を極めて短くなせり。然れども尙ほ古詩なるものに至りては、長短更に極りあることなし。元來西洋の詩たるものは長くして事の發端より其終りに至るまでを作りなせしものなるが故に、唐詩の類にあらずして、短くとも一小册をなせり。譬へば我が國の義太夫本の如きものなり。總て西洋の詩は芝居の種となすものにして、大體虛誕に至ると雖も、多少の實益あるしろものなり。

二、雅頌風、賦比興

又詩に數種の體裁あり。卽ち詩經の如きは朱子の說に六義と言へり。其六義とは、雅、頌、風、賦比、興にして雅とは賢人君子の世を憂ふるの語、頌とは神德を頌して歡ぶの語、風とは世の形勢を述

る語にて、所謂竹枝體なるものなり、此雅頌風の三種に賦、比、興の三體ありて、或は雅にして賦なるものあり。或は比、或は興ありて、其體裁一様ならず。此賦、比、興の三體は、和漢西洋共に、之を用ひざれば作る能はざるものなり。譬へば我が國の和歌に吉野山峰の白雲蹈分て入にし人の跡ぞ戀しきとは賦體なり。或は浪華津に咲くや木の花冬籠り今を春べと咲くや木の花とは比なり。或は天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かもとは興體なるものなり。又我が國にありて更に外國になき所の一種の體あり。あし曳きの山鳥の尾のしだり尾のなが〳〵し夜を獨りかも寢ん、此和歌は枕詞なるものを用ひし體にして曾て外國にあらざる所なり。凡そ我が國にて用ふる所の體は其他緣語を加へて五體となせり。元來和歌には韻を蹈むの例なしといへども、余庚午（明治三年）の春安藝の廣島に宿せしとき、他の家の絃管の聲を聞て試みに韻を蹈みて綴なせしが、更に面白き調をなすこと能はず。其歌は、絲竹の、音は誰が家ぞ、春雨の音にみたされてたへ〴〵に、やらぬかたなき旅人の、夢結ばれぬ耳のへに。

百兒西亞に句の頭に押韻するといふことあり、故に又試みに作りなせしが、前の韻を蹈みしよりも却てよき口調を得たり。其歌は、白浪の花にも香をや移すらむ咲くや櫻のたわの浦風、古來我が國の歌に雅頌風賦比興六義の體裁ありて、多くの人の知る所なるが故に、一々枚擧するに及ばず。定家卿の歌に、しかりとて思ふ心の世にたゝず交る蓬の淺ましの世や、此歌の如きは雅の比たる體にして即

ち世を憂ふるの語なり。

漢土雅頌風の三つは、後世に至りて作ること多からずとせり。漢土の詩は屈平の賦體なる離騷より一變せしものにして、賦體は漢魏時代に至りて殆ど止むに及べり。漢魏六朝時代の詩は大概唐の古詩なるものと同じき體なり。又其他竹枝體なるものあり。卽ち風の體にして俗に言ふ流行歌（ハヤリウタ）の如きものなり。

三、賦詠體、風騷體、雜體、循環體

西洋の詩は和漢の類にあらずして、前にも說きし如く、我が國の義太夫の如きものにて、是に四つの體あり。第一、賦詠體（Epic）第二、風騷體（Lyr.c）第三、雜體（Pallads）第四、循環體（Dramat-ic）なり。賦詠體なるものは總て外面の事に就て賦せしものを言ひ、風騷體なるものは Lyre と稱する？圖の如き七絃の樂器に和して吟ずるものにして、外面より內面の感じを賦せしものなり。故に Lyric と言ふ。雜體なるものは Lyrico-Epjc とて、Epic 及び Lyric を合したるものなり。循環體なるものは、之を分つて二つとなせり。一つは道化場（Comedy）一つは愁歎場（Tragedy）此二つを以て相互に反對して、組立しものにて、譬へば我が國俗の忠臣藏の芝居の如く愁歎の場合の後ちは又變じて歡喜の場合となすが如きものなり。

四、頌、偈、詩餘、狂詩

又頌（Psalm）及び偈（Hymn）なるものあり。此二つは總て經文の終りに記す所のものにて、神德を擧て記するものなり。其他又一種のものあり。詩餘（Ode）及び狂詩（Satire）なるものあり。俗に稱する流行歌の如きものにて、尙ほ勸善懲惡の一具たるものなり。

五、擬似

凡そ詩たるものは旣に總論中に說きしが如く、雅藝（Liberal Arts）なるものにして、音樂（聲）、繪畫（色）、彫像（形）、詩、書（書は氣象に係はる）等、悉く之に屬せざるはなく、其聲、色、形をなすを擬似（Imitiaton）とて總て事物に就て眞を顯はすが如く擬似するを要し、此擬似を以て能く人情を動かすを好しとす。其人情を動かすものは歡樂なり、故に彼の芝居の如きは最も面白き處にして人情を歡樂せしむる之に越えるものなしとす。（西洋の芝居は最も上品なるものにて我が國の如き淫褻媟戲の類は決してあらざる所なり。）

從來詩（Poem）なるものは散文（Prose）に對するものなりと雖も、或る人の說には散文は道理上（Rational）とて、道理上に基き、文辭學（Rhetoric）に對するものにて、敢て詩の對するものにあらずといへり。或る說の如く總て詩は道理あるを好まずして唯だ趣きを貴ぶものなり。其根元は詩樂畫（Aesthetics）なる學ありて、即ち詩に屬するものなり。又致知學（Logic）なるものは、即ち議論文に屬するものなり。此 Aesthetics 及び Logic の二つは元來哲學（Philosophy）中の一部分

なるものなり。凡そ詩たるものは何國に於ても文章に先き立て開けしものにて、漢土は最初に詩經あり、我が國は最初に萬葉集あるが如く、（漢土の文章は李杜韓柳より開け我が國は石川丈山及び菅茶山に至りて開けり。）和漢西洋共に詩は文章の前に開けざるはなし。然れども各國の文化未だ開けざる以前のことにして、方今の如き文化開くるに至りては、必ずしも詩を以て文章に先立つべからず。

西洋の古來詩に於て最も有名な人は第一 Veda 太古天竺の人にて作る所の詩四篇あり。第二 Psalm of David 猶太人なり（キリシタンの書中に見えたり。）第三 Homer 希臘人にて古昔 Troy なる國の都府に黃金の虎ありしを奪ひ取らむとて希臘より軍を起せしときの詩を作れり。其詩の一つを行軍（Iliad）又一つを歸軍（Odyssey）といふ。此 Homer なる人は紀元前八百年代の人なり。（漢土の周時代なるべし。）第四 Aeneid of Virgil 羅馬人 +70cb、第五、近來の有名なる人は Dante +1265。−1321 意太利人にして諸神芝居 Divine Comedy なるものを作れり。第六 Jerusalem Delivered を作れる Tasso 意太利人 +1493。−1565 第七、中夜の夢 Mid-summer-nights Dream を作れる Shakespeare 英人 +1564。−1616 第八極樂滅亡 Paradise Lost を作れる Milton 英人 1608。1674 第九、Tragedy of Phaedre を作れる Racinc 佛人 1639。1699 第十 Henriade of Voltaire 佛人 +1694。−1778

又其他最も晩近の有名なるものは Faust を作れる Goethe 獨逸人 +1749。−1832

〔第 四〕

（哲學）第六　佳趣論

第六佳趣論（Aesthetics）此佳趣論は太古希臘の時代よりありしものといへども實に學問となりしは近來のことなり、是を學問となしゝは日耳曼の Baumgarten +1714。—1762 なる人にして、此學を Aesthetica と名付けたり。古昔は是を卓美の學 Science of Beautiful と稱せり。

此學ある所以とするは知（know）行（act）思（feel）智（intellect）意（will）感（sensibility）眞（true）善（good）美（beauty）致知學（Logic）名教（Ethics）佳趣論（Aesthetics）の順序あり。

凡そ知は智より知り行は意より行ひ思は感より思ふものにて此六つを性理にて分ち眞善美の三つを以て哲學の目的とす。知は眞なるを要し行は善を要し思は美を要するものにて、知を眞ならしむるものは致知學にあり、行を善になすものは名教にあり、思を美にするものは佳趣論にあるなり。美とは外形に具足して缺くるところなきを言ふなり。

佳趣論の主意となす所は同異と云ふに在り。凡て天地間の萬物同異を以て成立たざるはなし。人民草木みなしかるものとす。我國の如き上天子より下士庶人に至りては大なる差別ありと雖も、彼の西洲の如きは天子も士庶人も同じ人となせしより、大なる差別あることなく大概相比敵すと雖も自から

た異なるところあり。

譬へば人はみな同じ人なりと雖も、人々みな異ならざる者なく、或は犬は同じ犬なりとも一つ〳〵異ならざる犬なきがごとし。

總て趣きなるものは、そろふ所にそろはざる所あり、そろはざる所にそろふものあるを以て味ひありとす。是すなはち佳趣論の重んじ基となす所なり。

譬へば櫻花を愛するも枝振りも花も同じ櫻をたえず見るより、他の櫻をかはるがはる見るに味ひあるが如し。

以上

（昭和十一年十一月「國文學研究」第七輯）

自由民權意識に成る詩歌

一

よく人が知つてゐることだが、竹越三叉氏の『新日本史』上卷（一七五頁）に次の有名な一節がある。——

立志社は（中略）社員一千餘人あり、洋學所を開き、法學所を設け、日々夜々自由民權の說を講じ或は佛國革命を童謠に作つて市街に歌謠せしめ、或は魯國社會黨の非運を小說に作りて傳唱せしめ以て自由民權の說を市民に知らしめんと勉めたり、

竹越氏の記事によると、此の一節は明治十年以前のことらしく受けとれるのだが、これは時間的に大に壓縮を行なつて、立志社が十年以後に於て試みた事柄を、こゝに繰上げて概說してゐるものと見たい。若しさもないと多少の間違ひなきを保しない。何となれば、立志社關係の人物が「魯國社會黨」の非運を小說に作つたといふのは、明治十六年坂崎紫瀾が土陽新聞に掲げた「露國安那物語」より以前には無かつたことらしいからだ。現に又、露國社會黨即ち虛無黨の活動に自由民權の闘士達が同情

したのは、明治十年以後のことに屬するのを見ても知られる。

だが、それは當面の問題ではない。今、私が注意を惹きたいのは、佛國革命を「童謠」に作つて市街に歌謠せしめたといふ點だ。竹越氏は何の「童謠」を指してかういつてゐるのか、私には分からない、又明治十年以前の當時、果してさういふ童謠があつたか何うか、これも疑問といへばいへよう。たゞ然し立志社の健兒連中が、明治十年以前から、自由民權の意を寓した歌謠を市街に唱へて、宣傳的效果を擧げたことは、これは種々な文獻に照して事實と認めなくてはならぬ。

元來詩歌と小説を本質的に比較せば何うだとかかうだとかいふことは別として、同じ文學とはいふものゝ、概していつて、小説は詩歌よりも理智的であり、從つてこれの理解には理智的敎養がより多く必要であるが、詩歌は小説に比してより多く感情的であり、その理解には小説程に複雜な心的能力を要しない（勿論例外もあるにはある）。端的に、直接的に、パツと聽手の感情に訴へて來る、それだけに詩歌乃至歌謠の方が聽手を感動させる力が强い。又その理解に複雜な理智の力も要しないので、小説に比してずつと大衆的ともいひ得る。宣傳文學として第一に詩歌なり歌謠なりが選まれるのが、この理由から出てゐる。

自由民權思想の宣傳戰に小説よりも先きに歌謠が取り上げられたことは、同じ理由から十分首肯の出來ることだ。

そこで、大仰な研究などと考へられては恐縮だが、此の頃フト「自由民權關係の詩歌や歌謠を纒めて見ようかな」といふ氣になつたのを好機會に、手許にあるだけの材料を纒めて多少の整理を加へてみよう。後の同好の士にとつて參考になるかも知れない。

二

同じく自由民權思想を讀込んだ詩歌といつても、單に風懷を託したとか自然に流露したとかいふもの、いはゞ自然發生的なものと、宣傳を目的として意識的に創作したものとの區別がある。私がこの篇で扱ふのは、勿論主として此の後者の方である。と思つていたゞきたい。

自由民權思想は勿論土佐人の發明でも專賣でもないが、然し明治の政治史を繙く人は誰でも、それがいかにも土佐人の發明であり專賣であるかの如く感ずる。それは土佐の自由民權思想が概して最も强烈であり、最も團結力をもち、最も有力な指導者を得て、最も活潑な運動をしてゐた爲め、全國の同運動者からその本山の如く、その源泉の如く、その智囊の如く仰がれてゐた爲めだ、それで事、自由民權運動に關する限り、指導理論にせよ、運動方針にせよ、實際運動にせよ、研究調査にせよ、宣傳方法にせよ、立志社の爲す所は全日本の民權鬪士の注視の的となり、その一擧一動は直ちに彼等の

模倣するところとなつた。

此の自由民權の宣傳詩歌の點でも、大體として土佐人が本家だといはなくてはならぬ。それも專ら立志社員を中心にして傳播されたものであつた。

立志社の結成は、明治七年四月であるといふが、その規制によると、學舍、商局、法律研究所、討論演說が事業のプログラムとなつてゐる。別に宣傳の部署はないが、それは、學舍、討論演說等の內容を察すれば、多くはこゝで行はれてゐたものに違ひない。然し民權を口にし、自由を標榜する以上大衆との接觸は必須のものだ。演說討論は大衆宣傳の手段として或る程度まで役に立つが、多くは士族又は智識階級の爲めのものになつてゐる。こゝに於てか特に大衆の爲めの啓蒙又は宣傳を目的としたもの、更に婦女子童幼にまでも宣傳力を及ぼすべきもの、又相互間の民權意識を强化するに役立つべき手段が工夫されなければならぬのは、當然であらう。

かゝる宣傳及び意識强化の手段として文藝が、而して先づ第一に詩歌が取り上げられたことは、私の考へによると、明治維新に於ける尊攘志士間の流行が直接の實例を提供してゐるのだと思ふ。

即ち、初期に發生した自由民權宣傳詩歌の目的は、(第一)大衆宣傳、(第二)相互の民權意識强化といふ二つであつた。(後にカムフラージュといふ第三の目的が入る)。而して勿論かゝる詩歌の製作は立志社の公式プログラムの中には見えてないが、想像力の豐かな、詩歌の才ある一部青年闘士達の間

から、以上の目的で夙にかゝる宣傳歌謠が生れ、それが先輩連の默認を得て、立志社の社歌とでもいふべきものとなつたことは、『新日本史』の記事で推察される通りである。

この種の宣傳歌謠の代表的なものとしては、「よしや武士」と「民權數へ歌」の二種が殘つてゐる。この二種は何方が先に歌はれたものか、「よしや武士」の製作年代は略々判明してゐるが、「民權數へ歌」の方は正確な年代が判明してゐないので、その邊は分からない。恐らく略々同時に流行したものでさう甚しい前後はなかつたものであらう。卽ち二者ともに、明治十年前後から盛んに謠はれ出したものと考へられて可からう。二種ともに此の種の歌謠では壓倒的に流行したもので、高知詣での全國志士は皆その土産として覺えて歸つたから、その流行も、文字通り全國的であり、殊に「よしや武士」の如きは、その口調が三絃にあふやうに出來てゐたので、花街女子の口頭にもよく上つたものであつた。

「よしや武士」の「武士」は勿論節（卽ちフシ）を武張つて洒落たもの、「よしや」とは、謠の毎句の頭に「よしや……」とつくによつて題としたものである。謠の體裁は別に新規の歌曲ではない。いはゆる都々逸調である。これを集めた本は以前は少くとも民權志士間に各人一部位づつもたれたものであつたらうと思ふのに（或は歌謠本の常として、案外口へと傳はるので、本としては始めから少なかつたものかも知れない）、今日甚だ稀れに見るところとなつてゐる。幸ひ私の手許に一部あるから、こ

れを左に全部收録してお目にかけよう。

よしや武志

序

培養宜キヲ得ズンハ草木豈ニ其レ蕃茂スルヲ得ンヤ人智ノ開達亦タ然リ之ヲ培養スルニ於テハ素ヨリ高尙ナル著書アリ優雅ナル詩歌アリト雖モ要スルニ皆ナ中人以上ノ得テ其智力ヲ發成スベキモ中人以下ニ至テハ則チ猫ノ小判ニ於ケルト一般ニシテ還タ其益ヲ受ル能ハズ是レ恰モ地味ノ不饒ヲ醫セズシテ唯草木ノ枝葉ヲ偃曲シ或ハ之ヲ媒助スルガ如シ豈ニ眞成ノ豐熟ヲ期スベケンヤ今ヤ曉鴉老兄ハ大ニ此ニ見ル所有テヨシヤ節ノ編纂アリ其殊ニ優雅ナラザルモノハ蓋シ中人以下ニ訴ヘントスル所アルガ如シ而シテ之ヲ花柳界ニ唱フレバ能ク冶客ノ醜態ヲ釐革シ能ク淫婦ノ蕩神ヲ改正シ之ヲ市井田野ノ間ニ奏スレバ則チ販夫モ自ラ奮興シ耕夫モ亦タ能ク震起セシムルニ足ル若シ試ニ之ヲ有髯社會ニ一喝スレバ髯的ノ或ハ畏避退縮スル髯ニ因緣アル海老ノ海底ヲ逡巡スルガ如ク之ヲ再喝スレバ其面ニ赤色ヲ呈スル復タ彼ノ海老ノ熱湯ニ在ル如キ狀アラン其奇效ヲ現出スル夫レ斯ノ如シ嗚呼此ノ山間ニシテ此ノ佳謠アリ歐人ノ誇稱シテ自由ハ獨々逸「ドツコイ」獨逸ノ深林ニ萠出シタリトナスモノハ抑モ亦タ故アル哉

明治十年暮秋鏡川北畔ノ南洋亭ニ識ス　小鱗逸人

世しや武士

暁鴉山人撰

よしやなんかい苦熱の地でも　粋な自由のかぜがふく
よしや田植のわたしが身でも　跡にさがるは好でなひ
よしやどほでも櫛齒にかけて　結はざなるまひ亂れ髪
よしや此身はどほなり果よが　國に自由がのこるなら
よしやあじやの癖じやと云ど　卑屈さんすなこちの人
よしや若茶と摘すてらりよが　くにに心をつくづくし
よしややま吹いろよくさけど　末は實のなひこと斗り
よしやほころび縫んすとても　縫ふにぬはれぬ人の口
よしやおまへが花さくとても　水にうき草たよりなや
よしや極りもわるくはあろが　よしておくれな瘦我慢
よしやいやでも言だすからは　掟さだめてそひとげる
よしやおまへが恥かしくとも　どふでいちどははつ枕
よしやねむくも門の戸あけて　叩く水鶏を聞しやんせ

よしやお前が通ふさぬ氣でも　開けゆく世に關はなひ
よしや憂き目に近江路なれど　きよき心は比羅のゆき
よしやつらくも少しはおきゝ　思過した愚痴じやもの
よしや浮氣をするならさんせ　わたしや獨で立氣ぞへ
よしやどほでも何いとやせぬ　辛きうしほに魚もすむ
よしや眞葛はからんで居よが　うらみうらみの秋の風
よしや隅田にうかれて居よが　もとはかもめの都どり
よしや待乳といほざきとても　こゝろ關屋の我をもひ
よしや絲目が切れよとまゝよ　わたしやじゆふの奴凧
よしやしうとが鬼でも蛇でも　惚た權理ですはりこむ
よしや私がぼんくらじやとて　主のおせじにや嘔(へど)を突
よしや憂きこと富士程つもが　辛抱駿河の甲斐はある
よしやおまへが程うるとても　作り笑顔に惚れはせぬ
よしやお前がよしよしなりと　司馬徽さんでは被居舞
よしやよく目かわしや白菊の　花もじゆうにさく山家

よしや朝寐が好じやといへど　殺し盡せぬあけがらす
よしやみやまの片ほとりでも　卯月はわすれぬ不如歸
よしや釋迦でも四月のあま茶　水になろとは思やせぬ
よしや早くはそへなひとても　いふた言葉を忘れねば
よしや邪見なあなたじや迚も　實と僞とがかわらねば
よしやおまへにふられた迚も　天地容なひ身ではなひ
よしや憂目にアラビヤ海も　わたしや自由を喜望峯
よしやいなかのかた言葉でも　うそを信といひはせぬ
よしや深山の埋れ木じやとて　いろは都にまさるはな
よしや鼠にもまりよがまゝよ　咲たいろかは變やせぬ
よしやお前が氣づよひとても　覺悟きわめた戀の意地
よしやどんなに水さすとても　わしの熱心さめはせぬ
よしやシビルはまだ不自由でも　ポリチカルさへ自由なら
よしやお前が居すはる氣でも　たてゝ居るそへこの箒
よしやねた振さしやんす迚も　醒にやなるまひ村時雨

よしやカードは禁ぜられよが　マグナカルタで遊たひ
よしやしばしはうき雲たとが　晴りやその儘さへた月
よしや鴛鴦やはなれるとても　はなれまひのは我權理
よしやとふ座の花とはいへど　迷わせさんすも程が有
よしや深山の伏家じやとても　わたしや自由がたつ煙
よしやあへない中とはいへど　筆にいはせる自由丈け
よしやわたしは罪つくるとも　惚た因果じや是非が無
よしやまことを明石たとても　主は須磨してうわの空
よしや可愛ひお前じやとても　愛(いとし)がらせにや是非が無
よしや私しが間抜じやとても　焦れ仕舞じや置はせぬ
よしや田にしと踏付らりよが　主の馬鹿貝螺(ほら)にやまし
よしやあらしが立田のやまも　わたしやよし野の花盛
よしやあま酒のませる氣でも　私や禁酒でアルコール
よしやとんびが攫へる氣でも　はなしやせぬぞへ油揚
よしやいのちに限りはあれど　限りないのが國のため

よしやどほでもまことを寫す　かゞみ川かよ筆のやま
よしやおまへの仰じやとても　權利ない身に義務は無
よしや氣障でもじゆうの空氣　弘ひ世界もいつしかに
よしやどんなに縛らんしても　解ざなるまい繻子の帶
よしやせいけひ六度の地でも　こゝはあじやの日耳曼(ぜるまにい)
よしや幕がへした氣で居よが　仕組や變らぬ時代もの
よしや彼地のはらいせじや迚　ほんに難面(つれない)やつあたり
よしやおまへがフランス氣でも　私や亞細亞のガンベッタ
よしや疼くもはらねばならぬ　よこねつぶしの權利膏
よしや野暮でもヨショシ節は　なまけ野郎の夢ざまし

「よしや武士」選者の曉鴉山人とは何人であらうか、これは奥附に安岡道太郎編纂とあるから、安岡道太郎の匿名であらう。安岡は立志社青年組の錚々たる一人だ。たゞこれだけの「よしや武士」を全部安岡が一人で一時に作つたものか何うか。かゝる歌謡集の常として、他人が歌ひ捨てたものを拾ひ集めたものゝあることも事實であらうから、大部分は安岡の作としても、他の青年連の吟じたものも多少はあらう。安岡は「よしや武士」の作者代表といふ格であつたのだらうと思ふ。

因みにいふ、私の藏本は、栗原亮一が高知にゐるところ、これを購つて志州鳥羽なる養父栗原亮休の許に送つたといふ由緒附のものである。又凡例の曲調によると、この本文の毎歌句の終りに「よしよふゝし、よふし、よし」と囃子をつけたものであつたらしい。二上りで謠へとか何とかいつてゐるが、私は三絃に不案內だから、それが何ういふ調子か想像が出來ない。

「民權かぞへ歌」は一ツトセーから二十トセーまで二十ある。植木枝盛の作と傳はつてゐるが、恐らく事實であらう。これも恐らく本になつて配られたものかと思ふが、この方はまだ見てゐない。これは『明治文化全集』(自由民權篇)を始め、その他の書物にも收錄されてゐるから知つてゐる人々も多い。だが、以上のやうな次第で、これも此の種歌謠の元祖級のものだから矢張り全文を左に掲げて置かう。

民權かぞへ歌

一ツトセー、人の上には人ぞなき、權利にかはりがないからは、コノ人ぢやもの

二ツトセー、二つとはない我が命、すてゝも自由のためならば、コノいとやせぬ

三ツトセー、民權自由の世の中に、まだ目のさめない人がある、コノあはれさよ

四ツトセー、世の開けゆくそのはやさ、親が子どもにおしへられ、コノかなしさよ

五ツトセー、五つにわかれし五大洲、中にも亞細亞は半開化、コノ悲しさよ

六ツトセー、昔ををもへば亞米利加の、獨立したのもむしろ旗、コノいさましや
七ツトセー、何故お前がかしこくて、私等なんどは馬鹿である、コノわかりやせぬ
八ツトセー、刄で人を殺すより、政事で殺すが憎らしい、コノつみぢやぞえ
九ツトセー、こゝらでもう目をさまさねば、朝寢は其の身の爲でない、コノおきさんせ
十トセー、虎の威をかる狐らは、しつぽの見へるを知らないか、コノちくしよふめ
十一トセー、犬もくはない内喧嘩、やるからけふびがやせじよたい、コノばかなこと
十二トセー、西と東はひるとよる、文明野蠻のわかちこそ、コノくちをしさ
十三トセー、榮へ行く世のそのものは、民の自由にあるぞいな、コノしれたこと
十四トセー、四民一つのその中に、とぼけた華族のかへりざき、コノめづらしや
十五トセー、五大洲中の亞米利加は、自由の國のさきがけぞ、コノうれしさよ
十六トセー、牢屋の中のうきかんく、惚れた自由の爲めならば、コノいとやせぬ
十七トセー、質にもおかない我が權利、うけだす道理があるものか、コノしれたこと
十八トセー、鼻の高いに羽がはえ、鞍馬の山あで何をする、コノ人しらず
十九トセー、國にむくゆるこゝろねは、岩より鐵よりまだかたい、コノうごきやせぬ
二十トセー、日本は亞細亞の燈明臺、きえては東洋が闇となる、コノ照さんせ。（愛書趣味四ノ二）

此の「かぞへ歌」を通讀すると、何となく福澤諭吉の「學問のすゝめ」や、「世界國盡」の匂ひがして來る。勿論福澤から發してゐるなどゝ斷ずるのは間違ひであり、見當違ひでもあらうが、何處となくさういふ匂ひのするのを禁じ得ない。植木は勿論、福澤の著書はよく消化してゐたらうし、記憶のよい男であつたといふから「世界國盡」などは諳誦してゐたらうし、植木自身に福澤を模倣するつもりはなくとも、無意識的に影響が出たものであらうか。

逸話を一つ紹介しよう。

（前略）その時分、磐城の河野廣中、越前の杉田定一、豐前の永田一二等が立志社見學に來た。何れも衍丈の短い學生で雜魚場の楠瀨喜多といふ立志社唯一の女性（後年有名な民權婆さん）の家に寄宿してゐた。十一年七月には頭山滿が訪れた。頭山は每日喜多さんの家で午睡ばかりしてゐる（この家は入江に近い川岸で夏は却々涼しい。）對手があると『おい民權數へ歌を敎へてくれろ』といふそして秋になると『俺も數へ歌を覺えたから歸る』といつて、旅費三十圓を喜多さんに借用して出發した。あとには失戀の一女性が殘つた。喜多さんの妹分でお羊さんと呼ぶ十七歲の處女であつた云々。（昭和四年三月、愛書趣味四ノ二號、濱本浩氏「民權かぞえ歌」）

おもしろい話だ、だが、これで一面當時の志士がこの歌を立志社土産にして國々へもち歸つた樣子がよくわかる。

勿論これ等二種の歌謠は、大衆といふ觀點から代表的といつたので、自由民權關係の詩歌はこれに限つたのではない。直接に宣傳的とこそはいへぬが、先づ志士の漢詩が種々ある。これ等も間接には自由民權の意識强化に役立つたものだ。だが漢詩のことは、後にまとめて語ることにしよう。

三

「よしや武士」や「民權かぞへ歌」の製作されたころは、これ等歌謠が自民權意識を宣傳するために作られたことは明白であつても、歌謠をもつて是非民權意識擴張の一手段としなくてはならぬといふ思想が積極的に纏まつてゐたわけではない。幾分か試みといふ形があつた。だが、これが異常な大成功を博したので、逆に、これ等歌謠の成功が歌謠そのものを宣傳手段にしなくてはならぬといふ思想を起戟したのである。明治十一年七月十九日の大阪日報（七二七號）には「民權ヲ擴張スル方法」といふ社說があり、この社說では、中等以上の社會に對しては、（一）新聞雜誌（小說の如き文章も入る）、（二）演說討論の二手段を利用し、中等以下の社會に對しては、（三）謳歌竹枝、（四）宗教の二手段を利用しなければならぬと說いてゐる。その（第三）謳歌竹枝の條を引抄して示すならば、――

第三　謳歌竹枝　文章ト演說トハ固ヨリ流通シテ馳聘スレバ其效用ハ以テ世運ノ開進ヲ助ケ人民ノ

智識ヲ擴ムル事此ノ如ク夫レ大ナリト雖モ大凡ソ論者ノ筆ヲ執リ事ヲ述ブル習慣ト地位トニヨリ或ハ鄙野ノ俗文ヲ綴リ下等ノ俚言ヲ須ユル能ハザルノ事情アルヲ以テ其之ガ爲メニ感動スルモノ或ハ中等社會以上ニ止マリテ下等社會ヨリ婦人兒子ニ至ル迄ノ開明ヲ致ス米國ノ如キヲ得ルハ難カラン而シテ獨リ此等社會ノ心ヲモ感通セシムルモノハ俚語若クハ竹枝ノ流行詞ノミ古ヘ支那堯舜ノ民ハ皆愚夫愚婦ナリ然ルニ萬口一談ニ舜禹ヲ謳歌シテ丹朱商均ヲ謳歌セズ益ヲ謳歌セズシテ啓ヲ謳歌スルモノハ豈ニ一先覺者ノ之ヲ教ヘテ皆之ニ習フモノニアラザランヤ四百餘州ノ愚民ニシテ豈ニ一々ニ得テ其人ノ賢愚ヲ判スルヲ知ランヤ古來世ノ亂世亂餘ニハ殺伐ノ謳歌流布シ治平安逸ノ時ニハ太平ノ竹枝流行スル亦タ其徵ナリ近頃高知ニよしや武士ナル一謳歌ノ流行スルコレ元立志社員中ノ手ニ成ルト聞ケリ其歌意或ハ粗慢ニ流ルヽモノアルガ如シト雖ドモ之ヲ以テ人民ニ國事ノ重キヲ示サントスルハ亦一ノ好手段ナリト下等ノ人民ヲ感化スルハ豈ニ夫レ之ヲ措テ何ゾ

これに觀ると、「よしや武士」の成功が、かゝる思想を起戟さしたといつても不可でない。

いづれにせよ、十一年頃から、一部人士が歌謠を以て對大衆の民權宣傳の好手段と公然認めるに至つたことは、この一文で察せられる。何となれば、この一文は日報記者の私言ではなく、輿論の反映と見てよからうし、又此の一文によつて明確に覺醒させられて、歌謠に對してかゝる認識を新たにし始めた志士達もあつたらうからだ。

更に轉じて、その當時の詩歌の發達史の方から考へると、歌謠を明確にかゝるものと認識せしめるに至つた間接の要因めくものが二つほどあるやうに思はれる。その一つは、詩歌改良の考へだ。これが、從來社會と何の接觸もない浮文遊詞乃至は誨淫導慾の具と見られてゐる歌謠を改良して社會に實益を與へるものにしたいといふ考へが一動機となつてゐる事は、こゝで喋々說くまでもなく、この方面の研究家には常識となつてゐるが、歌謠を民權意識宣傳の具とするといふのも背景には暗々裡にかういふ考へが動いてゐたのだといつて可い。今一つは、西洋の詩歌で政治に觸れたものが往々紹介され、それが又歌謠を政治と結びつけることの正當さを敎へたともいひ得る。かういふ詩歌方面の時代の空氣が、間接に維新志士達の示した前例を助けて、自由民權意識に成る歌謠を盛んに出現せしめたといふことが出來やう。

理窟めいたことをいへば、先づかうはいふものゝ、一つは自由志士達が、何うにもかうにもムシヤクシヤして遣りきれなくなつて、思ひきつて聲張りあげて欝屈せる感情を歌ひ出したい衝動に驅られたといふことも、大きな一つの要因になつたらうといふものだ。（昭和十一年十一月號「書物展望」）

四

明治十年以後二十年頃までの間に出た民權歌謠は、その種類に於て實に多岐にわたつてゐるが、大別すると、俗謠俗曲、漢詩、新體詩（及び準新體詩）の三種となる。さうしてその出現の時間的先後をいつたら、漢詩が最も早く、俗曲がそれに次ぎ、新體詩が最も後に出たことにならう。

俗曲はこれを細別すると大體六種に分れる。一は俗曲、小唄、端唄體を襲うたもので、主として替唄となつてゐる、（二）俗謠、即ち主として都々逸體のもの、（三）數へ歌（手まり歌）、（四）新作俗歌、これは、體式は新體詩に屬せしめてもいゝが、語句の上からは全然俗歌となつてゐる比較的長いもので、新作が多い、（五）淨るり、これは數が多くないが、一二ある、（六）流行歌、即ちオツペケペーの類を指す。先づ此の六種がある。

漢詩に、この詩の各體に應じて種々なものがあらうと思ふが、（一）短詩（絶句）、（二）長詩（古詩）又は歌行風との二種に分けて置く。

新體詩もまた（一）唱歌調と（二）新體詩と二種に分かつ。これに（三）準新體詩として、今様風のものが入るので、三種となるわけだ。

或は新體詩の（三）を分けて和歌の一種を立て、これに短歌、長歌の二種を置いて見ても説明はつく。何れでも可い。

以上の如き區分の仕方で、各種の民權歌謠、詩歌について語つて行くとしよう。

五

先づ漢詩について語らう。

漢詩で古いものは、明治九年、成島柳北が下獄の時の作と傳へられる右の詩であらう。

天無楮墨天無舌　人代天言代天筆　我下獄時天爲泣　滿眸涙化滿城雪

これは柳北と同時に下獄した某氏の作であるともいふが、一般には柳北の作として傳はつてゐるから先づさうとして置かう。いさゝか芝居氣があるといへばいへぬことはないが、その意氣は大したものだ。同じく新聞條例で入獄した鳥居正功の作に次の詩がある。

武士建功卽戰場　仁人得罪是文章　自由權利君休說　研盡腰間三尺劍

又左の詩は、國會請願代表の一人茨城縣の野手一郎が太政官の門柱に題したものといふが、頗る當時の志士達に愛誦されたものだ。

辛苦艱難不足言　丹誠誓欲達天閽　誰知衣袂斑々濕　卽是微臣血涙痕

明治十三年頃の作でもあつたらう。略ぼ同じ頃南總の人某氏が時事を慨して作つた詩に、かういふのがあつた。

何時得作自由民　國會未開權不伸　舊主門前一枝帚　今朝又掃落花塵

それより有名なものには、例の中島勝義の作といふ天日光寒巴里城といふ、有名なルウィ十六世を斷頭臺に斬るのを詠じたものがある。これは餘りにも有名だから、誰でも知つてゐやう。

栗原亮一の詩には、志士達の吟誦したものが多い。今『皆無庵遺響』中から一二抄して見よう。

默坐沈思殘燭前　苦艱遭遇憶先賢　寒威肌粟風霜夜　泣讀蘆騷民約篇

これは冬夜書感といふものである。

貪婪自誤治民謀　君視土塵臣視讎　奮鬪淋漓濺熱血　西球染出十三州

讀米史と題するもの、明治十二三年頃の作であらうかと思はれる。長詩（七言古詩）で有名なものは、波蘭國滅亡篇と巴黎懷古の二篇だ。これはいづれも、當時の志士愛吟中の珠玉ともいふべきものであつた。

弱肉强食一爭場　何異豺狼逐群羊　茫々天地公道滅　此時家國奈存亡
草莽豈無義烈士　奮然挺身執戈起　激昂決死誓山川　國存則生亡則死
孤軍防戰爭雌雄　動如雷震疾如風　悲憤淋漓滿腔血　欲灑敵陣試擊攻
嘗膽曷時雪此恥　難奈士氣屬萎靡　衆寡不敵勢旣窮　奮戰決鬪斃而已
痛恨無告亡國民　號叫呑淚訴蒼旻　百萬降兵夜流血　羶風腥雨泣鬼神

靑燐連野堆髑髏　英魂毅魄地下哭　壼磨汝劍飄汝旗　義軍一擧圖恢復
偷安多是自取殃　波蘭畢竟非天亡　君不見　蘇普盧(ソノブリユス)　拂盡妖氛輝國光
又不見　瑞得爾(ズキノテル)　熱血染出自由鄕

この詩は製作年代を詳にしないが、十三四年のものかも知れない。巴黎懷古の方は十五年に板垣後藤に隨つて洋行した時の詩だから、恐らく十六年の作に違ひない。

塞煙(セイヌ)之水巴梨(パリソ)城　地屬坤輿第一名　東瀛萬里乘槎客　懷舊向誰愬我情
想見路易十四世　苛政威厭猛虎勢　壯士慷慨志難酬　鼎鑊鋸刀前後斃
王家積惡苦蒼生　堅氷不戒履霜際　維時七月蕭颯秋　殺氣捲天起城頭
斬木爲兵揭竿頭　一擧義軍誅王侯　殺人如艸機化劍　屍骸成山血成流
專制君國威我敵　宣戰飛檄震五州　千古憂憤民約論　一世功名山獄黨
暴戾驅入亂賊門　英雄豈徒屈草莽　龍戰虎鬪亂無窮　霸圖帝業盡歸空
自由凱歌昇平象　共和建國貴賤同　儒生知否家國事　極亂却是致盛治
如今泰西文明華　總成羶風腥雨裏

此の種の詩では空前の長篇だが、誦し來つてその長を覺えない。

杉田定一（鶉山）が『經世新論』で筆禍を買つたのは、明治十一年であつた。その時拘留所での詩

だといふのに、かういふのがある。

夏宵雖短永於年　萬感撑腸恍不眠　撃柝一聲天地寂　木欄圍外月如煙

同じく杉田が、明治十五年四月板垣の岐阜の變を聞いて作つた詩に曰く、——

大道同人豈共灰　天將奇禍練眞才　海棠昨夜無情雨　添得一層春色來

同じ時中島信行の詩に——

（前二句を忘る）

金華山裂紅滿地　正是自由結實時

といふのがある。これもよく吟誦され、引用されたものだ。

十七年十月の加波山志士は皆詩を好くした。就中自由壯士達の口に膾炙したものも尠くない。河野廣體の加波山義擧の詩に曰く、——

虎狼不斬鯨不斃　一片丹心天地知　偶有秋風拂妖霧　山巓高颺自由旗

一味の巨魁視された富松正安の獄中の作にいふ、——

是非顚倒任人評　一片丹心如火明　誰識孤囚滿腔血　澆成膏雨濕蒼生

琴田岩松は、その獰猛な風貌に似ず、頗る詩人の素質をもつてゐた。

慷慨元期救蒼生　憤然決志爲此行　毒蛇蜿蜒兩毛野　豺狼咆哮帝王城

霜冷腰間三尺劒　腸寒壯士千歳名　風蕭蕭兮雲慘憺　憶起當年易水情

これは利根川を渡る時の作だが、殊に悲壯なのは、獄中母を思ふ作だ。――

三歳爲囚稀雁魚　夢魂唯向故園囘　鐵窓漏入半輪月　應照萱堂枕上來

平尾八十吉は、一味中唯一の戰死者だ――

不管事業僞兼眞　一擧可顚此暴秦　結得關東奥羽士　他又豪傑有何人

その他宮部襄を始め、まだまだ多數の人の詩を擧げることが出來るし、叉擧げなければならぬが、紙數の都合でさうもいかぬから、『佳人之奇遇』中で絶唱と稱された我所思行を揭て漢詩の分は打ち切ることにする。我所思行は幽蘭女史四首、紅蓮の和詩四首、合して八首あるが、今紅蓮の作を一首だけ抄出する。

我所思兮在斯身　蟠屈却期一朝伸　豫知成敗自有數　豈爲屯蹇失牲眞
天歩艱難如怒浪　世途嶮巇似列嶂　排之蕩之是吾任　區區辛酸不用恰
自古英雄出僕奴　異才往往隱狗屠　果知溷亂紛爭世　或出奇偉俊傑徒
寶刀在匣氣勃勃　何時能刺姦佞骨　海若眠時天地靜　枉把袂哀嘯皓月
月横大空千里明　風搖金波遠有聲　夜寂ゝ兮望茫ゝ　船頭何堪今夜情

我所思行は必ずしも自由民權の頌詩といふのではないが、愛蘭士亡國を嘆する慷慨の意が自由志士

の心膓を動かして、頗る歡迎されたものであつたといふ。

六

次に俗曲俗謠について語らう。

端唄の替唄式のものは、これも亦、明治九年に早く見えてゐる。

吾がものと、思へば嬉し、民權の、天賦の自由を胸に据へ、とぎ行く議論は、禁獄の、便器掃除のたねとなる、待身につらき滿月も、實に名譽じやないわいな

新橋の妓某が情人の記者の入獄を思ひやつて唄つたものといふ、自由民權の十分な宣傳とはいかぬが前半に多少その意か見えるので掲げて置く。尤も臺灣征伐の時、「夕ぐれに」の替唄で諷刺歌謠が出來たが、これは、今掲げずに置かう。

だが早いのは上の一首だけで、あとは皆ずつと後になる。數も少ない。栗原亮一の作と傳ふる「忍ぶ戀路」の替歌――

忍ぶ暗世はさてつらいもの、祕密(かくれ)逢ふのは、命がけ、照らす自由の燈の、光りを見せよ慈悲なさけ

これは明治十七年五月自由燈創刊の宴席でうたひ出されたものといふ。

同じころ自由黨の壯士連中の間で、よくうたはれた替唄が二つある。

（常盤津將門の替唄）

すごや魯西亞の物語、つよげな帝も幾度か、報の罪に責められて、事いたましき破裂彈、それおほへてか君さまの、姿も春の朧ろ月、おぼろげならぬ世の鑑、うつして見せて戒の、民の下燃へ思ひは胸に、壓制ゆへといふことを、そのおり知りて明暮(あけくれ)に、わたしの念がけふの今、屆いてうれしい此のしらせ、イヂヤ／＼と人々のむらがる夢合せ

（色氣ないとての替唄）

命ないとて苦にせまいもの、野邊の石碑に月もさす、見やれ苔にも花が咲く、監獄(ひとや)もどりに袖つま引かれ、今宵逢うとの目遣いに、招く合圖の旗印、すゝきに雜る髑髏(されかうべ)、心と讀んだが無理かいな

前者は作者不明だが、後者は栗原亮一作とも、小室信介作とも傳はつてゐる。此等の替唄は、政府當局の彈壓が嚴しくなつてからのものだけに「自由黨史」にいふところの革命文學めく調子がある。この種の替歌は、まだまだ數が多かつたらうし、現に國會開設後、盛に此の種の替唄が出來た。明治十六年福島や高知に流行つたといふ――

我戀は佛蘭西の國の革命(レヴオリユーション)起すニヤ恐し起さねば可愛自由に逢れない

又政治小說『總理大臣』明治二十年刊、志賀祐五郎著の中に見える――

春の日の、戰よ吹く風に誘引れて、谷の戸出づる鶯も、緣の梅の宿借りて、アレ見やしやんせ鳥でさへ、心の隨に物言ふて、自主の權利を張るわいな――

といふのも、かゝる替唄の一種かも知れないが、私は原歌に暗いので、何ともいはれない。

この種の替唄や、次の都々逸式の歌謠が志士の間に流行したことは、一面志士と花柳社會との接近を立證するものであり、その點では、彼等の間にも、幕末維新の勤王浪士等と頗る似通つた氣分が漂つてゐた。

都々逸式のものは、「よしや武士」をもつて代表されるが、民權都々逸の元祖は「よしや武士」よりも古く、矢張り明治九年頃から見えてゐる。明治九年某月評論新聞第七十五號に、新橋妓流間の流行歌として左の二首が出てゐる。

緣と思へばあの腰繩も　むすぶ心のいさぎよさ

雪はとけ花は開くる此世の中に　啞しのまねする身のつらさ

前者は、禁獄中の情人たる新聞記者の身の上に心意氣を走せたもの、後者は言論壓迫の不當を慨嘆したものである。「よしや武士」と同じ頃、高知で流行つたといふ都々逸で「民權家」と題するものに次の一首がある。

杜鵑愚痴な言だよ八千八聲　鳴ても雲井は浮はのそら

明治十二年三月明林新誌（第一號）に見える一首、――

民の權利がたたないならば　死で自由の鬼となれ

これは、その頃大阪の花柳社會で流行したものであつたといふ。

「よしや武士」以後、高知で新に民權都々逸といふものが作られて、盛んに歌はれた。作者は當時高知新聞記者坂崎斌である。曰く、――

〇民權獨々逸

旭かゞやく國とはいへど　民のねむりのまださめぬ

己が在所のかやぶき屋根も　かはらないのが自主の權

握り拳でアノ早蕨が　民の權利を春の山

野邊の若草踏みつけられて　萠ゆる思ひのたえまない

花に嵐は浮世のならひ　あとになるみのあんじられ

公議輿論でかうなるからにや　わたしばかりの愚痴ぢやない

ぬしの時計もソレみやしやんせ　もはや十二時まきなほし

かげらうのそれかあらぬか參政權利　思はせぶりにも程がある

自由黨主板垣退助が、政府の干渉政策を慨して作つたといふ變態都々逸が一首ある、――

風雨が育てるとても、雨風が强けりや花もちるぞいな

ホンニお世話もほどがある

諷旨幽婉、調子も佳い。又誰の作とも聞き知らぬが、同調の都々逸で皮肉の頗る猛烈なものがある。

〇〇は鬚ある癖に二重腰、海老の權利の後退り、

ホンニ卑屈な態(ざま)かいな

十七年十月自由黨解散の時、歌つたもの——

乘り出した舟だよ果ては何處までも

おも舵取り舵ぢや、互ひの胸にある

これは有名なもので、志士會合の席ではよく歌はれた。又左の數首も一般に好んで歌れたものだ。

破れ障子とわたしの權利、張らざなるまい秋の風

二十三年、そりや大馬鹿よ、善は急げと書いてある

他所(よそ)の花、羨むばかりぢやそりや氣が弱い

與我自由否與死　熱血染出十三州

羨ましけりや咲くがよい

二十三まで苦界の闇路、たよりますぞへ自由燈

この最後のものも、自由燈の發刊を祝したものであらう。

明治十六年八月の繪入自由新聞によれば、大和地方の雨乞踊りの唄だといつて左の如く見本數首出てゐるが、これも體例は、都々逸式である。

長い日照りの專制主義も、頓て自由の雨が降る

民のうるはふ自由の雨を誰か束縛するやらん

十七年十月三十一日自由燈には大阪此花新地吉川席のお德といふ妓が右の都々逸をうたつて喝采を得たよしが見える。

死骸の山積み血の雨降らし而して自由の花咲す

前出の政治小説『總理大臣』の中に（第六回）――

遂げぬことゝは心に知れど已むに已まれぬ國事犯

明治二十年には、自由思想を主題にした都々逸集で「改良百々逸評集」といふ本が刊行されてゐるといふが、それは未見である。都々逸は、簡單な詩形で、而かも即席にいくらでも作れるため、若し探すつもりで探せば、夥だしく集まると思ふが、今はかくの如く、見本程度で止めて置くより仕方がない。

尙は高知の某妓が好んでうたつたといふ左の一首は、決して都々逸ではないが、他に分類すべきも

のがないので、こゝに附載して置く、或は何節とかキチンとした名があるのかも知れない。曰く、
壓制しやんす、壓制しやんす、滅法矢鱈に壓制しやんす、お前達ア民權自由がお嫌ひか、ヤツパリ
壓制がお好きかね、テモマアおかしなお人ぢやね、ヒーャヒヤ
といふものである。

第三の數へ歌、乃至手鞠歌と稱するもの、これも、植木枝盛の民權かぞへ歌が代表的なるものであるが、その他にも有名なものが一二篇ある。同じ植木の民權自由かぞえ歌といふものが明治十三年十二月の「世益雜誌」に見る。

〇 民權自由數え歌

一ツトセ　人の生れは皆同じ權利に異りがあるものか　この同權よ
二ツトセ　二人三人の〇〇で兎角にお內が治まろか　この無理な事
三ツトセ　民權自由がわしの戀壓制舅姑があるとても　この恐れやせん
四ツトセ　輿論會議のその勢はおまへの力ぢや遏まらない　このやめしやんせ
五ツトセ　入らぬお世話のこの仕方程のないのはわしにや邪魔　このやめてくれ
六ツトセ　無理な仕方は通りやせん文明開化の世の中に　この政府でも

七ツトセ　なんぼおまへが威張つても天下は天下の天下ぞい　この萬人の
八ツトセ　止めておくれよ壓制をこれが亂れの本となる　このおやぢさん
九ツトセ　こんな馬鹿げた仕組では人氣のよろしひ筈がない　この換へしやんせ
十トセ　どうで自由の此戀路茨の中でも推し通る　この惚れたわし
十一トセ　色は香へどちりぬるを散りもせぬのは民權よ　この大切さ
十二トセ　西と東の別ちなく政府は人民保護の爲め　この我國も
十三トセ　榮え行く世のその本は民の自由に在るぞいな　この外はない
十四トセ　質にも置かない我權利うけ出す道理があるものか　この我物よ
十五トセ　ごまかし政事は一時よ二時立つたら尾が見ゑる　この淺間しさ
十六トセ　論じつめたら外はない專制政治が害の本　この昔しより
十七トセ　知らずにするのは罪淺し知つてやるのが罪深い　この惡い事
十八トセ　早く國會拵らゑて立憲政治に致したや　この我國を
十九トセ　黑き白きは言はずとも天下の人間に目がござる　この分るぞい
二十トセ　日本の國の獨立は民の自由にあるぞいな　このさき〱も

この數え歌の公にされるより一年半程以前、卽ち十二年四月の「大瀛新報」といふ雜誌（第十號）

には、この頃九州地方で流行を極めてゐる自主自由かぞえ歌といふものが一二首引抄されてゐるが、
それが、例へば、――

一ッ　トセイ　人の生れは自主自由獨立するのが第一だ　この世の中に

十二トセイ　西と東の別ちなく官的やおいらのやとひもの　この稅を出す

といふ調子のもので、今に示して植木の數へ歌と頗る調子を同じくするものがある。植木は明治十一二年度の夏、九州遊說の時、可成り長く福岡邊に滯留してゐたから、或は此の自主自由の數へ歌も植木の作かとも思はれる、若し然らずとせば、この自主自由數へ歌に暗示を得るか、これを模倣するかして、植木が民權自由數へ歌の方を作つたものであらう。

この二篇は何れも反抗意識が可なり强い。

年代が少し飛ぶが、明治二十年十一月十五日淺草の鷗遊館で全國有志懇親會が開かれた時、東京の代言人佐藤修吉が會員に頒つたといふ手鞠歌がある。

一ッ　トヤ　人に自由がない時は〱かたはのからだも同じこと〱

二ッ　トヤ　蓋するように押へても〱押へきれぬは人の口〱

三ッ　トヤ　三千七百萬人の〱力は御國の杖柱〱

四ッ　トヤ　よその侮りふせぐには〱上下一致でせにやならぬ〱

五ットヤ　今は寢て居る時でなし〱起て働らけ國の爲め〱
六ットヤ　無理を通してすむ樣な〱世界は地球の上にない〱
七ットヤ　何から何まで外國の〱眞似すりや日本と云はれまい〱
八ットヤ　大和心を人間はゝ國の爲めには死ぬ事ぞ〱
九ットヤ　（缺）
十トヤ　遠くの國へも日の本の〱威光を示せ吾れ人よ〱

民權自由を基調としてはゐるが、その中にも大分國權意識が强くなつて來てゐる。

第四の新作俗謠、これには、先づ植木枝盛の民權田舍歌を擧げなければならぬ。これは、明治十二年六月刊行の『民權自由論』の附錄として出てゐるものである。これは、大抵の俗謠の長編は七七乃至七五の調子で諧調を保つて進むが、この田舍歌は全くの自由詩である。勿論每句七五を基調としてゐるといへばいひ得るが、然し別にそれに束縛されず、全く奔放に自由に歌つてゐる。これの內容が自由民權宣傳の政治詩でなかつたならば、明治大正詩歌史上大に問題とされたに違ひない。然も兎も角、形式の方から注意すべき作である。

○民權田舍歌

自由なるぞや人間のからだ
心の靈妙萬物に越へ
天地と云ふもよし
なにも不足はないぞいの
自由じや自由じや人間は自由
食ふも自由に生きるも自由
體(からだ)は動き足や走る
自由にするのが我が權利
權利張れよや國の人
取らねば我儕(み)の恥ぞかし
羽があつても飛ぶことならぬ
鰭があつても游がれぬ
蹄があつても走られん
自由の權利がない時は
さらば人間と云ふものは

頭も足も備はり
心と身とが具はるは
自分一人は一人で立つよ
そこらで人間を自由と申す
行くも自由よ止るも自由
心は思ひ口は言ひ
見たり聞たり皆自由
自由の權利は誰も持つ
自由は天の賜じや
おまへ觀んかへ籠の鳥
おまへ觀んかへ網の魚
おまへ觀んかへ繫いだ馬を
人に才あり力もあれど
無用の長物益がない
自由で生きてこそよけれ

自由が無ければ死んだも同じ
鹽と云ふのはからいが鹽じや
砂糖と云ふのは甘いが砂糖
人間も自由でこそよけれ
卑屈さんすな壓制受ける
天の人間を造るのは
人の上には人はなく
こゝが人間の同權じや
政府は民の立てたもの
官的や吾儕の雇ひもの
古へ今の別ちなく
壓制暴虐やらかして
人を殺し家を燒き
議論を禁じ口を閉ぢ
なんとこれでもよい事か

おまへ觀んかへあの鹽を
からくなければ沙である
甘くなければ土じやぞへ
自由がなければ人形よ
人に貧富强弱あれど
天下萬人皆同じ
人の下にも人はない
權利張れよや國の人
法度は自由を護る爲め
權利を張らねば詮がない
惡るき政府が世にあると
民の自由を抑へ制け
金をとつたり寶を奪ひ
無理非道の事ばかり
これは間違ひ大間違ひ

こんな無道の政事では　民の安樂が得られない
權利張れよや自由を伸べよ　民選議員（院カ）を早く立て
憲法（おきて）を確に定めようよ　これは今日の急務じやぞ
やれ〱やれ〱國の人　立憲自由の政體で
自由の權を張り伸し　學問修めて智惠磨き
職業務め働いて　文明開化の人となり
三千餘萬が一致して　國の威光を輝かし
秀で榮えて行かしめよ

（明的十二年六月『民權自由論』附錄）

此の種の新作宣傳俗謠の作者としては、植木の外に、坂崎紫瀾の名を忘れることが出來ない。十四年八月一日高知新聞一五〇號を見ると、左の記事に出會ふであらう。

〇頃日九十度以上の苦熱には流石に姑射の神人氷雪の膚もたへずやありけん上の新地得月樓の藝妓六々三十六名が毎夜竹の模樣なんつけたる揃の浴衣にて鏡川原に伊勢おんどを躍り出せし由なるが又此方には鬼神をも取りひしぐべき壯士が自由の二字を記せる走提燈を高く提げて例の民權躍りを勉强せらるゝとのこと柳は綠花は紅あら面白の浮世にぞある因にアメリカ獨立てふ曲譜を得たれば

左に錄して四方有志の抵掌を博す

朝陽輝やく太平海や　波の彼方の亞米利加洲は
コロンブス氏の發見せし以來　音も名高き新世界
東岸しなる英吉利領は　日月經ること三百餘歳
次第〳〵に人別ふへて　民の產業繁昌すれば
欲に目のなき本國政府　アレのコレのと租稅をかける
されば人民よりあつまりて　我も〳〵もと議論をのぶる
中に拔群しパトリクヘンリー　眼血逆しり突つたちあがり
我に自由を與へよ神よ　自由なければ死を與へよ
假令國王政府といへど　非理の所業は堪忍ならぬ
イデヤ義兵の旗擧せんと　勇み進みし老若男女
ワシントンをば總大將に　四十八士が連判なして
本國政府の罪かき立てゝ　國の獨立世界へ示す
まつま程なく喇叭の響き　敵の大軍群りきたる
凝りにこつたる鐵石心に　鋒も矢玉もはねかへる

新手いれかへ渡海の敵に　流す血の河屍の山も
人に勝てふ天定まりて　和睦なせしはしちねんめ
共和政體目出度こゝに　人の上には人こそなけれ
四年代りの大統領　上院下院の評議役
昔しつどひし十三州も　今は三十六州となりて
扨ても愉快な獨立話なし　其(それ)に引代へ亞細亞の洲(くに)は
民の權利も荒繩しばり　牛よ馬よとおひつかはれて
いきて甲斐なき此の有樣を　筆に書れず口にはいへず
遙か隔てし東の空を　眺めて暮すが浮月日

坂崎自筆の「紫瀾年譜」を見ると、——

又草濱躍曲米國獨立曲其他民權詞曲十餘種（明治十六年）

とあるから、此の曲が坂崎の作だと知られる。坂崎は、この一曲だけでなく、十四年から十六年へかけて民權詞曲を十餘種を草したものであらう。詞曲といへば何れも相當長いもののやうな氣がするが此の一曲以外、私は知るところがないから、そこはたゞ想像に止める。

以上二曲は、その內容からせば新體詩の方に入れても可いものだが、詞調が俗だから、俗謠として

一項を立てゝ置くのが當然だ。さうして兩者とも、殊に後者の方に、矢張り福澤諭吉の『世界國盡』の臭ひが何處となくある、而かも相當深く浸みこんだ臭ひである。これは兩者を讀み比べた人は、必すや首肯するであらう。

次に淨瑠璃體のものは、長短二種あり、長は院本の體を成してゐる。松澤鶴舟の「民權鑑嘉助の面影」や、小室案外堂の「法燈將滅高野曉（ひはくらしたかののあかつき）」、及び「義人傳淋漓墨坂（ぎじんでんなみだのすみさか）」、或は飜譯で坪內逍遙の「自由太刀餘波鋭鋒」などはこの長篇淨瑠璃の方に屬する。案外堂の作や逍遙の「自由太刀」については、私は前に自分の著書の中で詳しく評つたことがあるから、今左に鶴舟の「民權鏡」の見本だけ揭げよう（十四年四月二十四日、東洋自由新聞二十九號、民權鏡加助の面影、四段目の中より）。

かゝる壓制束縛の下に生れし民として自由權利は夢にだにしらざる中にたゞ獨り義を鐵石に固めなし多くの民の共爲めに身を鴻毛よりかろんじて鳴雷（なるかみ）より恐れなす時の領主に畏縮せず理非明らかに剛訴して苛酷の收斂遁（のがれ）しも空く畫餅となるのみか一方ならぬ大難の身にふりつもる白雪を踏分け歸る夕まぐれ人目を包む蓑と笠梓川原にさしかゝるこなたは弟彥之丞此頃聞く世の噂心がかると一心に降りくる雪を傘のかみを賴みの眞心や兄の松本の鄕宿（がうやど）方へ心ざし漸ゝ渡しに近つきぬ思へば人間五十年永い浮世に短い命時よ時節と云ながら思ひもふけぬ今年の不作又其上に今度の難題叶ひし願ひも水の泡何の因果か我〳〵はかく非道なる御地頭の下に生れて斯く斗り心を焦し身を碎き凄や

子供や弟に苦勞をかけて心配の中に月日を送るぞやハテ淺ましや〳〵と互にそれと越方を思ひつゞけし義民の涙袖や袂に淵なせりよしや浮世の浮沈かくては果じと足早に歸ると知らぬ弟に來るとも知らぬ兄加助川の汀の舟小屋に立寄て聲潜め急用有て西へ越す者早く渡して下されよといへば舟人口々に渡してやるは安い事だが今日御上から御沙汰が有て日暮てから一人りも渡す事は相ならぬと見やしやれあのやふに舟迄封じてもそつとの先歸られたソリヤ又どふして何故と云ふ顏詠めてヤアあなたは中萱（村）の旦那樣いかにも私しは加助でござる云ゝ

これで大體の調子を概することが出來ようかと思ふ。鶴舟は案外な文學的手腕の持主である。「民權鏡」は淨瑠璃として語られるばかりでなく、舞臺にかけられもし、その都度見物を泣かしめたものであつたといふ。

短い方では、諷刺滑稽を交へたものを入れると相當多いことだと思ふが、眞面目なものが案外少ない。例として、左の一篇をお目にかける。『經國美談』主從再會の場である。作者は横濱の人加藤行永といふ。この人は當時のゴシツプ雜誌にチョイチョイ投書してゐるが、何ういふ人か詳かにしない。この淨瑠璃は明治十六年八月發行「面白叢談寄合話」第一號に見える。――

山里や時雨（しぐれ）にまじる小牡鹿の。音も小夜更けて憐れなる。病ひの牀に只一人。身の過方（こし）行末ゐを。

思ひつゞけて巴比陀(ペロピダス)。落つる涙を拂ひつゝ。詞「ハッア如何なれば斯までに正理を守る我ゝが身には不幸の重るぞ。本國騷亂の初めより三年に餘る憂き艱難。曩には寧河(ねいが)の流れにて死たる命。幸ひに漁夫老夫婦に助けられ阿善に於ては奸黨等が。刺客の爲めに果敢なくも。刄の錆となるべきを。李志(りしす)が息女の情けにて。漸く逃れ是までは、露の命も繋ぎしが。今又斯る病ひの爲。空しく此に相果なば。千辛萬苦の甲斐もなく。本國齊武の回復も。事半途にして水の泡。昨ふに比べ今(けふ)はまた。最と苦痛を覺ゆるは、我が身も天より遺(す)てられてか。ハテ是非もなや。口惜しや」流石無双の英雄も國を思ふの精神と民を憫れむ眞心より。悲歎の涙はら〳〵。落て前後も忘れける。折から秋の空冴へて。隈なく照す月影に。風がもてくる琴の音の。遙か彼方に聞ゆれば。巴比陀は身を起し、詞「ハテ心得ぬアノ爪音。斯る偏鄙の片山里に。妙なる調べを聽くものかな。如何なる人の手弄(てなぐさみ)ぞ。」と暫し病苦も打忘れて、獨り牀より起き出づれば。琴の音次第に近づきて。歌の聲さへ最と憐れに

(歌は後に出る「春の花」、こゝで略す)

と歌ふを聞て巴比陀 詞「ハテ不思議やナ。アノ歌こそは數年前。我が本國に在りし時。自らが作りし短歌なるに。之を歌ふは心得難く。若しや由縁(ゆかり)の人にもやと。思へば聲さへなつかしく。窓より外面(そとも)をさしのぞけば。月の光りに俤の。やつれ果たる禮溫(レオン)が姿。それと見るより巴比陀は、思はず

窓より聲をかけ。其處に立しは禮溫にあらずや。と問はれて此方の樂人は。暫し見上ぐる其折から再び上より聲高く。禮溫にあらぬか誤りしかと。言はれて下なる樂人も。然かのたもふは郎君ならずや。禮溫にてこそ候なれと。跡は涙に主從が。見上げ見おろす窓上窓下。暫し詞もなかりける。

此の淨瑠璃は、『經國美談』を歌つたのと、「春の花」の唱歌があるので自由民權意識を盛つたことになるが、然し何れかといへば、自由民權を宣傳するよりも、『經國美談』そのものに感心したものだといふことが、作者の序詞を讀めば知られる。

最後に流行歌のオッペケペー節は、大分晩く、明治二十年以後の起りであるが、これが契機となつて、かゝる流行歌と唱歌風のものが合して所謂壯士演歌が生れる。オッペケペーの元祖の川上音次郎のことも、オッペケペーそのもののこことも、大概は知られてゐるので、業々しく說く要はなからう。又壯士演歌については、斯道の元老たる添田啞蟬坊氏の纏つた研究があるから(『明治大正流行歌史』春秋社版)、それに依るを便とする。こゝでは、オッペケペーの本文をいさゝか掲げるだけにする。

「權利幸福嫌ひな人に、自由湯をば飮ましたい。オッペケペー、オッペケペッポー、ペッポーポー「堅い裃角とれて、マンテル、ヅボンに人力車、いきな束髮ボンネット、貴女や紳士のいでたちで外部の飾はよいけれど、政治の思想が缺乏だ、天地の眞理が判らない、心に自由の種を蒔け、オ

ッペケペー、オッペケペッポー、ペッポーポー

「洋語を習ふて開化ぶり、パン食ふばかりが改良でねえ、自由の權利を擴張し、國威を張るのが急務だよ、智識と智識の競べ合ひキヨロ〳〵いたしちや居られない、窮理と發明の魁で、異國に劣らずやつつけろ、神國名義だ、日本ポー、オッペケペ、ペッポーポー（昭和十一年十二月書物展望）

七

此の種の歌詩で新體詩風、唱歌風のものは、端を福澤諭吉の『世界國盡』（明治二年開）に發してゐる。『國盡』そのものは、別に自由民權の宣傳を意識して行つたものではないが、たゞ部分的に自由民權意識をそゝる效力があつたことは否めない。例へば卷四、亞米利加洲の條――

普天の下に土地廣く　率土の濱に民多し
億のみならぬ生靈の　貧富強弱賢不肖
その極は異なれど　耳目鼻に四肢の官
是非曲直を分別し　善に從ふ本心と
學びてすゝむ才能は　一種無類萬物の

靈に具る天の性　千古不易の一大義
こゝろを勞し身を役し　他人の熱を假らざれば
ひとへも貸さじ我自由　天の道理に基きて
國に報ゆる丹心の　誠にいでし一國の
不羈獨立の勢は　留んとすれど止らず
北亞米利加の十三洲　その本國の政府より
威光を以て命じたる　名もなき貢税いたさじと
告んとするに使なく　民に備る天然の
自由の趣意も日々に　蹙まることぞ遺恨なる
遺恨に遺恨かさなりて　賴む所は天地の理
頃は安永五年の秋　十三洲の名代人
四十八士の連判狀　世界へ示す檄文に
英吉利王の罪を責め　自から建てし合衆國
武器兵粮も乏しき民　數萬の敵は海を越え
新手引替へせめ來る　猛虎飛龍の勢に

おそれて撓まぬ鐵石の　こゝろに誓ふ國の爲
失ふ生命得る自由　正理屈して生きんより
國に報ゆる死を取らん　一死決して七年の
長の月日の攻守(せめまもり)　・智勇義の名を千歳に
流がす血の河骨の山　七十二戰の艱難も
消て忘るゝ大勝利、　目出度こゝに英吉利と
和睦結びし新條約　約束固き政(まつりごと)
政體ありて主君なく　天下は天下の天下なり

この一節の如き、何れよりも勝れた自由民權宣傳唱歌となる可能性があり、又事實その意識で歌はれもしたと覺しく、種々な點に痕跡影響を殘してゐる。

明治六年刊の『小學唱誦十詞』の中にも（例へば第九、文明の如き）、自主自由意識を高唱したところがある。煩を避けて引出せぬから、就いて見られるが可い。

高田義甫の著した『自由譚』（明治七年刊）は人の餘り讀まぬ書物だが、それはスマイルスの『自助論』即ち中村正直譯の『西國立志編』の內容を、自主自由といふ立場から取上げて、『世界國盡』風の七五調にした啓蒙書であるが、これも自由民權意識の刺激には若干役立つたものだらうと考へる

自主自由とは世の人の　常に唱ふる事なれど
勉強勵精苦を忍び　艱に耐るにあらざれば
固より得がたき事にして　其巧用の大いなる
邦家の隆替元氣の虛實　すべて人事の成敗は
自由を得ると得ざるとに　由らざるものはなきぞかし

大體の調子は此の如きものである。

以上は唱歌風の先驅的なものだか、然しかゝる新體詩風乃至唱歌風の長歌で最も有名な、最も人口に膾炙したものは、小室屈山の自由の歌である。此の屈山はよく案外堂主人と間違はれるが、全く異人で、屈山は名を重弘といひ栃木縣の人である（案外堂は名は信介、丹後の宮津の人）。屈山の自由の歌は何時頃の作か知れぬが、明治十五年十月刊『新體詩歌』の第一集に見えるから、それ以前の作たるは明白だ。

自由の歌

天には自由の鬼となり　地には自由の人たらん
自由よ自由やよ自由　汝と我れが其中は
天地自然の約束ぞ　千代も八千代も末かけて

此世の有らん限りまで
いかにぞ仇に破るべき
月に村雲花に風
話せば長い事ながら
共人民を自由にし
數多の人のうき苦勞
我權勢を張らんとて
企てたりしセーザルは
議員(院)の中に殺されたり
民を奴隷になさんより
我の羅馬を愛するは
羅馬の民の望みなら
捨つる命はいと易し
自由を壓制なさんとて
邪道はいかで正道に

二人が中の約束を
さは去り乍ら世の中は
まゝにならぬは人の身ぞ
古し羅馬の國と聞く
共和の政治を立てんため
それをも知らで慾のため
再び帝位に昇らんと
共親友の手にかゝり
共親友のいふことに
寧ろセーザルを殺さばや
親友よりも甚し
我身も玆に諸共に
佛蘭西國のルイス帝
種々に手段を廻せど
打ち勝つことのあるべきぞ

民の怒りは火の如く　又洪水の溢れ來て
岩をも砕く勢ひに　いと畏くも帝王の
こがねをかざす冠は　斷頭機械の上に落ち
あわれ果敢なくなりけるは　誰を怨みん壓制の
自業自得といふべけれ　英吉利國の革命も
同じ車の一つ轍(みち)　昨日の王は今日の賊
コロンウヱルが手に持ちし　自由の旗の招きには
天をも回らすばかりにて　チャーレス王を誅戮し
自由の基を立てたりき　北亞米利加の合衆國
もと英國の民なれど　其發端を尋ぬれば
自由の人になりたさに　故郷の名殘に氣を止めず
深山荊棘はまだ愚か　人のふみてしこともなき
あを海原を打ち渡り　見も知りもせぬ亞米利加へ
殖民なせし心根は　いかにあわれに思ふらめ
然るに猶も英吉利の　ほだしの綱は離られず

暴君汚吏の壓制に　詰り詰りて國の爲め
義兵を擧ぐると聞からに　我れ後れじと親も子も
死ぬる覺悟で七年の　長の月日の攻め守り
遂に敵をば追ひ拂ひ　目出度立てし獨立國
ワシントンの名に負へる　都と共に榮へゆく
國のほまれや勇ましゝ　嗚呼彼と云ひこれと云ひ
自由の爲には昔より　數多の人の生き別れ
亦死に別れするものを　我東洋の人ぢやとて
土地にかはりはあるなれど　などか心に變るべき
人の自由といふものは　天然自然の道なるぞ
つとめよ勵め諸人よ　卑屈の民と云はるゝな
余此文を書きをはる　時しも春の夢枕
眠りをさます鐘の音の　いともさやかに聞えける

これを誦すると、明白に『世界國盡』の句調が影響を與へてゐることが分かる、殊に一二の點では明々白々に模倣と見て可いところもあるのだ。

楢山居士安藤和風の同題の唱歌が一篇、明治十九年四月發行の「新體詩林」第六號に載つてゐる。勿論屈山のもの程有名なものではないが、これも亦志士の愛讀を經たものだ。

自由の歌

人の上には人はなく　人の下にも人はなし
貴族富豪を羨むな　我も人なり彼も人
命に換えて大切は　平等自由の權なるに
殷紂夏桀始皇等は　人を人とも思はずに
天意天理に逆ひつゝ　傍若無人の擧動は
憎しといふも愚なり　壓制無道の政略は
扼腕切齒の限なれ　塞烟河畔の哄の聲
十三洲の星の旗　惜き命も惜まずに
屍を曝し血を流し　自由の爲なら國の爲
銃の響も劍双も　我目に見れば雲烟
諒を立てゝ妹と背の　盜に縊るゝものもある
一旦斯うと思ひ立ち　目的立てぬ其内は

引くことあらぬ桑の弓　巖を徹すも何のその
凝りに凝たる國民の　鋭き征矢は百萬の
兵にも增して勇しき　之に手向ふ敵兵は
貴重の權利を打棄てゝ　利慾に暗む卑屈者
假令機械は精なるも　如何なることをなし得んや
刄の冴に斬らるゝか　銃の響に斃されて
憐れ果敢なき身の終り　敗れに敗れ拔山の
力も拔けて四つの面(も)に　楚歌の悲しく聞ゆるに
かてゝ加へて此方には　ドッと揚げたる凱旋の聲
草木も振ふ勢に　彼等の膽は彌增しに
小さくこそは縮むべし　今や自由の天兵は
無道の敵に打勝ちて　榮枯も變る夢現
無道の滅んで有道の　興るは先きより定りし
理義(ことわり)なりと得ぞ聞きぬ　霜をば踏んで白雪の
臻(いた)るを知れよ青空の　雨まだ降らぬ其前に

汝の窓を打ふさげ

以上二篇の自由歌を比較するに、屈山の方が情熱的であり、音響も強いが、詩體としては、楢山の方が、後から出來ただけに整つてゐて、唱歌よりも新體詩に近いものとなつてゐる。その邊の觀察は、新體詩發達史研究の上からは、多少注意されても可からう。

植木枝盛の『自由詞林』は、この種の自由歌詞で自作のものを集成してゐる。これは二十年十月土佐高知の出版で、米國獨立、瑞西獨立、不盧多斯（ブリユタス）、自由の歌（其一）、自由の歌（其二）、自由の歌（其三）の六篇の新體詩歌が入つてゐる。此等の作品が、屈山の自由の歌等に比して、遙に新體詩らしいものとなつてゐることは、右の例に見ても分かるであらう。

瑞西獨立

雲に聳ゆる白山や　其の風景も倫（たぐひ）なく
いまは春風和みつゝ　自由の花の匂ふなる
瑞西の國は其むかし　墺地利に併されて
さも苛酷（いらけなき）暴政の　嵐の斷ゆるひまも無し
左れば世の爲め民の爲め　天下の爲めに革命の
師（いくさ）をおもひ起しにし　維廉刎爾（てる）のこゝろざし

之れと心を同ふし　ともに慷慨悲憤して
精神勃々やみがたし　剔爾の親友米爾底撒(みるちさる)
剔爾に向ひて言ひけらく　維廉剔爾よ我兄よ
此の暴政をいかんする　此の暴政をいかんする
干戈を執て革命の　軍を起し皇天に
其の裁判を仰ぐべき　時はいづれの時なるぞ
この一言にはげまされ　維廉剔爾も今は早や
いとゞせかるゝ思ひして　其の用意をぞ急ぎける
さて瑞西(すうゐつ)の民ぐさは　彼の苛酷(いらけなき)虐政の
嵐の風にしをれふし　見る目忌ゝ敷(ゆゝしく)あれはてつ
虎狼の群なして　四方に蔓り朝宵に
踏しだかるゝ有様を　誰やゝ人か悲まぬ
怨は深く骨に浸み　怒るこゝろは火の如し
寧ろ死すともいかでかは　此の暴政を默すべき
一千三百八年の　歳にあるゝやあら玉の

春は一月一日に　蓆(むしろ)の旗をひるがへし
進めや進め國人よ　自由の戈を手握りて
よもに蔓りあらび立つ　虎狼をつくせよと
我が此の國に寇なせる　汝が仇を攘ふべき
時は今此の時ぞたて　猛り戰ふ勇ましさ
打出す音に散る玉は　秋田に集く螽蟖(いなごまろ)
交ふる戈に咲く花は　野分になびく幡薄
彼の白山の白雪も　天を覆ひ雲を成す
黒き煙にうづもれて　空吹く風もなまぐさし
我軍勢は猶も又　今を限りとはたらきて
聲は山をも轟かし　氣は斗牛をも貫けり
墺地利の百萬の　其大軍もいかでかは
敵することのなるべきぞ　妖氛遂に打ち晴れて
山なす屍めで度も　築き興せり自由郷
河なす血潮めで度も　染めし出しけり自由郷、

自　由　歌（其三）

我を捕ふる者あらば　我を捕へよ咄汝
我を殺さん者あらば　我を殺せよ咄汝
百萬勢の大軍も　來らば來れ咄汝
群なす虎や狼も　來らば來れ咄汝
われは自由の大君の　馬前に立ちて動かぬぞ
死しぬ可んば死せんのみ　生きぬ可んば生きんのみ
或は殺され或は又　いかなる憂さにあふとても
自由の君の爲めならば　笑つて之を受けんのみ
噫吾々のこのむくろ　夙に自由の大君に
捧げて置けり愛すべき　自由の君の其の犧牲
殺されぬとも死しぬとも　何惜むべき此のむくろ
殺されぬとも死しぬとも　何惜むべき此のむくろ

以上三篇の自由歌を比較して見ると、植木のものが最も新體詩らしい要素をもつてゐることが知られやう。

此の種に屬するものに、准新體詩ともいふべき今樣長歌風の雅びたものがある。それは、矢野龍溪著『經國美談』前篇（明治十六年三月）の中にある「春の花」と題するものだ。

見渡せば
野の末、山の端までも　花なき里ぞなかりける
今を盛りに咲き揃ふ　色香愛たき其花も
過ぎ越し方を尋ぬれば　憂きことのみぞ多かりき
霜降る朝には葉を隕し　雪降る夜には枝を折り
枯れしとまでに眺められ　集り會ふ憂きことの
積り積りし其中を　耐へ忍びし甲斐ありて
長閑き春に巡り逢ひ　斯く咲き出るぞ愛たけれ
世の爲にとて誓ひてし　其の身の上に喜の
花の莟は憂き事と　知りなば何か憾むべき
春の花こそ例なれ　春の花こそ愛たけれ

これが頗る自由志士の心に適ひ、同志が置酒して鬱を散ずる場合、又は街上に遊歩する際などに必ず口を衝いて出て來たものであるといふ。

和歌も探せば多少あるかと思ふが、特に宣傳的意識をこめて作つたものがあるか何うか、只今のところ私は見てゐないから、それは掲げない。

八

最後に述ぶべきは、明治二十年前後、政治小說が盛に出た際に、それ等政治小說の或るものには政治的意識を示した新體詩が織り込まれることが多くなつたことだ。これは一般に新體詩といふものが或る一部の知識人達の力强い排斥にも係らず、次第に勢力を增して來た一方、社交が重視されて來、政治小說中にも社交場裡の光景を寫したものが是非必要となる。社交の席では、西洋風を模倣して唱歌をうたふことが、大變新しいハイカラな事のやうに思はれて來た。さういふ理由が、かゝる新體詩風の唱歌の出現を助けたらう。

『國會後日本』仙橋散士九岐晰著、明治二十年一月刊）の第六回に曰く、――

ひらけゆく。みづほのくには。かしこくも。あまてらしますおほがみの。世にましませしむかしより。いともかしこきことながら。をみなのきみの。おほくにを。をさめたまひしためしあり。きさいのきみの祚を踐ませ。をさめたまひしためしあり、また外國のためしには。をみなの身に

て。そのくにの。政事にあづかる權利あり。かゝるためしのおほかるを。なほさとらでや。さまざまに。をみなの權をさまたぐる。荊棘を折りつ。進みゆく。みちを開きて。おほきみの。民と生れし分を立て。をみなの權をきずつくる。つるぎををりつ。進みゆく。みちをひらきて。おほくにの。ひとゝうまれし權を得る。道をつとめよ。女郎花、分をつくせよ女郎花。

これは珍らしくも女權擴張をうたつたものである。又、調子の五七調の古雅なのも、面白い。

『後世浮世の態』（高橋基一著、明治二十年六月刊）第十二回に曰く――

民　權　歌

枝折る暴風ありとても　雪は梢を壓すとても
篠つく雨の根を穿ち　烈しき霜の葉を枯らし
憂き事絶えずありとても　三千年の扶桑の樹
大空衝て立つものは　養ふ壤のあるが爲め
樹は壤に出で國は民　民より貴きものはなし
民の自由は壤の肥　壤の生氣は民の權
權利自由を守り立てよ　國にさかえん扶桑の樹
肥沃の壤に根を下し　幾千年に榮ふ如

幾千年に榮ふ如

『慨世偉蹟』（北越樵夫村松熊太郎著、明治二十年刊）第三十六套に曰く、――

雲を拂へば塵生じ　雨を厭へば霧起り
寞々たり寂々たり　昏々たり暗々たり
月の輝日の光　星も燦く蒼空に
專擅壓制虎より猛く　檢束干渉蛇より鋭く
民の怨や積積みて　世上の苦難愈よ高く
平和の社會も血涙飛び　藹靜人界骨肉馳せ
慘焉として悲風鳴り　慘焉として哀聲轟く
我黨決進何ぞ躕疑せん　我黨決進何ぞ躕疑せん
自由の爲ぞ死を賭よ　斃れて民權張る可きぞ

更に『才子佳人・濟民之花』（二十一年七月刊、横矢松千代著）第二章に曰く、――

不義の富貴を恃むなる　貪慾無知の人達よ
綺羅錦繡を身に纒ひ　又金銀の駟馬に乘り
自由自在に暮しつゝ　月日樂しく送るとも

非道の政治法律に　不正不當の處置をなし
上は陛下を惱して　下は人民に苦勞させ
民の權利を剝奪し　民の自由を殺ぐときは
いと麗はしく咲き出る　榮耀榮華の夫れのみか
長らひぬべき命まで　見るかげもなく落魄(おちぶれ)て
果は空しく朽ぬべし　我等が如き儕(ともがら)の
身は數ならぬ者とても　內務の職に撰ばれて
共和の政治立てん爲め　勞れはてたる精神に
飽くまで忠を盡しゝが　其の甲斐なくて今ははや
數多の人のうき苦勞　其をも知らで慾の爲め
痛く自由を壓制し　我等が如き儕を
惡さも惡く讒謗し　正義はいかで邪に
打ち勝つことのなるべきぞ　無念の心やるせなく
世の成り行ぞはかなけれ　實に世の中は月に雲
花に嵐ぞ習ひなる　嗚呼國民の其爲に

振ひ起りて汚れたる　政治の塵を洗ひ去り
共和政治を設置して　民を自由の域に置き
民の爲めなり國の爲め　勉め勵みて飽くまでも
死する覺悟で進むべし　正義の爲めに斃るゝは
何かは以て悲まん　討死するは此時ぞ
嗚呼々々今の務めなり

以上四篇は、これを分類すると、新體詩の部に入るべきものである。これ等も亦、自由歌の如き唱歌體よりも、可成新體詩らしいものになつて來たところが、詞句の練成の上にも、感情の表現方にも可成り認められると思ふ。

此等小說中に織り込まれた新體詩も、自由民權意識を盛つたものでないと、まだまだ澤山見えるが、民權意識を條件にすると、さう澤山はない。これ等の作も、それから小室屈山や植木枝盛等の作も、十五年『新體詩抄』以後、二十年頃までの萠芽期に於ける新體詩の動きを知る資料として、歷史的に見ると、多少の文學史的意義がなくてはなるまい。

九

自由民權意識に成る歌謠の發達を通觀すると、明治十五年を境界として略ぼ二期に分れる。先づ分類の上からすると、十五年以前は、俗曲俗謠が中心になつてゐるが、十五年以後は、新體詩風のものが中心となつて來てゐる。勿論、上來說いて來た通り、確然その種類のみが盛えたといふことは出來ない、數種交錯して同時に存してはゐるが、然し主點に力を置いて語ればさういふ風に區分される。漢詩は前後二期に相通じてゐるが、それも、矢張り一般的に歡迎されたものは、十五年前後までに出來たものゝ方が多い。換言すると、十五年を境界として、雅と俗が次第に分離して來る。これは、新體詩の勃興と關聯して解いても解ける問題であらう。それから內容的にいふと、十五年以前は、自由主義に殉ずる自家の心事を吐露して、大衆の宣傳に資したものが多く、敢て感情を掩したものは少ないが、十五年以後は、感情を掩してゐて、而も內實は猛烈な反抗氣分を籠めたものが多い。殊に俗曲などがさうだ。而して宣傳の對象も、知識階級と大衆とに別れ、大衆へは從來通りの俗曲俗謠、精々のところで軍歌風のものを利用してゐるが、知識階級へ宣傳する手段としては、唱歌なり新體詩なりの西洋風なハイカラなものが利用されることになつた。

自由民權が政治小說を生じて、明治文學の發達に若干の貢獻をしてゐることは、私の『政治小說研究』に詳しく述べて置いたが、同じく自由民權は、新體詩の發達にも、多少の貢獻があらう。それは上來、所々で述べて置いた通りである。だが今これを新體詩發達への影響といふ點から見直して纏めて語ると、第一に擧ぐべきは、創作意識の刺激で、これは政治小說の場合とも同じことだ。この宣傳詩歌の出現は、幾多の素人の詩人に詩筆を執らしめ、詩歌創作の意識を大に刺激した。勿論その結果としては、好影響のみではなく惡影響とみるべきものもあり、その爲めに、山田美妙等の純詩人の側から抗議的批評を出されてゐる。だが、結果の善惡を別として、創作意識を刺激した點は確かに買ふべきである。例へば、此等の自由歌や民權詩がなかつたら、あの北村透谷の諸作が、あんなに唐突に現れたか何うか。透谷の『楚囚之詩』とこれ等の民權詩と讀み較べて見たら、多少の脈絡が發見されるに違ひない。次に考へるべきは、ロマンチック氣分の昂揚である。この心的態度乃至詩的空氣が、明治二十年以後の新體詩と續いてゐることは、別にいふ必要はあるまい。第三には感情の解放だ。これが甚だ大切な條件であらう。胸に鬱した自家の感情を率直に歌ひ揚げる。さういふ點では、自由歌や、民權詩は可成り大きい影響を與へてゐる。それから最後には、詞句の解放だ。自由歌や民權詩は、元來通俗を旨としたものであるから、從來詩歌の用語とされてゐた大和語葉や雅言などを避けて、俗語俗言を自由に用ゐた。その點で私は、植木の民權田舍歌を口語詩、自由詩の嚆矢と認めたい位ゐ

だ。よし直接にさうと認められぬにしても、それに至る先驅的な作品として、詩史の上で重大な注意を拂はるべきものたることは、斷言出來るであらう。それから新體詩風の諸作に至つて（漢詩も或る點までさうだが）、新語と新表現を自由に取り入れることになつた。これも勿論弊もあつたには違ひないが、その爲めに清新な氣分が注入されて來たことは爭へない。それ等新語新表現が時代のジャーナリズムに支配されてゐることも、指摘して可い點だ。これ等も研究家の注意を牽きたい。

自由歌や民權詩は、勿論大部分は宣傳意識から作られたものであり、それだけに詩的價値かららいへば、さう高く評價出來ぬのが當然であるし、又宣傳の目的さへ達すれば、それで可い筈のものであるが、然し創作の動機なり、創作の感情なり、創作の才分なりの複雜な問題があるので、その邊の作用から自然に後々の新體詩發達にまで關係をもち、影響を與へることになる。

前にいふやうに、この篇を纏めた私の意圖は、何よりもこれ等の自由歌や民權詩を集めて置いて、後來の詩史研究家の參考に供したいといふ點が主で、それを資料にして何等かの結論を抽出するつもりはないのだが、いさゝか思ひ附いたところがあつたから、それをも併せてこゝに記した次第である。

（昭和十二年一月「書物展望」）

小說に描れたる日露戰爭

（昭和十二年十月號「東大陸」）

一

まづ題意を辯解して置かう。

日露戰爭を小說にしたものは、今日までいろ〳〵出てゐるし、今日でも、時々雜誌などで讀まれることがある。この題目をみると、かういふ現實の日露戰爭を題材にした小說を通して日露戰爭なるものを見ようとするのが、私の目的であるやうに受け取れるに違ひない。だが、私の目的はさうではない。明治時代の小說史からいふと、本物の日露戰爭、卽ち明治三十七八年戰役が始まる前に、小說上ではもうとつくに日露が戰爭してゐたのである。卽ち、小說の作者が小說でだけ戰はした日露戰爭、卽ち日露戰爭以前の日露戰爭を小說によつて見たい。さうして結論があるなら結論を引出してみたい、それが私の目的なのである。

それには、先づ吾々日本人の對露感情といふものゝ變遷を說かなくてはならない。

幕末に、外國に對して警戒心を以て臨んだのは一般のことで、特にロシヤだけに限らないが、明治に入つてから日本の發展に取つてロシヤこそ最も警戒を要すべき國だといふ感情が、そも〳〵の最初から、日本人にとつて一般的な、自明のものとなつて來た。さうして此の對ロシヤ警戒の氣持ちが、或は恐露說となり、或は憎露說となつて、いろ〳〵な關係を生ずる、これが日露外交史の鍵となつてゐる。

かういふ對露感情は、一體何によるものであらうか。日本人は國際人としては正直過ぎる程正直な人間だから、特別の理由がないのに、かうロシヤにだけ惡い感情をもつわけがない。革命以後、ソヴイエートになつて以後のことは別問題であるが、日本が國際舞臺に登場したそも〳〵の最初からロシヤを憎んでゐる。それは何故かといふ問題である

私の考へるに、第一は隣國として新興日本にとつてはロシヤのやうな強國は少なからず發展の邪魔になつた。又ロシヤにも東漸政策といふものがあつて、ピータア大帝以來の遺圖であるとか何とか云云して、東の方に侵略の手を伸して來る、さうすると、何うしても日本の擧動に氣をつけて、小憎らしい奴だと思ふ。思ふばかりでない、さういふ事を、仕草にも示す。樺太千島交換問題などゝいふ横車の如き、その一つの現れだ。卽ちロシヤの態度次第で、日本とロシヤは所謂食ふか食れるかといふ

差し迫つた關係になる。地理的、國策的にさういふ關係に立つてゐる以上、而かも日本の實力からいつて、當時のロシヤは太刀打ちの出來ぬ相手と考へられてゐた以上、日本人の氣持ちがかういふ憎露感情といつたものになるのは、先づ當然のことだと考へられる。

だが、こゝで一考の必要があるのがそれなら東洋に對して侵略的な態度を取つたのはロシヤだけかといふと、さうではない、當時歐米諸國の東洋に注ぐ眼は皆侵略的であつたのだ。たゞ同じ歐米諸國でも、實力のあるものとないもの、機會を握んだものと握めぬものなどがあり、それで何の國も一様に東洋侵略を實行するわけにいかなかつたが、侵略といふ點で、ロシヤよりずつと甚しい國がある。英國がそれだ。ロシヤの東洋侵略は、要するに地中海で、黑海で、又は中央アジアで英國から占め出しを喰つた結果で、ピータア大帝の遺圖であるにせよ、英國の東洋侵略程傳統的歷史的のものではない。且つロシヤの侵略は、亂暴ではあるが、北方の蠻族らしく力づくで來るので、誰にも分るが、英國のはさうでない、止むを得ずんば用ゐるが、經濟侵略、思想侵略を第一にする。經濟侵略は貿易の利を專占することをいふのだが、思想侵略とは可笑しいと思はれやう。然しそれは矢張り事實で、つまり英國の制度文物の盛を世界第一だと思はせ、世界の萬事を判斷するに英國の眼を通してなさせるやうにする。つまり日本人を、思想的に或る程度まで英國人化させる。さうしてこれを經濟的に利用するわけである。侵略といへばこれ程強い侵略はないので、英國は日本に對してかゝる侵略手段を實

行し日本は知らず識らず、この侵略手段を自分から歡迎しつゝあつた。當時の日本は、新に自分の登場する舞臺たる世界について研究する必要があつた。その際研究の資料を提供したものは、英米の書物である。誰も彼も、英米の書を第一に讀んでさうして世界の大勢を知らうとし、又事實、當時の日本の必要としたゞけは、かゝる書物で知り得たのである。文明の手引といへば、確かにさうに違ひないから、或る意味では恩人でもあらう。然し、この恩人は日本人の手引をすると同時に、自家の感情、利害をも吹き込むことを忘れなかつた。勿論、ものを教はるに無償といふことはない。必ず代償を必要とする。だから、英國人が日本人からそれだけの代償を得ようとしたのは當然であるが、日本人は、かういふ代償をとられて意識しなかつたのである。それが日本にとつて好かつたか、惡かつたかは別として結局日本人の世界を見る眼は、半ば以上英國的とならざるを得なかつた。從つて勿論、當時可成り濃かつた英國人の憎露感情も、日本人に傳染してゐたに違ひない。

私は、こゝにも一つ日本人の憎露感情の大きな原因があると思ふ。殊に、輿論の源泉ともいふべき知識階級が、この英國の憎惡感情に可成り動かされてゐたといふことは、爭へない事實であらう。勿論、ロシヤでも、英國が日本に對してこの手を用ゐてゐるのを知らぬのではないから、時々日本の輿論を煽つて、親露抗英の論調を出させたりした。(例へば明治十八年英國が朝鮮の巨文島を占居した際の如き、ロシヤは日本と同盟し、對馬を租借して英國と淸國に當らうと提言した。)だがそんな附

燒刄は成功しなかつた。

二

日本人の對露感情が漠然とした憎惡を通り越して、はつきり恐露的になつたのは、明治二十年以後ロシヤがシベリヤ鐵道完成に力を入れ出してからで、このシベリヤ鐵道に日本人の眼を向けさせたのも、多くは英國の新聞雜誌であつた。シベリヤ鐵道の完成は畢竟滿洲進出、朝鮮經略の前提である。（つまりロシヤはこの前中央アジヤから印度を狙つたが、英國に叩かれ、支那の新疆に向つたが、又英國淸國の合同に一敗し、仕方なく滿洲へ本氣に出て來たのだ。）そこで、日本もロシヤの態度を本氣に考へざるを得ない。當時のロシヤの國力は、表面いかにも凄まじいものに見えたから、日本の廟堂政治家は、主として親露的態度を取つた、いやだつたらうが仕方がなかつたのだ。これに對して民間連中は、一層の憎露となつたわけだ。

日淸戰爭の際の三國干涉は、こゝで說くまでもなからう。必ずしも淸國を助ける本心ではないが、滿洲を手に入れる方便に使つた。使はれた日本こそいゝ面の皮だ。ロシヤが、滿洲を狙つて淸國に接近すると、英國は、そんならかうするといはんばかりに、目立つて日本に近づいて來た。そこでロシ

ヤも急に態度を改め、日露協商といふものを作つて、朝鮮だけは日本に譲り、滿洲に專心する氣になつた。

その後のことは一々いふまでもなからう。北清事變を契機として、一方は露清密約で滿洲を確固と握り、他方は日英同盟が出來た。その日英同盟の出來た翌々年、本物の日露戰爭が遂に勃發したのである。

前にも述べたやうに、此の間日本の對ロシヤ感情としては、警戒、恐露、親露、又もや恐露といろいろな變遷をとつてゐるが、基調の憎露感情はいつでも消えなかつた。この遣る瀬ない憎露感情を、本物の日露戰爭が思ふ存分爆發させてくれるまでは、日本人はわづかに幾篇の小說に洩して自ら慰めてゐたのである。

私はさういふ小說について、いさゝか申上げたい。

三

此の種の日露交戰を豫想した小說で私が知つてゐる最初のものは、高安龜次郎の『世界列國の行末』(明治二十年六月)といふものである。これは第二十六世紀の豫言小說となつてゐるが、その說くと

ころによると、第二十六世紀に至るや、世界はロシヤと米國の二强國によつて代表され、他は各々その勢力範圍の小國となつてしまふ。然るにこのロシヤと米國の間に小さいながら參國（これに Country of Sun といふ英語を宛てはめてゐる以上、參國は卽ち日出國を意味することは明白である）といふのがある。ロシヤはその世界統一の大望から、先づ此の參國を攻擊する。參國は、最初はロシヤのシベリヤ鐵道の效力に壓倒されて、海陸共に敗北するが、米國及び歐洲諸國の助力でロシヤに勝ち、遂に露都を陷れる。この際、支那はロシヤを助けて滅亡する。參國がロシヤを大叩きに叩きつけた後、世界各國は、世界平和のため大會議を開く、といふのである。參國の未來が果してかくの如きものか何うかは別として、世界が米露の二强國で代表されるなどは、なか〳〵味な豫言ではなからうか。

同じ人の『ねやの月』（明治二十年十一月）にも日露交戰に及ぶ事が述べられてゐるが、この小說は元來は政治小說であり、日本の內政的爭鬪を材料にした暴露風の作である。その中で、筆が日露の事に及んで來る。朝鮮事件から露淸の葛藤となり、露はフランスに、淸はドイツに結んで相戰はんとする。此の時ドイツは日本によびかけて味方に入れる。さうして日本の對馬を海軍根據地に借せといふが、これに對して外務當局は贊成し、國論亦外務を支持するので、これをドイツに借し、遂に淸、獨兩國と協力してロシヤを破るといふのであるが、この對馬を借すことには著者は不贊成で、大に反對の意を洩してゐる。だがロシヤ膺懲には勿論大贊成である。

高安氏は茨城縣の人で、自由黨の壯士であつたが、文章の才があつて、好んで政治小說を書いた。この頃は恐らく二十か二十一、二であつたらしいから、まだ現存であるかも知れぬ。

明治二十二年一月に出た北海散史作の『日本花』といふ小說には、『二十世紀・戰爭豫言』と角書がついてゐるが、これは純然たる日露交戰未來記である。著者は丹後の人で、井口元一郞といひ、北海道に現存だと聞くが、波瀾の多い經歷の持主である。井口氏は丁度この時徵兵檢査に合格して大阪師團に入營したのであるが、家道不振の爲め、特に隊長の許可を得、夜間營內で小說を起草し、それを若干の金に代へて實家に送つてゐた。この小說の外に私の持つてゐる二冊、他にも一二冊あるやに聞いてゐる。

ロシヤはシベリヤ鐵道の完成と共にウラジホを中心に東洋經略に積極的に乘り出す。それで日本が何うしても、その鋒先に當らざるを得ない。ロシヤは、ウラジホから正面に當るので日本の北陸地方を睨んでゐる。日本の當局は、そこまで眼がとゞかず、北陸の防備など考へてゐない云々。

『日本花』は前篇で、後篇の『劍之林』といふものゝ方に日露交戰が描かれてゐる筈になつてゐるが、この小說の刊否は不明で、はつきりしたことの語れないのは遺憾である。『劍之林』の方では、ロシヤ軍が北陸に襲來し、敦賀に上陸して近所を頻りに荒す、日本軍はそれを退け、逃げるのを追うてウラジホに迫り、ロシヤを屈する。かくて列國の平和會議となつて局を結ぶといふ筋であるといふ。

軍人だけに、又日本海岸出生の人だけウラジホの對岸たる北陸地方の防備を提唱したのは、成る程と首肯させるところがあつたらう。

『匿名投書』明治二十三年七月）は村井弦齋の作である。弦齋といへば、明治の新聞小説界に鳴した人物だが、元來がロシヤ語を修めて海外で雄飛しようとしたのが、志を得ずして新聞記者となつたのだから、この位ゐの政治小說があつて然るべきだ。

一日本人が匿名でロシヤのゴーロス新聞に投書して、ロシヤの侵略主義を攻撃し、ロシヤ外交の祕密をあばき、日本は宜しく清韓と同盟してロシヤに當るべしと論ずる。ロシヤ政府はやつきになつてその日本人を嚴探するが、判明しない。然し外交の祕密がかう日本に知れては油斷がならぬといふのでシベリヤ鐵道を大急ぎで完成する。さうして一方清國を突ついて、先年の琉球事件を再び持ち出させそれを口實に日本と開戰させて、自らは淸國の正理を助けるといふ理由の下に大兵を出して清國と連合して日本に當る。その戰略に、最初九州中國を取つて京阪を犯さんとするが成功せぬので、優勢な海軍力を利用して一擧國都を衝く作戰で、露淸の聯合軍は靜岡淸水港に上陸し、沼津附近一帶を本部として東京進擊を始める。日本軍は咄嗟に集められる限りの兵力でこれを箱根山に防ぐ。そこで面白いのは、日本の結城某といふ理學博士が、地中の電磁氣を利用して火山を爆發せしめて、これを大地雷火代りにする發明である。箱根近くに舊火山が多いので、これを地雷火代りにし、遂に露淸の兵五十

萬を殺してしまふ。流石のロシヤもこれには驚いて、早々國外に退却する。日本軍はこれを追うて海外に渡りシベリヤで露清と大戰して勝利を得、見事兩國を屈伏せしめる。尙ほこの小說には、例のロシヤ新聞への投書家の正體をめぐつて、蠣崎某と結城某卽ち（理學博士）の眞僞爭ひがあり（結城が本人）、それに伴ふ星野伯（日本軍總師）の令孃との戀愛事件があり、いろ〳〵人情味を加へてある。

次には民間政治家として有名な末廣鐵腸の『明治四十年の日本』（明治二十六年刊）である。これも矢張りロシヤのシベリヤ鐵道完成と東洋進出の急ピッチから事端が發してゐる。ロシヤの東洋進出が急なため、從來淸國を藥籠中のものとして東洋に威を振つてゐた英國との衝突となり、遂に淸、英とロシヤとの開戰となる。日本には英國の味方が多いので、英國の勸誘によつて淸英側に加はり、大にロシヤの海軍を破る。ところが肝腎の陸上戰が淸と英の力ではロシヤに勝てず、遂に講和となつたので、ロシヤは獨り日本のみを眼の敵にする。さうして特有のスパイ戰術で先づ日本に內亂を起させ、ロシヤ黨にクーデターをやらせて、それを切掛に外からロシヤの大軍を向けようとする。だがクーデターが失敗したので、ロシヤ軍は作戰が齟齬し、戰爭に敗ける。かくて日淸英露の四國が改めて北京會議を開き、日本の東洋に於ける優越權を認めるといふので終るが、それはイザとなつたら獨力でやれといふ主張で、當時の有力な輿論の一部を代表したものであつた。

同じ末廣が明治二十九年に公にしたものに『戰後の日本』といふのがあるが、この中でも、朝鮮問

題でロシヤと戰ふ覺悟が必要だと暗示してゐる、然し日露交戰そのものに及んでゐない。
三十年代に入ると少々大掛りになるが、先づ擧げなくてはならぬものは、英人モリス原作の『東洋の大波瀾（三十一年五月、大町桂月譯）である。これはなか／＼よく材料を調べてあつて日露戰爭未來記としては可成り巧く纏つてゐるが、その裏面に何となく、日本を煽動して、「ロシヤにかうまでされてもお前は默つてゐるのか、一つパンとやらないのか」といふ氣味が出てゐるのに、注意すべきであらう。これは東洋全體の未來記であつて、單に日露戰爭のみといふのでないが、中心になつてゐるのは、日露戰爭である。この小說で特に面白いのは、日本の國力發展が、統計的に豫測されてゐる點で流石英國人の根氣よさが見えてゐる。これも、要するにロシヤが日露協定を破つて滿洲から朝鮮に侵入するので樺太千島交換以來遺恨を重ねてゐた日本は、遂に堪忍袋の緒をきつて日露開戰となる。開戰前は、日本はロシヤの相手ではなからうと考へられてゐたが日本は久しい間今日の爲めいろ／＼用意して來たので、その用意が役に立つて、ロシヤは先づ臺灣海峽の海戰に破れ、次いで日本海の海戰に破れる、（その理由として、日本の軍艦は英國製の優秀なるものだからといふのは笑はせるが、造船所と貯炭所の用意が整つてゐたから勝つたのだといふのは、當時の人々を傾聽させたと思ふ）。陸では朝鮮が戰場となるが、これも結局日本軍に追はれて滿洲からシベリヤに退く、日本は英國の助力で清國の迷蒙を醒まし、互に提携してロシヤに當り、日清同盟の力でロシヤを滿洲から追つてしまふ。

この戰ひの結果、日本は朝鮮を併せ、淸國を覺醒させて、アジアの盟主として西洋に對するに至るといふのである。此の間ドイツ、フランスが各々ロシヤに應じて淸國の一部を占領するのは注意すべきだと云つてゐる。勿論未來記であるから、當らぬところもあるが、日本の現實に基礎してゐる點でなかなか正確な判斷を下してゐるのは感心である。これに比べると、明治三十二年に出た『帝國國難の夢』といふのは、大衆作家ウイリアム・ルキューの『英國の大戰』を燒き直したものであつて日露未來戰といふのにピツタリしないところがあるが、原作が猛烈なものだけにこの燒直しも此の種の小說では最も猛烈なものだ。日本が露佛聯合軍に京阪地方を占領され、九州で最後の一戰をするところなど、燒直し小說とは思へずハラハラさせる。これも敵がシベリヤ鐵道を利用して北陸地方に上陸してゐる。たゞ海軍が優勢なので、辛うじて敵の死命を制することが出來ることになつてゐるが、これは矢張り當時の日本軍備に對する暗示であらう。

中尾撫劍の『外交之祕密』(明治三十五年八月)といふのは、外交戰を書いた點で唯一の小說であるが、つまり露佛同盟を破つて佛に中立を宣言させるに至つた經路を說明したものと思へばいゝ、外國小說の燒直しらしいところもあり(露大使の謀殺など)、不自然なつぐはぐなところもあるが、先づ政治小說としては一讀出來る方である。一方ではロシヤを刺激してフランスの不熱心に怒らせ、一方では日本とフランスと利害を同じくする點を强調して、フランスを日本側に引張る、その邊の駈引はな

かく面白い。

此の頃になると、憎露感情を洩らした小說は、澤山出る。別に日露戰爭未來記といふのではないが押川春浪の冒險小說（『海底軍艦』以下、『武俠之日本』、『武俠艦隊』、『新日本島』、『東洋武俠團』等）など、その好見本であるといつて可い。別に又、山田美妙の『金忠輔』の如き、對露イデオロギイをこめた歷史小說の如きものもある。一々枚擧出來ない程である。

最後に擧げるのは、『佳人之奇遇』で有名な柴東海散士の『羽川六郞』（明治三十六年）である。これは羽川六郞といふ志士で發明の天才たる會津人がいかにして日露戰爭に功を立てたかといふことを書いたのであるが、羽川の功は、潜水艇及び飛行機の發明で、それによつて日本軍は大勝するのであるが、戰爭の經過を說明するところは、不思議にも、本物の日露戰爭と割合に合致してゐる。これは實に不思議なくらゐで、私は、初めて此の小說を讀んだときに驚いたものであつた。

『羽川六郞』の出た翌年本物の日露戰爭の勃發となつたので、私の語るところも、『羽川六郞』で打ち切るとするが以上の小說を綜合していふと、初めは極々ロマンチツクな、夢幻的な戰爭であり、勝利であるが、後になるにつれて、戰爭も勝利も可成り現實的なものになつて來てゐる。それから日本の出方をみると、その十四年間に於ける日本の實力發展の迹が、大體推察される。卽ち、最初は同盟して戰ふ、又は助力を受ける。さうして勝負も實際はアヤフヤである。ところが、それがやがて單獨

で戰ふやうになり、我から進んで戰ふ。又初めは多くは一度は敵に押し込まれて、漸く敵を追ひ出す程度で、勝ても先づ部分的であるが、それがやがて國外に押出して戰ひ、決定的に勝つことになる。

それから英國は、淸國に對する利害から打算して日本を助けてロシヤに當つてゐるが、日本を本心から助けてゐるのではなく、自國の利害といふ立場から離れてゐない。それで、日英同盟後に出來た『羽川六郎』でさへが、日本はもう英國の力をさう當てにせずにロシヤと戰つてゐる。日本の立場はいつでも單なる利害にだけ制されて動いてゐはしないので、忍ぶべきだけは忍ぶが、國家存立上止むを得なくなると猛然と立つて徹底的にやることになつてゐる。

以上によつて、現實の三十七八年戰役が滿洲に於て戰はれる以前、日本の文學界小說界では、何度となく日露戰爭が行はれてゐたこと、而かもこれは日本の全國民の對露感情から是認され支持されたものであつたことが知られるであらう。かゝる小說に現れた國民感情の昂揚からみても、日露戰爭は實に必至の運命にあつたのだといふことを結論されるのである。

たゞ然し日本の必死の立場から事こゝに至らしめられた事實は別として、英國が、その東洋に於ける競爭者たるロシヤを苦しめる策として、日本の感情や思想を可成り自由に利用したことを思へば、日英同盟を日露戰爭に勝つた大きな原因として無やみに英國を有難がるのは、それこそ所謂何うかと思ふ類ひである。以上の小說に現れた日露戰爭をみれば、さういふ點も矢張りそのまゝ反映してゐる。

政治小說研究

政治小說研究の必要

政治小說といふと、大抵の文學史家や文學硏究家からはまゝつ子扱ひをされ、何處の國の文學史でも傍流的に輕く觸筆されてゐるのが當り前だ。明治文學史家の態度も、從來は大體さういふもので、所謂文壇本流の硯友社以後の文學とは對立的に相容れないものとして、硯友社以前、明治初期に「政治小說」といふやくざな小說が澤山あつたと、まるで何か美しい織物についた汚染のやうに扱はれてゐたものだ。全般的に、世界文學史上、政治小說といふものが果してさうまゝつ子的に扱はれて然るべきものか何うかは今こゝで論ずべき問題でないから取上げない。又硯友社頃の文壇小說家が政治小說といふものに毛蟲のやうに顏を顰めたのも、感情的には理解される。然し文學史家までが、この政治小說への反感のお裾分けをする必要はちつともない。あべこべに、この反感がいはゆる政治小說全盛への反動のためで、決して公平なものでないことを指剔すべき責任があるのだ。政治小說が研究に値するものか、値せぬものか、他國の文學に於ける例は知らず、明治文學に限つていへば、政治小說

は是非とも研究されなければならぬ。政治小說への好き嫌ひは問題ではない、是非さうしなければならぬ。何故といつて明治文化の研究が政治方面から着手しなければならないやうに、明治新文學の研究は先づこの政治小說の研究から始めなければならぬからだ。いはゆる明治の文學革命は先づこの政治小說の出現によつて實行の第一步を印してゐるからだ。舊文學の遺物なる戲作稗史が、文學とか小說とかいふ世界共通の觀念をもつた威張つた存在となるには、この政治小說といふ過渡期を經過しなければならなかつた。政治熱が明治文化一切の母胎であつたやうに、政治小說熱が明治新文學の母胎であつたのだ。手取早い例が坪內逍遙をとるがいゝ、逍遙は誰にいはせても明治文學革命の提唱者且つ實行者だが、その文學的生活は、戲作稗史、政治小說、の段階を經て明治の新小說に及んでゐる。多言はやめるが、これからの明治文學史は何うしたつて政治小說研究から始めなければ間違つたものになる。研究といふ以上好き嫌ひでの輕重は許されぬわけだ。

政治小說出現の動機

一部文學史家の言ふところを聞いてゐると、政治小說など、まるで政治家が醉興に書いたものゝやうにとれる。然しそれは見當違ひで、種々な理由からいつて此の種の文學があの時の日本に生れて來

なくてはならなかつたのだ。勿論目的文學であるから意識的に作られたものに違ひないが、然しそれは作られるやうな條件が數々揃つて作られなければならなくなつて作られたものだ。それでは政治小說出現となつた動機的條件は何か、それは時代の政治熱のせいだといへば當つてはゐても、然し餘り漠然と大ざつぱで不親切な說明である。それで今少しこれを分けていふと、第一にその政治熱から湧いた特殊事情、第二に當時の文學觀念、第三に西洋文學の影響、かう三つになる。

背景としての政治熱は、讀者諸君一通りの常識があるものとして別に說かないことにするが、兎もかく明治十三四年民權論の火の手が强くなつたので、政府は種々な條件を出して片端から民權黨の言論武器を奪つた。それで民權家達は言論に代る新しい宣傳手段を工夫しなくてはならなかつた。然もかゝる宣傳の主旨として、元來大に民衆に喰ひ入る必要があつたので、さう高尙な議論ばかりでは少し困る、それには何方みち民衆の娯樂機關教化機關である戯作小說なり歌謠なり演劇なりを利用するがよい。さういふ意識が政治運動者の腦裡に動くと、何時とはなく實行されて來た。それが卽ち政治上からの特殊事情なのである。この點からいつて政治小說は言論不自由を補ふため、又下層大衆宣傳のため生じたもの、いはゞ政治鬪爭の一種カムフラージュめく武器として取り上げられたものに外ならない。

この政治上の特殊事情は政治小說を生むに至つた第一の因ではあるが、更にこれが實現を助けた二

つの原因がある。それは、當時の一風潮たる利用厚生の思想が文學にも及んで、この頃は全く表面的看板だけとなつてゐた小說界の勸懲主義の徹底的實施を期すべく小說改良の機運が動いてゐたこと、卽ち文學觀念が一轉機に達してゐたこと、これが一つ。又當時西洋文學知識の移入と共に、種々なことが分つた、日本では所謂小說の如きを下等娯樂視して士君子の手にすべきものでないといふことになつてゐたが、西洋では文學として尊重されてゐる、且つ紳士が小說を讀むのみでない自ら小說を書いて怪まない、怪まぬどころかこれを榮とし人にも羨まれたりする、堂々たる大政治家でさへさうする、卽ち、西洋の例によると、紳士でも小說を書いても可い、又政治家の手になる政治小說といふ都合のよいものがあるといふものが分かつて、これが又政治小說の出現を助ける一因となつた。

だが吾等はもう二つ考慮に入れて置かなくてはならぬ。それは日本文學の傳統には政治小說といふものこそないが、時勢や政治を諷刺した作物や戲文が相當多く、それが傳統的には政治小說の先驅的存在をなしてゐること、及び所謂政治小說の作家には士族出の政治運動家が多いが、かゝる人々の敎育を考へてみると、表面四角張つた理窟張つたものである割合に文學的敎養とか趣味とかいふものが可成り一般化されて浸み込んでゐることである。これは彼等の政治論が、多くは理想主義的な、精神的な、ロマンチックな特色をもつてゐるのでも分る。卽ち此の人人は小說家に成り得る可能性をもつてゐたに違ひないのだ。

こゝで纒めていふと、政治小說の出現は、直接には當時の政治熱から生れた特殊事情、特殊要求の衝動を中心に、當時の文學界や社會や政治家達やに潛在し顯在してゐた以上のやうな諸因が作用し決定したものだといふことになる。

政治小說の範圍・政治小說發展の區劃

政治小說の範圍といつて可笑しいなら、性質といつても宜しい。「政治小說とは何ぞ」といふことは僕が前に（註、一）スピイヤ教授の定義を引いて述べたことがあるから、今こゝで繰返さないことゝし、たゞ明治初期の所謂政治小說について一寸概念を出して置きたい。

此等の政治小說なるものが、今日の「小說」といふ概念で律し得るものばかりだと思つたら、大きな間違ひである。勿論政治「小說」といふからには今日考へられるやうな小說も入つてゐる、いな大體さういふものが中心をなしてゐるが、今日の小說概念には全然內包されてゐない戲文、諷刺文、スケッチ、雜記、史傳、戲曲、戲曲筋書、飜譯の如きものが多量に混入してゐる。これは、當時の「小說」といふ語が可成りルーズに使用されてゐた爲めで、廣義に幾分でも假作的構想をもつた文字を小說と目して怪まなかつたので政治小說といふと、大體何等かの政治的イデオロギーをもつてゐる假作

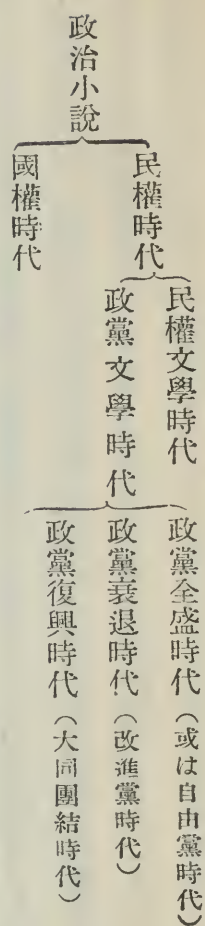
的文字であれば、筆者も政治小說をもつて任じ、讀者も政治小說をもつて目して怪まなかつた。それが明治二十年頃までが殊に甚しいが、二十年以後もさういふ傾向はある。勿論「小說」の語義內容の定まつて行くにつれて政治小說の方も自ら局限されて來たが、自ら治外法權を要求してゐる格好でこの傾向が可成り後までつゞく。（これが文學史家からまゝ子扱ひにされる一因でもあるのである。）政治小說の研究には最初からこれをのみ込んでゐることが肝心だ。

次に概念を纏めるに必要なのは、年代的區劃だ。これについて今まで誰も調べも云ひ出しもしないことだが、僕は種々骨を折つて少しばかりの發見をした。その結果を簡單に述べると、先づ所謂政治小說は明治初期だけに限つたものであるが、いふまでもなく政治小說といふものは、事實明治を通じてある、或は二三に分裂して假裝したりしてゐるが、兎もかくも初期だけで絕えたものではない。經濟小說、冒險小說、社會小說、社會主義小說等の中繼を經て大正時代のプロレタリヤ文學と立派に連絡するのである。が、今は明治時代を主にしてゐるから、その點からいふと、政治小說は明治二十三年國會開設以前と以後に大別される。これはたゞこの年が區劃上便利だといふのではない、此の前と後とでは政治小說の主旨も調子も大に違ふからである。何う違ふかといふと、ほんたうは例を擧げぬとハツキリしないかも知れないが、結論だけ出すと、國會開設以前は民權的對內的改革が主潮、以後は國權的對外的進出が主潮となる、又以前は對內的に積極的主張、對外的にやゝ冷淡であるが、以後

のものには對外的には大に熱心で對內的には往々消極的冷嘲的暴露の興味が少なからず加はる。この變化の原因は、日本の世界的進出の急務と實現された國會理想に對する知識階級の心持の動き方によるものが多い。その邊のことは詳しく說けぬが、そこでかう二分した前期の方が、文學史家の所謂政治小說で、何の文學史にもこの前期のものが論ぜられてゐるだけである。然し此の後期の國權主義的政治小說の硏究も極めて有意義且つ面白いものである。だが遺憾ながらこの稿では割愛する。

そこで、この前期の、卽ち明治初期の所謂政治小說の年代的區劃は何うなるかといふと、普通政治小說らしい政治小說の現はれたのが先づ明治十三年六月の『情海波瀾』であるから、これを基點に二十三年迄の十年間をその年代とし、これが更に十五年を境界に二期に分られる。この分け方も單に便宜主義ではない、必然性のあるものであるが、その理由は長いからやはり僕の前稿（註、二）に讓つてこゝには持ち出さないことにし、その二期とは自由民權時代と政黨文學時代である。前者は十三年から十五年前後、後者は十五年から二十三年前後までとなる。さてこの後者の政黨文學の時代が大體又十七八年を境界に二期に分かれる。その前期を自由黨に代表させ、後期を改進黨に代表させ、それぞれ自由黨時代、改進黨時代とよぶことにする。或は二期に分けず三期に分けて、第一期（十五―十七年）を政黨全盛時代、第二期（十八―二十年）を政黨衰退時代、第三期（二十一―二十三年）を政黨復興時代といつた方がいゝかとも思ふ。勿論母胎たる政治熱、政黨運動の消長を標準にしての區劃たるはいふま

でもない。これを一見して分かるやうに示すと、——

政治小説
　民權時代
　　民權文學時代
　　　政黨全盛時代（或は自由黨時代）
　　政黨文學時代
　　　政黨衰退時代（改進黨時代）
　國權時代
　　　政黨復興時代（大同團結時代）

（註一）（二）本星社版「明治文學講座」第四卷、拙稿「明治の政治小説」參照。（『政治小説の研究』上卷）

政治小説の先驅者二三氏

嚆矢探しは何題目につけても興味のある且つ有益なものであるが、今はさうした餘裕はないので政治小説の嚆矢の研究は他日を期し、政治小説といふ體裁を備へて出現してより以後の先驅的作家二三氏について語ることから始める。

先づ『情海波瀾』の作者戸田欽堂、美濃大垣戸田家の支流、いはゞ貴公子である。明治初年洋行もしたし、クリスチヤンでもあり、又北辰社員として政治演説にも熱し、又娼妓解放乃至敎育にも奔走し、民權貴族として有名であつた。此の人のことを一概に放蕩者扱ひにし、たゞの戲作者らしく見て

ゐる書物もあるが、それは間違ひで、相當目立つ活動をしてゐる。又一二の文學史料に晩年陋巷に窮死したらしい意味のことを書いたものがあるが、これも見當違ひで、欽堂は生活としては日本銀行の秘書をつとめ、又戸田家からも合力があつたので、戲作で食ふや食はずの生活をするといふ如きものではなかつた。なかなかの好事家で紙腔琴の改良をしたり、ボール紙の發明に盡力したり、洋傘の骨の改良なども考へたと云ふ。明治十七年に小說家名披露會をやり、公然と小說家の仲間入りをして、數篇の小說を書いたが、今日意義のあるものは、明治十三年の『情海波瀾』と十五年の『薰兮東風英軍記』の二篇位である。『情海波瀾』に趣向を人情本式にした政治小說で、情海は勿論政海の謎である。欽堂のことは可成り詳しくわかつてゐるから、そのうちに發表しよう。(『政治小說の研究』上卷)。

　次に上田秀成、これは福岡の人で、よくは分らぬが何か東京大學に多少緣ある人であつたらしい。東洋學藝雜誌の初期の編輯者であり、明治日報にも關係があつた。この人は明治十四年に『蝴蝶紀談』といふ政治小說を書いた(十五年刊)。初篇だけより出ないので、主旨はよく分からぬが、「自由之栞」と角書がしてあるから、大體自由民權の眞諦を說明する立場であることは察しがつく。その他『自由の空夢』といふ政治小說の斷片(十五年)もあるが、根本思想は同じものであつたかも知れない。秀成の關係した明治日報が帝政黨の機關紙であつたことが、その政治思想を知る上に於いて注意すべきであらう。(よく帝政黨が自由民權に反對したとか否定したとかいはれるが、漸進と皇室中心を旗幟にこそしたれ、根

本的に否定も反對もしてはゐないのである）。

嘯風子一宮猪吉郎、これは長崎縣の人で、朝日新聞（大阪）の編輯名義人などをしてゐた青年であつたが極く若くて死んだ。明治十四年に『東洋奇談・鳳緣情誌』といふものを書いた。これは先驅的の政治小說中でまづ一番纒つて居るもので、有名ではないが歷史的には相當注意すべき作物である。

その他、明治十三年の『國勢夢想記』（岸甚咲著）、同年の『黑貝夢物語』（風頼子著）なども先驅的政治小說として擧げられるものである、殊に前者は可成眞面目に日本國家の行末を考へてゐるところがあつて、面白い。

總て民權時代の政治小說は、內容は漠然とした自由民權思想の宣傳で、形式は夢中の記事に托したものが多く、好望的豫言的ではあるが、抗上的鬪爭的ではないのが特色である。

政黨文學時代・作家と作物

政黨時代に入ると、政治小說も單に自由民權の勝利を歌ふといふやうな漠然としたものでなく、政黨と交涉をもち、政黨の政治思想を反映し、政黨の鬪爭武器宣傳武器として利用される。これが前期の通り三期に分れるとして、第一の政黨全盛時代、これは自由黨が最も活躍した時代なので、自由黨

時代ともいふ。此の時代の政治小說の大體の特色は鬪爭的、破壞的、悲憤慷慨、頗る感情的な內容をもつたもので、創作よりも飜譯が多く、飜譯といふよりも飜譯に托した創作といつた方がよい。露國の虛無黨や佛國大革命の事蹟を假りて宣傳的文字を寓したものが多いので革命文學ともいふ。作者はいづれも宣傳的効果さへ擧がれば、小說的巧拙は論ぜぬといふ風がある。

此の派で第一線に立つのは、百華園主人櫻田百衞、この人は岡山の人で、栗原亮一に知られ、同人社等に學び、高松の腰拔新聞の記者をし、明治十六年二十五（或は七）で死んだ。生前東洋のヤ　グ・ヴィクトル・ユーゴーとまでに呼ばれたが、それは勿論おまけとして、幾分天才的なところがあり意識的に政治小說の力を認め、政治小說家にならうとした最初の人であらう。今日殘つてゐる作品は『阿國民造自由廼錦袍（にしき）』（十四年作、十六年刊）、『西洋血潮小暴風』（十五年刊）の二篇よりないが、後者は政治小說の代表的な一つとして有名である。（僕は最近この人に關する研究を明治文學會のクォタリに發表した。有志の方の一覽を乞ひたい）。（『政治小說の研究』上卷）。

第二陣は有名な宮崎夢柳、夢柳は土佐高知の人、土佐の高知新聞から自由新聞、自由燈記者となり大阪の東雲新聞を起し、二十二年死んだ。年三十餘。その小說中有名なものが多いが、それが皆飜譯即ち意譯的創作である。その代表的なものは『自由乃凱歌』（十五年、二十一年）、『冤枉（むじつ）乃鞭笞（しもと）』（十五年）『一滴千金憂世乃涕涙（なみだ）』（十六年作、十七年刊）、『佛蘭西太平洋鮮血の花』（十七年）、『虛無黨實傳記鬼啾々』（十七年作、十八年

刊)、等あるが、內容はフランス革命に關するものか、ロシヤ虛無黨の活動を寫したもので、自由黨の一面の思想を立派に表示してゐる。夢柳には又、『高嶺の荒鷲』(十五年)、『芒の一ト叢』(二十一年)等がある、前者は幕末義賊の事に托し、後者は現代政界の揷話を假想して、共に自由黨的の尖銳な思想を盛つてあるが、小說としては先づ稚拙なものである。兎もあれ、夢柳の政治小說の宣傳的効果は可成り大きく、それだけ夢柳が文學史家によつて政治小說の代表的作家の一人と見られてゐるのも、當然なところである。

夢柳の先輩の坂崎紫瀾、この人は政治的にも夢柳などより重さをなし、又文學的敎養も夢柳等より優れてゐたが、何しろ餘り長く土佐に居過ぎたので(十七年上京)、文壇的には夢柳の後輩の如く見られて損である。此の人も亦彼一流の政治小說を作り出して有名になつた。櫻田や夢柳が露佛流の革命思想を理想としたらしいのに反して、紫瀾に明治維新の大運動に自由民權の根源を認め、維新の歷史小說を書くことによつて民權宣傳の實を擧げようとしたのである。事實自由黨にも黨首板垣を始め民權運動を明治維新の連續と考へてゐた人々が多かつた。紫瀾の小說はかゝる思想を背景にもつてゐることを知らなくてはならぬ。彼が小說を書いたのは主として土佐時代で、マダム・ローランを主人公にした『自由の花笠』(十六年)や露國虛無黨を寫した『露國安那物語』(十六年)などもあるが、これはただ流行に應じて邦語譯したに過ぎぬ、その最も特意なものは、『南海血潮の曙』(明治十三年)『汗血千

里駒』（十六年）、『南山皇旗の魁』等である。就中坂本龍馬を主人公にした『汗血千里駒』は當時最も喝采されたものであつた。

以上三家は自由黨側の政治小說家であるが、自由黨の別働隊たる日本立憲政黨から加はつた作家に案外堂主人小室信介がある。此の人は丹後宮津の藩士で、若年だが板垣の古い同志である。本姓小笠原氏、有名な小室信夫の婿になつて小室を名乘つた。よく種々な書ものに父子取違へられてゐることが多い。學校敎師から新聞記者となり、大阪日報、日本立憲政黨新聞から自由新聞へ來た人だが眞面目な論說よりも諧謔の文字に宣傳的思想を含ませるのを得意としてゐる。小說家的伎倆は以上三家の何れよりも富んでゐた。それは案外堂の小說は、兎も角彼の創作ばかりで、飜譯物や外國種の厄介になつてゐないのでも分かる。だが短命で、明治十八年の夏死んだので、作の數は多くない。先づ『新編大和錦』（十六年）、『興亞綺談夢戀々』（十七年）、『自由艶舌女文章』（十七年）がその代表的作物であらう。『女文章』は有名であるが、小說として『夢戀々』の方が立派だ。此の人に認むべきは、此の頃から夙にその東亞問題に注目して、日本を東洋の救世主にしようとするイデオロギイを小說中に織り込んだことである。

政黨全盛時代を代表するものに、自由、改進、帝政の三政黨があるが、以上諸家が自由黨系のイデオロギイを反映宣傳する役割を務めたに對し、改進黨側には矢野龍溪が現れた。これに對して帝政黨

側から何人も出てゐないが、これは帝政黨側では別に言論に不自由せず、宣傳にもカムフラージユを必要としなかつた爲めがあらう。改進黨側から龍溪だけしか出てゐないのも、政治小説出現が大衆的宣傳の動機をもつてゐるのに對し、改進黨はブル中心の政黨でいはゆる大衆を目ざしてゐなかつた點を考へると首肯される。龍溪の志も大衆的宣傳ではなく、超黨派的經典を作るにあつたのである（然し事實に於いて改進黨主義の宣傳小説たる一面を脱却しなかつた）。龍溪の『經國美談』（十六――十七年）については、餘りに有名なものだから内容その他については説かぬが政治家龍溪が小説を書いたといふことが時人の文學觀を或る程度まで高めたこと、その小説が文學的に立派なものであつたといふことで、政治小説、引いては一般の小説といふものが新な眼で見られ論じられることになり、又その爲め龍溪の風を聞いて起つた素人玄人の作家が多勢出たのである。政治小説全盛は龍溪に負ふところが多い。

十八年以後、卽ち政黨文學の第二期第三期は、十八年以前を自由黨時代といふに對し、正に改進黨時代とよばれてもいゝものであるが、然し二十年前と後とで調子が少し變るから、全部を改進黨時代にしたくないとせば、二十年以後をもつて政黨文學に對する國會文學時代といふものにしても可い、卽ち本稿にいふ政黨文學の第二期が改進黨時代となり、第三期は別になるわけである。かくて十八年以後、愈よ政治小説の全盛時代となつて來る。

十八年以後二十三年までの小説の特色を簡單た述べると、形式からいへば、前期の諸作が往々稗史

風になりたがるのに反して、現代的寫實風が主となる。內容は槪して破壞的分子が去つて建設的となり、感情よりも理性に訴へる分子が多く、合理的秩序的改革を重んじ、國會を目標とし、國會に於ける勝利を理想とするやうになる。勿論政黨の思想を反映宣傳はするが、それは前期の如く黨第一の鐵則に縛られてゐはせぬ、可成り自由に個人的意見が加味されて來る。前期に飜譯が多いのに對して創作が多いが、これは手心を心得、見當のついた結果と見られる。勿論手本はあるので、それは前期の佛露流の過激なものではなく、英國流の政治小說（主としてヂスレーリのそれ）に影響されてゐる。

一寸設明を要するのは、政黨全盛時代に政治小說が全盛でなく、政黨の衰退時代に政治小說が全盛になつて來たのは何ういふものか、といふ點である。一寸聞くと矛盾のやうにも不思議のやうにも受けとれるが、よく觀察してみると、かうなるのが當然なのだ。

先づ政治小說それ自身の方からいふと、明治政治小說の出現した動機がカムフラージュ的大衆宣傳といふ點にあるが、つまり政府の彈壓を避ける新工夫として取上げられた形がある（無論積極的な主張ももつてゐるが）、然るに十八年以後數年間の政黨衰退は何の爲めかといふと、政府の彈壓が益々嚴しい爲め（と民間不況とで）政黨的活動が出來難くなつたからだ。然し根本の政治熱が冷却したのではないから、その宣傳的捌け口を求むることが益々急である、これがカムフラージュ的宣傳手段たる政治小說といふものに一層多く賴ることになる。それから今一つは丁度、此の頃折よく政治小說に傑作

（當時として）が續出したので益々世人の注目を惹いて文壇に覇を唱へるに至つた點も認められる。

政治小說自身の側にさういふ發展の好條件があるのに、一般文壇では時の政府の歐化政策に起因する社會改良熱から分派した文學改良熱、小說改良熱が恐ろしい勢ひでもり上つて來た。そこで所謂文學革命といふ現象が生ずるのだが、この改良熱と政治小說が結びついた（それが何ら結びついたかを詳しく說く餘裕がないが、文學革命の要求を先づ取り上げたのは政治小說であつたといふこと、文學革命の首唱者春のや朧が一面政治小說家でもあつたといふこと、必要上小說改良の聲を先づ揚げたのは政治運動者であつたといふことなどから推察されたい）。政治小說全盛の條件はこれで大體揃つたわけだ。もつとも當時の國民の經濟生活のことも一考すべきで、當時一般民間として不況であつたが、新興の都市ブルの上中層階級は、多年の積蓄でこのころから漸く餘裕が生じ、歐化政策と相俟つて（洋風の）社交生活といふ新現象が生れた、文學改良熱は直接間接この社會生活に負ふところが大きいのである。且つこの社交生活が又、決して政治と絕緣したものでないので、益々政治小說全盛の空氣を釀すことになる。

次にこの時代の主要作家と作品とを擧げて置かう。

改進黨側では矢野龍溪が政治小說を書いて以來、その後輩や政友が我も我もと政治小說を書き始めたが、その中に須藤南翠、藤田鳴鶴、尾崎學堂、服部撫松等がある。

最も早く龍溪を模倣したのは、須藤南翠である。彼は龍溪の小說を書く前から新聞續物作者として、

一家を成してゐたが、一方政治が好きで改進黨に投じ、國約憲法論に大氣焔を吐いたりしたものである。彼は模倣の點で天才といふべく、始め龍溪を模して、專ら維新を舞臺にした稗史風の政治小說を書いたが、「旭日美譚」「照日葵」の如き、ヂスレーリの政治小說を讀み、又坪内逍遙の『小說神髓』を讀むに讀んで稗史的結構と現代寫實風の社交的背景をもつた折衷的の新しい政治小說を工夫し、世人の大喝采を得た。『緣簑談』(十九年)『新粧之佳人』(十九年)、『旭章旗』(二十年)、『唐松操』(二十一年)、『隱君子』(二十二年)等がその代表作である。

藤田鳴鶴の『濟民偉業錄』(二十年)も明白に龍溪の『經國美談』に發奮して書かれたものなることは一讀して分る。舞臺を支那明末に變へ、明末の惡政に譬へて明治政府の專制を諷し、その改革を叫んでゐるもので、餘り讀まれぬが面白いものである。尾崎學堂の『新日本』は何方かといへばリットンの『繫思談』ヂスレーリの『ヴィヴィアン・グレイ』を眞似た趣きが見えるが、これはたゞに改進的政治理想だけでなく、新日本の人々の當然もつべき婦人觀、結婚觀、社會生活、外交政略その他について暗示するところのあらうとした頗る野心强いものであるが、小說としては未成品たるを免れない。

戲文家として東京新誌で賣りこんだ服部撫松も政黨時代に入るや、改進黨に參加し、改進黨イデオロギイ宣傳の政治小說を書いた。漢文式戲作家としてのみ知られてゐる撫松にも案外かういふ眞劍な努力の一面があつたのだ。『二十三年國會未來記』(十九年)、『春告鳥』(二十一年)、『二十世紀新亞細亞』(二

十一年）等が一讀すべきものである。

以上は改進黨の純然たる黨員であるが、改進黨の傍系シンパたる位地にあるのは、春のや朧（坪内逍遙）である。逍遙の文學革命家としての功績について別項で硏究されることであらうからして、これについては、格別述べぬことゝし政治小說家としてのみ一瞥して置く。『淸治湯講釋』は明治十五年まだ東京大學にゐるころのわざくれであるが、十六年卒業『自由太刀餘波鋭鋒』（十六年）、『慨世士傳』（十八年）の二飜譯で當時の政治熱への關心を示し、遂に『京わらんべ』（十九年）、『內地雜居未來之夢』（十九年）、『外務大臣』（二十一年）、『小呉蜀魏誌』（二十三年）等の政治小說を公にした。その名著『小說神髓』（十八年――十九年）が、一般小說から引いて政治小說の形式描寫方面に、決定的な影響を與へたことは注意されて然るべきだ。

以上の諸氏に少し先立つて、而かも何の政黨的背景もなしに立派な政治小說を公にして一躍大家となつたのは、『佳人之奇遇』の著者柴四朗である（東海散士）。柴氏の小說には『佳人之奇遇』（十八―三十年）の外に『東洋之佳人』（二十一年）、ずつと後に『日露戰爭羽川六郎』（三十六年）といふのがあるが、專ら『佳人之奇遇』の作者として傳はつてゐる。柴氏の經歷のことや此の小說の內容のことは略ぼ世間で知つてゐるから述べぬが、ただ一つ辯じて置きたいのは、この小說が筋が通らず支離滅裂だといふ非難がある點である。それは卒然この小說を讀めばさういふものも無理もないが、然し成立の事情を

考へてみると、たゞさう見なし去るべきではないと思ふ。この作八篇のうち第五篇あたり迄が初案で以下は追加であり、本來ならば別の小説となるべきものである。兩者の刊行年代に六年の隔てがあり事件も舞臺も變るのでさう見るのが當然である。或はこの小説全體がもつと大きな腹案の一部で、まだ未完の作であるといつて可い。何れにしても著者の心境と共に生長して來たもので、豫定したプランに依つたものでないと察せられる。その點だけは斟酌すべきである。柴氏は必ずや第五篇散士の歸國で一應大團圓にするつもりであつたと思ふ。さう思つて、讀むと一應纒つてはゐるのである。

政黨復興は二十年二十一年大同團結の運動あたりからと見て、この期に入つて政治小説の火の手が益々强くなり、完全に文壇を席捲して政治小説の全盛時代となる。前述の諸家中、この期に執筆してゐる南翠、東海散士の如きもあるが、全盛時の代表は大同團結の鬪將末廣鐵腸とならざるを得ない。彼はその政治思想に於いて自由、改進を折衷し、その政治的經歴に於いて獨自の大同的立場をとつた如く、その政治小説に於いても、從前の諸家を滙集大成した趣きがある。鐵腸の最大の功績は、政治小説を兎もかく小説にしたことである。小説的テクニクの點で、南翠程ではないが、政治小説の作家としては鐵腸は優に南翠の上にある。文學史家が、政治小説といへば鐵腸を以て代表させるが、それは當然である。その代表作は『二十三年未來記』(明治十八年、十九年刊)、『雪中梅』(十九年)、『花間鶯』(二十一——二十一年)、『雨前之櫻』(二十一年)、『國會開設之前後』(二十三年)、『南洋の大波瀾』(二十四年)

『明治四十年の日本』（二十六年）、『戰後の日本』（二十八年）等々である。この中二十四年以後の諸作は、國權主義の理想をあくまで發揮したもので、後期政治小説中の最も代表的なものとなつてゐる。

鐵腸と同時の作家には、上記諸家の外に政黨に關係ある人々で——

內村　義城（舊立憲政黨）『二十三年夢幻鐘』（二十年）『鶯宿梅』（二十年）

小宮山天香（—）『聯島大王』（二十年）

志賀祐五郎（舊自由黨）『枯骨の扼腕』（二十一年）

小林雄七郎（—）『自由鏡』（二十一年）

高安龜次郎（—）『ねやの月』（二十年）『世界列國之行末』（二十年）

矢野　龍溪（再出）『浮城物語』（二十三年）

久松　義典（改進黨）『南溟偉蹟』（二十年）『代議政體月雪花』（二十年）『東洋社會黨』（三十四年）

大久保夢遊（—）『深山櫻』（二十年）

中村　望天（—）『昂駒之蹄』（二十年）

等あり、殆んど政黨に關係のない人々に——

福地　櫻痴『もしや草紙』（二十一年）『煨芋の煙』（二十一年）『滑稽妄說仙居の夢』（二十三年）『撰擧競爭噓八百』（二十五年）『大策士』（三十年）

牛山鶴堂『日本新世界』（二十年）『日本の未來』（同年）
久松廉三『國民の骸骨』（二十一年）『國會之燈籠』（二十一年）『新日本之娘艶舌』（二十一年）
擧げれば無數に擧げ得るが、際限のない話だから、この邊で打切る。右のうち櫻痴の政治小説はあくまで冷嘲的暴露的なものであるが、政界失意の彼として、一つは鬱憤の洩らし所としたものであらう。尙ほ久松義典は政治小説と社會主義文學との連絡を示す存在として特に研究に値する。

蘇峰の政治小說評について

國權思想をもつた作物、即ち後期の政治小説については初めから語る豫定が立てゝなかつたので、先づこれで文學史に所謂政治小説については一わたり語り終つたわけだが、それにしても語り殘した事柄の何といふ多いことだらう。少くとも二十三年以後政治小説急衰の原因、政治小説と明治新文學との交渉の二項は是非述べて置きたいものと思ふが、殘念ながら今は止めて置く。たゞ一言したいのは、よく研究家が引用する國民之友第六號所載（二十年七月）の『近時流行の政治小説を評す』といふ蘇峰の論についてゞある。この論は當時の政治小説の缺點を評したものとして誰にしろ大體異存がない。ところが、この文は短を論ずるに富み、長を述べるに吝だといふ點を斟酌して讀まなくてはなら

ぬ。如何に政治熱に乘じ文學熱に煽られたにせよ、缺點だけで固まつて何の取柄もない作物が政治小說全盛といふ一時期を造るなどいふことはあり得ない。必ずや若干の取柄があつたことは事實として認めなくてはならぬ。同樣に蘇峰のいふ政治小說の缺點は、寧ろ當時の小說界全般に當てはまるべきものである。又この文で蘇峰の要求する政治小說が如何なるものかも、明白に分かる。蘇峰は暴露的なものを描けと要求してゐるのであるが、然しそれだけでは成功した政治小說にはならない。研究家は、いかに大家の言でも、附和雷同の態度を避けなくてはならない。（八、一〇、六）―本講座の拙稿「明治の飜譯小說文學研究」參照のこと―（昭和九年一月、改造社版「日本文學講座」）

初期飜譯文學概說

一

此の篇で、私は明治初期飜譯文學の源流について文献的に述ることを主な目的とし、初期以後の飜譯文學のことは略記に止めて置く。私は何主題についても好い加減のことを好い加減に書いてゐられない損な性分なので、自分が多少なりとも自信をもつて述ることが出來ないものは成るべく避けることにしてゐる。明治の飜譯文學についても、初期の分に就いては多少研究めくこともし、人にも語りもしたので、やゝ自信を以て述られるが、それ以後の分に就いては今のところ一般文學史並の知識よりないので、可及的少なく語らざるを得ない。

又飜譯といふ以上は、嚴密にいへば支那小説などの譯をも含むのであらうが、今こゝではその方のことにはふれず、歐米文學だけに限つて置く。このことも一寸お斷はりする。

二

明治初期の飜譯文學で劃期的なものは先づ何といつても織田氏譯の『花柳春話』で、『花柳春話』の出た十一年までに、可成り多く飜譯が出てゐるが、文學らしい文學の飜譯は殆んど出てゐない。

そのうちで幾分文學に縁のあるものを拾ひ上げて、年代順に列べてみると、

明治五年　『魯敏遜全傳』（齋藤了庵譯、實は黒田行元譯）

同　六年　『伊蘇普物語』（渡部　温譯）

　　　　　『訓蒙話草』（福澤英之助譯）

同　七年　『後世夢物語』（上條信次譯）

　　　　　『西洋孝子流別奇談』（小林謙吉譯）

同　八年　『暴夜(あらびや)物語』（永峯秀樹譯）

同　九年　『天路歴程』（佐藤喜峯譯實は村上後吉譯）

同　十年　『胸肉の奇訟』（譯者名未詳）

　　　　　『回世美談』（山田正隆譯）

但しこれは刊否未詳である。

なほ此の外にも、ハムレツト獨白の紹介（明治七年ヨコハマポンチ）とか悲劇『椿姫』の消息とか（明治五年成島柳北巴里書翰）斷片的に歐米文學の片鱗を窺ふに足る材料はあるが、多少纏つた飜譯紹介としては大體以上の數部で十年迄の飜譯文學がつくされてゐる。

尤もかういふと、此の頃誰も西洋文學を讀んだ人がないやうに聞えるが、これは讀んだ人々はあつたに違ひない。靜岡の葵文庫の所藏の貴重書は德川幕府のものを明治の初め移したものと聞くが、此の貴重書中には數多の英佛書があり、殊に、英佛文學書がある。ドンキホーテ、トリストラム・シヤンデイやヂツケンズの作（佛譯で）などもあつたし、シヤトウブリアン全集などもあつた。何れ役人が洋行の途次手當り次第に買集めたものか先方から寄贈されたものであらうが、これで見ても、明治以前にも西洋文學を味つた人々はゐた事はゐたらしい。古くは高野長英の傳記にも、長英が蘭文の小說を愛讀したといふ記事があり、勝海舟が蘭歌を和譯し、英學者尺振八なども好んで英國小說を讀んだとのこと、又神田孝平は『楊牙兒奇獄』などといふ探偵實話めくものを紹介してゐる位である。だから西洋文學が多少輸入され、これを愛好した人々も確にゐた。然しながらそれは極々少數の好事的精神の持主だけのことで、洋學者の九分迄は專ら利用厚生の一點張りであつた。だから今日から見てこそ明治十年迄の飜譯文學書は驚くべき貧弱なものであるが、然し明治以前の皆無に比較したらその

反對に感じられたかも知れない。

上に擧げた譯書に就いて語ると、『魯敏遜全傳』は有名な黒田行元の『漂荒紀事』の初頭二冊（一卷分）を齋藤了庵の名で上梓したもの、蘭文から重譯である。『伊蘇普物語』は靜岡の人（幕人）渡部溫の譯刊で、興味ある話柄二百餘篇、外に譯者が補つたものもあり、イソップならぬ書（『經濟說略』の如き）から補入もある。俗語口語を交へた一種の通俗譯で、物が物だけに理解專一を旨としたらしい。渡部氏は英文の方をも飜刻してゐる。その他いろいろな點で此の人は明治初期の英學界に大きな貢獻をなしてゐる。『訓蒙話草』はイソップの譯であるが、これは話柄の數が九十餘ある。譯文は普通文であるが、譯は前者より消化されてゐる。これを譯した福澤英之助は豐前中津の人で、福澤先生の門生であるる。元と和田愼次郎といつたが、幕府から洋行させて貰ふため福澤先生の弟分となつて福澤姓を名乘つたといふ面白い經歷の人である。福澤氏の此の譯書のことは、渡部氏のもの程有名でないので知る人が少ない。

『後世夢物語』は寓意的未來小說である。余といふ主人公が碩學ロージヤ・ベエコンとミス・フワンタシヤ（幻想）とに導かれてロンドンの後身たるロンヂニアに遊び、更に宇宙の旅行に出て紀元第二十何世紀の進步した文明の諸相を見物して驚異するといふ「午睡の夢」で、『夢想兵衛』の少し科學的なものと思へば可い。これと同じ原書を明治元年に譯した（十一年刊）といふ近藤眞琴の『新未來記』

には、蘭人ジヲス・コリデス著となつてゐる『夢物語』の方は英文（或は英譯）から譯した痕跡が明かである。譯者の上條信次は信州東筑摩郡和田村の人で、大學南校に學び、曙新聞その他に執筆して民權論を唱へ、後に東洋自由新聞にも關係した有名な人物であつた。

『流別奇談』は備中倉敷の人小林謙吉の譯したもの、小林氏には他に一二譯書がある。譯者は、此の原書は一八六七年佛國出版オルレンドルフの著したもので原名を『レクチユール』といふと斷つてゐるが、然しこれだけではよくわからない。何かフランス文抄めくものから一話を拔いて補譯したものであらう。フランスの商人モリスはインドで成功したが歸國の途難船にあふ。妻は孤島に死ぬが殘つた兄と妹は父に廻りあひ、種々冒險の後黒人國王を斬つて歸國し、大に榮華を得るといふ筋で大分小說めいたものである。

『暴夜物語』は勿論『アラビヤンナイツ』の譯であるが、內容は漁夫の物語から黒島王救出のところまでゞある。譯文も此の頃として巧みな方であらう。譯者永峯氏は甲州生れで舊幕人、海軍出身たが文學の嗜みがあり、此の外にも『ギゾオ文明史』その他多數の譯書があり、當時高名な飜譯家であつた。

『天路歷程』即ちジョン・バンヤンの『ピルグリムス・プログレツス』は七一雜報（十五號より）に連載されたもの（十二年刊）、初頭に口語の譯文があるのが注意される。『胸肉の奇訟』は慶應義塾の民

間雜誌に載つたもので沙翁の『ヴェニスの商人』の梗概である。地名人名など、日本風に移されてゐる。沙翁については、明治八年既に假名垣魯文の『ハムレット』紹介（平假名繪入新聞）があるといふが、私は未見である。『回世美談』は『ロビンソン』の全譯を試みたものであるが、版權書目によると豫定六十冊の內何冊か出版されたらしいが、これも私には未見である。

以上の飜譯紹介の動機は二つに分けられる、一は教訓を目的としたもの、他は好奇心から出たものである。或は二つを兼てゐるものもある。概していつて實利的精神を脫してゐない、又飜譯紹介された書物には文學書として立派なものがあるが、譯者が必ずしも能文達筆の人でなかつたので、たゞ內容の一般を傳へるに專らであつて、原書のもつ眞の美を傳へる力がなかつた。然し大體逐次に文學らしいものが紹介されてゐることが認められる上、紹介された大半は有名の古典ばかりだから、見樣によつては西洋文學の基礎知識の紹介ともいへるのである。

三

『花柳春話』の刊行は明治十一年から十二年に亘る、記者は織田純一郎（初名丹羽）である。森田思軒が「我國ノ小說ノ趨向一變セムトスルヤ、織田氏譯スル所ノ『花柳春話』ソノ嚆矢ヲナセリ」（益

田克德譯『夜と朝』の序）といつてゐる通り、たゞ一つの飜譯文學書で時の文壇創作界にこの書程の影響を與へたものが他にあるかどうか、此の點で『花柳春話』は眞に劃期的なものといひ得る。英のリツトン卿原作『アーネスト・マルトラヴアース』及び續篇『アリス』の二部を抄譯したもので、此の時の譯文は漢文直譯體だが、後文章を馬琴流に書變へて『通俗花柳春話』と題して再刊した（十六年）。此の小說飜譯紹介の目的は、譯者によると大體二つある。曰く日本人に西洋の風俗人情を知らせること、曰く英國近世社會史の理解を助けること、これである。だが此の二つを合してかういつても可からう。曰く感情生活を介しての西洋そのものゝ紹介、これである。卽ち從來の抽象的主知的西洋紹介ではなしに、具體的實例によつて情的西洋に日本人の眼を開かしめんとしたものである。

此の小說が大歡迎されたことは、譯者晩年の述懷によつて知られるが、文壇に大きな影響を與へ、何々春話、何々情話とか、表題を模倣するものは勿論、內容文章から挿繪まで模倣したものも出た。『春風情話』、『群芳綺話』、『春窓綺話』などは前者の好例であり、『鴛鴦春話』、『艶才春話』（『世路日記』の前身）などは幾分後者の範圍に屬する。世間に歡迎された理由としては、種々ある。卽ち明治九、十年頃の殺伐な騷々しい空氣が落ちつくと共に時代が淸新な讀物に渴してゐたこと、當時の西洋崇拜熱に迎合したこと、內容が才子と佳人と流離艱難多年の後團圓するといふ日本在來の小說的理想にぴつたりと當はまつてゐたこと、文章描寫に淸新味（當時として）のあつたこと、幾分か政治界の

消息を傳へてゐること、皮相的な道德的說敎卽ち廣義の勸懲的意見が中心を成してゐること等々。此の政治界の消息をいさゝか傳へてゐる點でこの小說を政治小說だなどといふ人もあるが、これは決して政治小說ではない、又譯者もそんな心算で譯したものでもない。何處までも西洋流の才子佳人式小說である。此の小說は今日讀んでも相當の興味をもつて讀了することが出來る。

譯者織田氏は京都の人、一條家の臣若松氏の子で三條家の諸大夫丹羽氏に養はれ、後故あつて織田姓に改めた。お茶の水聖堂、高知致道館等に學んだ後、明治三年英國留學、エヂンバラ大學で法律を修めた。七年三條家の公子公恭君の補導として再び渡英、十年歸朝。『龍動繁昌記』『花柳春話』等を譯刊して一躍文名を揭げた。後諸官省で法學を講じてゐたが十六、七年頃から新聞に關係し、殊に大阪朝日新聞の爲めに大いに盡した。だが時代の先覺者の例にもれず、事志と違ひ、晚年不遇不如意のうちに病んで歿した（大正八年）。飜譯小說には以上の外に『寄想春史』（十二年、リツトン『ポンペイ最後の日』）、『いさ子姬』（二十二年、ウード女史『イーストリン』）がある。織田氏は專門の文學者ではなかつたが、風流才子の名を博してゐただけ、文學に對する理解は相當あつたらしく、氏の譯文小說は皆讀むに足る。

氏の弟若松永胤も戲作小說を書いてゐるが、或は文學的遺傳でもあつたのであらうか。

四

明治十一年て、而かも『花柳春話』より早く、注目すべき一飜譯小說が出てゐる、川島忠之助譯・『八十日間世界一周』といふものがそれである。これはジュール・ヴェルヌの科學的冒險小說の紹介であり、その異常な內容と遂字譯の文章とによつて大に時人の注意をひいて然るべきものであつたが、『花柳春話』の人氣に蔽はれたものか、識者（例へば栗本鋤雲の如き）の外にはこの小說の價値を認めるに至らなかつた。

十二年から十五年へかけて出た飜譯のうちで見るべきものには、——

十二年　『哲烈禍福譚』（宮島春松譯）

十三年　『月世界旅行』（井上　勤譯）

『春風情話』（橘顯三實は坪內逍遙譯）

『ガリバア回島記』（片山平三郎譯）

『龍動鬼談』（井上　勤譯）

十四年　『五九節操史』（松岡龜雄譯）

十五年　『蝶舞奇緣』（桑野　鋭譯）

『群芳綺話』（大久保勘三郎譯）

『西洋夫婦事情』（加藤鶴吉譯）

などがある。以上について簡略な解題を加へると、『哲烈禍福譚』はフエヌロンの『テレマック冒險譚』の譯で、譯文の流麗な點で明治初期飜譯文學中第一流に位する。譯者宮島春松は信州松代の士、英佛の語學に達し、陸軍飜譯掛として貢献した人、後年雅樂に精進し、雅樂協會を創設した奇士である。『月世界旅行』はジユール・ヴエルヌの原作、巨砲の彈丸中に身を潜めて月世界に至るといふ科學的物語、十六年刊の『月世界一周』と姉妹篇を成す。『春風情話』はスコツトの『ラムマアムーアの新婦』の抄譯、坪内逍遙の處女譯、處女出版、スコツト物の紹介の最初といふ點で重視すべきもの、『ガリバア』についてはいふ程のことはない。小人國の部だけの逐字譯で裝幀に雅致がある。『龍動鬼談』はリツトンの『不思議な話』の抄譯で物凄い怪談的興味に富む。『五九節操史』はヂユマの『四十五人の近衞兵』の譯で原語譯だが未完である。ヂユマ物の最物か。『蝶舞奇緣』は『アルビニヤ、一名若き母』といふ米國小說の抄譯紹介といふ原著者は不明、內容は才子佳人式人情小說もの、譯者桑野氏は筑後柳川の人で、東京新誌の編輯者から皇子傳育官になつたといふ異常な經歷の持主である。『群芳綺話』は『デカメロン』紹介のはしりであらう。フランス譯からの重譯で、二日目の第三話、十日目の

第四話、三日目の第三話、五日目の第七話、四日目の第十話、九日目の第二話、四日目の第六話といふ順で都合七話だけ紹介されてゐる。譯者については全然知るところがない。『西洋夫婦事情』はチヤールズ・チツケンズの作といふが、『スケツチエズ・バイ・ボズ』などの抄譯か。

なほ小說ではないが、明治十二年刊の菊池大麓譯『修辭及華文』は、後の十六年刊の中江篤介譯、『維氏美學』と共に西洋の文學藝術の理論を紹介したものとして注目すべきであらう。

以上の外、版權書目に依ると、或は出版されたかと思はれるものに左の數種がある。

十一年　『へねろむ物語』(長澤正毅譯)

十三年　『瑞西獨立自由の弓弦』(齋藤鐵太郎譯)

十四年　『昔ゆうぜん荒夢(あらむ)物語』(上田秀成譯)

五

明治十三年の國會願望運動以來自由民權の叫びが全國的に强くなつて來、操觚者といふ操觚者は皆此の運動を勢援した。十五年には飜譯文學界にも此の風潮が露骨に現はれて、政治小說乃至自由民權の宣傳、壓制政治排擊の小說じみた飜譯物が續々と出た。そのうちで——

櫻田百華園　譯『西洋血潮小暴風』
宮崎夢柳　譯『自由乃凱歌』
同　　　　譯『寃枉乃鞭笞』
山田郁治　譯『哲爾自由譚』
川島忠之助　譯『虛無黨退治奇談』
井上　勤　譯『良政府談』
杣田策太郎　譯『烈女の疑獄』
澗松晚翠　譯『壓制政府の顚覆』

などが、主なものである。（第一）はヂュマの『一醫師の回想』の一部を政治小說化したもの、（第二）もヂュマの『バスチイユ奪取』の譯、（第三）は露國の革命婦人ヴェラ・サシュリッチの少女時代の事を小說化したもの、（第四）はシルレルの『ヴイルヘルム・テル』の原語譯、（第五）は佛人ポール・ヴェルニエの原著、忠實な逐字譯たることは『八十日間』と同じであり、讀んで極めて面白く、虛無黨の內狀なども相當突込んで書いてある。（第六）はサア・トマス・モーアの『ユトウピヤ』の全譯、これも忠實な好い譯文である。（第七）は小說ではないが、前述のヴェラ・サシュリッチが大警視トレポフ暗殺未遂公判の記錄の抄譯で小說より面白い。（第八）はフランス物の戲曲の梗概で極めて漠然とした

ものである。興味の中心は概して佛國大革命の事蹟と露國の虛無黨の動靜との二つにあるといつて可い。虛無黨が注意を惹いたのは、丁度露帝アレキサンドル二世が暗殺されたばかりの所爲もあつたらうが、何れにせよ、當時の青年政治運動者の大半の志す所が何處にあつたか、察すべきであらう。譯者の中櫻田氏は岡山の人で、自由新聞記者、政治小說先驅者の一人である。宮崎夢柳は土佐高知の人、高知新聞から自由新聞に入り、繪入自由、自由燈、東雲新聞等に執筆して、文名隆々たるものがあつた。夢柳が譯した政治小說めくものには、『鮮血の花』（十七年、『西洋血潮小暴風』の續篇）、『憂世乃涕涙』（十七年、英國エドワード・キング著『ヂ・ジエントル・サヴエージ』）、『鬼啾々』（十八年、ステプニヤツク『地底の露西亞』によるもの）などがあるが、一番有名なものは虛無黨物の、『鬼啾々』で、これはステプニヤツクの著書を中心に種々な材料を案排して一篇の政治小說化したものであるが、革命婦人ソヒヤの行動が殊に讀者に感動を與へた。櫻田や宮崎の譯は、名は譯といつても實は增補刪削勝手次第の恐ろしいものなので、後世の評者から豪傑譯の名を貰つてゐる。

同じ十五年に飜譯文學界に現れた現象で注意すべきものは、『新體詩抄』の中の譯詩である。シエークスピヤの詞曲三篇、グレイ、テニソン、カムベル、ロングフエロウ、キングスレーなどの詩が十餘篇收められてゐる。譯は稚拙ながらこれが飜譯紹介した動機が多少とも藝術愛好心を示してゐるのは

從來の飜譯態度の多くは實用功利的なのに比して、一進步である。

六

明治十六七年の飜譯文學界を一瞥すると、私は先づ井上勤氏の健筆に感心する。井上氏は先づ十六年度に於て――

『全世界一大奇書』（『アラビヤンナイツ』）
『空中旅行』（ジュール・ヴエルヌ原著）
『魯敏遜漂流記』
『英國太政大臣難船日記』（ジュール・ヴエルヌ原著『チヤンセラア號の生殘者』）
『人肉質入裁判』（沙翁『ヴエニスの商人』）

を、十七年度に於いて――

『狐の裁判』（ゲエテ原著『ライネツケ・フツクス』）
『自由の征矢』（ジュール・ヴエルヌ原著『マルタン・ポス』）
『海底紀行』（ジュール・ヴエルヌ原著）

を公にして、當時としては稀に見る讀書力語學力を示してゐる。『一大奇書』は抄譯だが略ぼ首尾整つてゐて、長い間我國唯一のアラビヤ物語の譯として愛讀されたもの、譯文は一種の新體を成してゐる。『亞非利加内地空中旅行』は『海底紀行』と共にヴェルヌ得意の冒險科學小說乃至科學的冒險小說である。『難船日記』の表題は可笑しいが、これは校定者渡邊義方（文京）の所爲であらう。『魯敏遜』は井上氏譯書中の白眉ともいふべき程で、その正確な逐字譯は井上氏の語學力の秀拔を證明してゐる。『人肉裁判』は有名なものであるが、大體はラムに依つたらしく見えるもの丶井上氏は原作も讀んでゐたらしいから、何ともいへない。從來これが兎も角沙翁紹介の纒つたもの丶最初とされてゐたが、同十六年だがこれより前に郵便報知新聞に『春宵夜話』として沙翁物幾種かの梗概を物語つたものがありその一部が矢張り『人肉裁判』より先に西基斯比耶叢書第一篇として『佛國某州領主馬吉（マキシム）侯情話』として出てゐる（『お氣に召すまゝ』の紹介）。だが此の年二月大阪の日本立憲政黨新聞に出た『ジユリアス・シーザルの劇』（十九年刊『羅馬盛衰鑑』小宮山天香、河島敬藏共譯）が原作紹介の最初である。『狐の裁判』はゲエテ時代の政治社會の諷刺であるが、惡が善に勝つ主意が深刻である。『自由の征矢』はペルウ革命に絡む才子佳人の悲劇物語で、ヴェルヌ物としては變り種である。

井上氏は阿波德島の人で、早く外人に就いて英獨語を學び、諸官省の飜譯掛や役人をしつゝ西洋文學の紹介に力めた。內田魯庵氏と姻戚で、少年時代の內田氏は井上氏から提撕をうけたものといふ。

以上の外に十六七年中の注意すべき飜譯文學として、十六年には伊澤信三郎譯『鐵烈奇談』、高須治輔譯『花心蝶思錄』がある。前者はフエヌロンの『テレマツク』の譯(未完)だが、その飜譯態度に於いて原作の文章形式尊重の意を仄めかしてゐる點を取るべく、後者はプーシユキン『士官の娘』の抄譯で、恐らく露國小說飜譯の最初であらう。(十九年改題再刊『露國情史、スミス・マリー之傳』)。なほ此の年ルソオの『懺悔錄』の初譯『自叙詳傳』といふものが出てゐるらしいが、未見である。(栗原亮一譯)。

十七年譯刊の白眉は坪内逍遙譯の『自由太刀餘波鋭鋒』別名『該撒奇談』である。これは餘りに有名なものであるから、こゝでは何も述べずに置く。『春窓綺話』はスコツトの『湖上の美人』を散文譯にしたもの、服部誠一纂述となつてゐるが、實は高田早苗、坪内逍遙二學士の譯に成り、漢譯の詩は天野爲之學士の助けをかりたものである。初め『春江奇緣』と題したのを、服部氏は勝手に改め、叙事の順序を顚倒したり文章を改作したりして公にした。『春鶯囀』は政治小說『コニングズビイ』(ビコンスフヒールド卿)の譯、譯者は後年政界に名を成した關直彥で、此の頃の飜譯小說としては完璧に近いものの一つであらう。分册四册が全部此年中に刊行されてゐるのは、如何に歡迎されたかといふことを物語つてゐる。これは本格の政治小說紹介の最初であるが、總體として十五年以後飜譯文學はずつと政治趣味、自由民權的色彩と離れ難いものとなつて來てゐる。『自由太刀』の表題にも亦『春窓

綺話』の序によつてもその邊の消息が看取される。宮崎夢柳の豪傑譚たる政治小説が全盛を極めたのも、十六、七、八年の間のことである。

七

十八年に入つて先づ語らなければならぬのは藤田茂吉、尾崎庸夫共譯の『繫思談』である。『繫思談』の出現と共に明治の飜譯文學界は更に一轉化する。森田思軒は『花柳春話』を論じた後、此の書についてかういつてゐる、「藤田氏ノ『繫思談』ヲ譯スルニ及デ造句措辭別ニ一機軸ヲ出シ。或ハ艱奥ニシテ通ジ難キモノ無キニ非ズト雖モ。其ノ原本ヲ臨スル謹嚴精緻。今日無數ノ周密文體ハ其紀元ヲ此ニ溯及セザルヲ得ズ」(『夜と朝』の序)。卽ち『繫思談』の出現は、その飜譯態度の完全な意識的宣明によつて、明治飜譯文學界の今一つの劃期的な現象となつてゐる、換言すると明治の飜譯文學はこれと共に、內容偏重の無意識時代から內容外形併重の意識時代に入つて來たわけである。文學を文學として飜譯紹介すべしといふその自覺した飜譯態度は、此の書の卷頭の例言に十分宣明されてゐる。十六年の『鐵烈奇談』が此の態度の先驅をなしたことは前に述べた通りである。

此の書の原本はリツトン卿の『ケネルム・チリングリイ』で、題名もK・Cから出てゐる。藤田、

尾崎二氏の共譯とはなつてゐるものゝ、實は大學生時代の朝比奈知泉の譯であるといふ。尾崎氏は福井縣の人、報知新聞記者として又改進黨員として當時相當知名の士であつた。卷中佛人ビゴオの挿繪があつて、一層この書の價値を加へてゐる。主人公ケネルムは時代の新思想に教育された青年だが、種々人生の試練をうけた結果、新思想の空理なるを覺つて、傳統に生きるといふ筋で『花柳春話』の原作と同じく、明かにゲエテの『ヴィルヘルム・マイスタア』の影響をうけたものである。

思軒の語で一寸注意を要するのは、此の書が周密文體の元祖なるかに受取られる點であるが、周密文體は決して此の書が發明したものではない。中村正直の『西國立志編』乃至は『八十日間世界一周』なども周密文體と見て然るべきものである。たゞ『繋思談』はこの文體こそ本格的飜譯文學の執るべき文體であるといふことを意識的に公言した。思軒の語はこの點を參酌したものである。然し有體にいつて此の書自身の周密文體は成功したものではない。周密文體の大成には、思軒自身乃至二葉亭四迷の出現を俟たなければならなかつた。

十八年に出た飜譯小說中別の意味で重視すべきは坪內逍遙の『慨世士傳』である。これもリツトン卿の作『リエンジ』を譯したものであるが、才人が佳人の助けを得て偉業を成すといふ內容と當時先生の得意とした馬琴調の文章もさることながら、序の小說論は『小說神髓』の根幹をなすものとして貴重な文献である。なほ卷中の女主人公那以那(ナイナ)姫の性格は識者の注意を惹き、模倣した人も出た(須

藤南翠『照日葵』の女主人公糸萩姫の如き)。なほこの書にも『繋思談』にも政治小說的分子が可成り認められるが時代の反映である。

坪內逍遙は此の年更に『ハムレット（第一幕のみ）を飜譯してゐる（「中央學術雜誌」所載）。『新編黃昏日記』は飜案であるが、原作が少デュマの『椿姬』であるところが珍しい。但し悲劇が目出度しで終つてゐるところは日本式らしい。著者醒々居士と署名してゐるのは、有名な小宮山桂介氏である。

『人七癖』、（森澄德聽譯ユージエーヌ・シュウ『人間の七大罪』）、『地底旅行』（三木愛花、高須治輔合譯、ジュール・ヴェルヌ原著）、『壽其德奇談』（橫山鉒呂久譯、スコット『祖父物語』）は同年譯刊の主なものである。

八

十九年に入ると、飜譯文學の數が俄然殖ゑるので、文字通りそのうちの主要なものにのみ就いて語らざるを得ない。先づ沙翁物から語つて行くと、『春情浮世之夢』（河島敬藏譯）、『羅馬盛衰鑑』（小宮山天香、河島　藏共譯）、『西洋歌舞伎種本』（竹內余所次郎譯）、『セキスピヤ物語』（品田太吉譯）、『泰西

奇談』(仁田桂次郎譯)が此の年の刊行であり、第一は『ロミオとジユリエツト』の全譯、第二は『ジユリアス・シーザア』の全譯、第三はラムの物語中『リヤ王』の項だけの紹介、第四は同じくラムの物語中『ハムレツト』、『リヤ王』、『ベロナの二才子』、『マクベス』、『シムベリン』、『ベニスの商人』の六項を抜いたもの、第五は四冊あつて(第一のみ十九年刊)、第一巻冬物語、因果物語(『以尺報尺』)第二巻女房持虎の巻(『じやじや馬馴し』)、第三巻嵐の巻(『テムペスト』)、第四巻智盃物語(『アゼンスのタイモン』)、何れもラムの紹介である。譯者の中、河島敬藏氏(號鶯林)は和歌山の生で、日本人で沙翁全集の譯出を企てた最初の人である。品田氏は新潟縣の人、今日は方面違ひの萬葉研究の篤學者である。仁田桂次郎氏(號叢菊野史)は伊豆仁田の人、慶應義塾に學び『哲學管見』、外數種の著書がある。

此の年の譯刊物にも勿論政治的色彩の伴つてゐるものが多く、『政海之情波』(渡邊治譯)は純然たる政治小説(ビコンスフヒールド『エンヂミオン』)であるが、『世界進歩第二十世紀』(服部撫松譯、佛人ア・ロビダ原著)、『梅蕾餘薫』(牛山鶴堂譯、スコツト『アイヴアンホウ』)、『得廉自由の一箭』(中川霞城譯、ジルレル『テル』)、『朗蘭夫人傳』(春のや朧譯)等にもそれぞれ政治的意識が認められる。此の中『政海之情波』は飜譯文學で速記法によつたものゝ最初か。渡邊氏は水戸の人、慶應出身で後の大阪毎日の功勞者である。原文に即してはゐるが流暢で理解しよい譯文である。『第二十世紀』は創

作小說界にも可成りな影響を與へたものであるが（例へば須藤南翠の『新粧之佳人』等の如き）既に十六年に富田、酒卷二氏の譯で第一編だけは出てゐる。藤山廣忠の譯刊した『社會進歩世界未來記』（二十年）も同じ原作である。

更に政治的色彩のないものに眼を轉ずると、『想夫戀』、『鍛鐵場主』、『北歐血戰餘塵』、『楊牙兒奇獄』等がある。『想夫戀』はボツカチヨの『デカメロン』第五日目の七話（卽ち前掲『群芳綺話』の第四）の意譯で（佛譯による）テオドルといふ少年奴隷が主家の女ヴイオランテと通じ、事露はれて處刑されんとする刹那身分が知れて、ヴイオランテと偕老の契を結ぶことを許されるといふ物語を敷衍したもの、その裝幀とビゴオの挿繪と相俟つて明治飜譯文學中珍書の隨一視されてゐる。菊亭靜校閱重譯者佐野尙となつてゐるが、菊亭靜とは雜著家高瀨眞卿のことだ。なほ菊亭校閱の『デカメロン』物に『鴛鴦奇觀』と『密夫之奇獄』の二篇がある（共に二十年刊）。前者は三日目の第三話（群芳綺話、の第三）、後者は第四日の第十話（『群芳綺話』の第五）である。共に佛譯の重譯たること勿論である。

『鍛鐵場主』は佛人ジヨルジユ・オネーの原作、加藤紫芳譯、『血戰餘塵』は意外にもトルストイ伯の『戰爭と平和』の紹介（初頭のみだが）である。譯者は岡山縣人森體氏、譯文は古いが原語譯らしい。『楊牙兒奇獄』は別に此の年始めて出たものではない、『花月新誌』（明治十年）に最初出たものを纏めたのである。譯者は神田孝平氏、編輯者は成島柳北氏、探偵實話ともいふべきもので讀んで極め

て面白い、これの姉妹篇たる『青騎兵一件』も先年漸く吉野博士によつて發見された（文久初年譯）

二十年に入つて、飜譯文學の數が前年に更に幾倍する。こゝではその一斑を語るとして、古典物から始めにみると、此の年譯刊の古典物は沙翁、ボッカチョ、セルヴアンテスなどがある。卽ち沙翁物では『西洋娘節用』と『誠の鏡』の二部があり、譯者は共に木下新三郎（後赤司氏）で前者は『ロミオとジユリエツト』を小說體の筋書にしたもの、後者は『ペリクリイズ』の紹介である　デカメロン物二篇については前に述べた。セルヴアンテスも佛譯からの重譯で矢張り二篇ある。『谷間之鶯』、『美人の良』がそれで、前者は『ドンキホーテ』中の一挿話、後者も或はさうか。前者は齋藤良恭譯、後者は中村柳塢譯。何れも三木愛花氏の校閱となつてゐる。眞面目な飜譯などといふ代物ではない。

近代物の飜譯は夥しいが、大體これを英（米）國物と大陸物に分けると、英國物には——

『ハロールド』（磯野德三郎譯、リツトン卿原作）

『連理談』（服部撫松譯、リツトン卿原作『ユージエン・アラム』、飜案といふべきもの）

『雙鸞春話』（牛山鶴堂譯、ビコンズフヒールド卿原作『ヘンリエツタ・テムプル』、人情小說）

『妻の嘆』（井上勤譯）、ウイルキイ・コリンズ原作『夫と妻』、最初の部分のみ、政治小說と銘打つてゐるが、問題小說の程度）

『戀慕と嫉妬』（井上勤譯、英國ルシイ・コンフォート女史作）
『一讀三歎』（尾崎行雄譯、マクス・オーレル原著『ジョン・ブル』）
『斷腸花』（宇田川文海譯、院本體、ジェームズ・スタツフォーヅ氏原作『青年學生』とか）
『梨園の曙』（院本集、高橋義雄譯、）第一洋琴調子整（ヘンリ・ジョーンズ作）、第二戀衣乾ぬ間の渚（ジョオジ・ソーン作）、第三ガイ・フオークス地雷火奇譚（ジョオジ・マクフアーレン作）、第四女權擴張情理岐（デイ・イー・ハルマー作）共に口語體を用ゐてゐる點は注意すべきものである。かゝる院本の紹介は演劇改良運動と關連するところがある。

大陸物（主としてフランス）には――

『西洋復讐奇譚』（關直彥譯、ヂユマ原作『モンテ・クリスト』）
『斷蓬奇緣』（初め『勇婦テレーズ』と題して十五年立憲政黨新聞に掲げしもの、小宮山天香譯とあるが、實は河津祐之との共譯、フランス革命時代の一挿話）
『鐵世界』（森田思軒譯述、ジユール・ヴエルヌ原著『ヂ・ベガムス・フオルチユン、』思軒の名を著せる單行本はこれが始め）
『北極旅行』（福田直彥譯、ジユール・ヴエルヌ原著『非常旅行並びにカピタン・ハトラス氏の果敢』）

『奇遇魯國美談』（佛人ドンベイ父子作といふ、原名『ボン・フレール』）『蒙理西物語』（佛人カロー女史原著）、『花情粹話』（伊人ビトリオ・ベルセジオ原著『新ピエモン人』といふものゝ重譯）

以上三部は共に大石高德氏譯である。

その他此の年から郵便報知新聞で報知異聞の一欄を設けて、森田思軒が中心で續々と西洋小説を紹介した。これ等の小説を集めたものに『天外奇緣』（二十年）とか『各國才子寄合演說』（二十一年）とかいふものがある。

『西洋梅曆』（原作佛國物、未詳、森知齋、福田直彥合譯）

『神仙叢話』（グリム童話集、菅桐南居士譯）

概觀するに、十九年から二十年にかけて俄に飜譯文學の殖えたのは、矢張り時代の歐化主義の影響があると思ふ。數に殖た割合に政治的色彩が少なくなつたが、これは政治小説といふものが別途に發展した結果とも見られ、又幾分は文學的意識覺醒（『小說神髓』中心の）の結果とも見られる。時代の改良熱に促がされて小說改良の參考書といふ抱負で試みられたものも多い。だが飜譯動機が敎訓的好奇心的なものがまだ可成り多く、眞面目な內容の物は數ふる程よりない。飜譯の內容は無選擇混沌たるものだが、文體は、本格のものには周密文體に近いものが勢を得、且つ口語體の分子が漸く增加する傾向がある。院本が院本として紹介され始めたのも注意すべきである。

森田思軒が飜譯文學界に擡頭し始めたのは此の年からである。思軒、名は文藏、岡山縣笠岡人、大阪の慶應義塾支塾及び東京慶應義塾に英語を（教師は矢野文雄）、鄕里の興讓館に漢學を（坂田警軒に就いて）學び、十五年上京郵便報知に入つた。十八年から十九年にかけて支那及び歐米に遊び（歐米行は矢野氏の助手として）、此の年から飜譯文學界に進出し始めたのである。爾後十年間（三十年歿）、飜譯家として立ち殊にユーゴーの作物の紹介者として知られた。生時飜譯王とまで持上げられた反對に死後甚しく無視されてゐるが、周密文體の完成者として、又飜譯文學の內容をユーゴー迄高めた功勞者として、歷史的にその貢獻は忘るべきであるまい。

九

明治二十一年の國民之友第二十五、二十七の二號に、『あひゞき』といふロシアの小說が二葉亭四迷の名で揭載された。元來がツルゲーネフの『獵人日記』のうちの一短篇で、當時無心に讀過した所謂大衆に何れだけの感銘を與へたか疑はしいが、此の一短篇こそ、今日から歷史的にいつて明治飜譯文學の主流乃至正調、本格を定めるに最も大きな貢獻をしたのである。これの出現は、ひとり『花柳春話』以後、『繋思談』以後の大きな轉機を劃するばかりでなく、或る意味で明治の飜譯文學を『あひ

びき』以前と以後とに分つても可い位の革新的な聲であつた。勿論當時直接の影響からいへば『花柳春話』などの比ではない、だが『花柳春話』の影響は派手な淺い大味な廣い妥協的なものだが、『あひびき』のそれは地味な、細々とした而かもあくまでも清純な、根本的に革新的なものであり、而かもそれも十年二十年の後に漸く表面化して來たのである。

だが此の『あひゞき』も單に天來的に譯者の頭に湧いたのではない。『あひゞき』のもつ革新的特色は二點に要約出來る、それは形式即ち文體としては言文一致であること、内容としては從來よくある西洋早や學び乃至世道人心云々の實利的動機をもたず、純藝術感興によるものであること、これである。ところで飜譯文學が言文一致と結びつくに至つたのは勿論二葉亭の口火を切つたのによるが、十八九年から二十年の飜譯を調べてみると、何處かに口語體俗語體の分子が多くなつて、言一致と結びつくべき機運は熟して來つゝあつたのである。さて二葉亭の此の頃の譯文は何うか、『あひゞき』をみても『めぐりあひ』(都の花所載)をみても、純然たる逐字譯の周密文體である。事實二葉亭はその飜譯態度に於いて、周密文體の完成者森田思軒に私淑するところがあつたに違ひない。彼の最愛讀書の一に思軒の『探偵ユーベル』があつたのに見ても察せられる。最も此の周密文體を言文一致化するといふことは口では簡單だが實際には大きな技術革命といふべく、これの實現には多大な天才を要することはいふまでもない。たゞ今述べたところによつて、天來的の『あひゞき』の出現も、當時の飜譯文

學に象ふところがあることが知られるであらう。

『あひゞき』が、後來明治大正文壇の第一線に立つた二三の作家（田山花袋、國木田獨歩、島崎藤村など）にとつて一種の「驚異の再生」となり、藝術的天地の開眼となつたことは、文學史上有名なことであるから、こゝには繰返して述べることをしない。

一〇

以上の如く『あひゞき』の一篇はよく明治飜譯文學界の主流の方向、本格の基調を決定した。だがそれは當時としては先驅的意味だけで、『あひゞき』の表示した方向が眞の主流となり本格となるには未だ未だ多くの時日を要した。それは二十一年から以後、鷗外漁史の名が出、不知庵の名が出て飜譯文學界の新明星と輝いた時にさへ、大勢は、依然思軒流の周密文體を中心に、傳統的な意譯抄譯様々な傍流がこれに沿つて流れて行くのを見ても知られる。その例證といふのではないが、次に『あひゞき』以外の二十一年の飜譯文學を瞥見して、最後の略記にうつることにする。

此の年譯刊の飜譯文學書の主なものについていふと、英國物が最も多く、大陸物が少ない、同じ大陸物の中でもフランス物がやゝ少なく、ドイツは幾分多い。

英國物で第一は先づ沙翁物、これは『みなれざを』(わたのとろみ(和田萬吉譯ご)、『鏡花水月』(渡邊治譯。)『幽靈』(井上勤譯)、『豪傑一世鏡』(板倉與太郎譯)の四部、第一は『オールズ・ウエル・ザト・エンヅ・ウエル』第二は『間違ひの喜劇』、第三は『ハムレツト』、第四は『コリオレーナス』の譯であるが、第一と第三が梗概めく外全譯である。

末松謙澄の名で(實は二宮孤松譯)有名な『谷間の姫百合』の出たのも此の年である。ヴアサ・クレーの『ドラ・ソーン』を譯したもの、これが大流行をしたのは文學博士末松謙澄の肩書によるものであらうが、內容も面白いことは面白い。その他の英國物では、『奸雄の末路』(吉田熹六譯、リツトン卿原作『カルデロン』此の書の序文には言文一致反對論がある)。『贋金つかひ』(春のやおぼろ譯、カサリン・グリーン女史著『X・Y・Z』)、『猿の裁判』(井上勤譯、英國グレイ氏原著云々、ダーウインン說の反對論を小說化したもの』)、などがある。

大陸物では、先づ『瞽使者』、森田思軒譯、例の報知異聞の一部、原作はジユール・ヴエルヌ『ミシエル・ストロゴフ』である。逐字譯ではないが思軒の佳譯の一であらう。國民之友に揭げられた『大東號航海日記』(ヴエルヌ作『ヂ・フローチング・シテイ』)、も思軒譯である。『千里風煙』は(チソー、アメロー共著『三逃亡囚人の冒險』、)鈴木天眼譯、シベリヤの政治犯人の逃亡に纒る物語で、筋は面白いのだが、譯が拙い。宮崎夢柳譯『義勇兵』(ガボリオー原著)は愛國小說である。

『奇遇夢物語』、横山峯一譯、原書は『獨逸千一夜物語』といふものから拔いたといつてゐるが、正に『アラビヤンナイツ』のドイツ譯のことであらう。內容から明瞭である。明治飜譯文學の珍書の一となつてゐるがいふに足りない。『妖怪船』はハウフの物語の一篇、高橋禮五郎譯。『旅路の空』もハウフだが、これは『隊商』といふものゝ全譯であるといふ。田中栢城、秋元幻夢共譯、譯文も流麗、內容も面白い。『春雪瑪利御最期（はるのゆきメリーのごさいご）』はシルレルの『マリア・スチユアルト』、署名はないが福地櫻痴の譯筆に成るといふ。矢野龍溪として『志別士商人物語』といふものがある。例の報知異聞の第一篇に當るものであるが、原作者原著とも不明である。

最後に『双兒の邂逅』はラテン文學で喜劇の大家プロータスの作で譯者は相良常雄といふが、末松謙澄の力が與つてあるらしい。よく讀みこなして、如何にも喜劇らしく出來てゐる。

丁度此の二十一年を境界として飜譯文學譯刊の數は漸次減少するが、これは一つは單行本が少なくなつた爲めで、つまり新聞雜誌の發達によるものである。だか何としても皮相的歐化主義の熱が醒めかけて來て、西洋早學び式の杜撰な譯書に飽いた結果もある。旣に新興文學は正に積極的建設の一步を踏み出しつゝあつたので、かゝる啓蒙的紹介、梗概的紹介の大多數が影を潛めて然るべき時が來てゐた。

だが明治の飜譯文學を兎に角こゝまで導いて來た先人の勞力は多大なものであつた。彼等は殆んど

時代から認められず、報ゐられずに、種々な不便を忍び、暗中模索的努力を續けて譯語を工夫し、譯文を試み、漸々と飜譯文學の形式を定め、一方新興文學界と密接させて、それによつて我が國の文學の發達を助ける路をつくつた。個人個人として、又一著一作として見ると、彼等先人の努力は如何にも空寂な言ふに足らぬものゝやうに見えるが、それが集まつて十年の歲月を積み、兎に角明治飜譯文學の基調を固めたのである。これに對して吾等は一片報謝の念を抱くべきではなからうか。

以上で明治飜譯文學の源流を一通り明かにすることが出來たと思ふし、且つ今や紙數も盡くるに垂んとしてゐるから、急いでこの邊で爾後の飜譯文學の略記に移ることにする。

大勢を概括していふと、明治二十一年以後の飜譯文學界には先つ超時代的な古典物の飜譯が少なくなつて、現代乃至極く近代の文學が盛んになる。殊に各種の新聞雜誌の勃興につれて、ジャーナリズム本來の必要上益々此の傾向が強くなる。飜譯文學が、歐米現代文學の紹介を第一にするにつれて、從來あるかなきかの程度にあつた文壇との關係が次第に緊密なものになり、終りは主潮を共にして動くことまでなる。種類からいへば、ロシヤ、フランス、ドイツ等の大陸文學の紹介が次第に多くなり又歡迎もされるが、從來壓倒的だつた英國文學は漸次讀者の興味圏外に去つて行く。これは一つは反動もあるが、英國文學の紹介が次第に所謂英語學者の一手專賣のやうになつたので、極めて無味乾燥

なものとなり、文學的濕ひの甚だ稀薄なものになり、又作品の選擇が當を得なかつた點なども原因となつてゐる。だが概していつて詩と戲曲方面を除くと、ヂツケンズ、サツカレイ以後の英國文學は大陸物に蹴押されて來てゐたのだから、これも自然の勢ひといひ得よう。

今二十一年以後の主要な飜譯文學家とその飜譯中の有名なものを擧げると、大略左の如くであらう

二葉亭四迷――『かた戀』、『浮草』
森　鷗外――『水沫集』、『埋木』、『卽興詩人』
森田　思軒――『探偵ユーベル』、『瞽使者』、『大叛魁』、『懷舊』、『十五少年』
內田不知庵――『鳥留好語』、『罪と罰』、『復活』
原　抱一庵――『聖人歟盜賊歟』
黑岩　涙香――『鐵假面』、『巖窟王』、『噫無情』
若松　賤子――『小公子』
磯野依綠軒――『文明之大破壞』
高安　月郊――『イブセン社會劇』
長田　秋濤――『椿姬』、『王冠』
上田　柳村――『みをつくし』

戸澤　姑射　―『沙翁全集』その他

淺野　憑虛――『クリスマス・カロル』その他

以上の外、高橋五郎、坪內逍遙、平田禿木、戸川秋骨、馬場孤蝶、生田長江、中澤臨川、その他が數へられる。明治飜譯文學も實は二十一年以後が調査研究を必要とすることが多いのであるが、今こゝでは如上の略記に止めて置く。諒察を乞ふ次第である。（昭和七年三月號「日本文學」）

歴史小說研究

一、歴史小說について

〔歴史小說〕明治の歴史小說に一考察を加へることが今私に與へられた義務なのであるが、これに先立つて、そもそも歴史小說とは何ういふものかといふことに簡單な一瞥を割くことは、さまで無益なことでもあるまいと思ふ。

一般常識で歴史小說といふと、歴史といふ言葉が伴なつてゐるせゐか、何か古めかしいものゝやうな印象を與へる。だが文學史上の事實からいへば、謂はゆる歴史小說（Historical Novel）といふものは比較的新しく、卽ち嚴密にいへば十九世紀に入つて顯然と進展させられた文學形式なのである。

此のことは、歴史小說とは何ぞといふことを考へてみると、よく分かる。歴史小說とは何ぞや、私はこゝで『英國小說の進化』の著者、フランシス・ストッダード教授の定義をかりるが、歴史小說とは――

歴史的興味のある環境又は時代を舞臺とした個人生活の記錄、個人的情緒の記錄である。

此の定義によると、歷史小說を構成するには次のことが必要なわけである。（一）歷史的事實に對する概念及び歷史的精神に對する愛着、（二）個人生活の重大さに對して知識と理解をもつこと。ところが此の二つは近代人の心でないともつことの出來ない資質なのである。

此の二つの資質の生成を、今英國文學史上の出來事を例にとつて歷史的に辿つてみよう。

第一については、古代は勿論のこと、中世に於いてさへ、人間の心に此の資質がない。中世はロマンスの時代で歷史の時代ではない。歷史の眞實を讚美する者がないので、歷史の眞實をもとめる衝動は中世の歷史家にはない。從つて歷史的事實に對する概念など中世人にはなかつたといはなければならない。降つて十八世紀に及んで始めて歷史が現はれる。前後にクラレンドン、ロバァトソン、ヒュ ーム、ギボンなどといふ歷史家が輩出したので、世人の心は始めて歷史の眞實に對する概念をもち得るやうになつた。スコットの歷史小說をうけ入れる準備の第一步はこゝに進められたわけである。

第二については、文學上で個人生活の重大さを敎へたものは、所謂小說卽ちノヴェルであるが、小說の近代的所産たることは文學史的知識の初步として誰でも知つてゐる。これは小說そのものゝ性質上さうあらざるを得ないことである。元來小說は情緖のストレッスのもとにある人間生活の經驗の物語である。小說では、單に男性としての男性、女性としての女性に對する興味を要求する。小說の生ずるには、個人の情緖に對する興味の普遍的なことを識るを要する。卽ち若し此の情緖が現實的で強く

して眞實なものであるなら、その生活はテピカル・ライフであり、その描寫對象は全人類の關心するところであるといふ確信を要する。さうして此等の必要條件は何れも皆近代思想の所產である。現に小說の作として先驅に立つリチャードソンの『パメラ』、フヒールヂングの『トム・ジョーンズ』、スタアンの『トリストラム・シャンデイ』、スモーレットの『ハムフリ・クリンカァ』、などの興味の中心は何れも個人の情緒生活である。中世のロマンスでは英雄だけが重視されて、個人は問題にならなかつたが、然し小說になると、個人が身分の如何に論なく平等にその表現描寫に與かることを要求する。これは政治上社會上個人が提出する同じ要求とかはりはない。それは全然近代的の叫びである。

以上の二つの資質の何れも近代的所產であることが、これでわかつたと思ふ。それで此の二つの資質を基礎として成立つ歷史小說なるものが近代まで存在可能でなかつたといふことは、當然のことだと思ふ。

歷史小說といふ文學形式が近代に於いて發展させられた二原因は以上のとほりであるが、此の二つはともに或る意味で外的原因といふことが出來る。これに對して第三の內的原因といふものがある。それは人間本有のロマンチック・デザイアの聲である。

心理的事實は何うであるにせよ、人間の心が事實とか理智とかいふものであまり積壓されるときには、これに對してロマンチックな反動を起す、理想に對するあこがれとでもいはうか、或はウォッ・

ダントンの言葉をかりて驚異の再生とでもいはうか。さて、歴史の眞實は、近代に於いて始めて中世の無稽な神話的ロマンスの存在を不可能ならしめた、だがそれが威勢を振つた反動として人間の心の内面的に潜在するロマンチック・デザイアが反抗を起した、勿論歴史的眞實の洗禮をうけた後だから中世ロマンスをそのまゝでは承知が出來ない、自然、歴史的眞實に基礎したロマンス、卽ち所謂歴史小說を要求するやうになる、そこで大歴史小說家スコットが、理性の時代、歴史的眞實の時代につゞいて出現したことも不思議がないわけである。

〔歴史小說と歴史的事實〕サア・ウォータア・スコットが歴史小說家として世界的に偉大であることは何人も異論のないところであるが、彼でさへ、程度の相違はあるにせよ、批評家研究家から種々の非難を向けられる。その非難の大抵は個個の作、スコットの手法などに關するものであるが、たゞ一つ歴史小說の本質にふれざるを得ないものがある。それはスコツトはその歴史小說に於いて史實か離れたといふことである。

元來歴史小說なる言葉は、或る意味でいへば根本的に矛盾をもつ、歴史といふ言葉は如何程廣汎な範圍を包括させられたにせよ、そもそもその基礎として生活の事實、卽ち現實の過去の記錄を要求する。小說といふ言葉は如何程廣汎な範圍に適用しても假作の物といふにすぎない。そこで歴史小說の史實に對する態度が問題になる。史實に離れすぎたが最後、歴史といふ言葉が無意味になつて了ふ。

史實に卽し過ぎたが最後、小說としては不完全なものになる。畢竟歷史小說家は偉大な藝術的天分があるのでなければ此の問題を見事に解決が出來まい。

スコットは歷史小說も一種の小說たるをもつて本領となす以上は、史實より離れるのが先決問題だと解釋したらしい。離れるとは、史實をして想像の翼を束縛させないことである。『アイヴァンホウ』の緒言のうちに次の文句がある、「興味をそゝるためには主題を現代と同じ環境なり擧措なりに飜譯しなければならぬ」と。スコットは實際この言葉を實行した。彼はよく事件の連絡をかへる。彼の小說のすぢと歷史上の眞の出來事の連絡とは同一でないことが多い。單に方言や年代で史實を外れるのみならず、色彩、空氣、關係その他に於いても眞實の歷史と一致しない。これはスコットが意識してさうしてゐたことで、正確な史實に奴隷的に束縛される必要はスコットの感じなかつところ、且つその方が讀者の爲にも宜しいと思つてさうしたものである。これはスコットの歷史小說の理想からいへば當然すぎる程當然なことである。スコットの理想的歷史小說といふのは、歷史の事實が一の感情、一のプロット、又は一の性格を照明するやうに集中されてゐるもの、である。歷史小說では、歷史的事實が一の繪畫を生ずるやう、或る一點に集中されてゐなければならぬ。歷史は遠心的であり、小說は求心的である、歷史は葡萄の蔓のやうに、直接連絡のない事件をまきこみつゝ自然に生長する、小說は如何にしても技巧的構成物たるを免れない。歷史は自然の生長であり、小說のプロットは技巧的に

建造されたものである。從つて歴史の手法は物語的叙述的ですむが、小說は演劇的乃至ロマンチックたらざるを得ない。そこで歴史と歴史小說の唯一の根本的差違は、形の統一といふことである。著者の創造的想像によつて歴史の出來事から發展させられる統一、又は或る出來事に歸納される統一である。歴史小說にはこれがあり、歴史にはこれがない。

此の統一が歴史小說を歴史から區別する本質的特質だとすれば、歴史小說の史實に對する態度如何は、一にこの點によつて定まるといつて可い。

アレクサンドル・デュマは、史實に對してはスコットよりも更に自由で大膽である。スコットの歴史小說論を徹底的に實行したのは、本人のスコットでなしに却つてデュマであつたかも知れない。〔歴史小說發達の三段階〕以上、スコット、デュマ等の歴史小說に現はれたロマンチック乃至ドラマチック暗示を第一期とすれば、リットンやエベールスの連中が一種の哲理をこめて歴史の再現を試みたのが、第二期それからサッカレイに見える想像的解釋が第三期に相當する。スコット、デュマは言ふ迄もなく歴史が從でロマンスが主、リットン、エベールスは哲學的談理によつてまとめられて小說らしくされた眞の歴史を與へようとする。歴史と小說は手を携へて好伴侶となつてゐる。サッカレイに至つては歴史の意味深い事實に想像的解釋を加へようとする、歴史が主でロマンスが從である。先づ現實の情緒生活を生々としたものにし、同時に理想的のそれを暗示しようとかゝる。

リットンはデュマの先輩だが、歴史小説發展の上からいへば後輩となり、明かに第二期に屬する。彼の作『リエンジ』の序言にみると、彼の歴史小説は、たゞその小說に種々な場面やロマンチックの空氣を與へるために歴史的事實を寄せ集めたのではない。『ボムペイ最後の日』は時代の歴史を再現してそれを個人生活に關聯さして表現しようとするものであり、『リエンジ』は更に進んで靈魂とその環境との爭ひを描く、やゝ内的分子が加はる。總括していへばリットンの小說は、歴史的基礎が正確であり、性格と事件にも調和がとれ、動機と行爲の形式的な記述もあり、問題も提示され、性格解剖もある。第二期の歴史小說家といへば、リットンの外に、エベールス、イリオット、リイドなどであるが、此の人々の手法を概言するとかうなる。(一)現實の狀態を正直に描寫すること、(二)時代の生活を再現すること、(三)一の生活を能ふ限り細く描くこと、(四)歴史の事實に忠實なること(小說としての價値を損じても)是れである。

サッカレイの『ヘンリ・エスモンド』に至つて、歴史小說はその最後の最近代的な段階に達する。これを歴史の想像的解釋といつても宜い。小說發達の原則として、外的、ロマンチック、客觀的なものより内的、現實的、主觀的なものに向ふのが順序である。歴史小說も同樣でデュマ、スコットは外的であり、彼等の小說は外的出來事の小說であるが、リットン、エベールスなどに至つてやゝ内的分子加はり、サッカレイに至つて全く内的となる。サッカレイの歴史小說は靈の出來事の小說である。

スコットとデュマは歴史小說の建設者であり、サッカレイはその完成者であるといつて可い。とにかく歴史小說はサッカレイに於いて最も近代的な、最も發展させられた、最も完全な形式となつたのである。

サッカレイの歴史小說に至つては、最早どの意味でも無責任なロマンスではない。その小說の主人公には良心がある。その小說は地圖をもつて讀むことが出來る。良心が入つて來、地理的寫眞が入つて來、愛と義務の間の葛籐が入つて來、躊躇と疑問とが入つて來た。今日の歴史小說とて、畢竟はリアリズムのロマンスに外ならないが、それが吾等に與へるものは英雄ではなしに人間である。近代流の一種の眞面目さが歴史小說にも強く影響するに至つたのである。

以上は主としてストッダード教授の著『英國小說の進化』の第三章歴史小說といふ項に據つて立論したものであるが、明治の歴史小說を一考する豫備智識として必ずや一讀の勞だけの値打ちはあると思ふ、猶ほ讀者諸君が他日自身で明治歴史小說の論なり史なりを案ぜられるときにも或は幾分の參考となりはすまいか、もつとも分外の望みかも知れぬ。

二、明治歴史小說概觀

歴史小說は、正しい意味では明治文學界の特產物である。明治以前には歴史小說なるものはない、

これは當然のことであらう、上述の如く歴史小説とは何ぞと、歴史小説の性質を考へ、これを構成するに必要な二要素を考へてみると、さもあるべき筈である、歴史の眞實を探求すべき史學の發達も明治に入つてのことであり、所謂ノヴェルの必須條件たる、個人生活の重要さに對する知識と理解がほの見えるやうになるのも、坪内逍遥先生が『小説神髓』を唱へ、『書生氣質』を公にしてから後のことに屬する。

明治の歴史小説の發達には、明治の歴史文學の發達と明治新小説の興起が大に關係をもつてゐる。明治の歴史文學は大體として、田口鼎軒の『日本開化小史』(明治十一年)、藤田茂吉の『文明東漸史』(明治十七年)、島田沼南の『開國始末』(明治二十年)などを先驅とする。これ等の諸著は何れも明治初年から二十年までの間のものであるが、何れも歴史的眞實を世人の心に敎へ、世人をして歴史の事實に對する概念をもたせる基礎として役立つものである。

歴史文學が眞に隆盛を極めるに至つたのは、明治二十二三年以後のことであらう。明治の歴史文學に造詣の深い高須梅溪氏は、その原因を數へて、(一)國粹主義の提唱によつて過去の日本を新しく眺めようとする風潮を生じた事、(二)德富蘇峰の「國民之友」などに、毎號史論史傳類の歴史文學を掲げたことなどにあらうといつてゐる。此の二事は何れも歴史文學の興隆を助けたにちがひない。田口鼎軒の「史海」が發刊されたのも此の頃(明治二十四年)である。この雜誌は、新しい歴史文學の發

達を促す上に大きい貢獻をした。却つて民友社の才人諸氏をさへ動かすところがあつたものであるといふ。

歴史文學の發達は大體右のやうであるが、小說の發達はどうか。事實明治小說史上からいへば、紅葉、露伴が轡を並べて出たのが矢張り此の二十二三年の頃であり、硯友社の勢力の强くなりつゝあつたのも此の頃である。新しい小說の出現はいかに早くとも明治十七八年頃以前には遡りかねよう。明治の歴史小說が、必然的に二十一二年頃から本式に萠芽を出し始めるのも無理がない。以上の歴史文學と新小說の發達興起の跡を見て、その無理の無さが大抵わかると思ふ。たゞ一つ遺憾といへば遺憾なことは、英國の歴史小說はその創建者としてサァ・ウォータア・スコットを有し、フランスは同じくアレクサンドル・デュマを有してゐるが、明治歴史小說界には、これに比肩するやうな創建の功ある歴史小說家が見當らない。從つて大作家がゐないだけにその發展の經路なども英國やフランスなどのやうに目覺ましいものではない。

明治二十一二年頃に歴史小說の萠芽が出始めたとしても、それまでには萠芽を育む力が何か動いてゐたと見るのが當然であるから、明治十年以後史傳史論などの歴史文學の興起しかけた頃から二十年頃までを前期とし、これを明治歴史小說の準備期とする、それにしても約十年前後のこと、何といふ短かい準備期であるか、英國などでは少くとも五十年以上を費してゐる、大なる準備なくば大なる成

績もない、これは當然の理である。かゝる準備期の後にはあはてたやうに萠芽を出した明治の歴史小說が、概していつて萬事小規模な、氣魄の小さい、めざましさのかけたものであつたのは、蓋し止むを得まい。

明治二十一二年以後二十七八年前後までを明治小說發達の第一段階とする。此の期は群作家の割據時代の如きもので、老若それぞれの歴史小說作家が、或は歴史的事實を何等顧慮せず、或は歴史的事實に餘り拘束され過ぎつゝ、自分勝手に好きな作品を提供し合つてゐた時代である。若手では美妙を筆頭に、紅葉、嵯峨の屋、露伴、綠雨、浪六、弦齋、麗水、水蔭などが多少に論なく活動し、老人乃至中老では學海、櫻痴、澁柿、三昧などが、むしろ若手を壓して活動してゐた。當時から見たなら、當時の歴史小說界は、此等老人中老の天下であつたかも知れない。まゝ美妙の或るもの、又は露伴の『ひげ男』のやうな、傑作として後世に殘る資格のあるものもあるが、概して此の人たちの作は、「外的ロマンチック、客觀的」といふ萠芽時代、創建時代の特色を帶びてゐる。

明治二十七八年頃より三十七八年頃までは、大體明治歴史小說發達の第二段階とみてよからう。概していつてさう歴史的事實を無視し、顧慮しない作がなくなり、むしろ正直な時代を描寫し、それに關聯して幼稚ながら個人的情緖生活にも解釋を與へようとした時代である。或る意味で此の期の代表的歴史小說家に塚原澁柿を擧げることが出來る。第一期の作家中歴史小說界に筆を絕つた人が多いが

依然活動してゐる人も少しはある。新手としては先づ樗牛、風葉、その他、靑軒、奴之助、曉花などを數へるが概して歷史小說の作品も作者も第一期より遙に少ない。之は一つは歷史的眞實に對して世人の眼が大分開いたので、さうむざむざと歷史小說だと銘打つて自由な空想に或る小說を發表することが出來なくなつて來たせゐもある。又時代意識が同じ小說界でも他の點（たとへばこれを前にして社會小說、これを後にして自然主義など）に集中され、歷史小說など閑却されてゐた傾向もある。今澁柿の作をもつて此の期を代表させ、これを基調として作風特色を察すれば、外的出來事に興味がかかつてゐる點は免れないが、歷史的事實に對する概念は立派にあり、歷史的精神への愛着も立派に見える、たゞ個人生活の解釋、個人情緒の說明の點で不滿があるのを免れない。概していつてかゝる特色は澁柿本來のもち物であり、これが澁柿をして第一期に轡を並べて馳せた群歷史小說家中に頭角を拔ん出させたものである、これをもつて明治の「外的、ロマンチック、客觀的」歷史小說の大成したものといつてもさう過言ではあるまい。

此の期の末に漱石が數篇の歷史ロマンスを書いてゐるが、歷史小說とまで進展せずにやんだ。

明治四十年前後頃から四十五年迄の一期はそれだけでは一期を成しはせぬが、歷史小說の發達にとつては重大な過渡期である。美妙が著しい進境を示してゐるので假に美妙をもつて代表させる。作としては天外の『伊豆の賴朝』などが傑作として殘るべく、新進作家としては潤一郎氏を注目すべきで

あらう。美妙の歴史小説は此の期に入つて內的の深さを增し、從來彼に缺けてゐた歴史的事實にその作を基礎づけるといふ點も先づ滿足すべきものとなつた　單に基礎づけるに止まらず或る作では、歴史の出來事に對して相應に「想像的解釋」を加へて居り、個人情緒の說明は最も見事に行はれてゐる。大正歴史小說界の先驅として立派なものであると思ふ。かくて明治の歴史小說はつひに最完最全の發達段階にのぼらずに大正歴史小說になるのであるが、これは如何に遺憾としてみても、文學史上の事實であるから何ともし難い。大正歴史小說界に入つて、文壇の長老森鷗外がこの方面に筆をとり始めるや直ちに傑作續出、歴史小說としての最高水準に達し、明治歴史小說の或は到着すべかりし歴史小說の最完最全の發達段階に入つた觀があつた。鷗外と共にこの發達に貢獻した文壇作家としては先づ龍之介氏寛氏などに屈指すべきであらう。露伴氏にも數篇あるが、これは人情的史論として歴史文學としての傑作と見るべく（よしそれが歴史小說以上の興味があるにせよ）歴史小說としてではない別に所謂文壇た超然たる作家に介山氏あり、力量の大、氣魄の雄、文壇人諸家に對して隱然一敵國たる立場にゐる。

三、明治の歴史小說家の印象

一、龍淬。鳴鶴。南翠

歴史小說は嚴密にいへば明治二十年以後に發展した文學形式であることは既に說いた通りであるが、それはそれとして、今二十年以前の文學界にほの見える歴史小說の胚種ともいふべき作物を拾つてみると、目につくものが三四ある。矢野龍溪の『齊武名士經國美談』(明治十六年)藤田鳴鶴の『濟民偉業錄』(明治二十年)須藤南翠の『照日葵』(明治十九年)などがそれである。

此等の作物は所謂政治小說であり。歴史の興味を主眼としたものではない、此の頃歴史文學が政治的興味と切つても切れない連契をもつてゐたやうに、いかに歴史小說的の分子を多分にもつてゐても當時では矢張り政治的理想にあこがれる一種のロマンチシズムを脫することが出來ずにゐる。以上三作のうち、『經國美談』は歴史小說として最も見事な出來榮であり、『濟民偉業錄』はこれにつぐ。『經國美談』は古ギリシヤのテーベ(シイブス)の興隆の顚末を叙したもので、史實に根據すること最も確實であり、篇中に活躍する諸豪傑も九分通りまでは史上實在の人物をそのまゝ描いたのだから全體として甚だ生々と描き分けられてゐる。趣向が正史を潤色したものであり、この點からいへば支那の演義體を新式に行つたものといつて可い、たゞ主眼が經國濟世といふ政治的方面にあるので、イパミノンダスやペロピダスなどの豪傑の個人情緒の說明描寫がやゝともすると概念的に流れ、大きな不滿があるのは止むを得ない。

『濟民偉業錄』は『經國美談』に比して今日讀む人は少からう、此の小說の舞臺は支那である。龍溪

の評語をかりると「事を支那の舊世界に繫け、道を西洋の新社會に取る、篇中の人物議論言語、皆是れ支那史書中の成語にして其精神は悉く西籍に合せざるべからず」云々、これで、此の作が純歴史小說でないことがわかる。舞臺を支那にかり、これに西洋の道を吹き込んで新興日本の政治に何か諷しようとするところがあるのであらう。明の世宗の嘉靖年間姦臣嚴嵩父子が權威を逞しくし、國家の政治が大に亂れた。この時兵部員外郞楊繼盛の子楊雲字は士龍といふ憂國の靑年才子が濟民の大業を志して天下を周遊し同志の友を結んで大事を計るといふ筋である。楊雲が實は日本倭寇の豪傑某の子だつたり、その右腕とたのむ壯士魯英が實は窈窕たる佳人瓊英とわかつて遂に偕老の契を結んだりするところは、傳奇としては面白くはあるが、歴史小說としての立場からすれば、無くもがなである。『慨世悲歌照日葵』は南翠の作中、傑作に屬するものであると思ふが、前一作に較べて見劣りがする、出身が出身だけに讀本式、草双紙式の趣向なり臭味なりがぬけ切らず、作者が時尙を逐ふに敏な人だけに作の中心を貫いて讀者の心をうつ精神氣魄といふものが足らぬ。陸奥の大領名取家の臣大館主稅之介忠良なるものが姦人を斬つて主家を安堵させるといふ筋の、矢張り何か寓意ありげな作である。

二、山田美妙（その一）及び嵯峨の屋氏の歴史小說

山田美妙を歴史小說家と見るとき、彼について語るべきことは却々多い、これを前後二つに分けて

今前期の彼についてだけ簡單に語る。

美妙は或る意味では處女作の時から歷史小說の分子をもつてゐた、抒情的乃至主情的詩的分子も多分にもち合はしてゐたが、歷史小說的分子も相應にあつた。我樂多文庫に載つた處女作『竪琴双紙』はアルフレツド大王の傳を骨子にした歷史小說めいたものであり、處女小說集『夏木立』の約半分は歷史小說であり、その他初期の作でいゝもの、勝れたもの、世評にのぼつたものは皆歷史小說作品である。『武藏野』、『蝴蝶』など例にとつて見るといゝ。

『武藏野』（明治二十年）は今は『夏木立』集の一篇となつてゐる、本來歷史小說などといふ重々しい名でよぶべきではなく、抒情詩的小品ともいふべきものである。足利、新田が關東の山野に血を流しあつたころの武藏野、つまり今の東京のある部分を舞臺にして、當時の空氣なり生活なりを想像的に髣髴させたものである。これといふ筋もなく、取り立てゝいふ程の人物も活動しないが、內に盛られてゐる空氣なり詩味なりが堪らなく可い。歷史小說的小品として傑作である。

『蝴蝶』（明治二十二年）は美妙の名を宣傳するには大に力があつた作であるが、これは、一つは作そのものゝ爲めといふよりも例の裸體畫が入つてゐたからであらう。脚色は壇浦沒落の後日物語で、安德帝のお伴をして落ちたといふ經房卿の書いた古文書により、「一厘一毛も事實を枉げず、」ありのまゝ書いた物である。主人公の蝴蝶は「ことし甫めて十七になつた宮女」である。壇浦沒落の時、主上の

船を追ふつもりで惡者の手に入らうとし、それを逃れて海へ落ちたのが緣で二郎春風といふ戀人とあふ。同棲三年、落ちた安德帝の居所が二人のところに知れる、元々源氏の間者である二郎は源氏に訴へ出ようといふ、蝴蝶は一夜、愛情をしのんで夫を殺す。だがその翌朝帝がお隱れになつたのを聞いて、發心して尼になる。興味の中心が外的の事件の運びではなく、蝴蝶が愛と義理にからまれて我と自らたましひの戰ひを續ける內的葛藤にあるが、これは注目すべき點である。

以上の外に注意すべき作としては、『いちご姬』(明治二十二年)、『丸二つ引新太平記』(同二十四年)『兒菊』(同二十五年)などであらう。

『いちご姬』は、作そのものとしては種々の缺點をもつてゐるが、力作たるを失はぬ。興味の中心が、『蝴蝶』と同じく主として女主人公いちご姬の性格・心理にある點、即ち外的でなしに內的である點は注意して可い。たゞ肝心の興味の中心となるべきいちご姬の性格描寫の筆が今少し深くふれないだけ讀者の心に不滿を與へる。いちご姬といふのはさる堂上公卿の愛女で、中々氣がさの、勤王の心をもつた女性がふとした機會から思ふ人に身を許さんとして思はぬ人に操を失つてから、性格ががらりと一變し、夫婦共々盜賊殺人の惡事を働き、幾人かの男を轉々と弄んだ揚句、流れて田舍侍の妻となり野心に狂氣して死ぬ。舞臺は足利東山時代である。

『丸二つ引新太平記』これは足利尊氏、直義の兄弟を描いた小說で二人の性格に對して同情ある見方

で解釋を下してゐる。尊氏方から見た大塔宮護良親王も一寸首肯されるところがある。作者も一番刀を入れたのであらうが、直義が一番よく描かれてゐる。大塔宮をわざと怒らしてじらしてからかつて、先方から事を仕出かさせようとかゝるところが裏の裏といふ程うがつてある。その代り宮がたゞ正直一途勇猛一點張りの人物となつてゐるのは止むを得まい。これに描かれた尊氏は傳說上の西郷隆盛によく似てゐる。

『兜菊』この作は單行本がないので人に最も讀まれないものだが、未完ながら美妙の作中で重きをなすものである。時代は足利の初期か中期、舞臺は武藏五十皿子近くで、土民上りの美少年金剛次郎が主家横領の大野心から山の內管領に主家を賣るところまでで終つてゐる、此の作も興味の焦點は金剛次郎の心事の變化にある、その奸智の縱横な點にある。然し筋として無理が多い、例へば女裝の次郎が武藏野でひるねして金山主從にあふ、これが發端だが次郎が何の爲めに女裝して野原にひるねしてゐるのかわからない類である。

『まことに憂世?』(美妙集)なども、此の期の作として一讀すべきものであらう。

美妙の歷史小說は二種あり、『猿面冠者』、『新太平記』、『雪折竹』のやうに實在の人物又は實際の史實に基いて巧みにこれを敷衍し鋪張して一種の新解釋新批評を加へようとするものと『武藏野』、『いちご姫』、『まことに憂き世?』、『兜菊』などのやうに、實際の人物事蹟ではないが當時の時勢に孕ま

されて然るべき想像上の上の人物をうみ出して、上手にこれを活動させるものとである。概して抒情心、主情的傾向が多く、歴史的眞實に對する概念はさまで確乎とはしてゐないが、個人性格の尊重はある。外的興味もなくはないが、內的興味に力を入れて外的の方をこれに從はしめてゐる。これが特色である。

美妙と同じ主情的傾向をもつ歷史小說を書いた人に矢崎嵯峨の屋主人がゐる。嵯峨の屋主人も始めは『阪東武者』(明治二十四年)、『黃八幡』(同二十五年)などのやうな史實によつた作を見せてゐたがだんだん進んで『中世武士』(同三十年)、『一劍有響落花村』(同年)などになると全然史實も何も無視した抒情的詠歎的作品になり、『關東男兒』(同三十年)に至つて眞物の詩になつてゐる。美妙の主情的傾向を徹底さしたやうな感じのするのが嵯峨の屋氏の歷史小說である。『中世武士』をとつて讀むとその調子がよく分かる。活動する人物に何れも名がない、例へばわれといふ武士が功名を求めて天下に遊ぶ、偶然或る野で何處かの兩軍の戰つてゐるのをみる、一方を助けて敵を破る。恩賞をもらふ。だが、敵將の姬と戀仲になり、浮世の無常を感じて何處ともなく去つてしまふといふ風なものである。

三。紅葉。露伴。綠雨

美妙といへばすぐ紅葉が聯想されるが、その才識乃至成功の度の如何はとにかく、歷史小說といふ

點からいへば、紅葉は美妙の遙か下風に立つ。

出世作『色懺悔』（明治二十二年）は時代物ではあるが、歴史的興味など全然ない、抒情詩ではあるかも知れないが歴史小說ではない。

『鬪東五郞』（明治二十二年）の方がこれにくらべるといくらか歷史小說めく感じがする、然し此の一篇では紅葉の歷史小說の手腕の優秀を立證することになりかねる。

露伴はこれと反對に、少數だが美妙に拮抗してさまで遜色のない（或る點では凌ぐ）だけの歷史小說の作がある。代表として『奇男兒』（明治二十二年）、『雪紛々』（同年）、『ひげ男』（同二十三年）などを擧げる、そのうち『雪紛々』は堀內新泉との合作になるものだからこれは暫らくのぞいて、他の二篇について簡單に語つてみる

『奇男兒』とは問題の烈士村上喜劍のことである。此の作には別に歷史的眞實の考證めいたところなどない、たゞ傳說通りの喜劍を寫したまでであるが、全篇に漲つた作者の氣魄の烈しさが讀む者の心をうつて名狀し難い感激を覺えさせる。就中京都の茶店で大石內藏助に酒の飲み方を敎へるところなど、讀んで骨が動くやうな氣がする、元々喜劍をかりて作者の理想を寫すのが興味の中心であり、從つて嚴密に歷史小說の資格をたゞし始めると果して何うかは知れないが、『奇男兒』あたりになると、もう問題を超越した理想的歷史小說として立派に通ると思ふ。

『ひげ男』、これは讀んだ人たちも多いと思ふが、武田勝頼の長篠出征を背景にして甲州方の笠井大六郎高英なるひげ男のことを書いたものである。現に流布してゐる『ひげ男』は後に書きかへたものだといふが、何れにせよ、明治歷史小說の傑作の一たるを失はない。長篠戰の日、勝頼方の諸老臣が訣別の水酒盃をする場面、酒井忠次が信長家康兩將の前で蝦すくひの舞をまふ場面、捕虜となりし笠井大六が自ら手にかけた柳小太郎の姉の玉枝に述懷の場面、皆歷史小說として上乘でないものはない。主人公笠井大六の言動をかりて作者が述べる理想の烈々とした意氣、これは單なる歷史小說にはのぞめないものである。露伴は直ちに自分の勁烈な心念を作中の人物にうち込み、作中の人物と一體になつて動く。それだけに讀者の心を感動させる力も強い。此の點では美妙の作もかへつて一籌を輸するところがある。

綠雨の歷史小說については、いつか小島德彌氏か誰かが少し論じたことがあるやうに記憶する。その大意は、批評や論難の際の綠雨は惡魔のやうに强いが、歷史小說によつて見た綠雨は神のやうに弱いといふにあつたらしい。綠雨の歷史小說の代表作ともいふべきは『見切物』の中の『弓矢神』（明治二十七年）であらう。これは何れの時代ともわからないが、玉田左衞門の殘黨落雀五郎安方が故主の姫を奉じて仇の眞間入道を打たんと計り、事成らずして自殺するといふ悲慘な物語である。各人の個性も想應よくかけてゐるがたゞ最大缺點は背景として何等歷史的眞實の概念が與へられないので、出

る人物が、皆何やら皆空を蹈んでゐるやうに思はれる。そして全篇些の明るさもない、暗い淋しい物語である。

四、學　海。三　昧。

學海の小說は歷史小說に終始したものといはれ、當人もさう考へてゐたらしいが、彼の小說の大半が果して眞正の歷史小說といへるか何うか疑ひなきを得ない。私の考へるによると、彼の數ある作中僅に歷史小說と目されて可さそうなるものは『竹間善文』(明治二十二年)、『征西將軍』(同二十三年)〔楠木』(同年)などの數篇に過ぎない。

『竹間善文』は鎌倉管領持氏に仕へた武士竹間善文の自敍傳物語體に綴つたもので、學海としては確にその乏しい想像力を傾けて作つたのであらう。此の人特有の木屑をかむやうな、情感もない描寫や記述が少くはないが、優に一讀は出來る。『征西將軍』は後醍醐帝の皇子征將軍懷良親王のことを叙したもので、未完である、恐らく學海の小說中で一番の大作物かも知れない。引證該博、舞臺も相應ひろく取つてあるが、何しろ個人情緒など些もないので普通の讀者なら幾頁讀まないうちに參つてしまふ。そこへ行くと流石に『楠木』は短くて割合に筋に變化もあり、少しだが個人情緒もあり、人物の個性なども幾分描かれてゐるので、彼の作中で先づ第一に歷史小說らしい感じがする作である。

學海に似て違ふ人に宮崎三昧道人がゐる。漢學に達し漢詩を作る點は似てゐるが、三昧は小說家的分子がより多く、世話物の作品も少くない。三昧の方が文章もつやがある。三昧の歷史小說は、『松花錄』（明治二十二年）、『塙團右衞門』（同二十六年）で代表させても可い。

『松花錄』は當時として文章に新味があるが、筋は平凡、權臣の子が浪人武士の娘を取らうとする、壯士が義に勇んでそれを助けて恨をかふ。とゞのつまり、浪人父子は山谷に跡を埋める、壯士も浮世を捨てゝ同じ庵に入る、權臣父子は惡業重つて主家を退轉するといふ物語。時代は足利の初期、鎌倉管領基氏の頃である。明石淸虛齋といふ老武人は割によく描かれてゐるが、總體が筋の上の興味だから、人物も機械的に動かされてゐるのを免かれぬ。

その代り『塙團右衞門』の方は、所謂性格描寫の歷史小說として明治歷史小說界の傑作の一つであると思ふ。歷史上に名高い拗物の團右衞門の性格を寫して神に入つたものである。勿論誇張もある、鉾文もある、理想化もあるが、何といつても時代の精華ともいふべき、一徹の武士氣質が讀んで行くうちに心をわくわく躍らせる。浪人せぬ頃の團右衞門、浪人後の彼、石田三成の首を盜まうとかゝるところ、乞食の生活に入つてからの義俠、猛將變つて禪僧の鐵牛となること、例の一鞭遲到の偈、彼に子を託す遊女左近のことなど、數へ立てゝ胸のすつとすかない場面は一つもない。又副人物ともいふべき男女も僧俗も好漢子ばかり好女子ばかり、勿論歷史小說としては幾らも缺點はあるが、團右衞

門の性格描寫がすば拔けて快いので、他を忘れてしまふ。持つて生れた意地骨を立てゝたてゝたてぬいた拗物の一生は、浮彫のやうにくつきりと描き出されてゐる。

五、櫻　痴。漣　柿。

櫻痴は漣柿の師匠株であるが、櫻痴にも歷史小說と目すべき作は澤山ある。だが概していつて、櫻痴の歷史小說は櫻痴の史論に比べて半分も面白くない。學海の歷史小說を更に面白くなくしたやうなのが櫻痴の歷史小說である(但し彼の史劇物には一切ふれてゐるのではない、豫め斷つて置く)。

櫻痴の文章は實に隙間のない老練な文章であり、史實の方の詮議も實によく行きとゞいてゐる、だがその歷史小說の書き方は全然歷史の書き方で小說の書き方ではない。種々な描寫がたゞ拙劣平凡な筋につながれてゐるだけで、或る中心に一つのまとまつた繪畫をなすやうなことはない。この散亂體の缺點は彼が力を入れたらしい『天竺德兵衞』(明治二十五年)、『練絹新三郎』(同年)、『水野閣老』(同二十八年)などの何れを見ても伺はれる、此の統一のないのが、歷史小說としての根本的致命的缺點である。老熟な筆にも掩せない。晚年の『元寇物語』、『鎭西對外談』は大作だといひ得やう。

漣柿は歷史小說家として終始したので好い作品も澤山あり、批評家によると明治の歷史小說が彼によつて絕頂に達したといはれてゐる。或る意味では絕頂に達したといふのも溢美でもあるまい、それ

は外的出來事の描寫を趣向とする歴史小說としては、明治の文壇で澁柿の上を越す作家は一寸ないからである。

澁柿の作で注目すべき作品は、『山中源左衞門』(明治二十七年)、『北條早雲』(同二十八年)、『由井正雪』(同三十年)、『大鳥逸平』(同三十一年)、『金忠輔』(同三十三年)、『俠足袋』(同三十五年)、『天草一揆』(同三十九年)、『不老術』(同四十一年)、『水戶光圀』(同四十一年)、『水野越前守』(同四十一年)などであらう。澤山の作品であるから選擇に遺漏もあらうが、こゝでは、以上のうち四五について簡單にのべてみる。

『北條早雲』では、從來姦雄一點張りで見られてゐる早雲を人間的に新しい見方で見ようとしたものである。作者の同情のせゐか知れぬが、此の小說では早雲が如何にも濕ひのある、情のある人格に描かれてゐる。作者の目的は或る點まで達成されてゐるといへやう。

『俠足袋』はお關といふ深川の俠妓のことを書いたもので、足の小指が一本ないので、夏冬白足袋を離さなかつたといふところから此の小說の題名が出る。小說としていへば、澁柿の諸作中での白眉であらうと思ふ。お家騷動に捕物小說の味がからみ、それに義俠勇烈の意氣がこもつてゐる。美濃の八幡の金森家の騷動が話の中心であるが、出て來る人物相互の關係がこれ程入り組んでゐる小說は他にはあるまい。先づ俠足袋のお關は美濃の金森領の相生村名主與次兵衞の娘で俠僧澤禪に助けられて江戶

に出、澤禪の妹の深川藝妓お夏の家から藝妓に出る、それに對して親の仇百姓の仇たる郡代萱木五郎兵衛が惚れる、最も老爺だけに汚い惚れ方だ、お鬮は此の老爺のために足の指を切られるのである。澤禪の妹の藝妓お夏は惡人と知らず金森家の成上り用人黑部市郎右衛門を旦那にしてゐる、だがお鬮の身上を知り、兄から黑部の惡事を聞いてお鬮の方に同情を表する。お夏はその爲めに金森家の下屋敷である黑部の妹で金森家の妾お照に殺される、惡寺社奉行恩田長門守はお照と私通してゐるので金森家をかばふ。黑部の手先の目明三吉はお鬮に戀してゐる、それで改心して百姓方の同情者になる、澤禪に率ゐられた一隊は八幡の金森家の居城を燒き拂ふ、又お鬮の叔父杉本左近に率ゐられた義徒の一隊は老中酒井侯に直訴する。酒井侯と旗下の水野十兵衛忠英（澤禪の舊主）が百姓方の同情者として影に動く。一方野犬が銜へ出したお夏の片腕に市（市郎右衛門）の入墨があることなどの證據から流石の惡人共も罪に伏して、大騷動が納まる。これにあれがからみ、それがこれに絡むといふ風にして重々層々として事件が大團圓に近づく息もつけない面白さである。

『不老術』は『新粧法』と侯つて完結する作で、淀君の心事をうかがつたものとして一寸面白い。筋は、顏に皺の見え始めた淀君はそれを心配して叡山の僧豪澤に不老の法を修させた上、豪澤を西班牙にやつて新化粧法用の白粉をもつて來さすといふだけだが、それを望む淀殿の心事を織田家恢復の大

賭博にしたのは、淀君の性格上或はさうもあらうかと思はれる解釋である。『淀殿』（明治三十八年）の長篇よりも、此の短篇の方に棄て難い味がある。

『天草一揆』はひとり澁柿の歴史小說といはず、明治歴史小說中の最大收穫の一つである。先年ロシヤのヨッフェが東京に滯在中此の小說を手に入れたいといつて新聞廣告迄した事は未だ知る人の記憶には新なものであらう。此の小說では天草一揆の大將天草四郎と由井正雪との連絡を肯定し、四郎をキリスト教徒で非凡の英雄と見てゐる、正雪が謀反人の首領にするために薩摩へ下つて豐臣秀頼の行方を深すなども面白い。發端は肥後の日奈久で正雪と四郎との出會、四郎はお時といふ馬子娘に化けてゐる。正雪は八代の四郎の姉の家に一泊して四郎と密議する。この密謀の結果は舞臺は尾州名古屋に飛ぶ、尾州家君臣間の內偵に來たのである。大若衆にかへつた四郎は物頭淺川主膳の娘を助けた事から、尾州侯の目通りで惡劍士淵上逸角との試合となる。四郎の勝がもとで淺川家に禍ひがかゝり、主膳は暗擊になり、子息恭之進、娘お綾は四郎の附添で仇討に出る（お綾は四郎に戀してゐるのだ）。仇の淵上は江戶に出て島原の松倉家に奉公する、一夜恭之進一行淵上の隱家に踏み込んで四郎の後援で仇をうつ、だが相手が松倉家の家來になつてゐるので、問題は紛糾し、四郎は松倉家に禁錮の身となる。松倉の家老大館權之助大望あり、主の愛妾お紺と通じ主家を横領しようと計る。權之助は四郎と正雪を此の仲間に入れようとする。正雪と四郎はそれに入つた如く見せて松倉家の亂政を利用しよ

うとする。此の間お紺が四郎に戀して殿の怒りを買ふ一幕、四郎が踏繪を踏まされんとする一幕などあつて、さて一揆の導火線の島原領百姓騷動が始まる。これに信仰壓迫問題がからんで愈々旗揚となるのだが、大將とすべき四郎の居所が不明である、それで四郎の姉のお竹が四郎を探しに出る。お竹がふとしたことから松倉の屋敷に四郎のゐることを聞き、四郎を助けようとして松倉の屋敷に入り、危く松倉の妾にされるところを正雪その他の力で救はれる。かうして四郎は本國に歸つて一揆の大將になる。これ以後は在來の天草物語と大同小異であるが、たゞ違ふのは正雪が天草方として城の内外で大働きをすることである。長崎へ行つて、ポルトガル人を口說いて城方に味方させようとしたり、城中人々に說いて無謀の籠城はやめさせようとしたりする。最後は宗旨弘通のため四郎お綾その他が落ちのび、お紺が身代りになつて死ぬ、明末臺灣に據つた鄭氏を四郎の後身であるらしく暗示してある點も、史實の問題を離れると、小說の趣向として興味ある見方かと思ふ。

澁柿はもと武士であり、從つて武士魂といふものが最後まで殘つてゐる。從つて武士道や武士の意氣地などにからむ所謂拗物の性格を解剖描寫するのを喜んでゐる。が、たゞその解剖が聊か皮相的であり、道義的見方一點張りからのみするところが單調に流れて讀者をあきさせることがある。然し史實の詮索も比較的好くやり、歷史的精神を愛着する心も强く、想像的解釋も多少あり、此の點では歷史小說家としての資格を十分備へてゐる。然し作品一體に古風といふ趣きがあるのは爭はれない。澁

柿の歴史小説の理想は、「要するに古文書や歴史は信憑するに足らぬ、歴史小説は自分の批評眼で勝手に歴史を解剖し利用し、創造したがよい」と云ふにある（本講座第十卷千葉龜雄氏『新聞小説研究』一五頁參照）、確に澁柿は此の理論を十分實行したのである。

六、弦齋。浪六。麗水。水蔭。任天。

紙數の制限上、この六家を一括して述べることにする、六家何れも歴史小説家としては特記する價値のある人々であらうが、止むを得ない、時の不祥と諦めていたゞく。

村井弦齋の歴史小説を代表すべき作品は『櫻の御所』（明治二十七年）と『沖の小島』（同二十九年）であらう。『櫻の御所』は相州三浦の豪族三浦家が北條早雲に滅亡される悲劇の物語であり、好丈夫荒次郎義意と敵方の勇婦小櫻姫との組み合せが、その悲劇的效果をいやが上にも強める。これは私なども少年時代に同情の涙をもつて讀んだものであるが、今日でも相當に讀める、たゞ全篇センチメンタルな調子の濃過ぎるのは、歴史小説としては何ういふものかと思ふ、然し落城の物語だからこれでいいかも知れない。

『沖の小島』は明治歴史小説中、稀に見る深刻なもので、主と戀中の家臣の娘が主と不仲の（同じ家臣）大將に嫁する、主は此の戀を諦らめかねてその女房の許を訪ふ、それを大將は嫉妬して、つひに

主と大將との双傷となり、大將は殺される、女房は自分の身からかういふ悲劇が出たのを嘆じて、自ら主の双に身をすてる。主は無常を感じて國も家も戀ひしたふ女もすてゝ出家する。極めて陰慘なロマンスである。粉本は私が曾つて指摘したが、ルサージュの『ジル・ブラス』のうちの一挿話『致命の結婚』である。

村上浪六の數多い歴史的作品を若したゞ一篇で代表させるとしたら何をとるべきか、いろいろ意見もあらうが、私は『原田甲斐』(明治三十二年)をもつて最なる物の一としたい。此の作には浪六の所謂撥鬢物に見るやうな甚しい誇張や衒氣がなく、何となくしつとりとした落着きがある、歴史的事實の概念の有無はいさゝか問題になるにしても、從來姦物といはれて來た甲斐その人の心事を縱横に描きぬいて、いかにもさもあつたかも知れぬと首肯させる。此の小說に出る原田甲斐は稗史や傳說上の甲斐とは全く違ふ、伊達家の逆賊ではない、伊達家の忠臣の何人よりも優れた大忠臣なのである。ただ自分の才智をもて扱ひ氣味なところがあり、好んで割の惡い役を買つて、伊達兵部を計るための彼の味方と見せるといふ反間苦肉の策をやつたので後世に誤られたといふ見方である。さうなると從來の大忠臣伊達安藝などがまるで木偶棒めいて來るのは仕方がない。今日の研究からすれば伊達騷動の眞相といふものは果して何うか知らぬが、原田甲斐の心事を解釋したものとしては、私はこれ程面白い歴史小說を知らない。

『原田甲斐』の次には、駿河大納言一件を描いた『海賊』(明治二十八年)がいゝ作であると思ふ。

遲塚麗水の歷史小說には『蝦夷大王』(明治二十五年)、『半月城』(同二十七年)その他がある、大抵の評家は『半月城』を代表作とするが、私はむしろ『蝦夷大王』の方が優れた歷史小說であると思ふ。神居古潭の總乙名のきりむかくるが愛儂人の獨立を計り、一度は成功しかけるが、つひに松前侯の討手に破られて立ち腹を切るといふ壯烈な筋の小說である。乙名のきりむかくるもよく書かれてゐるが軍師の陳祿山といふ支那の漂流客人の生活も面白い。また、松前侯を刺して禍ひの根をたゝうと單身館に貢物を持つて行く勇士まきちいん、此の人物の働きは特に見事に描かれてゐる。何れ大半は空想の所產であらうから史實云々の標準からいへば、立派な歷史小說といへるか何うか、たゞ所謂筋の上の興味からいへば麗水の作を代表して餘りある。概して麗水の歷史小說は筋と文章といふ外的の興味の外には取柄が少い。然しその筋も此の『蝦夷大王』以上に出るものは先づない。

水蔭には三十年以前に歷史小說の作が澤山ある。水蔭自身何れをもつて得意の作とするか、それは知らぬが、私の讀んだ限りでいへば、『兜の星影』(明治二十六年)を白眉とすべきであらう。水蔭は硯友社派文人のうちでも、眉山と共に詩人と稱されてゐた作家であり、從つてその小說にも(從つて歷史小說にも)詩趣の豐富なのを特色とする。『兜の星影』もそれがあるからで、大體は筋も人物も平々凡々の物語といつて可い位ゐのものだが、たゞ一つ他の歷史小說作者には如何にしても描けない一場

面がある。それは主人公難波田太郎が敵を逐うて深入りし、入間川の一本柳の青々と枝垂れる下で敵の武者、實は生みの父と戰ひ、敵に組み敷かれて今はの望みを述べるところである。われはあの柳の根方に捨られし棄子故、せめて死骸はあの柳の下に埋め、誠の親といふに會ひし時はわれはこゝに眠ると告げてくれと乞ふ、父はこれを聞いて仰天する、あの一場面は短いものだが、實に畫龍點睛といはうか、此の一語で主人公は紙人形のやうな鎧武者から生きた血のある人間に變る。此の一場面のために『兜の星影』は實に忘れ難い印象を殘すのである。

こゝに意外なのは、明治十年代から二十年代にかけて特殊の風格を文壇に示した田島任天居士が、明治二十七年讀賣新聞の懸賞歷史小說募集を機として二編の佳作を出したことである。懸賞に應じたものは、以心庵の名で成した『不鳴銜』であるが、これは當選作とはならなかつたものゝ、佳作として讀賣紙上に掲げられた。今一つは無署名で同紙上に載つた『在五中將』である。出來榮は後者の方がいゝが、共に藤原全盛時代に於ける勤王の反抗兒を主人公としたもので、後者はいふまでもなく業平朝臣のことを書いたもの、前者は知恩院法親王を寫してある。日淸戰爭の最中の爲め餘り人目を引かなかつたが、弦齋、浪六とは違つて、歷史小說として立派に一風を成してゐた。

此の四家は所謂新聞小說派の歷史小說家である　霞亭が最も現はれ、桃水がこれに次ぎ、他は比較的世間に名を知られてゐないが、勿論その道ではそれ相應の貢獻をしてゐる人達と見るべきである。然し此の四家の作品の小說としての價値は別で、何れも大體は外的出來事をたゞ面白く描寫し、それに機會さへあれば、皮相的道德的敎訓、勸善徵惡の主旨をふくめるといふにとゞまる。いはば德川時代の馬琴、種彥その他の文學觀をそのまゝ繼承して明治の小說壇に現れたといつても過言ではなからう。個々の作品としては例外もあらうが、大體の傾向は此の通りである。

七、霞亭。桃水。繭溪。仰天子

霞亭は世間的にも最も現はれたが、小說家として才分も最も優れてゐたかと思ふ。霞亭の歷史小說としては、私は矢張り『渡邊華山』(明治四十年)が一番すぐれてゐるやうに讀んだ。たゞ華山を理想化し過ぎて、人間としての華山が出てゐないのは、物足りない氣がする、咎をうけて田原に閉居してからの華山の生活や氣分がよく出てゐたと思ふ。

桃水の作中から、私のかつて讀んだ記憶で何か面白いと思つたものを拾つてみれば、『天狗廻狀』(明治四十年)、これは福島の桑折代官所支配の長倉村の義民齋藤彥內のことを綴つたものであるが、老熟の筆がよくたるみなく讀ましたものである。彥內に戀しても家が代官手代なために本望をとげかね、

つひに彦內を呪ふに至る娘の心もちがいぢらしく出てゐた。『胡沙吹く風』は面白い小說といふ點では明治小說界有數の作だが、歷史小說といふ部に入るまいから、今こゝに紹介することは止める。

蘭溪氏とは、明治十六七年の戲作界で押しも押されもせぬ作家であつた柳條亭華彥のことである。氏の作も歷史的作品が澤山あるが、二十年以後のものゝうちで『錢屋五兵衞啼痕錄』(明治二十五年)が力作であらう。他に『女俠客』その其一二相當認むべき作があつたと記憶する。

仰天子の作を讀んだことも十數に上るかも知れないが、『荒木又右衞門』(明治四十三年)、『明智光秀』(同四十四年)などを相當な興味をもつて讀んだことを想ひ出す。『荒木又右衞門』は可成り歷史的眞實に根據して書いてあつたと思ふが、矢張り外的出來事を興味本位に辿つて行くだけに終つてゐたのは惜しい。

八、樗牛。天外。

樗牛と天外を一緖に並べると、人によつて異樣な感じを與へるかも知れない。然しこれは理由がある、それは二人とも所謂歷史小說作家として立つてゐる人ではないが、歷史小說の佳作を一つ宛殘してゐるその點からである。但し樗牛の『瀧口入道』明治二十八年)は甚だ有名なものにされて今でも讀む人(殊に靑年には)が可成りあるだらうと思ふが、天外の『伊豆の賴朝』(同四十五年)に至つて

は明治歴史小說界の傑作の一位を十分占める價値のある作であるに係らず、今日これを口にする人は殆んどない。されぱとして、天外その人は別に何とも思はないかも知れないが、私達からいへば大に遺憾なことである。

『瀧口入道』は歴史小說といふよりは、むしろ歴史に託した抒情詩であらう。公平にいつて此の小說の取柄は文章と詩趣にあるので、性格の描寫など殊に拙、個人的情緒の解釋なども極めて皮相的である。横笛が時頼を嵯峨野に訪ふところは人が愛誦して措かない文句であるが、場景としてはむしろ時頼が深草の里に横笛の死をきくところの方がすぐれてゐる。時頼の心理など今少し深刻な解剖が出來るだらうと思ふが、戀をするにも、無常を悟るにも、維盛に死をすゝむるにも、動機が極めて淺薄である。一言にしていへば、若人の春の夢に似た作である、長所も短所もこゝにある。

『伊豆の賴朝』は、賴朝が石橋山の旗揚の血祭として山木判官を屠るところまで書くつもりであつたらしいが、實際の作では赤澤山の狩くらに河津三郎が横死するところで終つてゐる。賴朝を始め、北條父子、政子姫、河津三郎、佐奈田與一、工藤祐經、何れも單に中世の英雄ではなく、さもあつたらうと思はれるやうにいかにも血の通つてゐる人間、疑ひもあり、煩悶もあり、喜びも怒りも、良心もある人間に書き分けられてをり、土地の風物家屋敷のたゝずまひ、人々の服裝なども、目の前に見る

やうに細かく浮彫のやうに描き出されてゐる、時代の背景、流人としての賴朝の生活、政子との戀、土地の空氣、この小說を讀んでゐると、七百年もその餘も昔のことだとは何うしても思へない。河津三郞は阪東第一の豪傑として描かれてゐるが、而かも正史や稗史に傳はつてゐるやうな匹夫の勇士でなく、十分時勢を看ぬくことの出來る大志ある先驅者となつてゐる。奧州北陸を廻つて平氏に謀反する氣骨のある人物を探した揚句、心を賴朝に歸することになつてゐるが、これは作者の創作に成るにしても、讀んで些の無理を覺えない。北條の長子宗時と佐奈田與一とは早くから義兄弟の如く同心して賴朝に旗揚させる機會をつくらうとしてゐる。その他、宇佐美の平太といひ、誰といひ彼といひ、一體の空氣が賴朝の旗揚を餘儀なくさせるやうになつて來る。そこへ政子との戀であり、山木との憎惡が加はる、如何にも賴朝が起つた心事が明瞭に看取される。一體が歷史小說の筋には無理が多く、時として取つて付けたやうな場合もあるが、『伊豆の賴朝』はたゞ目前賴朝その人の生活を見つゝすらすらと書き流してでもゐるやうに極く自然に發展させられてゐる。

『伊豆の賴朝』は明治歷史小說の恐らく最終の收穫であらうが（四十五年）、然し最大最佳のそれの一つであることは、一讀した人は直にうなづくと思ふ。澁柿などとは又ちがつた世界がある。

九、山田美妙（その二）

美妙の歴史小説の後期の進境を代表する作品としては、長篇では『平重衡』（明治四十三年）、『平清盛』（同四十三年）があり、短篇としては佐々木兄弟を描いた『四郎高綱』（同三十九年）、『二郎經高』（同四十一年）、『三郎盛綱』（同四十二年）、『太郎定綱』（同四十四年）及び『小宰相局』（同四十二年）がある。何れも明治歴史小説中の佳作と目すべきものである。主題に何れも不遇の人、又は不遇時代の人を選んでゐるが、これは自分の境遇から、かゝる人々、かゝる境遇に同情したものであらう。

由來美妙は好んで叙述に現在法の動詞をもちひて、現に眼に見るやうに物語つてゆく、英語にいふヒストリカル・プレゼントである。この戲曲的手法が、美妙の歴史小説の一つの特色でもあり、同時に讀者にそのうつすところを強く印象させる特技でもある。讀者は作者の人物と同時代に合體するからである。後期の諸作では、此の話法が殊に圓熟して來たらしい。

『平重衡』は重衡が一の谷で捕虜になつてから、奈良で斬られるまでのことを書いた小説であるが、四人重衡の心事の變遷を明は明、暗は暗と事細かに辿つたものである。重衡にせよ誰にせよ、他の歴史小説家の書くやうな武士道の化物みた人間ではなしに、矢張り環境や運命と爭ふ靈魂をもつた生きた人間として描かれてゐる。人物では流石に重衡が一番よく出てゐる、男らしく、而かも優美で、誠

に敵方から惜まれるだけの人格はある、最後迄自暴自棄せず平家の運を顧念しつつも大きな運命の手に抗がはず安心の地をもつてゐるところは仲々好い。賴朝は善意だが實際の人物より少し規模が小さく解釋されて、義經や時政は傀儡のやうに見なされてゐる。義經の印象は惡い、するどくて、我儘で横暴で、何ともいへない、眼先のわかる點をのけると義仲と甲乙のない人物に寫されてゐる。忘れ得ない印象を殘す場面としては、重衡と中納言局との別れ、法然房と重衡の對話、鎌倉の狩野介の邸で千手の前と朗詠するところ、奈良での最後など、しみじみと胸に浸み通つて、いつまでも搔き消し難い印象をのこす。背景になる歷史的槪念が今少しくつきり出てゐたら猶よろしいと思ふ。たゞそれだけが足りない。

『平淸盛』は『重衡』程舞臺が大きくない。出世前の高平太淸盛の生活を題材にしたものだが、他日淸盛が橫暴專恣を極めたのを、此の寒微時代に藤原氏その他からうけた虐待や冷遇や壓抑やの反動だとみる見方は成程面白い。今に見ろといふ一念が淸盛を好運の寵兒たらしめるに至ることを、淸盛の心理描寫に中心を於いて語つてゐる。父正盛の死ぬ時に、貧乏な上藤原氏ではないので、殆んど醫師もろくに見舞つてはくれぬ事、又正盛の夫人の藤原氏の虛威張のことが、筋として些の無理もなく工夫されてゐる。人間淸盛が立派に描かれてゐる、此の小說の淸盛を讀むと、同情は起るが、決して正史の淸盛、軍記物の淸盛のやうに憎惡をそゝりはしない。

佐々木兄弟の短篇は、太郎以下四郎に至るまでの佐々木兄弟が、勇武もあり功名もありながら、いつも運命の寵兒となり得ず、何れもさびしい失敗者とし終つてしまふのにいたく同情して、その「追遠の意味」で創作した歴史小説である。『四郎高綱』は、頼朝と北條から眼の上の瘤にされた高綱が、つひに北條などにそゝくられて出家遁世することを書いたもの。『太郎定綱』は、北條も頼朝も直接定綱をどうにも出來ぬところから、その子太郎定重が父の留守中柏阪の遊君の事から（表面は年貢の問題から）延暦寺の僧徒と悶着を起したのを幸ひに定重に切腹させて定綱を抑へることをかいたもの。『二郎經高』は、經高が北條におべつかせぬために、功ありながら貶下されるので、承久の亂に官軍に加つたが、戰ひ破れて死ぬ物語を書いたものである。『三郎盛綱』もほゞ同様な盛綱の不遇を書いたものであるが、これが一番古武士氣質の性格描寫も成功してゐる。何れも主人公の心理描寫性格解剖が興味の中心となつてゐることは他の美妙の歴史小説にも共通の特色である。此等の諸篇に出て來る頼朝は、『重衡』とは變つていかにも奸雄らしい陰險な面影が見える。

『二郎經高』が、一番すぐれた出來のやうに思ふ。殊にこれに出る北條泰時がいゝ、經高に自滅させようとする父と祖父の議に反對して經高を救ふ、こゝが實に美しい一場面である。

『小宰相局』は、越前三位通盛と小宰相局の哀れ深い物語である。然し、歴史小説としては以上の諸作に多少劣るやうに思ふ。通盛討死の場面、小宰相入水など強い印象をのこすが、通盛は吾等とは大

分隔てのある通盛である、重衡や淸盛程吾等と接近してはゐない。たゞ美しいことは美しいロマンスである。

概ね、美妙の後期の諸作や、天外の『伊豆の賴朝』などを讀むと、私は明治の歷史小說が、今や歷史小說として最後の發展段階たる內的描寫、史實への想像的解釋を特色とする第三段階に進みかけてゐたやうに思はれる、それがつひに完全なものを見ずに、大正の歷史小說に入つてしまふのである。美妙は、總體としてみれば、明治文壇の何の邊に位置させていゝ小說家か疑問かも知れないが、畢竟歷史小說家としては澁柿と同等乃至それ以上に立つべき人物なのである。

明治文壇に人多し、歷史小說家と目すべき作家、一顧に値する歷史小說を書いた作家はまだまだ澤山あり今こゝでそれ等の人々、それ等の小說について何事も述べずにやむことは、題目に對して相濟まない氣もするが、もう紙數もいさゝか超過したので、こゝらで止めて置くことにする。(了)

(昭和二年十月、新潮社版「日本文學講座」第十一卷

明治時代の傾向小說

一

明治時代の傾向小說は一言にしていふと、時代傾向に對するインテリゲンチヤの關心を第一線に出した作物だといふことになる。

この關心は明治の時代的發展によつて定限される。明治の時代は封建時代からブルジョアジイ擡頭封建的殘滓たる藩閥との戰ひ、ブルジョアジイ全盛、ブルジョアジイ內部的衝突の發生、プロレタリヤの勃興といふ筋道を辿るのは、誰でもいふことであり、定石の又定石程の常識だが、時代傾向に對するインテリゲンチヤの關心なるものもこの時代的步みによつて定限されるわけである。さうしてプロレタリア勃興といつても、事實はそこまでは行かず、僅にいはゆる前衛思潮の潮來といふ位のところで明治時代は終りとなつてゐる。關心が定限されたといふ、いひ換ると關心の對象が定確にされるといふことで、これを具體的にいふと、それぞれの時代傾向に應じ、明治前半においては政治に關心が集中され、後半においては社會的關心になつて來てゐる、さうしてこの社會的關心が社會問題の發

生と共に社會主義的關心となるところで終つてゐるわけ（明治としては）である。この關心の現れた小說としては、前にしては政治小說、後にしては社會小說乃至社會主義小說がそれに當る。もつともこれを細分すれば、更に幾つかに分けられやう、例へば政治小說といつても、冒險小說、經濟小說、等々となり、社會小說もこれを分けると、家庭小說、宗教小說、敎育小說、戰爭小說等々も含まれることになる。だからこれを細論する場合には勿論簡單に行かないが大體の論としては、政治小說と社會小說で代表さしていゝと思ふ。

二

政治小說について、云へば、丁度この時代——即ち明治十年前後から二十年前後——は藩閥に對する共同戰線を張つてゐる時代であるだけブルジョアジイとインテリゲンチヤが手を握つてともかくも政治的權利の確立に血みどろになつてゐる。それだけに政治小說も初めのうちは、全然ブルジョアジイ支持の主張をもつてゐる。これは當然だ。

ところが二十年頃から漸くブルジョアジイが藩閥に勝つて階級的に勢力を得始めると共にインテリゲンチヤを冷遇し出すのでインテリゲンチヤが、從來味方と思つてゐたブルジョアジイに對して幻滅

を感じ、不平を覺え、憎惡嫉妬をもつといふことになり、ブルジョアジイに對して一種の倫理批評的監視の眼を光らせて來る、これが先づ現れるのは、二十三年以後の政治小說でこの頃の政治小說の大半は暴露小說であり藩閥とブルジョアジイの妥協、ブルジョアジイの横暴に對する暴露と批評を第一にしたものである。勿論初めの頃のブルジョア支持の態度が全然なくなつたのではない（事實ブルジョア自身もまだ全然進步性を失つてゐないので）、これは國家主義となつて當時の政治小說の或る物に痕を留めてゐる。然しこの暴露的政治小說は、社會小說と政治小說のつなぎの役をつとめてゐる點が第一に注目されるべきであらう。

かういふ暴露的政治小說を代表するのは福地櫻痴である。櫻痴は二十年頃までは御用記者として散散たゝかれたが、二十年前後から小說家兼劇作家に轉向し、大に政界暴露の八つ當たり的戲作を發表してゐるのは面白い。櫻痴のかういふ政治小說は當時の政界の表裏に關する知識がないとあまり面白くないものばかりだが、若しこれを知つて讀むと、なか〳〵面白い。

三

日淸戰爭後、産業の大進步と共にブルジョアの隆盛期になるわけであるが、ブルジョアの勢力進展

と共にこの內部的矛盾衝突が漸く表面に出て來、インテリゲンチヤの倫理批評的監視眼も急に光りをます。これが或は時代精神論となり、或は社會文學社會小說の要求となる。さうして技巧的にも小說として立派なものが出て來るだけ傾向小說としても本式的なものになり出すわけである。傾向小說としては主觀的理想化的なものでは效果が少ないので、客觀的リアリスチツクに深みをもてばもつ程傾向小說として立派なものになるのだから、いはゆる政治的小說の如きは、大部分は傾向小說としても實にお粗末なものだが、寫實主義時代に入ると、漸くいさゝか本式の傾向小說となるのが當然の道行であらう

社會小說の代表としては一般に內田魯庵が擧げられるが、その前驅的現象として、例の觀念小說、深刻小說が認められてよくはあるまいか、又或る意味で小杉天外の寫實小說も傾向小說と見られぬことはない。これは社會批評めいたお說教はしてゐないが、淺薄ながらブルジョア階級を現實的に分析解剖をしてゐる點で、傾向的であるといひ得るのがあらう。

日露戰爭も又傾向小說の發展には大きな契機となつてゐる。この前後からいはゆる社會小說に次第に社會主義小說といふ色彩を帶びて來る、さうしてこれがいはゆる自然主義文學の現實暴露思想と併行して生長してゐる點は、文學史硏究家がよろしく一考を拂ふべきところである。

社會主義的小說家としては木下尙江氏の獨り舞臺たるやの觀があるが、舊改進黨の殘黨久松義典が

此の種の小說において先驅をつとめてゐることは、人があまり知らない。久松氏の小說は『東洋會社黨』(三十六年)といふもので、社會主義的思想を藝術的に發表した木下氏の小說とは少々違ひ、國家社會主義の思想を生々しく出したものであり、むしろかゝる思想の宣傳が主といふ明治初期の政治小說めくものであるが、明らかに社會主義的である點で、今研究家が取り上げて然るべき作物である。

四

以上明治の傾向小說は大正時代以後に入つてプロレタリア文學となつて再現するのであるが、それはこゝでは問題外であるとして、たゞ考へなくてはならぬのは傾向小說の傾向的といふことである。こゝではいはゆる意味の傾向小說についてのみ語つたのだが、然し考へてみると古來偉大なるすぐれた文學で傾向的でないものがあらうか。明治文學とて又然りで、明治時代のいゝ小說は皆傾向的要素をもつてゐる。逍遙、二葉亭、紅葉、露伴以下皆然りである。この問題は論じ始めると大きな問題になるから、こゝではヒントだけとし、詳細は他日を期したい。

(九、六、一、朝草、同九、六、四、帝國大學新聞)

伊東忠太博士の

小　説　論

——明治十九年執筆の珍稿本——

一

僕は釣のことは知らない、しかし釣でも大方さうだらうと思ふのだが、古本あさりも永いことやつてゐると一種のミステリアス・センスが出て來て、出かける前から獲物のある日とない日がおぼろげにわかる樣になる。この間、久しぶりで書物展望社主催の白木屋の古書展に出かけて行くときも、かつぐんぢやないが、確にこのセンスがあつた。そこで會場でかゝつた獲物は二つ、曰く成島柳北の書入本『東洋自由の魁』といつて板垣退助傳を小説風にしたものゝ、曰く伊東忠太博士の自筆稿本『小說構成法』だ。

柳北書入本の方は會場で會つた少雨莊老人の懇望で割愛したが、『小說構成法』の方はしつかり握つ

て歸つた。署名もあり、印も押してあるので大丈夫と思つて買つたのだが、(序文のあとに、明治十九年十一月の日付で伊東忠太と署名があり、更に潛龍、忠多の二印がある)しかし考へてみると工學博士の伊東忠太氏が、いかに明治十九年の昔にせよ、果してこれほど纏まつた本氣な小說論を書いたらうかと多少の疑念が出なくもない。そこで早速伊東博士へ手紙でお伺ひしたところ、詳しいお返事ですべてわかつた。

この小說論、卽ち明治十九年十一日の日付のある『小說構成法』は正しく若い日の伊東博士の書いたものに違ひなかつた。これを書いてから何處へも公けにしたことがなく、多年筐底深く藏してゐたつもりのところ、先年から行方不明になつてゐたのだといふ。さうしてこの書が出來た動機や材料についていろ〳〵面白い事を敎へて下された。

伊東博士がこれを書いたのは、丁度二十歲のときで、第一高等中學の學生であつた(二年生)。元來博士は子供の時からの小說好きで、『弓張月』『八犬傳』等馬琴ものが大好き、やゝ長じてからは『三國志』、『水滸傳』、『西遊記』なども好んで讀んだ。高等中學に入つてから、辯論練習の目的で有志の生徒と講演會やうのものをつくつて隨時皆で感想などを語り合つたが、その折博士は、平常愛讀してゐる小說に關する若干の考察を、多少系統立てゝ何度かに話した、そのまとまつたものが卽ちこの『小說構成法』となつたのだといふ。

材料としては、以上のやうな愛讀書のほかに、理論的基礎づけをするものとして中江兆民譯の『維氏美學』と坪内逍遙の『小說神髓』その他一二を利用した。

何しろ元氣ざかりの學生の會合とて、會每に數十名の來會者があり談論が妙所に至ると、ヒヤ〳〵を盛んにやつた。このヒヤ〳〵連中の一人に、當時一年級だつた大町桂月がゐたといふのは面白い。伊東博士の講演の聽衆は、博士の母校外國語學校ドイツ語學科の出身者が大半であつた。その人達は大抵醫學志願でおよそ文學とか小說などに緣のない人たちばかりであつたが、然し伊東博士のかゝる風變りな小說論に多大の興味を感じたものらしく見うけられた。中には博士を激勵して、是非この小說論を徹底的に大成せよと勸めた人々もあつたといふ。

その頃の若い學生が何故さう文學論小說論に興味をもつたか、これは明治文學史を多少とも知つてゐる人ならすぐわかることだが、やはり當時の小說改良運動の熱がそこまで犯してゐたのだ。坪内先生の『小說神髓』を生んだのもこの改良運動であつたが、歐化主義に刺戟されたはなやかな强い文化改良運動の一部として、小說改良論が至るところで唱へられてゐた。伊東博士の小說論もその記念碑の一つであつたわけだ。

二

ところで肝腎の『小說構成法』の內容はどういふものであるか、それを簡單に述べよう。
これは上下二卷に製本されてゐるが、上之卷には――

緖論
第一部　小說總論
第一編　小說の目的
第二編　小說と畫との關係、付比喩論
が收められ、その第一部がまた次のやうに分けられてゐる。
第三編　小說の範圍
第四編　小說作者に必要なる才性
第五編　小說の組立
下之卷の方は――
第二部　小說構成法

で、これがまた次のやうに小分けされてゐる。

第六編　主　意　論
第七編　脚　色　論
第八編　文　辭　論
第九編　文　法　論
第十編　利　害　論
第十一編　結　　　論

即ち上卷は原理論で、下卷が技術論といふことになる。以上の外に別に「序」があるが、この序がまた快樂論といふもので主として『維氏美學』あたりを骨子として藝術的快美の原理を論じたものである。一寸各編に說明を加へると、緒論といふのがこの書著作當時知識階級の間に大流行となつてゐた改良運動（いはゞ一般文化の再組織運動）の建前から小說改良の必要を述べ、日本の小說と西洋の小說の比較から、彼の小說の學ぶべきこと勸懲主義は小說から去らなければならぬことを說いてある。第一編では藝術と學問の區別から說き起して小說の要は感情を通して人生の眞理を求むるにあると斷じてゐるが、當時としては新しい。第二編はこの書としてはさう大切な部分でもないが、レツシングを引いて詩書の別を說いてあるのも、この頃だけに珍しい。第三編は小說の範圍といふがむしろ小說の分

類を系統立てたもの、第四編は感動力、想像力など八つをあげて小說家の資格を論じたもの、こゝにも『維氏美學』の影響が見える。第五編は第六編以下の總論にあたると見た方がよい。第六編以下第九編までは、實際小說を著作する時の心得を例をあげて說いたもの、大抵『小說神髓』を基礎としてゐるが、所々堂々と坪內先生の說を訂正してゐるところがある。

いづれ機を見て更に詳しい紹介を書くつもりであるから委細はそれに讓るとして、この書の文獻的價値はその著作動機となつた青年學生の小說研究熱の知られる點と、その書の內容が『維氏美學』と『小說神髓』を綜合して（幼稚ながらも）『神髓』の訂正批評を試みてゐる點にある。今後この書は明治文學、殊に文學思想研究家の見逃されぬものとなるであらう。

この書の末尾によるといづれ近々この書中の理論によつて創作を實現して見せたいと斷つてある。事實伊東博士はその後小說を書くやうに勸誘もされ、また書く機會もあつたが、遂に筆をとらずに終つたといふ。大分後になつてから、伊東博士が青年時代に小說家志願で、尾崎紅葉のところに弟子入りしたといふやうなゴシツプが傳はり、若干の試作もあり、なか〳〵隅へ置けぬ腕前だなどといはれたこともあつたが、これは根も葉もないナンセンスものだとのこと。

僕は伊東博士の承諾を得て一通だけ寫しをとり、原本はそのうち元の筐底深く返璧したく考へてゐる。（昭和九年六月二十四日、東京日日）

歳寒窓
文學問答

わが手許に「ある人との問答」と題する手控めける冊子あり。いま貴問に接し、この冊子よりなるべくお答となりさうなるものを拾ひあつめて差しあぐべし。

ある人の曰く「先年若き人々のプロレタリヤ文學など唱へて騒ぎのゝしりける頃は、文學界も元氣がよかりし。それぞれ利もあり弊もあり、功罪褒貶いろ〳〵なれど、要するに文學界に新生氣をふきこみ、近代日本の文學史に一轉機をつくりたるや勿論なり。されど今日のはいかぬ、元氣もなく、理想もなく、光明もなく、希望もなくたゞもうグヅ〳〵、ジメ〳〵として陰氣くさきこと死人の家の如し。作者が迷へば、讀者も迷ふ。迷うて迷ひたる揚句が、その場のがれの空々寂々、たゞお茶をにごしてお座敷をつとむるのみ。思ひきつて男らしくやけくそになる程の意氣地もなし。概して言ふに、今日の文學は戲作也、新らしき戲作也。卽ちテクニック上の新しさに進步性は示せるも、その精神に於て戲作と何等異るなし。かゝることを言へば、アイツは文學が分らぬなどゝ叱られんかなれども、今日文壇の大勢を支配するものはいづれも戲作精神ならざるはなし。」

ある人の曰く「今日の文學は敗北者の文學なり。意氣地なしの文學なり。諸安症の文學なり。偶々讀みごたへのありさうなものを拾ひあげて、讀んでみると大抵は自分が西洋の本に醉ぱらつたいゝわけをくどくどとならべてゐるのみ。今日の文學に最も目立つ分子は病的神經過敏と、半毛唐的文化生活と人間獸性の合理化なり。その合理化の手段として、スポーツと瞬接間が用ひらる。殊に著しき現象は靑春女性が性慾的にアグレシイヴになれる點なり。なかに健全らしいものがあるかと思ふと、徒らに滑稽諧謔を弄するなり。時代、國家、社會に切實なるものゝ如きは一つもなし。却つてさういふものを敬遠してソウつとして置き、なるべくさういふものと緣のないものを書いた方が可いとする心理なり。」

ある人の曰く「誰も彼も口を開けば非常時と言ふ。非常時といふことはシヤレや冗談にあらず、國家國民にとりてライフ・アンド・デスのストラグルを意味するなり、少くともさういふストラグルに刻々として進みつゝあることは確なり、然るに今日の文學者は、銀座裏にオツなバーあり、某カフエーに何とか言ふ美人女給あり、何々茶房にうまき菓子あるを知れども、緊迫せる社會狀勢には無關心なるが如し。アパート内の小冒險、シネマに於けるランデブー、サロンの嫻靜に魅力を失ひたる小情事をフレツシユにするための所謂ドライヴ、スポーツ遊戲(と敢ていふ)の爲めのスポーツマンなど、刻々と移り行く國民の運命とは何の關係もなき事柄、何の關心も持たぬ人間を好んでうつし、これが文

學なり、文學はかういふものさ、文學はオツでゲスなどゝ言ふに至る。それ卽ち戯作精神にあらずして何ぞや」。

ある人の曰く「時代の文學に消極積極の兩面あり。然れども文學はその根本に於て理想也。光明也、希望也、熱也、力也。文學は時代を描き、時代を反映し、巧みに時代の眞をうがつ。然し同時に、時代をつくるもの也。現代が陰氣なれば先、陰氣憂鬱なる文學を寫してすむといふものにあらず、よろしく光明赫々たる次の時代をつくるために文學を動かすべき也。この時代をつくる力が忘れられては文學の尊き使命が大半無くなる。眞の文學は宜しくクリエーションたるべし、イミテーションたり、デスクリプションたるに止まるべからず。文學の價値はそのクリエートする力にある也。これがなくば文學にあらず、時代、國家、社會、人類等によき生活、よりよき生活を與へんとする、そこに文學のクリエーションがあるべし。時として文學が科學以上、哲學以上、宗教以上のものにさるゝは、このクリエートする力が最大なれば也。古代の西洋人が文學を神格化したるは、このクリエーションの力を認めたれば也。古代の東洋人も、文學の力については昔からやかましく言ひ、或は經國の大業といひ、貫道の器といひ、或は不朽の事といふ、これ皆文學のクリエーチヴ・パワアに感ずるところありし故なるべし。今日の文學者は、文學文學と頻りに口に唱ふれども、眞の文學の力を知らざる也。文學の力の消極的部分をいぢくりまわして、自ら滿足す。その積極的方面に就いては、これあるを知

らぬか、知りても手に負へぬか、いづれにせよ我闘する事なきが如くす。あたかも精巧な機械を手にしつゝ、これをもてあましてゐる子供の如し。豈遺憾ならずとせんや」。

ある人の曰く「尤も今日の文學中、文學の積極的力を發揮せんとするものも、全然なきにあらず、行動派文學の如き、最近の諷刺文學の要求の如き、皆その現れなるべし。但し力小に、徹底せざる片片たるところあり。これではいかぬ、腰をすゑて大いにやるべし。今日歴史的に明治以來の文學を見るとき、明治初年の素人小説家（政治小説家や飜譯文學者）の方が案外文學の眞の力を感づき居たるが如し。彼等が文學に關係せるは、いづれもその時代、その國民、その社會に Good life を與へんが爲なりし也。從つてテクニックは幼稚なれども、その理想抱負には同情すべきもの多し。この人々も當時の文壇の戲作精神に憤慨して起てる也。然るに春の屋主人の寫實主義を唱へてより以來、これが文學の傳統となり、種々形を變へて以て今日に及ぶ。春の屋主人が寫實を唱へたるは、唱へたるだけの立派なる時代的理由ありて、排斥すべきにあらず、然れどもこの爲に文學が專ら寫實にのみあるかの如き思想を抱かせ、爲に寫實主義と言ふものを傳統化せしめたるは事實なり。寫實といふ事の根本論は別として、これを文學の大勢よりいふ時は、明治以來數十年の文學その十中七八はみなこの傳統による文學なり。これに反抗して理想の光明を描き、文學の積極的力を現はさんとせるものは僅かに一露伴あるのみ。細かく見れば露伴の他猶二三あるべし。然れどもその力の大を以て代表せしむれば

露伴一人にて足るべし。内田魯庵、木下尙江、初期の夏目漱石、武者小路氏の或る作物等この派に屬すべし。これを要するに、今日の文學には、寫實なるものを誤解したる爲に生じたる弊、未だ極めて多し、從つて今日の文學を革新せんとせば、一度先づこの誤れる寫實主義の傳統を粉微塵に叩き壞すべし。そこよりして、新に文學の積極的力に對する理解生ぜん。文學は不死鳥の如きもの也。そも、明治の寫實主義が馬琴流の理想主義に對して起れるものなれば、起倒共に地に依るの流儀にて、今日文學を革新せんとするに當りて馬琴の文學の如きを、新らしき意識と態度とを以て、再檢討するも一案なるべし。」

ある人の曰く「大衆文學は文學なりやいなやなどゝいふ議論あるよし。吾等よりせば如何なるものにもあれ、文學のクリエーチヴ・パワアを發揮せるものならばみな文學なり。たゞ生粹の儘なると、水を混ぜて方便的にしたるものとの區別はあるべし。それは讀者の程度によることとなり。テクニック上の手加減なり。大衆に娯樂を與へ、同時に光明と希望を與へて、彼等の生活をよりよきものたらしむるを得ば、如何なる大衆文學とて文學にあらざらんや。たゞ然し、今日の大衆文學がその理想をバクチウチの生活やサンピンの切つた張つたや、クサつたやうな女の取やり(いはゆる悲戀とか何とか)を描く事に置いてゐるのは、これ又大變なる見當違ひと言ふべし。今日の大衆文學が亡者なりといふ者あり。それは、一つは影法師だけと言ふことか、今一つはアシのないことばかり氣にすればなるべ

し。アシとは何ぞ須らくオの字をつけてよむべし。アシに氣を取られては、理想を行ふことなど出來ぬと知るべし。おれはアシさへあればよいと言ふ人があれば、その人の書く物は、もはや亡者の內臟と知るべし、斷々乎として生きたる文學にあらざる也。」

右の拔書にて見れば、この「ある人」はあまり此頃の文學を讀まぬ人なるが如し。又その考へてゐる事も、別に新しきところ無きが如し。新しいどころか、大分以前ならでは通用せざる如き論多し。平々凡々、陳々腐々とでもやつゝけられさうなもの也。だがその本心を叩けば、時代にふさわしい理想文學、光明文學、希望文學がほしいと言ふに止まるが如し。文中、文學者に對する失禮なる言もいろ〳〵あるも、それは、彼の熱心にめでゝ宜しく恕していたゞきたきもの也。

（昭和十一年五月號「文藝懇話會」）

隨筆探偵小說史稿

一、はしがき

おもしろい題目だから、いつか書いてみよう、と約束したら、それを楯にたうとう生け捕られてしまつた。

隨筆體とはいつても、かういふ歷史物て、得て考證に流れがちだから、讀む方でも肩が張る。その上何うやら場違ひの感じもするし、かたがた三回位で切り上げるつもりだ。その位なら我慢してもらへるだらう。

大正年代以後のことは、森下さんや江戸川さん邊りから詳しい直話でも窺はなくちや書けないし、且つ『日本探偵小說傑作集』の森下さんの序や江戸川さんの「日本の探偵小說」で殆んどその發達史乃至鳥瞰圖といふものがつかめるから（今のところ文獻的にこれ以上書けといつても一寸無理だらう）、私の書く分はまづ明治時代だけに限つて置きたい。

ところで歷史風となると　時間的區劃をつけることは見透しがつけにくい。勿論正式な探偵文學史

なんといふのぢやないから、さう喧ましくいはなくてもいゝが、何とか段落をつけぬことには、書くにも書きやうがないわけだ。それで極く大ざつぱに、探偵文學の主流に多少の變化の見えるどころを切掛けにして三つ、乃至四つに區切ることにしよう。先づ明治二十年前後黒岩涙香の擡頭までが第一期で、探偵前期といふべき時代、二十年頃から二十六年頃まで五六年間が第二期で、涙香全盛時代、從つて飜譯が主となつてゐた時代、二十六七年頃から三十五六年頃の約十年間が第三期で、作家の輩出時代、作家といふ中には譯家も實話者も入れて置く。三十七八年から大正の初へかけてが第四期で沈潜時代、これは多少說明しないと可笑しいと思はれるだらうが、つまり探偵小說なるジャンルそのものからいへば冬眠時代だが、そのジャンルの興味即ち作家の狙ひ處が幾つにも分れ、いろいろな他のジャンルと合體して新しい色調、新いし萠芽をもつに至つた時代といへば、まづわかると思ふ。それからが第五期「新青年」時代で、探偵小說再興時代とでもいふべきものに入る。

何しろ急のことで一々調べてゐる時間がないので、大抵は記憶まかせだから、書きもらしたり、語り忘れたりするものがいろいろあらう。その邊はよろしく。

二、明治二十年頃まで

此の一期は涙香以前といふべき時代で、時間的には長いが、探偵小說の歷史からいへば、一番書くことの少ない時期だ。
だが書くことは少ないが、まるきり無いといふのではない。この時代の讀者は、文學上の一ジャンルと纒つた探偵小說といふものは與へられてゐなかつたが、いろいろなものでその探偵趣味を滿足させてゐた。この頃の讀者だつて探偵文學趣味がなかつたのぢやない、前代から、乃至もつと前からの遺傳物として、いかに低俗なものにせよ、可成り豐富にその趣味をもつてたことは、私が一々證據を擧げて述べ立てるまでもなからう。德川時代のみでも始んど汗牛充棟といふ形容詞を辱かしめない幾百千部の復讐物、寶物探しから『某々政談』お家騷動の類まで多少の探偵趣味を示さゞるはなしといふ有樣だから、推して知るべきだ。(何うして德川時代にかう探偵趣味が發達したかといふことは、探偵小說の本質論に觸れて來るから、こゝでは立ち入らないことにしよう)。それで、兎も角、明治初期の讀者層なるものには、探偵文學趣味が可成り豐富にあつたことゝして、さて、彼等はその探偵文學趣味を何で滿足させてゐたかといふと、先づ二通りの手段があつた。その一は、傳統的なもの、その二は外來物であつた。
傳統的なものといふのは、當時の新聞の續物のことだ。此の頃の續物は、いはゆる新聞小說でなく新聞雜報の潤色したものだが、その雜報に探偵趣味の豐かなものが多かつた。殺人、强盜、謀叛、何

しろ新政府草創の血腥い時代だから、それも當然のことだつた。例へば明治八年假名垣魯文が書いた横濱小僧殺しの事件、十二年に出た高橋お傳などが代表的なものだ。勿論もつともつと澤山あつた。此の時代の文學の一特色となつてゐる毒婦物にして探偵趣味を伴はぬものはない。それから十五年頃から續々と書かれる國事犯暴動の讀物、實に無類に澤山ある。これ等の讀物中には單に珍事異聞として愛讀されたものもあるが、探偵趣味を伴ふものは、一層の興味をもつて讀まれたものだ。毒婦兇漢の傳記が次第に新聞小說に仕組まれて來たのは、一つはかういふ讀者の要求から出てゐるものといつて可い。

今一つの外來物、これは種々あるが、まづ第一は、外國の珍事異聞中探偵趣味の多いものゝ紹介だ。これの代表的なものとしては、成島柳北の「女優馬利比越兒（マリーピエール）の審判」明治十三年朝野新聞、『柳北遺稿』下）や、後（十九年）に『近世米國奇談』として刊行された春陵散史「米國奇談」（明治十四年）などがそれだ。前者は女優が情人の薄情を怒つてこれを殺した顚末、後者は姦通殺人事件の記錄であつたと思ふ。前者は何しろ柳北の名文で書かれた物だから、殊に愛讀された（感激の投書もある）。探偵小說の元祖視されて有名になつてゐる『楊牙兒（ヨンゲル）奇獄』も恐らく最初は、事實探偵譚として愛讀されたものであらう。これは明治十年、柳北の手で「花月新誌」に發表されたので柳北の譯かと思はれたが、事實は神田孝平が文久元年頃オランダの書物（『死刑彙案』と假譯されてゐる）から抄譯したも

のである。原名は『和蘭美政錄』といふので、上下二篇あり、「楊牙兒」はその上、下は「靑騎兵吟味一件」といふものだ。刊本は『楊牙兒奇獄』（十九年刊）しかないが、明治二十四年の「日本之法律」といふ雜誌には、神田譯の原文のまゝ二篇とも載錄されて居り、又近くは「靑騎兵」だけ、昭和六年四月新靑年で神田譯のまゝ紹介されたことがある。二篇何れも極めて面白いものだが、探偵といふ點を主眼とせば、「靑騎兵」の方が傑作である。前者は、旅館の夫婦が共謀してヨンケル・ロデリイキといふ大學生を殺し（大學生が、夫婦が行商人を殺したことに氣づいたので）、巧みに犯跡を穩してゐたが、大學生の殘した演劇脚本から端なく發覺するといふ筋、後者は、退役靑騎兵一族が、近所の寡婦殺しの嫌疑を受け、殆んど刑が確定するが、名探偵の活躍で眞犯人が捕れて、靑騎兵一家は赦される話である。

外來物の第二は、裁判の判例集である。これは前者と違つて興味本位、報道的なものでなく、實際上の必要から譯出されたものであるが、その內容の奇々不可思議な探偵趣味から、まるで讀物同樣に讀まれるに至つたものである。だが、性質が性質だけに、前者程大衆性はなかつたらう。それは明治十四年司法省藏版『情供證據誤判錄』だ（譯者は高橋健三、後に自恃庵主人として官界操觚界に名を馳せた名士。）これは實際裁判に當る人の參考として譯述されたもので、原本は一八三七年米國ボストン刊行“Famous Cases of Circumstantial Evidences”といふものだと斷つてある。敍言の「推測證

據論（エス・エヌ・フヒリツプ）の外に、二十七件の判例が收まつてゐるが、その悉くが疑獄、難獄、怪奇獄ともいふべき、探偵趣味の津々たるものばかりである。例のウェブスター教授バークマン殺害事件の如き（この件も判例中に入つてゐるが）、微妙愼重な探偵、審判を要する事件が、二十七件も收まつてゐるのであるから、讀物としても相當面白いものである。

同種の實話集が、今少し年代が遲れるが、明治二十一年にもう一つ出た『摘陰發微・奇獄』と稱するものがそれだ。これの原書は"Detectives of Europe and America"と題する米國本で、著者はジョオジ・マクウァツテルスといふ、千原伊之吉の譯であるが、假死僞葬から、的證まで二十の犯罪實話が收まつてゐる。『情供證據誤判錄』に比して、文章も優しく、內容も大分小說らしく見せてあるから、たゞ讀んだのみでは、この方が面白いかも知れない。

以上の如きものが、この當時の讀者を滿足させてゐた探偵趣味文學だといつて可い。

三、黑岩淚香の出現

淚香といへば、今日專ら探偵小說家といふことに極め札がついてゐるが、あの世で本人の彼がさうと知つたら、あまり嬉しさうな顏はしないであらう。彼は政治家が理想で、その理想を行ふために先

づ新聞記者となつた。從つて彼は論說記者として大に活躍したもので、論文の方が小說より澤山あり名論も名文も頗る多い。又キビキビした實際運動もやつた。理想團の結成、東京市政の淨化運動、大隈內閣の出現等には、彼の力が目立つて大きかつたものだ。

さういふ淚香が何で小說に關係したかといへば、第一に社會敎訓の方便としてゞあつた。「おれのは新聞大衆相手のストーリイで、文學などゝいふもんぢやない、多勢の俗人に讀ませるんで少數の識者に讀ませるつもりぢやない」、彼はよくかういつてゐた。第二には(第一から演繹されて來ることだが)經世の理想を行ふため文學を利用しようとしたが、當時の文學はいはゆる戲作で、千篇一律、面白くも可笑しくもないものが多く、大衆があくびをかみ殺してばかりゐた。こゝで、西洋にはかうゝふ面白い續物があるぞといふので、目醒ましのつもりで探偵譚を紹介し始めた。勿論、戲作卽ち續物改良といふ考へが多少動いてゐたのであらう。それから、淚香個人としては、經濟的な理由もあつたのだと思ふ。何しろ、論說記者として受ける給料のみでは、極めて微薄な收入で何うにもならなかつたらうからだ。更に、今一つ、當時米國の小說界では、南北戰爭後のダイム・ノベル(十錢小說)の汎濫時代だから、その溢れこぼれのセンセショーナル・ノベルが澤山日本へ入つて來た。貧乏な淚香は英語勉强のつもりでかういふ安本小說を片つぱしから讀破した。この結果探偵小說に興味をもつことになつたのだ、といふ事情も考慮に入れてよい。だが、いくら小說に興味をもつてゐたにしても、以上のや

うなわけで自分では小説家になる心算などなかつたのだから、何か特別な機會がなかつたから「小説家涙香」の出現など見られなかつたらう。ところが、何うしても自分で小説を手がけなくてはならぬ機會が來た。それはかうだ。明治十八九年の頃といふが、彼は一日非常に面白い小説を讀んだので、その筋を知人の戯作者兼新聞續物記者の雜賀柳香（後に廣岡氏）に話して新聞（今日新聞といふ）に載せさせた。ところが、その頃の戯作の書き方には、略ぼ型があり、柳香は、涙香から聞いた話をすつかりその型に入れて書いてしまつたので、折角の面白い筋がまるきり仕様のないものになつてしまつた。そこで涙香は、人手を借りたのでは、何うも面白くいかないと覺つて、自分で筆をとつて書き出した。これが『法廷之美人』だ。これの原作者は英人ヒュー・コンウエイで、『後暗き日』（"Dark Days"）といふものであるといふ。

柳香に筆記させたといふのは、原作は何といふものか、その續物は今日單行本で殘つてゐる、題は『二葉草』といふので、双生兒の兄弟が善玉惡玉となつて活躍する小説だ、誰か博識の人に尋ねたら原本が分るかも知れない。然し柳香著となつてゐるので、涙香に關係あるものだといふことは餘り人に知られてゐないらしい。

ところで此の『法廷之美人』は素晴しく受けた。新奇な讀物に飢ゑた讀者は後を次をと、斷えず催促した。新聞社の方では、この折角の讀物を、さうやみやみと手離すわけがない。涙香は心ならずも

次から次へと探偵小説を譯した。それが又一作毎に當らないものはなかつた。明治二十年頃は、彼は繪入自由新聞にゐたが、當時この新聞は全く涙香の人氣で存在してゐたやうなものであつた。今も見ることが出來るが、日によると、新聞一頁分乃至一頁半が彼の小說で埋まつてゐる、時としては二頁大の附錄まで出してゐる。彼の精力もえらいが、その人氣は恐ろしいものであつた。彼は、その間中斷えず、皆のため、讀者の爲めになればといふことを考へつゞけて筆をとつてゐたらう。

かうして探偵小說の筆を執りつゞけてゐるうちに、當時の文壇には「涙香調」乃至「涙香體」なる新文體が生れ、「探偵小說」なる新ジャンルが生れて來た。二十二三年頃には、その新ジャンルが文壇に確固たる地步をしめ、模倣者がぞろ〳〵と現れ出して。文壇の老大家さへ、急造の探偵小說で人氣を挽回しようとするやうになつた。涙香自身は、こゝに至つて自分がいつの間にか小說家の仲間入りをさせられてゐるのを見て驚いたことであらう。

然し涙香の紹介した小說が何れもこれも當つたのは、むしろ當然といふべきで、彼が明治二十年から、二十五六年まで、普通涙香時代といはれる位の勢力をもつてゐた五六年間に譯した小說は約三十種はあらうが、この三十種の背後には一千數百部といふ犧牲小說があつたといふことを聞くと、いかにもと首肯される。つまり面白いといふ點では、粒選りといつてもいゝ三十種であつたのだ。

かうして面白い小說を粒選りにした彼は、而もこれを譯出するのに、周到な用意を怠らなつた。いか

に面白い小説だからといつて、彼は讀み下しのブツつけ直譯はしなかつた、彼はその譯すべき小說を選定すると、それを更にもう一度丁寧に讀み直した。それから文中抄譯すべきところと逐字譯でいゝところを區別した。その上で、これを新聞小說風に回數に割りつけた、それから、每日早曉、その日譯述すべき部分を讀み直して、頭の中ですつかり筋を立てゝ置いて、原本を全く離れて筆を取つた。時には一部の小說で興味の足りない時には、他の小說から借りて來さへした。だから讀者は、涙香の面白いと思つた小說のうち、その「面白い」といふエッセンスだけ味はされることになる。これで受けなければ、ウソだ。涙香はよくかういつた、「おれ程飜譯に苦勞すりや、創作だつていゝものが出來るサ。」全くその通りだらう。

私はいつか涙香の著作譯年表をつくつたことがあり、それを舊刊の『隨筆明治文學』（春秋社發行）中に出して置いたから彼の小說の目錄はこゝでは擧げないことにする。

涙香の出現した明治十八、九年から二十年頃は、一般に文學改良論の叫ばれた時であつた。さうしてそのモデルは皆西洋小說であつた。涙香の出現も、今日文學史的に見ると、矢張りこの大きな文學改良運動の波から出て來たやうに思はれる。

兎もかく彼の出現によつて、明治の文學史には「探偵文學」なる新ジャンルが加へられることになつたのだ。

涙香の話をもちつとつゞけて、それから他にうつることにしよう。

四、涙香の創作小説『無慘』について

前回の終りに涙香について今少し話したいといつたが、それは涙香の創作小説『無慘』についてのことだ。涙香の晩年に『今世の奇蹟』といふ創作があることは比較的よく知られてゐるが、この小説は一種變態の諷刺小説といふべきもので、探偵小説家としての半生の盛名を恣まゝにした涙香にふさはしい創作ではない。そこへ行くと此の『無慘』は、割合に人が知らぬが、いかにも涙香らしい本格の探偵小説である。恐らく本格の探偵小説らしい探偵小説の創作は、此の『無慘』をもつて嚆矢とするといつてもよいかも知れない。そこで、此の作だけ一寸特別に取り上げて紹介して置きたいと思ふのだ。

『無慘』は、最初二十二年九月、例の小説館の定期刊行物「小說叢」といふものゝ第一編に收まつて公にされたもので（右田寅彥氏作『平家姬小松』といふ院本風の小說と合册になつてゐる）、「新案の小說」云々とある。二十三年二月單行、二十六年十月『三筋の髮』と題して再版が出た。

涙香の凡例がついてゐるが、それが一寸面白い、——

此一篇、文には艶もなく味も無し、趣向には波も無く風も無し、小説は美術なりとやら云はるゝ方方は一目視て唾して捨らる可し、自ら小説と云ふは鳴滸がまし、小説には非ず記事なり、記事も事實を寫したる記事にはあらで心に浮ぶ想像を書き表はしたるまでの記事なり、云々

一寸讀むといかにも謙遜らしく聞えるが、ソンナことはない、あべこべに所謂文壇派の純文學小説を愚弄してゐるのだ。だがこれで見ると、この小説は涙香の純然たる創作たることが明白だ。今日からいへば、そこが探偵小説として却つて貴重なところだと思はれる。涙香は言葉をつゞけてかういつてゐる。――

余は或小説家に添削を依頼したれど共人苦笑ひしてこは小説家の添削す可きものに非ず、宜しく論理學者にでも校正を頼むべしとて突返されたり、爾すれば小説家の目には小説とは見へぬ者と見へたり、去ればとて之を論理家に見するも論理書とは見てくれまじ、論理書と云はゞ云へ、小說と思はゞ思へ、唯だ見る人の評に任するのみ。云々

これだつて恐らく眞實のことをいつてゐるのではあるまい、勿論素人作家の處女作を辯護する氣持

は幾らかはあるにちがひなからうが、そればかりではない、文壇小説に對して敢て異を樹てゝ一風變つた「探偵小説」なるものを作り出す意氣込をヒヤかし半分に述べ立てゝゐるのだと見る外はない。

作の內容は、上、中、下の三篇に分れ、上篇は（疑問）と題して事件の顚末から、これに對する疑問の數々、中篇は（忖度）と題して、證據品によつて事件の經過から犯人や犯罪の性質を細密に推理する、凡例で論理書云々とふざけたのは、この推理の條が長々と物語られてゐるからだ。下篇は（氷解）で、卽ち解決篇になつてゐる。此のキチンとした三段の順序は、探偵小説の典型的な說話形式であるが、これをかうキチンと定めたたのは、矢張り涙香の此の小説からである。その點でも歷史的意義があらう。

事件はといへば（涙香によると、全然彼の頭腦中からデッチ上げたものといふが）、此の小説を書いた年、卽ち明治二十二年の七月五日に築地海軍原（海軍大學のあつたあたり）近くの川中に恐ろしく慘酷な傷を受けた男の死骸があつた。持物は全然なく、身元も分からない。そこで最寄警察署では嚴重探索となるのだが、同じ警察署內の刑事谷間田（たにまた）、大鞆（おほとも）の二人がこれの探偵に當る、谷間田は舊幕時代の岡ッ引上りで、見込み、聞き込み、當りで行く舊式探偵術の老巧者、大鞆は西洋式の科學的なやりかたの研究者で、探偵小説の愛讀者であり、科學知識と論理的推究で行く新人、その二人の前に同一の證據物が與へられる、それは死骸の指にからみついてゐた數本の長い髮の毛だ。谷間田は、犯罪

定石の「女あり」をそのまま應用して、髮の毛がチヾレくせのあるとこから、チヾレ毛のバクレン女を探し廻る。大鞆は髮の毛を顯微鏡にかけて、その髮の毛の性質、チヾレの具合を調べその髮の毛に生毛とカツラの毛とあるのを知り、又チヾレの具合からして犯人は何うしても支那人でなければならぬと推斷する、その他死骸の身内の傷についても論理的な推測を下して、一々適確な說明を下す。結局大鞆の推理で犯人は築地居留地にゐる支那人の陳某だとわかる。一方谷間田はチヾレ毛のバクレン女を探し廻つてその女を捕へるが、偶然にもその女が犯人の陳の妾であることがわかり、これも、犯人が陳某だといふことを探知した。この妾が陳の弟と不義したのを、陳に見つかり、弟が逃げ出すところを殺されたものである。そこで、犯人探知の功は谷間田、大鞆ともに優劣なしとなるが、然し谷間田のはいはゞマグレ當りであり、大鞆のは科學的推理の必然から來てゐると云ふので、作者は新人大鞆に凱歌を揚げさせてゐる。

作者の意では、此の各間田と大鞆の對立によつて、當時一般にまだ行はれてゐた舊式な日本探偵法に對し、西洋風の科學的探偵法を加味せよと、改善の意識をほのめかしたものであらう、それで中篇の忖度、卽ち大鞆が長官に對して自分の推理の結果を說くところがこの小說のヤマとなつてゐるのも首肯される。今日からいへば此れ程の科學知識など可笑しい位ゐのものであるが、然し帝國議會さへまだ出來たか出來ないかの明治二十三年の當時としては、如何に斬新なものに思はれたか、想像も出

來ない位ゐだ。
涙香がもつと創作をつゞけて、此の大鞆探偵を活用してゐたら、ホームズ或はソーンダイク風の探偵性格をつくり上げて、今日「明智小五郎」をしてひとり盛名を恣まゝにさせなかつたかも知れない。
兎も角も、この涙香の處女作は、事件そのものゝ興味ではなしに、事件の推理解剖の興味を中心としてゐる點で、近代探偵小説のコツを立派につかんだものだ。コナン・ドイルが活躍して間もない此の頃、早くも大鞆探偵の如き性格を書いた涙香は、これだけでも立派に日本探偵小説史上搔消すことの出來ぬ存在となつてゐるのだ。
吾等は、飜譯家涙香の外に、創作家涙香の名も記憶に値することを知らなくてはならぬ。

五、涙香時代の探偵小説熱

日本の文學はいつだつてさうだが、外國の變つた作品が紹介されてそれが流行すると、早速その作品の和製といふのが出來る。涙香の飜譯小説が、恐ろしい勢力で流行し始めるや、これを眞似する連中がわれもわれもと出た。その中には、涙香の行き方をソックリ眞似た飜譯家や飜案家もあり、又この流行に一ト當てあてようと意氣込んで我流の探偵趣味を盛り込んだ創作家もある。然し大衆は馬鹿

で欺され易いやうで、それでゐて案外正直であり、さう容易に欺されない。彼等は涙香の物は眞に面白いから歡迎したが、いくら涙香を眞似たといつても、似せ物は似せ物だけのことだから、涙香程に歡迎されず、それ相當の待遇しか受けなかつた。

此の探偵小說流行（といふよりも寧ろ涙香小說流行といつた方が正しいが）をあてこんで探偵小說を作つた小說家の第一は、須藤南翠だ。彼は涙香の出現した明治十八九年から二十二三年にかけて舊文壇の第一位に立つ老大家であつた。多少の學問もあり、何にでも役に立つ重寶なジャーナリストであつたが、當時は續物卽ち新聞小說の大家として有名であつた。ジャーナリストの常として、好新的なものだが、中でも、此の人のは極端で、文學上の新傾向には何でも一わたり筆をつけるといふ癖があつた。政治小說が流行しさうだと政治小說、社會小說が流行しさうだと社會小說、歷史小說が流行しさうだと歷史小說といふ風にやるのだ。（もつともかうして書いたものゝ中には、なかなかいゝものもある）。そこで、此の人が、二十年以後涙香の小說が勢力を得て來ると、忽ち探偵小說に筆をつけた。そして先づ公けにしたのが『殺人犯』といふのだ（二十一年六月刊）。

金貸をしてゐた潮田寬三といふものと、同じ職業の水口春澄といふものが、某地で殺される。兇器はピストルと仕込杖が用ゐられてゐる。被害者同志は、同業である上に、春澄は寬三の娘のふき子に緣談を申込んで殆ど受け入れられてゐるといふ關係だ。探偵當局では、これを金貸關係と緣談關係方

面からの原因と見込みつける。然るにこゝに此の兩方面の原因から二人を怨むべき立場にある人間がある。それはふき子の戀人で、かつて遞信省電信局の官吏をしてゐた野口今朝雄といふものだ。これは兩人からの若干の借金もあり、春澄とは戀敵といふ關係になつてゐる。そこで當局では早速野口を拘引し、家宅を捜索すると、六連發のピストルや仕込杖などが出て來る。そこで野口の罪狀は確實的なものとなる。野口家の食客内海某は平生野口の知遇に感激してゐたので、この時とばかり素人探偵として活動するが結局無效に終つてしまふ。最後の判決の日、、野口の戀人ふき子の無罪證言が役立つて、許され、代つて寛三の手代をしてゐた松川玄七なる者が眞犯人として刑を受けるといふのだ。

いかにも複雜らしく事件を仕組んであるが、その組み合せ方が皮相的で、淺薄的で、一寸した新聞雜報の以上に出るものではない。これに探偵小說的興味を與へるには、眞犯人玄七を見出すところにこそ、力點を置くべきだのに、穿き違へて野口の有罪無罪だけに興味を集中してゐるのは、近代探偵小說のコツを心得たものではない。時間では『無慘』より一年以上も先に出てゐるので、或る意味では『殺人犯』の方が先きだといへぬでもないか、然し探偵小說としてはまづ未成品で、單に先驅的なものとしか見られない。

南翠にはこの外に『朧月夜』といふ長篇がある(二十二年、新小說)。これは普通の探偵小說ではなく惡漢小說とでもいふべきもので、三人の惡漢がある、その一人は男爵櫻町春行、實は日本銀行の倉庫

を地下道からクリ拔いて大金を奪つた大盜賊、その二は東洋生命保險會社の社長遠山霸三、これは保險業は表面で矢張り强盜團の首領である、その三は藥種商桃井澄之助、これは保險魔ともいふべき惡漢、その外遠山の部下たる寺澤某の如き、探偵で死人の入齒盜みを道樂にしてゐる男、櫻町の侍醫で惡事共犯の池上醫學士、桃井の妻で美人局の名人お艶などゝいふ惡漢毒婦が出る、全篇一人として善人がなく、事件が悉く惡事惡業だ、その點では全く變つた小說だといつてもよい。然しあまり人爲的に筋を複雜にし過ぎたので、何が何やら分らぬところや、辻つまのあはぬ無理がいろいろあつて、時時可笑しくなるが、ともかく頭を捻つて、精一杯に考へ出した小說に違ひない。卷中、寺澤が櫻町の犯行を探偵するところが面白い、且つ終始、三人とも互ひの惡事を探知してゐる。最初はお互ひに睨み合つて對抗してゐるのだが、後には秘密に團結を結んで、三人同盟して大惡謀を企らまうとする、が、それは表面で實は三人三樣の手段で早く相手を斃して自身の安全を謀らうとしてゐるのだ。そして結局、三人とも同時に毒殺し合ふところで終る。よくもかういふ妙な筋を考へたものだと、その點だけは感心させられる。

この小說の中には時事も取入れてあるし、又西洋の探偵小說からも借入れてあるし、南翠自身の創作も多少ある。現にこの小說の中で、第一回に私が述べた『情供證據誤判錄』に言及し、その中の裁判事件のことを利用したりしてゐるから、この書からして種々の趣向をかりるところがあつたに違ひ

ない。

南翠は文壇小說の方からは一向買はれぬ人だが、大衆文學の發達なり、探偵小說の歷史なりからは注意すべき人物だ。

南翠のは兎もかくも創作だが、同じ頃やまと新聞を舞臺に盛に飜案をやつた人に條野採菊がある。これは南翠以上の故老で、いはゞ幕末生殘りの作者だが、これが妙に氣の若い人で、同じ生殘りの假名垣魯文などがそろそろ老ひこむ頃の十九、二十年頃から、西洋小說の面白いものを盛に飜案し始め新聞小說として讀者から相當に喝采された。その中に惡漢毒婦式の探偵小說が可成りある。原作も分からず、又果して一部の小說を飜案したか何うかも分からぬので一々は述べないが、『月雲兩面鏡』、『いすかの喙』などといふものがそれだ。シェークスピヤの『リヤ王』を、いかに何んでもお家騷動の惡漢毒婦に作りかへたなどは少々困つたものだが、然しこれで、かういふ飜案さへ讀者から兎もかく歡迎される程探偵小說熱がわき立つてゐたといふことだけは、わかつていたゞけるだらう。

南翠と並んで、特に江戸前風の洒落な作風を示した、これも當時では大家の一人、饗庭篁村がポウの小說の梗概を紹介したりしたのも此の頃だ。これは然し必ずしも涙香に刺激されたといふべきではなく、元來が西洋文學の好きな高田半峯氏等と交際があつたから、その人々からの耳學問を綴り合せて新聞に出したものであつた。だからその紹介してゐるものが何れもこれも探偵小說かといふと、さ

うではない、探偵小説は少ない方だが、その少い中にポウの『ルーモルグの人殺し』(二十年十二月、讀賣)がある。

ポウの紹介では、よし耳學問にせよ、この饗庭篁村のが最初であつたかと思はれる。少し遲れてウイルキイ・コリンズの『月珠』(ムーンストン)も紹介されてゐる、これは長いものだから初頭の方一部分だけだが、一度ならず二度ならず手をつけられてゐる。これは一つは、コリンズが一八八九年即ち明治二十二年に死去したから、外國雜誌の記事につられて手をつけたといふこともあらう。

以上で、當時の探偵小說熱の何れ程であつたかといふことの一斑が分かるであらう。

六、森田思軒とその一派

涙香の小說の愛讀者は何の階級といふことはなかつたが、涙香自身は大衆的なつもりで筆を執つてゐた。又實際文字通り大衆的なものであつたらう。これに反して飜譯家として、主として知識階級を相手に西洋文學を紹介して多大な名聲を得たものに、報知新聞を根城とした森田思軒一派がある、思軒の飜譯したものは何れかといへば科學小說、文學小說が多いが、探偵趣味のものが可成り雜つてゐ

る。「盲使者」、「幻影」、「探偵ユーベル」、「炭坑秘事」、「毛家莊秘事」、等がそれだ。これ等の作については、私は、『明治初期の飜譯文學研究』の中で（森田思軒といふ一章がある）相當詳細に語つて置いたので、今こゝでそれを繰り返すことはせぬが、涙香とは少し違つた立場から西洋の通俗小說を紹介して、知識階級者間に探偵小說趣味を鼓吹した思軒の存在も、かういふ歷史風な書き物では一言しておく必要があらう。

思軒の譯風は、まるで涙香とは正反對で、思軒の譯文は逐字譯の周密文といふのだ。一字一句もゆやしくもしないといつた、硬い文章だ。「探偵ユーベル」の中に出るノンセンス（Nonsense）といふ一語の適譯を得るため何日かなやんだ揚句、遂に得ずして止んだといふくらゐの凝り方だつた。「幻影」（二十一年報知）、「炭坑秘事」（同）、「毛家莊秘事」、（二十二年、新小說）の如きは、立派な探偵小說である。實は、私が始めて「幻影」を讀んだときに、あまりの面白さに驚いたくらゐだ。「毛家莊秘事」の方は何うだつたか知らんが、他の二作の方は前記『飜譯文學研究』（春秋社發行）に載せて置いたから、一度讀んでいたゞきたい。

思軒の親分は矢野龍溪、矢野があの「報知異聞」即ち「浮城物語」で敢然と大衆文學に味方したのは、『隨筆明治文學』で說いた通りだ。思軒の門からは、原抱一庵、村上浪六、遲塚麗水、村井弦齋の四天王が出たといはれる。「門」から出たといふには多少の語弊があり、抱一庵と弦齋は門下生格とし

ても、浪六と麗水は必らずしも門下生といふのではないが、然し思軒に見出され推挽をうけたといふことは首肯してよからう。

次回には二十五六年以後を中心に書くつもりである。

七、おことわり

前回の終りに、今度は二十五六年頃を中心にして書くこと豫告したが、この時のつもりでは、まづ涙香を先驅として起つた飜譯探偵小説界の新人連中、卽ち南陽外史、丸亭素人、菊亭笑庸などゝいふ人々のことを紹介し、それから探偵小説の全盛に壓倒された純文學方面の反間苦肉の策を說き、更に探偵實話物の出現に及ばうといふのであつた。中でも私が一番樂しみにしてゐたのは、當年生殘りの南陽外史との會見記であつたが、私自身のいろ〱な都合や、南陽外史の方の種々な事情から、會見がつひのび〱になつて、その會見記は今月號に間に合はないことになつた。おことわりして置く。

八、探偵實話の起り

若し『和蘭美政錄』が探偵實話だとせば西洋種のこの種の探偵文學は、文久年間に日本に入つて來たわけだ。それから『情供證據誤判錄』が一種西洋種子の探偵實話集と見られぬでもないといふことは、前に述べた通りだ。だから、探偵實話の起りも相當古い。もつとも、讀者の中には、そんな事をいつたつて、もつと古い探偵實話に『大岡政談』があるぢやないかなどと逆襲される方がないとも限らぬがあれは實話と稱する小說だ。眞實の實話物でも何でもない。尤もあの頃天一坊關係の實話だなどと大きな顏して眞實の處を書いたら、首がとんでしまふ、とても書けるものではない。形式が時の政治の美しさを稱讃する小說になつてゐるから、存在を許されてゐたので、內容は大抵支那の公案物の飜案だ。支那では舊式探偵小說を何々公案といふのだ。今日いふ探偵實話物は、先づ文久年間神田孝平が譯した『和蘭美政錄』に發端するといつて可い。此の『美政錄』の一部分を明治十年に成島柳北が文章を訂正して花月新誌といふ自分の雜誌に揭げた。それで『美政錄』の譯者を成島柳北だと考へてゐる人があるが、それは違ふ。その邊のことは、前々回あたりも述べて置いた。神田孝平はリーダアで有名な神田乃武の先代で、男爵になつて明治三十一年に死んだ。探偵小說を紹介したから、男爵になつたのではない、彼は明治政府に仕へて、西洋文明の移入や法律編成や地方民法やに相當な貢獻をしたので、男爵になつたのだ。

だが、探偵文學の愛讀者たるもの、彼の名を忘れるべきではない。

そこで西洋種子の探偵實話はそれとしてさて日本種子の方はいつ頃起つたか、明治十年度の新聞雜報の中には、立派に探偵實話として通用するものがあり、又讀物の中にも犯罪事件を扱つたものも澤山あるが、十年代のは『大岡政談』の流で、何うも筆者の作り事の方が多い。例へば高橋お傳、夜嵐お衣、斑猫お初、幻しお竹、布施お糸（これは問題だが）等々の所謂毒婦物など、探偵實話風のところが大分あるが、筆者の目的は大部分教訓的であり、犯罪記事を主としたもので、肝心の犯罪の探偵といふ點が興味の中心から逸してゐる。これではいかに探偵事件を扱つたものでも、探偵實話とはいへまい。その上、筆者の手加減の加はることはいふまでもない。だが、兎もかく、日本式の探偵實話がこの毒婦物その他に脈を引いてゐることは事實だ。その他といふうちには、『島田一郎梅雨日記』の大久保利通暗殺一件、『名廣澤邊萍』の廣澤參議暗殺一件なども入らうし、外にまだ〳〵澤山あるが、結局此等の新聞雜報本位の戲作探偵物から、探偵實話が發達して來たことを、認めずばなるまい。

此等の戲作物は十年前後から十七八年乃至二十年まで盛んに出るが、さうかうしてゐる間に涙香の出現となつて、一般に探偵文學への興味の火の手がぱつと強まつて來た。それにつれて探偵實話めいた創作物も幾種か出たことは、こゝに一々述べないが、本式に探偵實話といつて可いものゝ出たのは明治二十四年だ。

明治二十四年の六月に、森澤德夫著『探偵淵軌』と題するものが出版されてゐる。著者の森澤氏は

警視廳第二局の第一課長を長くやつてゐたことのある人だといふ。此の著書は、その題目からいへば探偵學原理とでもいひたいものらしく想像されるが、事實は全く探偵の體驗手記で、正眞正銘の探偵實話集だ。例言には「本書ハ探偵ノ術策ヲ示スヲ主旨トス」云々などと書いてあるから、著者のつもりでは、後進の探偵刑事諸氏の實務上の參考として書いたものであらうが、吾々からいへば、全くの探偵實話的讀物で、約十種位の種々な犯罪の探偵事實が、要領よく面白く物語られてゐる。

森岡氏の意は、以上の如くあくまで實際的なものであつたといふ點から、これを興味本位の探偵實話の元祖とするのは、甚だ相濟まない氣がするが、全く以てこの『探偵淵軌』こそ、探偵實話の元祖に違ひない。

例を示してもう少し詳しく此の書のことを物語るといゝのだが、少々先きを急ぐから、又改めて內容を紹介するとして、こゝではたゞ『探偵淵軌』といふ二十四年に出た本が、今日いふ探偵實話の元祖だといつて可い、といふ事實の御記憶を願ふだけにして置かう。

九、探偵叢話とその說話者

ところで、此の二十四年の『探偵淵軌』で始まつた探偵實話物が、二十六年に至つて俄然興味本位

の新聞讀物として、特異な人氣を博するに至つた。それにはかういふ事情があるのだ。
涙香が、二十、二十一、二十二年と足かけ三年の間、探偵小說を發表してゐたのは繪入自由新聞等だが、二十二年に至つて都新聞（今日新聞の後身）に入つて主筆となつた。それで自然彼の探偵小說も、都新聞の紙上に限られることになり、都新聞の賣高がぐつと上つた。二十二年から、二十三、二十四、二十五年と足かけ四年の間都新聞は好調の鰻上りであつた。然るに、二十五年の夏頃　何ういふ事情からか、多分政治的な事情からかも知れない、都新聞社が山中閑といふ人の手から楠本正隆といふ政治家（男爵）の手に移つた。此の時新社長楠本男と涙香との間には社員の首切りはやらぬといふ紳士協約があつたのだといふが、楠本の方でも、その協約を守りきれぬ理由があつたと見えて、矢張りチハ〳〵と人事移動をやり出した。そこで涙香は楠本氏の男らしからぬ遣り方を詰つて、一味を引連れて都新聞を退社してしまつた。かくて此の年の秋、自ら社長となつて萬朝報を創立することゝなつたのは、誰でも知つてゐる通りだ。
そこで、涙香の退社と共に、名物探偵小說も都の紙上から姿を消すことになつたがこれは、都新聞の編輯者にとつては大痛事であつた。そこで涙香の代りに誰かに探偵小說を譯させて矢張り探偵小說で讀者を繫なぐ工夫をつけたが、讀者は「探偵小說なら何でもいゝ」といふのではない、涙香の探偵小說でなくてはならんのだ。都では人を撰んで、先づ文壇の大先輩春の舍朧先生（坪內逍遙）に出馬を

乞ひ、春の舍は十四堂主人と號して探偵小說や惡漢小說を試みたが、二篇だけで引下つた。十四堂といふのは當時三十四歲であつた先生が十四の童子に若返つて一奮發するといふ意味からさう號したのださうな。その後を引受けたのが不知火と號する人物、これは本名何といふか分らぬが、此の不知火生が暫らく飜譯探偵小說をつゞけたが、矢張り何うも讀者受けが妙でない。そこで窮餘の一策として考へつかれたのが、「探偵叢話」といふ實話物だ。それは二十六年三月のことであつた。

同年三月二日の都新聞の「探偵叢話」のはしがきといふものが見えてゐる。あまり人の知らんものだから、この機會に少し長く揚げて見よう――

「飜譯探偵小說が都新聞の特有の呼物となり居るは今云ふまでもなし、然らば此飜譯物に加ふるに日本流の探偵小說を以てし、並べ揭げて彼我を比べば一層世の好評を博するや明かなり。去りとて徒に奇趣向きでさへあればと云ふが如き心得にて、實際在り得べからざる事柄など筆に任せて記したらんには、却て讀者の笑ひを招かん。若ず其道に就き事實話を聽きて之に問を加へんにはと、是れE生が編輯局諸兄に建議せる當初の意見にして諸兄も之を可とし、或人が試みに後者の探偵指針にもなれかしと骨のみを略記せしめ置きたることありとて所有する四十餘件を得て一讀するに甚だ無味淡白なり、然れども再讀三讀するに得も云はれざる深味を生ずる事の甚だ多し。蓋し落しありたる下駄一足が右大臣要擊者の探偵材料にてあり、風呂敷一つが强盜殺人者の行衞を示したりと云

ふが如き、書きたる骨のみを無心に讀過すれば何等の味なきも、數月前に犯罪現場に於て一見したる足跡と、今見る此の男の足跡と似たりと云ふが如き點にまで注意して、遂に共犯人を知るに至る迄の手附の程を想像し、我知らず之に問を加ふれば、自然に得も云はれざる深味の生ずるなり。故にE生は當初の意見を飜へし、徒らに問を加へず骨のみ其まゝ次號より揭げて、讀者諸兄にも文字以外の樂しみを頒つことにしたり」云々。

これで「探偵叢話」出現の表面的理由はよくわかる。筆者のE生といふのは勿論都新聞の記者の一人であらうが、事實上彼は或人の記錄の書き直し役たるに止まるわけで、探偵叢話の實際の記錄者ではない、實際の記錄者、卽ち此の「或る人」は當時都新聞の探訪か何かをしてゐた高谷爲之といふ警視廳の元刑事であつた。

私の友達の蜷原八郞君が、いつか高谷のことを多少調べたことがあり、その報告が「書物展望」昭和八年四月）に出てゐるが、それによると、此の高谷は豐多摩郡高井戶の出身で、舊幕時代からの岡ツ引であつたらしい。（少なくも岡ツ引に密接な關係のある生活をしてゐたらしい。）明治十九年とかに芝署の巡査となり、間もなく警視廳の刑事に轉じ、數年間に可成手柄を立てたといふが一種の人生觀から刑事商賣がフツといやになり、足を洗つて新聞探訪となつた。初めやまと新聞にゐて、二十五年に都に轉じたのだといふ。彼が刑事在職中に、自分の關係した事件四十何件の梗概を手帳に書きつけ

て置いたのが、此の時に至つて都新聞を救ふといふ（少々大袈裟だか）大事の役に立つことになつたのだ。（高谷はその後三十七年まで都新聞にゐて、或るモスリン會社に入つたが、その後も都や時事に自分の探偵手記をのせてゐる。大正二年五月、中風で西大久保の寓居に歿したとのことだ。）「探偵叢話」が出て何年か後の、明治三十年かに新著月刊といふ雜誌が出たが、これに高谷の經歴談、苦心談が載つてゐる。これはつまり「探偵叢話」の種明しのやうなもので、これだけでもなか〳〵面白いものだ。これで見ると、高谷の刑事としての經驗は實に變化のある豐富なものであつたらしい。

そこで「探偵叢話」連載の件が都新聞の編輯局で、窮餘の一策として可決されて、早速掲載となつたが、當時高谷は讀物風の文章がかけぬので、彼の原稿を同じ都の記者淸水柳塘、羽山菊醉の二人が代る〳〵潤色して紙上に出した。柳塘の書き方は、いかにも實話らしく報道的であつたが菊醉の方は大分小說的な傳奇的な分子を加味してゐた。高谷自身は、何方かといへば淸水柳塘式の書き方でやつてもらひたかつたのだといふが、讀者や社內の受けが、菊醉の方がよかつたので、この方が多くなつた。だが「探偵叢話」は一切無署名で發表されたので、高谷とも、淸水とも、羽山とも、何とも書いてない。且つ高谷の原手記がわからぬので、淸水、羽山の加筆潤色の程度が何のくらゐのものか、それは一向見當がつかない。

窮餘一策の筈で、內心アヤフヤだつたが發表してみると、「探偵叢話」は大受けだつた。殊に第二十

同日のピストル强盜淸水定吉の實話が、大當てに當てた。それから引續いて「蒲鉾屋殺」、「大惡僧」「あたりやおきん」等掲載されたが、中でも有名になつたのは「三週間の探偵」、「二兇漢の探偵」、「極惡探偵中川吉之助」、「國事探偵」、「俠客木曾富五郎」などといふものであつたといふ。かくて日淸戰爭後から、日露戰爭前にかけては高谷は、もう立派な探偵實話作家となり、彼自身の懷中も樂になつたらうが、都新聞の會計掛をいつもニコ〳〵させたものだつた。

都の「探偵叢話」は當つたと見るや、東京の新聞も、地方の新聞も競爭的に探偵實話犯罪實話を掲げるやうになつた。

人間の知慧など、どうも當てにならぬもので、今日からいへは、探偵小說は、その全盛の反動やその他の理由で、もう二十六七年から飜譯探偵物には中たるみが來てゐたのだ。それと知つたか知らずにか涙香も二十六、七年から萬朝報に掲載するものは單なる探偵一點張りのものでなく、人情物を加味したローマンス風のものに變へて來つゝあつた。だから、都の「探偵叢話」は窮餘の一策どころか事實は方向轉換の最もいゝ策であつたので、恐らく涙香に此の材理を握られたら、涙香の方が先に實行したかも知れない。

「探偵叢話」の目次も手控へはある、がそんなものをこゝに引出しては、イヤに文獻臭いものになつて、讀者諸兄から又かと顏をしかめられる恐れがあるから、まづ〳〵やめた方が無事だ。

此の次には、涙香以外の飜譯探偵小說家のことを書くことにするつもりだ。

（註）この探偵叢話は最初は極短かい一二回乃至四五回のもので、文字通りの叢話である、一日二話三話のもある。——

明治二十六年三月三日　探偵叢話其一

「落た小風呂敷の印から」

同　三月四日　同　其二

「鄭外務文書權頭邸妾殺しの一件」

同　同　同　其三

「其にしては草履の塵が多い」

以上の如きものであるが、それが四月十四日叢話第二十「淸水定吉」となつて、俄然長編に發展し大人氣を呼んだものである。

尙は探偵叢話の單行本となつたものは私の知つてゐる限りでいふと、——

○淸　水　定　吉　　○三週間の大探偵
○中　川　吉　之　助　　○國　事　探　偵
○山　田　實　玄　　○俠客木曾富五郎

○娘義太夫　　○法衣屋お熊
○官舎私借　　○品川鐵
○菅屋お婦美　　○大井川殺人
○水中の祕密　　○蠣殼町之血雨
○兜町小夜嵐　　○三輪之怪火
○黑須大五郎　　○箱詰美人

一〇、涙香につゞく人々

探偵小説の勢力が涙香と共にのび、これらの掲載機關たる都新聞の人氣が高まるにつれて、同業者間に自然模倣者を生じて來た。此の現象は明治二十三四年を境ひ目として、次第にはつきりして來る探偵小說界は、これ以後もう涙香の獨り舞臺ではなく(人氣の點で彼が依然第一位にゐたのはいふまでもないが)、若干の新人が彼と共に活躍し始めることになる　それと共にさもなくても火の手の强い探偵小說界が益々勢ひを逞しくして、遂に文壇文學を追ひまくり、全盛の威を示した。その結果、この勢ひに敵しかねた文壇派の本部たゞ硯友社が、文學書出版の第一人者たる春陽堂と示し合して變妙

な反間苦肉策をやつた。そのことは後に述べる。

涙香につゞく探偵小説界の新人で一番早く名乘り出てたのは、丸亭素人、卽ちマルテシラウト氏だ。此の人は本名が遠藤速太といつて東京日日新聞の記者だ。然し此の人が探偵小説を記載した舞臺は東京日日ではなく、多くは遠くの地方新聞だつたといふ。それで此の人のものは單行本になつてから都會の讀書子に讀まれたので、その名は比較的遲く知られたが、活動し始めたのは、二十二、三年頃からだ。此の人の履歴のことはよくわからない。二十二年に涙香が繪入自由新聞から都新聞に入るとき、涙香の後をうけて「美人の獄」をやつたのが抑もそも探偵小説に入る最初のやうに思ふ。丸亭素人の譯本には『殺害事件』、『探偵譚』、『暗殺』、『鬼車』、『涙美人』、『慘毒』等々あつたと記憶してゐる。その代表譯は、二十五年刊の『大疑獄』だ。これはガボリオーの『ムッシュー・ルコック』を殆んど全譯したもので、仲々面白く讀ました。いつか本誌で書いたやうに、私がそもそも生れて始めて讀んだ探偵小説は、この『大疑獄』であつた。その意味で私には一つの記念的譯本だといつていゝ。

その次ぎが南陽外史水田榮雄、これは東京中央新聞を根據にしてゐたので、早くから探偵小説の讀者に名を知られ、フアンもあつた。丸亭氏のヂミなのに比較して、可成り華やかな存在であつた。此の人は現に健在であり、その一通りの履歴も聞くことが出來たら、次に項を別にして書かう。

それから菊亭笑庸、これは本名も履歴もわからない。この人の特色は獨逸種の探偵小説・怪奇小説

を紹介したことだ。その意味で、小さいながらもエポックメーカアだ。前二者に比してやゝ遲れて出た人で、新聞に關係のあつた人らしく考へられるが、果して何うだかそこいらのところは、一向手がかりなしだ。『耳と腕』、『青面孃』などといつたものがあつた。

それから不知火生、これは都新聞で涙香の代りに探偵小說を譯載させた一人だが、これも本名一切不明だ。『轍の跡』（二十五年）といふのがあつたと記憶してゐるが、これはヒュームの『ロンドン辻馬車』の譯だつたかと思つてゐる。それから『消防夫』（二十六年）、その他に『十萬株』といふ單行本があつたことはたしかだ。

たしか二十六年頃丸亭素人と菊亭笑庸の二人が分擔して譯したものに探偵文庫といふものがある。

そのうち丸亭の分は――

（第一）死人の掌
（第二）共　囚　人
（第三）多湖廉平
（第四）生殺自在
（第五）獄中の働
（第六、第七）二人探偵

丸亭は大抵フランス物を譯してゐるが。これ等が皆の英譯からやつたとも思へないから、フランス語が出來たのかも知れない。菊亭のは——

（第八）鬼　美　人

（第九、等十）林中の犯罪

といふのだ。例の如くドイツのものであらう。

ずつと變つてゐるのは、時事新報の「掬月庵ましら」といふのだ。この人は探偵小說ばかりでなく西洋文藝を時々時事にのせてゐる。探偵小說としては二十九年の『夜汽車の犯罪』などが長篇だ。處でこの人が誰だと分かつたら、一寸その意外に驚くだらう。これは、福澤諭吉先生の長男で現慶應義塾の社頭たる福澤一太郎氏の匿名なのだ。

かういふ新人の間に、老大家の森田思軒が割り込んで『無名氏』、『隔簾影』などを公にしてゐる。後者は英國の有名な通俗小說「オードレー夫人の祕密」を譯した物だ。

東京でこの有樣だから、大阪でも負けるなとばかり、大阪每日でも探偵小說をのせたが、いろいろな人の話をきいて何でも面白い小說を取り寄せろと英米から數十册取りよせて、その中から面白いものをすぐつて新聞にのせ始めた。ところが何ういふものか、讀者が受けない、中には涙香の二番煎じを知らぬ顏でのせるなどはヒドイと文句をいふのがゐる。そこで社員があはてゝ調べ直してみたら、

何年か前に涙香が繪入自由や都などにのせたのであつた。それから大阪毎日では獨り天狗をやめて、涙香のところに人を派し、涙香の原本をきいてからのせたといふ。チト何うかと思ふ話だが、出所が確かだからウソではあるまい。現に東京でさへ、同じ原書が二度も紹介されたことがイクラもあつたのだ（例へば『ルコツク』の如き、『書類百十三號』の如き）。
だがそれもこれも、探偵小説がいかに讀者にうけたかといふことを知るには、好い資料といふべきだらう。

一一、南陽外史について

材料が少し餘計あるから、水田南陽外史のことは別に語らう。尤も價値的にいつても、涙香をのぞくと、南陽外史が新人連中のピカ一たる觀がないでもないから、別項にするだけのものはある。
前に述べた通り此の人は健在で、何不足なく老後を樂しんでゐる。なかなかきかぬ氣の人で、私が行つたときも履歴も話したがらず、探偵小説のことを訊かれるのをひどく迷惑らしい風であつたが、ともかく一ト通りのことは無理に聞いてみた。その履歴はかいつまんで書くと次の通りだ。
明治二年一月、淡路の薦江（こもえ）といふところに生れ、播州で子供時代を過したといふ。明治二年に生れ

といへば今年六十九だと思ふが、それにしては若い元氣な人だ。二十七年生れの筆者などより若いといつては少しおまけになるかも知れないが、少くとも同等位ゐの若さと元氣をもつてゐるやうだ。播州で小學敎育や漢學などを修めたものらしいが、何うも物をかく興味も早くからもつてゐたらしい。その邊のことは一切笑つていはぬから、皆私の想像だ。

十七八の頃大阪に出て、英和學舍で英學を勉强した。だが入學數年でこの學舍がやめることになつたので、秀才の故をもつて選拔され、東京立敎大學に入學した。立敎大學在學中氏は東京能辯學會に加盟して（二十二年）、度々そこで演說をしたり、（演題に「青年論」、「日本に於ける西洋人」、「近時小說小言」、「讀文明史」などがある）、又同舍の機關誌「能辯」（初め東京能辯學會雜誌）にシエークスピヤ物の飜譯をのせたりした。能辯學會の主盟は漆間眞學、大岡育造、城山靜一などといふ人々であつたが、殊に大岡氏が水田氏の才鋒を認め氏を「能辯」の編輯に參加さした。大岡氏はこの頃代言人が本職であつたが、政界にも雄飛したい野心があり、東京中新聞を手に入れて（後中央新聞と改題）經營したばかりの時であつたので、早速在學中の水田氏に記者とならぬかと交涉した。然しこの時は水田氏にそんな考へがなかつたので、それを斷はり、立敎卒業と共に淡路に歸つて私塾經營に沒頭した。大岡氏は然し水田氏の歸鄕後も、氏の才能を惜んで東上をすゝめて止まぬ。そこで水田氏も大岡氏の知己の感に動かされ、私塾をやめて上京し、中央新聞社に入つた。それが明治二十三、四年のことだ。

水田氏はこの時中央新聞に入つたまゝ、同社に腰を据ゑること二十年間、明治四十三年大岡氏が中央新聞を手放す迄は、同社を去らずに、實に献身的に働いた。同社を去る頃の水田氏は編輯總長の重責にゐた。

この新聞時代は、同氏には、樂しい追憶だ。「新聞生活卅年の自慢話なら一日でも二日でも話してきかせするが――」探偵小説談は御免だといふ。私もその追憶の二三を聞いた。

水田氏は日清役にも北清事變にも從軍した。日清役は海軍で浪華艦に乘り組んだ。時の浪華艦は東郷大佐（後の元帥）であつた。この時諸新聞の從軍記者が各艦に乘り組んだが、千代田艦に於ける國木田獨歩の如きは、水兵と起臥飮食を共にし、好んで士官水兵と談論し、時に彼等に對して演説を聞かせるなど、深く將兵の人氣を博したものであつた。そこで浪華艦の一士官は、水田氏に向つて暗に君も演説して聞かせよと催促したので、水田氏も折を見て艦内のホールで大演説をして聞かした。すると艦長の東郷大佐は大に喜び、「かゝる出來事は浪華艦進水以來の事ぢや、君は面白い男ぢや、ナゼ艦長室へ遊びに來てくれぬ」といふ、水田氏は「それは宜しいが、此頸の骨が少し硬いので無暗に下りませんが」といふと、東郷大佐は、破顏一番、「よし、そんなら相撲をとらう」といきなり組みついたといふことだ。英國艦高陞號を擊沈めた若い頃の東郷元帥の元氣さが眼に見える樣な話だ。

かくて戰局の一段落と共に、從軍記者の歸國報告となつたが、この時考へた水田氏は船中でスッカ

り原稿をつくり、門司に上陸するなり、電信局にかけつけて四萬何千語の長文電報をうつた。そのため中央新聞の戰況報告は、他新聞は勿論官報のものよりも三日間先に現れて、同業者をアツといはした。これは當時の各新聞でも口を極めて賞讃した一代の離れ業であつた。

三十三年の北清事變にも從軍し、大岡氏の紹介で伊藤博文の紹介狀をもち、籠城中の西公使を慰問した事等もある。此時の從軍記者で實戰を見て記事を作つた人は氏の他三名位の者であつたといふ、それで後に當時の勇將栗屋鬼大佐から記念の銀盃を貰つた。

もつとも水田氏は、此の日淸役と北淸事變の間に二度洋行をした。最初は二十九年の渡英（三十二年歸朝）、二度目は三十二年の渡米であつた（この時は大岡社長同伴）。渡米の記念として『大英國漫遊實記』があるが、これは當時の新聞人の英國社會表裏の見聞記として實に面白いものだ。殊に注目すべきは、水田氏が、當時早くも日英同盟論を提げて英國の同論者間を歷訪し、一種の輿論をつくつてゐることだ。

かくて四十三年まで中央新聞にゐた水田氏は同年大岡氏と共に退社すると、間もなく、新聞事業に見切りをつけて（事實大隈伯のお聲掛りで報知から有利な條件で招聘された）實業界入りをした。その皮切りは糖業聯合會で、此の會の智囊の役割を務め、着々と地步を固めて行つた。蔗糖事業に關する著譯に、大部なものがあるのを見ても、此の事業に於ける氏の地位がいかなるものであつたかといふ

ふ事が知られやう。

イヤ忘れてゐたが、學界の名物男だつた福田德三博士は水田氏の義兄になる、詰り福田氏の令妹が水田氏夫人といふ譯だ、どつちにしても同じ事だ、福田氏が學者として大成した蔭には、この口、筆、手と八丁揃ひの義弟が色々と盡した物であつたらしい。

さて水田氏のイヤがる探偵小說と氏の關係に移らう。

これは矢張り中央新聞の自衞策乃至發展策から出たものであつたらしい。都新聞に載つた涙香の探偵小說の勢ひのすさまじさに、各新聞が皆模倣した。中央新聞が探偵小說をのせ出したのも、この模倣の現れの一つだ。新聞に探偵小說がないと讀者が承知せぬ、そこで水田氏が一役買つて出たといふわけだ。氏と涙香は親友の間柄であつたらしく、最初は氏の譯載した探偵小說の原本も涙香から供給されてゐたものだといふ（涙香會編『黑岩涙香』）。

水田氏が最初譯載した探偵小說は『大探偵』といふのだ（二十四年五月）。これがガボリオーの『ルコツク』で、つまり丸亭氏の『大疑獄』と同じものだ。これを最初に、續々と探偵小說を揭げたので、南陽外史の名は本職の記者としてよりも、探偵小說家として有名になつた。翌二十五年夏、涙香が都を去るに當り、都から代りの探偵小說家をと乞はれて推薦したのは、實に氏であつたといふ。都の懇請が氏の承諾するところとならなかつたので、春の屋、不知火生などの出る幕となり、遂には探偵叢

話の出現となつたことは、前回に述べた。
次に南陽外史譯の主なものを擧げると、『夢中の玉』（二十四年十二月、ボアゴベイ作『マタパン・アフエイア』）、『忍び夫』（二十五年三月、ボアゴベイ作『閉ぢられし扉』）、『珊瑚の徽章』（同七年七月、ボアゴベイ作『コーラルピン』）、『どくろ船』（同年十一月）、『國事犯』（同年十二月）、『啞娘』（二十六年一月）ボアゴベイ作『レッドバンド』）、『生靈』（二十七年四月）『鐵面皮』（同年五月）。
丁度こゝで從軍となり、引續いて英國行となるので、小說譯載の筆が三四年途切れるが、三十二年から又つゞく。南陽外史は新聞に大英國見聞實記を通信した外に、探偵小說ファンにとつて素晴らしい土產をもつて來た。それはコナン・ドイルの作品を將來したことだ。英國滯在中、日本の留學生達に向つて、近頃何か面白い小說が無いかときくと、それはドイルに限るといふ。そこで氏はドイルの『シヤアロック・ホームズの冒險』及び『ニコラ博士』の二部を讀んでみたが、成る程面白い、從來のフランス種のものとはまた違つた面白さがある。そこで歸朝早々の三十二年の五月から『魔法醫者』と題して『ニコラ博士』を紹介し、同年七月から『不思議の探偵』の總題目で『シヤロック・ホームズ』の冒險を殆んど全部譯載して非常な喝采を博した。
三十三年以後はあまり小說の筆を執らなかつたが、全く止めたのではない、例へば、『六人婿』（三十六年七月）、『露國怪物・探偵魔王』（三十七年一月）、『母不知』（三十八年八月）などがあるのを見て

も知られやう。

南陽外史のドイル紹介は、ドイル紹介の最初であるのみらず、我が國の探偵小説がフランス物から英國物にと移る一線を劃したものとして、これ亦、探偵小説史上、重要視すべき一事實だ。かう考へると、南陽外史の歴史的立場は、案外重大なものがある。

（こゝまで書いて來たところ、筆者の筆硯が故あつて此の頃バカに多忙になつたのでこの回で一二回休載する。もともと埋め草記事の隨筆だから、そこは氣樂なものだ。一二回休載の上、改めて出直す事にする。）

大分休んだから、今月から又しばらく續けて見る。考へて見ると、隨筆だといひながら、「探偵小説史」といふ「史」の字に縛られて、少々カタクなつた氣味がある。「史」と標出したからつて、何も年代順に、「史」的に書かずともいゝわけだ。「史」に關する隨筆であれば可い筈だ。今度からそのつもりで、大體は年代も追ふが、必ずしも年代にこだわらずに、思ひついたこと、見聞してゐることをいろいろ自由に語ることにしよう。

そこで、再掲の手始めに、前に書き洩らした件を二つ、追補することにする。

一二、田島象二『裁判紀事』

前に、探偵小說の先驅的讀物のことを書いたときに外來種のものとして、裁判事件の判例集を擧げ『情供證據誤判錄』のことを語つたが、その時當然言及すべき筈の書物を忘れてゐた。それは、標出した田島象二の『裁判紀事』だ。

田島象二、卽ち任天居士は、いはゞ明治初期の戲作者、ブックメーカアのうちでは大分毛色の變つた一人だ。和漢の學問が相當あり、筆も達者に動き、佛敎の方の知識も可成りあつたので、明治初期の戲作界には十分過ぎる程の能力をもつてゐた。それだけに、彼はその能力を振り廻して四方八方矢鱈に活動した。彼の著した作物の數は夥だしいものであるが、今こゝにそれらを一々擧げる必要はないから止めるとして、それは實に際立つて澤山ある。たゞ、それ等の著作は大抵人から頼まれるまゝ又は才に任せて書きつけたものが多く、眞面目な著作は甚だ少ない。こゝに擧げた『裁判紀事』の如きは、その少ない一つなのだ。

此の『裁判紀事』も一種の判例實話集だ、たゞ內容が支那の判例乃至探偵實話めくものに限られてゐるので、その點は喰ひ足りないといへばいへるものだが、然しこれを通讀すると矢張り一種探偵小說

を讀むやうな面白味を與へることは事實だ。明治八年四月の刊行といふ日附があるからして、この方が『情供證據』より古いことは古い。強て買へばその古いといふ點をかふのだが、『情供證據』の方は探偵の手續を細々と書いたものがあるに對し、『裁判紀事』の方はそれが少なく、たゞ裁判官となつた人の手柄を褒めるために書いたらしい記事の方が多い。それだけに『裁判紀事』の一話一話は淡泊なものが多いので、『情供證據』に比較すると、無味とけなされる恐れがある。從つて、この刊行年代の古いといふ點を取柄にして、いたはつて、讀んでやる必要がある。殊に、漢文の特色でもあり短所でもある簡略の態度を示した文章が多いから、その淡泊なところが餘計目立つて見えるのだ。

一則、引いて見よう。

潮州ノ趙三、周生ト友トシ善シ。同ジク南都ニ往キテ貿易ヲ營マント約ス。趙ノ妻ニ孫氏アリ、夫ノ行クヲ欲セズ。已ニ鬧フコト數日。期日ニ及ンデ黎明趙先ヅ舟ニ登ル。太ダ早キニ因テ舟中ニ假寢ス。舟子張潮ナルモノ意ニ趙ガ金ヲ懷ニスルヲ察シ、之ヲ利セントス。潛カニ舟ヲ僻所ニ移シテ之ヲ殺シ、海ニ沈メ、復ツテ詐ツテ熟睡ス。周生至ツテ謂フ、趙未ダ來ラザルヤト、舟ニ登テ俟ツコト良ヤ久シ。遂ニ潮ヲシテ往テ促サシム。潮趙ノ門ヲ叩キ、三娘子ト呼ビ、因テ問フ、三官何ゾ久シク來ラザルヤト。孫氏驚キテ曰ク、良人門ヲ出ル既ニ久シ、豈尙ホ未ダ[illegible]ニ登ラザルヤト。潮還ツテ周ニ報ズ。周甚ダ驚異シ。孫ト路ヲ分チ、徧ネク尋ヌルコト三日、踪蹟ナシ。周日ヲ累ヌルヲ

懼レ、因テ牘ヲ具シ、縣ニ呈ス。縣尹、孫（氏）ガ姦有リテ故ラニ其ノ夫ヲ害スルカト疑フコト、之ヲ久シウス。楊評事ナル者有リ。其ノ牘ヲ閲シテ曰ク、門ヲ叩テ便チ三娘子ト呼ブハ、定メテ室內ニ夫ノナキヲ知レルナリト。此ヲ以テ潮ヲ罪ニ服セシム。潮乃チ服セリ。

大體はかういふもので、此の種の小話が約二十程收めてある。序文によると、丁度明治の新律が施行せられた際のことで、裁判官達の參考に群書を涉獵して編纂して一書となしたといふやうな意味を述べてゐるが、然し事實は『棠陰比事』の如き書物から拔き出したのみであることは、いふまでもなからう。

この「裁判紀事」は『情供證據誤判錄』より本が少ないので、割合に人が讀まぬものであるが、然し探偵小說の興味を云々する場合には、先づ年代が古いといふ點で第一に擧げるべきものであらうかと考へる。

一三、森澤德夫『探偵淵軌』

この本のことは、前稿に所謂實話物の先驅として、名だけは擧げてある。（第三回の八、探偵實話のおこり）。その時は紙面の都合で內容を紹介することを略してしまつたが、『裁判紀事』を紹介した序で

に、この本の内容のことも紹介して置かう。

前項でこの小說を紹介したときに、內容は全く著者の體驗手記だと書いたが、これは少し說明の仕ぞこなひで、著者の聞いた刑事の體驗の手記と訂正すべきである、著者の森澤德夫はかつて警視廳の第二局の第一課長であり、それ等の刑事を指揮する位置にゐた人物であるから、全く彼の體驗ではないへないが、然しそれでは內容の書き方に照して少し不都合だから、矢張り今のやうに訂正すべきだ。本文に「余」とあるは事件擔當の刑事の稱呼で、森澤氏のことではない。又、此の「余」も一人ではなく、恐らく事件を異にする每に、刑事も異にしたことであらうから、この「余」も數人の刑事を代表してゐるわけであらう。

その他の說明は、前揭のまゝでいゝから、今は、すぐ此の本の內容に入ることにしよう。

本文は十二章、各章が一件の割合で、都合十二件の實話が物語られてゐる。それに附錄が一篇あるから、全部で十三篇の實話集である。

順序を追うて簡短に語つて行かう。

第一章は「色情奴」、これは明治二十年二月、本所の津輕伯邸で家令の佐藤某が殺された事件である。この事件は他にも講談風なものに書かれたのがあるが、當時の人々の視聽を側たゝしめた怪事件であつた、要するに同邸の女中の一人を挾んだ家令と傭人との三角關係の發展した結果である

尙ほ本文の全部に亙つて犯人、その他の人名は假名としてある。又事件の經過よりも、探偵の經過に主點を置いてあるから、中には事件そのものについては結果だけしか出てゐないものがある。從つて話によつては面白いものと面白くないものとの差が大きくついてゐるから、そのつもりで讀むべきだ。この第一話は餘り面白くない。

第二章の「政狂」、これはその頃の政治熱を背景にして考へると、割合に面白い。これも二十年一月の事件であるが、土佐出身の政治書生が、革命を夢みて出京の途中、大阪で旅費に窮して三人共謀の上、同鄕の二書生を謀殺し、そのまゝ上京して陰謀を續けてゐた。それを捕へた事件だ。これは探偵手段も複雜してゐるし、謀殺の經過も面白く物語られてゐる。

第三章「僞券」、これは振替爲替券の僞造で金を詐取した事件で、當時（二十三年九月）としては新奇な犯罪として興味を惹いたものかも知れないが、今日讀んでは一向つまらない。勿論犯人は、金を詐取された東京郵便電信局の、舊雇員であつた。

第四章「年玉の片紙」、强盜事件、明治十七年二月のこと、强盜の刀のつかをまいてゐた紙片が「お年玉」にもらつたものであつたといふところからかういふ題をつけたもの、これも有りふれた話だ。

第五章「狂花（かへりざき）」、二十二年三月の事件、有夫の一老婦の若い燕が、情婦とその中を堰かれたのを恨んで情婦の姉を殺した實話。實に醜猥貪慾の見本ともいふべき物語で、さういふ意味では一寸典型的と

いふべきものだ。

第六章「偸劵」、二十二年十一月の事件、抵當の公債證書が銀行の金庫から紛失した件だが、これも犯人が最初からハッキリしてゐるので、たゞそれの犯跡をさぐるだけの面倒があるのみ、別に面白くはない。

第七章「五ヶ年の苦心」、これは明治十八年から二十二年八月まで重罪犯を追ひかけまはした實話。これは全くその探偵の苦心話だけのことである。犯罪は單純な共謀殺人、犯人もわかつてゐるので、犯人の一人が長くつかまらなかつたといふだけのことだ。

第八章「菊花數瓣」これは二十二年十一月の强盜事件、これも詳しく述べる程でもない强盜事件、たゞ證據がないので困つたが、犯人のもつてゐた風呂敷のつぎをした布片に菊花の瓣が幾つかと內調の二字があつたので、これを手づるに、犯人が宮內省調度課の使丁某の子であつたとわかつた。それをつきとめる苦心だけのところだけは面白い。

第九章「花茨」これはラシヤメン上りの鈴村カジといふ女詐欺師乃至枕探しの犯行を語つたもの、明治十六年頃から十七年にかけての事件である。これは語られた實話としては面白い方だ。然し犯罪そのものは餘り智慧のないやり方で、たゞ相手が女だと思つて油斷するから巧くしてやられるのだ。

第十章「紅氈」、明治十七年十二月にあつた强盜事件。

第十一章「桃の花繍」これも二十一年三月の强盜事件の實話だが、犯人の足に桃のいれずみのあるのを證據に探偵するといふあたりが一寸ロマンチックで可い。

第十二章「小才子」、これは少年詐欺師の傳で二十一年中のことだ。純然たる智能犯ともいふべきもので犯人は實に才智湧くが如く、詐欺の手段も咄嗟の思ひつきで種々なことをする。そこはまことに感嘆すべきものがある、たゞ少年だけに仕事が極て小さい、それだけに少しも目立たぬが、この度胸と才智で大仕事をしたら全く國際的大山師となり得たと思ふが、自分が書生であり、英語が出來、外人と知り合ひがあるのを幸ひ、外人をだしにして書生連中を喰ひ物にしてゐた、それだけに大仕事も出來なかつたわけだ。然し、面白い實話だ。

然し、この本で一番面白いのはその附錄だ。附錄は品川鐵といふスリの自叙傳とあるが、品川鐵といふのは仮名で、歌村鐵五郎といふ江戸子だ。猿若町の芝居茶屋の子でいゝ暮しをしてゐたのだが、父の遺傳で遊蕩の味を覺えて次第に墮落する。最初は奉公先から小盜みをするが、遂に家出して盜人からスリの仲間入りをする。スリの味を覺えたのは、新開港場の横濱であつた。さうして二十そこそこの時にはもう押しも押されもせぬスリの親分となつたものだ。

大抵の大泥坊やスリの親分や、バクチウチの頭などは皆表面上正しい職業をもつてゐるかに示してゐるものだが、品川鐵も魚屋を渡世としてゐる風をしたもので、從つて人の出入りなどもさう目に立

たゞに近所をごまかすことが出來た。

鐵がスリの業に最も脣ののつた明治十三年のことだが、(その頃京都にゐた)、京都の伏見の稲荷祭の際には十月祭當時午前十一時から午後二時までの約三時間に、助手一人と共にあげた品物は、金時計十三、銀時計五十餘、紙入五十三あつたといふ。これを買つたケイヅ買ひは驚いた。スリとはウソで實は時計屋から盗んで來たのだらうといつたといふ。

鐵は明治二十一年第八回の懲役六ヶ年に處されたが、この時までに彼のスッタ人間は一萬餘人、金額で何萬圓ともいふのであつたといふ。この自叙傳は、此の在監中に自ら語つたものを筆記したものだといふが、これを書き直して多少潤飾したら、面白い大衆的讀物となりさうだ。

尙ほ、本文の實話のところでは、當時の探偵方法が如實に語られてあるので、實話そのものの興味のことは別としても、探偵方法の實體を知る點では、これ又、確かに得るところがあると思ふ。探偵達が如何にして事件のつるをたぐつたか、何ういふ人間を手先きに使つたか、何ういふ品物を何ういふ見方から事件の證據品としたか、といふやうな點に至つては、實に事細かに書いてある。かういふところは普通の人の書いた探偵實話と違ふので、さういふ點を主眼として讀めば何の話も皆面白いといへる。然し普通の探偵實話の如く、事件そのものゝ興味、語り方の興味などをこの本の實話にもとめたら、多少失望すると思ふ。

當時の探偵方法をこの本によつて察すれば、大體は江戸時代の與力岡つ引のやり方をそのまゝ繼承した點が多く、科學捜査法などは殆んど行はれてゐない。これはもつと後、例へば三十年頃になつても矢張りその通りであつたらしい。若し科學捜査法の如きものが行はれてゐるとしたら、それはずつと上層の幹部間で試みにいろいろやつてゐたものらしく、實際運動をする刑事連中の間では一向用ひられてゐない。

こゝに涙香の『無慘』の皮肉諷刺が利いて來るわけである。

一四、圓朝の『黄薔薇』

『歐洲小說黄薔薇』は落語家三遊亭圓朝の名作の一つとなつてゐて、今讀んでも一通りは面白くよめるものだが、あれは、某氏が種を圓朝にくれたもので、その本はフランス小說であつた。それも『黄薔薇』をよんだ人が誰でも知つてゐる通り、十二分に探偵小說の素質がある。圓朝に種をやつた某氏といふのは、一時東京日日の社長として、又花柳界の通客として飛ぶ鳥を落す勢ひのあつた福地櫻痴であらうといふことだ。

此の『黄薔薇』の單行本は明治二十年に出たものと心得てゐるが、今日流行の初版さがしをやると

果してこれでいいか、もう少し前になるか、分からない。この二十年版はボール表紙の一冊だつた筈だが、別に和裝の二册物もこの前後に出てゐる。この和裝の方は今手許にないので、何年の刊行か急に確めるよしもないが、これがボール紙のものより前に出てゐたどしても、さう前ではない、一二年も前に出てゐると考へたら十分であらう。假に明治十八九年刊として置かう、然るに明治十二年の十二月二十八日の有喜世新聞五九二號をみると、記事の中に、本月淺草井生村樓の忘年會で三遊亭圓朝が「西洋人情ジユリヤの傳」といふのをやるとなつてゐる。この「ジユリヤの傳」とは何であらうか私はもちろんその時の話を聞いたのではないから、何ともいへないといへばいへないが、これは多分『黄薔薇』のことであら　。いな、確かにさうだと斷言しても可いと思ふ。ジユリヤとは、『黄薔薇』の女主人公お孃ジユリヤなる毒婦をさすものに違ひないのである。さうすると『黄薔薇』は本になつたのは明治二十年頃だとしても、講談としては少くなくとも明治十二年から巷間に傳はつてゐたものに違ひない。さうなると、あの小說の內容に照して相當探偵小說趣味を刺激するところがあつたと想像して可からう、そこで、これ亦淚香出現以前に於いて探偵小說趣味を鼓吹した先驅的作物の一つだといふ事になるわけだ。『黄薔薇』がさう古いものだといふことは、知らぬ人が多い。一寸御參考までに。

（再考。二十年一月にこの『黄薔薇』は東京繪入にのつてゐる。それを思ふと、何うも二十年以前に

は單行本がなかつたとする方が正しからう。)

一五、涙香の『我不知』

『我不知』は涙香の譯物中で、私が今まで現物を見ることが出來なかつたものゝ一つである。それが先月二十七日(海軍記念日)に池袋の赤春堂といふ本屋から、一冊だけ入手することが出來たのは、何よりの欣びであつた。私の入手したのは萬朝報第三十一號の附錄として出たもので、明治二十五年十二月十日の日附があり、本文の初めに「第八回」とあつて、頁は三十一頁から四十六頁までとなつてゐる。若し每號十六頁づゝで一冊になつてゐたものとせば、これは丁度三冊目あたりとなるわけだが、そこは何うであらうか。涙香研究の先輩たる茨城縣下妻の住人藤倉浩吉氏はたしか第二冊目をもつてゐるとかいふことであつた。

これは、元來、二十五年八月二日から都新聞に譯載されたものであるが、同月涙香の退社と共に中絕となり、その後同年十一月萬朝報の刊行と共に附錄となつて出たことは私の涙香著譯目錄に記して置いた通りだ。たゞ一寸疑問になるのは、都新聞に出た分をまとめて萬朝報の附錄にしたものか、それとも都新聞の分はそのまゝとして、それにストーリイがつゞくやうに萬朝報の附錄を出したものか

の點であるが、私はたゞ今のところ何うも都新聞につゞけたものではないかと思つてゐる。それは、回數の分け方からの當て推量であるが、私の入手したものは、一冊全部で第八回となつてゐるから、この前の分二冊あつても、その二冊で七回分は覺つかないわけだ。何うも都につゞけるやうに附錄を出したものであらう、その方が、讀者を引張る上からいつても上々の策であるからだ。

ところで私は今此の『我不知』のことを特別にとり上げたのは、何もそれが手に入つたことを自慢するつもりからではない、現物一讀の上、その原作について訂正の責任があると感じたからだ。

あの涙香著譯目錄には、私は現物がないまゝ、古い記錄をそのまゝ信じて、原作はウイルキイ・コリンズの『無名』(No Name) だと記入して置いた。ところが、今度その現物を見て驚いたのは、コリンズはコリンズだが、『無名』ではない、彼の代表作の一つたる『月長石』(The Moonstone) なのだ。『無名』と聞いたときには、成る程これで『我不知』かなどゝ獨り合點をしたものだが、今度原作が「月長石」と分つて、『我不知』の意味がよくわかつた。これは卽ち我知らずに犯した罪といふので、『月長石』の內容を一通り心得てゐる人なら、すぐうなづける題意なのである。

涙香はコリンズの作物を可成多く讀み、その二三を紹介してゐるが、何うしてその『月長石』、乃至『白衣の女』に手をつけなかつたのかと不思議に思つてゐたが、この『我不知』をよむに及んで、彼が早くも『月長石』に手をつけてゐたのを知つた。

コリンズの興味は、明治二十二年彼の死が傳へられてから急に高まつたものらしく、涙香よりやゝ前に報知新聞に原抱一庵が『月珠』即ち『月長石』を紹介してゐる、又やゝ後の都の花（小說雜誌）に抱一庵だつたか誰だつたかの『白衣の女』も紹介されてゐたやうに記憶する。このコリンズ紹介が從來、佛蘭西物全盛の觀があつた我が國の探偵小說界に一轉機をつくるに至つた先驅的現象といつて可い。勿論、英國探偵小說が本式に優勢になつたのは、三十年代に入つてコナン・ドイルが紹介されてからだが、その機運はそれよりも七八年も早いコリンズ紹介に端を發してゐるといつて可からう。『我不知』は、さういふわけで、小冊子ながら涙香の生涯及び日本の探偵小說界にとつて記念すべきものといひ得る。新聞附錄だけに稀本たる點はいふまでもない。

一六、探偵小說と春の屋朧

涙香の飜譯小說が全盛期に入りかけた明治二十年頃、一般文壇方面にも探偵小說熱が波及して、いろいろこれを試みる人のあつたことは、既に第二回に述べたが、あそこは、本來もう少し詳しく述べるべきところであつた。その不足分を、今こゝで補足して置かう。

先づ春の屋朧、即ち坪內逍遙と探偵小說の關係だ。

後年倫理教育、藝術教育その他教育といふことに凝り固まつた時代の逍遙は、探偵小説や大衆文學などをあまり好まなかつたらしいが、然し明治二十年前後の柔軟性に富んだ春の屋主人の頃には、小說の種子をとるため外國の大衆文學を盛んにあさつたものだ。さうしてその次手に一寸ばかり探偵小說の方にも足を蹈み込んでゐる。

第一は『贋貨つかひ』で明治二十年十二月から讀賣新聞に出た（二十一年八月單行）。この原作は例の米國女流探偵作家アンナ・キヤザリン・グリイン女史の『X・Y・Z』といふものである。譯といふよりは梗概といつた方がよく、譯名來栖政道といふ名探偵がX・Y・Zと名乘る贋貨つかひを探索に赴いて圖らず別の殺人事件の渦中に捲き込まれる話で可成り面白く讀ませる。最初に春の屋主人の長い前置があつて、此の小說の譯出に着手した由來や、飜譯上の用意態度などを詳しく述べてゐる。

明治二十五年に至つて、涙香の都新聞退社と共に、都から賴まれて飜譯大衆小說を寄稿したことは前べた通りであるが、その小說は『大詐欺師』、『電小僧』の二篇で、二篇ともに若干の探偵小說趣味がある。『大詐欺師』は米國某氏〔戲曲〕"False Friend" を小說化したものといふが、行衞不明の友人の家に、友人の替玉となつて乘り込み、財產を横領しようとする話、後に『ふた心』といふ題で單行本となつた。『電小僧』の方は英國の大衆小說家ウイリアム・エインズウアースの『ジヤック・シエパード』の譯で、原作は有名でもあり又頗る面白いものである。だが春の屋主人の紹介は、その三分の

一程のところで中絶してゐるし、この方は單行本がないので、これは餘り人に讀まれない。二篇とも當時春の屋主人の門下にゐた奥泰資が筆記したものといふ。譯文の調子は、務めて涙香風にやつてゐるが然し魅力が到底涙香程でないのは止むを得なからう。

春の屋主人の友人饗庭篁村のポウ紹介のことは、既に述べたが、そのポウは、矢張り春の屋主人の學友高田半峯の談話から出てゐる。半峯の同窓の友に丹乙馬といふ人がゐたが、この人は英語が得意で、早くから外國文學に親しんでゐた。半峯の外國文學涉獵も、實はこの丹氏の手引きによるものでポウをよましたのも此の人であつたといふ。丹氏がポウを愛讀したのは明治十一、二年のことだといふから、相當早い、若しこの頃丹氏かそれを紹介してゐたら、丹氏の名も明治探偵文學史上先驅者の一人として輝やいたものになつた筈だ。この人は東京大學を卒業せずに去り、外交方面に多少關係したきり早く歿したので、今は名を知る人も少ない。愛媛縣の人であつたとは半峯氏の直話である。

一七、鷗外と探偵文學

よく逍遙を語ればすぐ鷗外が引き合ひに出されるが、鷗外も全く探偵文學に緣がないではない。今鷗外の初期の著譯文集たる『水沫集』を開けてみると、その中に、「玉を懷いて罪あり」の一篇がある。

これはホフマンの『マダム・ド・スキュデリイ』の譯で、いはゞ怪奇探偵文學といつてもいゝ作だ。飾り職カルヂリヤツクのヂキル・ハイド的生活が、例の薄氣味の悪い說話法で物語られてゐる。これは明治二十二年三月讀賣に出たものであるが、これから十年もその餘も後に、文藝倶樂部か新小說かにポウの『リユーモルグ殺人事件』を抄譯したことがあつた。『諸國物語』の中にも探偵文學に類するものが一二あつたやうに思ふが今はつきりは記憶してゐない。

一八、初期の創作探偵小說について

涙香の全盛と共に探偵小說熱が一般文壇にも波及したが、それが幾分か新進作家をも動かして、彼等をして創作を試みさせたりした。その一例として幸田露伴を擧げやう。

涙香の創作『無慘』は二十三年の發表だが、須藤南翠は二十一年に『殺人犯』を發表して居り、創作では流石に文壇作家の方が先鞭をつけてゐる、露伴の試作も、涙香より少し早く、二十二年の發表である。それは「是は是は」と「あやしやな」の二篇であるが、『是は是は』の方は支那流の種のある手品らしく、『杜騙新書』あたりからつくりかへたものではなからうかと思ふ。騙者が人をかたらうとして自分で智慧まけがし、却つて裏を掻かれるといふ話は、往々聞くところだ。「あやしやな」の方は

純粋の探偵小說で、篇中の人物も地名も皆外國風だが、飜譯ではなく、矢張り一篇の創作小說であるといふ(直話)。二十二年十月都の花に發表されたものだ。

若い美しい妻をもつてゐたバァドルフといふ老人が死ぬ。その死樣は明白に毒藥による頓死とうけとれるが誰も毒を飲ました者がなく、他に毒殺者も見出されない。老人の死ぬ時居合した若い妻と、醫師と、老人から恩人の樣にいはれてゐた伯爵シャイロックとが三人とも嫌疑をうけるが、訊問の結果犯人でないと判つて、放免される。だが警察署長は猶ほも心をゆるめず三人を監視させる。すると妻と醫師は別狀ないが、伯爵の擧動に少しをかしいところがある。そこでバァドルフの死去前に飲んだ藥物を分析してみると、醫師のくれた甘汞を飲んだ外、伯爵からもらつた鹽酸レモナーデをのんだことがわかる。これは各一品では別に毒ではないのだが、同時にのむと、胃中で劇藥の昇汞となつて、飲んだ者が悶死する、バァドルフの死因がこれだと分かる。然し伯爵が何故さういふ細工をしたか、その原因を探るため、愼重に探偵をつゞけてゐるとバァドルフの前妻ボナといふものが出て來て、バァドルフと伯爵の關係がわかる。伯爵は、かつてバァドルフとボナの間に出來た娘クイックリイを暴力で犯したので、クイックリイは許嫁の男に操を立てゝ水に入つて死んだ。伯爵はクイックリイの死因の口留料としてバァドルフに每月百五十弗づゝ渡して來たものである。ところが、今度バァドルフは熱病にかゝつた、そこで伯爵は、病人が熱にうかれてクイックリイの一件を口走りはせぬかと心配

で堪らない。心配の餘りつひ惡心を起して毒殺の細工をめぐらしたものだとわかつた。そこで署長は、醫師や探偵の應援を得、シヤイロックの病氣の時に、幻燈を利用してバァドルフの幽靈を出させ、シヤイロックを苦しめて、その罪を白狀させる、甘汞と鹽酸レモナーデの化學的混合がこの小說の中心興味であるところは、南翠の創作とは又別な一面を示すものといつて可い。

「あやしやな」は漸く探偵小說流行の兆があるのを見て、戯れに草したもので、友人達にこれを見せて、「一種がわかるなら見つけて見ろ」とからかつたが、流石誰も見つけたものがなかつたといふ。それもその筈で、無い種は見つかるわけがない。呵々。

露伴の外、硯友社系の山田美妙にも、この頃探偵小說めくものが一つ二つあつたと思ふが、こゝにわざわざ擧げる程のものはない。紅葉にははつきり探偵小說といへるものはなかつたやうに思ふが、それでも、やゝ後れて『紅白毒饅頭』『八重襷』、『片ゑくぼ』のやうなものがある。これは然し探偵趣味から出發した作品でないから探偵小說的分子があつても、こゝには擧げぬことにする。讀みたい方は、彼の全集で讀んだらいゝ。

硯友社連中で、探偵小說の點から注意すべきは、先づ中村花瘦（雪後）を擧げなくてはなるまい。花瘦については項を改めて說くことにしよう。（昭和十一年十二月—十二年八月、探偵春秋）

一九、中村雪後、井上笠園、加藤紫芳

前にも一寸述べたが、文壇畑で最初の探偵小説家ともいふべき一人は、中村花痩、即ち雪後だ。花痩は當時明治文壇に勢力を張つてゐた硯友社の中堅の一人で、同じ硯友社でもその文名は格別高いといふまでにはいへないが、面白い風格をもつた作家で、或る意味でのヴァサチリチイもあり、英文學の素養もあり、何方かといへば、次第に發展して行く方の型の作家であつた。探偵小說に着眼したのも、彼が何とかして一流を切り拓かうといふ試みの現れで、彼のヴァサチリチイを示すものであらう。だが漸く探偵小說の面白味を感じたかして、意識的にこれが創作にかゝるやうになつた。今日中村花痩などといつても、專門の文學史家さへ彼の作の一二を讀んでゐるか何うか怪しいものだから、探偵小說の讀者など、彼について全然知らぬとしても、怪むに足りない。少し詳しく紹介しよう。

花痩の本名は中村壯、本姓は篠崎氏で、別號を柳園ともいふ。後には專ら雪後と號した。慶應三年江戸赤坂藥研坂に生れ、明治三十二年二月七日牛込新小川町の寓居に歿した。まだ三十三の若さであつた。父は舊幕臣篠崎德彰、維新後鳥取縣大書記官を經、日本銀行金庫課長となつた。母は居區氏、久子。雪後は初め四谷にあつて小學教育を受け、又某漢學塾に學び、その頃から漢詩に特別な嗜好を

もち、又叔父大竹昌徳に就て、夙に雪門の俳諧に遊んだといふ。十八九の頃神田に移り、一ツ橋の高等商業學校に入學したが、正規の學課よりも、文筆讀書の方により多く親んだ。同窓には飯田旗軒、丸岡九華などがゐた。九華の紹介で硯友社に入てからは、文筆の方が面白くて、遂に學校を退てこれに專心することになつた。小説としての出世作は、「谷間の雪」(二十四年八月十一日、都の花)であらう。爾後、が、文壇にその名を認められたのは『離れ鴦』(二十四年八月、新著百種第十七號)であらう。爾後、讀賣新聞、山陽新報等に小説を寄稿し、硯友社の中堅作家の一人として相應人氣を集めた。前者に寄稿したものでは「晒し井」後に寄稿したものでは「陽炎」などが有名であつた。日清戰爭の際には、春陽堂の依囑を受けて、獨力『日清交戰錄』の編輯に當つたことがあり、戰爭後、やまと新聞社に入り、轉じて萬朝報記者となり、傍ら「新小説」「文藝倶樂部」「少年世界」等に小説を寄稿した。その中でも「薄けむり」(二十年六月、新小説)「抓み鹽」(三十一年七月同上)等は好評であつた。彼は、これ等の作で、文壇一部の要望であるユーモア文學を拓かうといふ心持があつたらしい。晩年は不幸つゞきで妻君を失ひ、二兒を先立て、ついで自分が病んで歿した。萬朝報に掲載された「三人若衆」はその絶筆である。彼には漢詩の嗜好があり、大分後まで續いてゐた。また俳諧には前の如く素養があつたので、硯友社の句會の紫吟社でも、錚々たる作者であつた。英語が讀めたゞけに、英米の小説を耽讀しては、よく飜案した。作品は『五少年』(二十四年四月、少年物)、『離れ鴦』(二十四年八月)、

「一閃影」（二十六年三月）、『陽炎』（二十六年九月）、『こぼれ萩』（二十六年十月單行、「晒し井」外一篇）短篇小説明治文庫第七編中村花痩集（二十七年二月）、『ぬくめ鳥』（二十七年十月、小説百家選）その他である。その中で私の讀んだ探偵小説は「谷間の雪」、「一閃影」、「陽炎」等四五篇に過ぎないが、私の知らぬもの匿名で書いたものなどまだ十數篇もあると思ふ。東京の新聞に書いたものにも探偵小説はあるが、地方新聞は大體探偵小説がかつたものゝ方が多かつたらしい。本來は探偵小説でないものでも、好んで探偵小説らしい趣向を取り入れたりした。又、仔細に讀んだら外國通俗小説又は探偵小説の燒直しも可成り多いことゝ思ふが、然し何れにしても、彼が意識的に、自分から買つて探偵小説界に飛び込んだ點は認めていゝ。それだけに先驅者の一人として、探偵小説の歷史には特筆していい人だらう。

中村花痩と前後して、やはり探偵小説の方に年を向けた小説家は、井上笠園である。笠園は然し花痩程の意識があつたか何うか、探偵小説の作品も亦、さう多くない。私の讀んだものは『記留物』（二十六年）、外一二篇に止まつてゐる。大阪方面に長くゐたので、一般的に知られずに終つた作品も多いことだらうと思ふ。傳ふる如くば、彼は、本名を眞雄といひ、槐堂仙史とも號したといふ（槐堂仙史と號した人は他にもある）、慶應三年一月下總佐倉に生れ、慶應義塾で勉强した後、金港業に入つたといふ。それから都新聞、土陽新聞に轉じ、二十六年大阪毎日新聞に入り、三十三年に死ぬまでそこにゐ

た。新聞雜誌の小說としては、時代物世話物ともに書いたが、何れかといへば時代物、浪六風で今少し地味なものを得意としてゐた。この方の作品は十數篇ある。

笠園に次いで名の憶ひ出されるのは、紫芳散人加藤瓢乎である。これは小說家としても新聞記者としても笠園や花瘦の先輩であり、可成り古く、もう十年代から讀賣新聞の記者をしてゐた。讀賣新聞が明治十九年、正式に新聞小說として載せた「鍛鐵場主」はフランスの通俗作家ジョルジュ・オネーのものであるが、これは紫芳の筆になつた。紫芳は尙ほヂュマの作二三の作家のものを譯してゐるから何うもフランス語が讀めたものらしい。一々英譯によつたものではなからう。その後も二三の探偵小說風なものはあつたやうに記憶するが、『血塗室』(明治二十六年)のことははつきり覺えてゐる。これはボアゴベイの飜案(といつても地名人名を日本風にしただけのもの)で、原名を矢張譯語そのまゝの Salon Sauguinolent といふのだといふ斷りがついてゐたと思ふ。何うも、どの程度か知れぬが、フランス語が讀めたのではなからうか。『椿姬』の最初の全譯者もこの紫芳であるが、この『椿姬』も矢張り原文譯らしい。

紫芳は美濃大垣の人で(藩士)、安政三年八月生れ、大正十二年七月歿した。前記の如く讀賣に長くゐたが、明治二十二年頃同紙に一寸した改革めいたことのあつたとき退社し、大阪へ下つて、大阪朝日新聞に入つた。同社でも厚遇したし、本人も得意で、渡邊霞亭と交互に小說を書きつゞけてゐた。

ずつと在社してゐたら、同社の元老として不自由のない晩年を送れたらうに、在社十數年で故あつて退いたまゝ不遇の生涯を終つたといふ。

この邊で、筆を轉じて、ずつと前に一寸豫約して置いた硯友社と春陽堂の苦肉策を語らう。

二〇、探偵小說全盛と春陽堂の共同策

何といつても、明治二十四五年から探偵小說が壓倒的勢力を占め、純文學方面の旗色は餘り面白くなかつた。然し見やうによれば、これは逆にもいへるので、純文學方面で小說の行詰つた結果、殊に寫實、寫實とやたらに寫實を貴んだ結果が、小說は實に面白くない、つまらないものが多くなつた。その反動として、筋の變化に主點を置いた興味本位の探偵小說が繁昌したともいひ得やう。

此頃(明治二十六年)探偵小說流行、黑岩涙香の飜譯が非常な勢ひで流行してゐた。それに續いて水田南陽外史(榮雄)も「中央」で盛んに書いた。

江見水蔭の『明治文壇史』にかうある(「探偵小說退治」の條)。文壇の作家側でも探偵小說全盛の煽りを喰つて閉口した連中は多かつたらうが、第一に閉口したのは、文壇小說一手販賣所として時めいてゐた春陽堂であつた。そこで、春陽堂の主人、和田篤太郎、號鷹城といふ「ヒゲ」の先生が、いろ

〱と頭を絞つて、探偵小說退治の策を立てた。それは以毒制毒の手段だ。同書にいふ、――

「とても探偵小說が横行しては、純文藝物が賣れが惡いですから、一つ毒を制するに毒を以てするとやらで、探偵小說文庫を出して、安價でドシ〱賣つて見ませう」

春陽堂の主張で、それを紅葉の處に持込んで來た。それで紅葉は、早速硯友社中の決死隊を募集した處が、思案（石橋）、花瘦（中村）、風谷（細川、後の講談師）といふ連中が勇んで應募した。云々。

その決死隊の中には江見水蔭も加はり、泉鏡花さへも一席買つて出た。さうして明治二十六年の二月から翌二十七年の二月にかけて「探偵小說」といふものを二十六集まで出した。

成る程、春陽堂の主人が、苦肉の策として安本の探偵小說をどん〱出したといふのは、事實であらう。然し苦肉の策といふのは硯友社に對する表面の口實で、內實は、當時大繁昌大賣行の探偵小說だから、安本を出せばきつと賣れるに違ひないといふことは、「ヒゲ」の先生がちやんと見拔いてゐたところであらう。從つて探偵小說の退治は表面の、だが第二の目的で、事實は春陽堂の會計をウンと肥らせることが第一の祕密な目的であつたのだらう。どうも、私は、春陽堂は最初からさう考へてゐたのだと思ふ。然し何の口實もなしに探偵小說を出しては、硯友社や他の文壇作家に具合が惡いのでわざと退治々々と騷いだものであらう。或は紅葉あたりも、春陽堂の腹の中を見透してゐたのかも知

れない。

それでかういふ策で探偵小説の退治が出來たかといふと、事實は出來ぬのみか、益々全盛の感を與へ、春陽堂までが降參したといふことになつた。

舞姫、細君の時代は夢の如く去り、探偵小説、鐵道小説の時代は來れり云々

これは、徳富蘇峰が「文學社會の現狀」を論じた文章の一節（二十六年五月國民之友）であるが、他にも、さういふ記事が澤山ある。つまり探偵小説の全盛の火の手を益々强めたに過ぎない結果になつた。だが、その本なるものは大賣れで、春陽堂がホク／＼したことはいふまでもない。だから早稻田文學などは、春陽堂を拔目のない出版屋だといつてゐる。

「探偵小説」二十六集の目次を擧げると——

（一　集）十文字　（二　集）百萬兩　（三　集）電氣の死刑
（四　集）五人の生命　（五　集）やれ手紙　（六　集）影法師
（七　集）足の跡　（八　集）美人狩　（九　集）風流醫者
（十　集）血染の釘　（十一集）活人形　（十二集）怨の片袖
（十三集）ひだりきゝ　（十四集）黑髮　（十五集）銀行の祕密
（十六集）無頭の針　（十七集）手形の賊　（十八集）火中の美人

（十九集）四　本　指（二十集）緋　　　櫻（二十一集）美　人　石
（二十二集）殘　　　菊（二十三集）船中の殺人（二十四集）物　言　ふ　玉
（二十五集）女の死骸（二十六集）親　か　子　か

以上二十六册であるが、春陽堂はそれに味を占めたか、更に「高等探偵」といふものを出した。「探偵小說」の方は短篇であるが、この高等の方は、いはゞ長編である。この高等の方も、二十六年から始めて、『木戶少佐』、『戀之嫉双（ねたば）』、『大毒藥』などを出したが、何篇出したか、大方上記三篇に止まつたらう、尙ほ探偵小說中、（十一集）の『活人形』は鏡花、（十九集）の『四本指』と（二十三集）の『船中の殺人』（二十五集）の『女の死骸』の三篇は江見水蔭の手に成る。水蔭はそれ以後探偵小說めく小說も可成り書いて、花瘦と共に硯友社中の異彩となるのだ。

探偵小說退治の苦肉策は、事實に於いて、探偵小說煽りの苦肉策となつたことは、全く苦肉でない皮肉な現象であつた。

だが探偵小說の全盛も二十六年が止りで、二十七八年の日淸戰役以後は、讀者はやゝ食傷の氣味で探偵小說よりも、もつと通俗な講談が歡迎されることになつた。日淸役から日露に至る約十年間は探偵小說史でいへば、過渡期で、この間に舊探偵小說は、一應吸收淸算されて、探偵小說界に新しい現象が起る、その一はドイルの紹介とシヤァロツク・ホームズ物の流行、後には創作探偵小說の轉向、

即ち單なる探偵小說でなく、冒險探偵乃至家庭小說的趣味をもつたものゝ流行だ。だが探偵實話は、講談と提携して、却つてこの頃の方が勢力を張つた觀がある。そして明治三十三四年には、大阪方面にも探偵文學熱が起つて來て、丁度春陽堂の「探偵小說」のやうな叢書風のものが、百册近くも續刊されてゐるが、その多くは皆實話を燒き直したやうなものである。

春陽堂のものと違つて、この大阪の方の叢書などは餘り知る人も少なからうから、目次だけ揭げて置く。それが何れも駸々堂の發行になるものである。「探偵小說」の方は、全く春陽堂のそれを形式的に眞似たもので、都合五十一集までは出てゐる。

（一）薄皮美人（二）鬼美人（三）かたき討
（四）生劍（五）少將姬（六）暴殺事件
（七）福富中佐（八）稻妻（九）大蛇美人
（十）美人殺（十一）天刑木（十二）三筋の髮毛
（十三）七人の慘殺（十四）金の指環（十五）六人の死骸
（十六）土藏切近江榮公（十七）なま首（十八）嫉み男
（十九）人食鬼（二十）恨み刄（二十一）拳銃自殺
（二十二）情婦殺（二十三）蛇の目傘（二十四）妖怪寺

（二十五）幽靈船（二十六）X光線（二十七）風琴娘
（二十八）美人と短銃（二十九）地下鐵道の女賊（三十）放火犯
（三十一）暗鬼（三十二）善乎惡乎（三十三）保安條例の犯罪
（三十四）指頭の肉（三十五）胸三寸（三十六）頑固の寃罪
（三十七）旅役者（三十八）一軒家（三十九）倉庫の小刀
（四十）證據の片袖（四十一）片割月（四十二）活髑髏
（四十三）婦人の念力（四十四）朧影藝者殺（四十五）白露骨
（四十六）社會主義三人娘（四十七）六甲山（四十八）新聞配達
（四十九）谷中の美人（五十）雪の鷺（五十一）可憐孃

こゝまでは分つてゐるが、それ以上は一寸分らない。これで打ち切つたものか何うか。更に春陽堂の高等探偵に相等する「探偵文庫」といふものが二十冊出てゐる。

（第一編）瀧夜叉阿仙（第二編）監獄破（第三編）華族の變死
（第四編）暗穴地獄（第五編）慘殺事件（第六編）西洋幽靈奇談
（第七編）晒し首（第八編）妾の魂膽（第九編）祕密電報
（第十編）磐若之面（第十一編）汽車强盜（第十二編）鑛山の魔王

（第十三編）可憐のお園　（第十四編）數罪の探偵　（第十五編）伊吹峠
（第十六編）二人探訪　（第十七編）夜叉娘　（第十八編）二人幽靈
（第十九編）毒婦お化　（第二十編）古茶箱

内容からいつたら言ふに足るものも讀むに足るものも極く少ないであらうが、何れにしても、盛んなものといはなくてはならぬ。

二一、國事探偵と戰時探偵

此の二つは、探偵小説の變種と見るべきものである。國事探偵の小説は、人の考へてゐるより遥かに多いもので、又文壇側の人々もいろ〳〵と手を染めてゐる。中西梅花、須藤南翠さては巖谷小波までがやつてゐるが、その典型的なものは伊藤痴遊の講談に見られる。壯士物語、照山峻三慘殺、群馬暴動の話などがそのいゝ例である。痴遊は自由のシヤレであるが、本來は自由黨生粋の壯士上りの彼の講談には、他人の及ばぬ眞實な空氣がみちてゐる。もとより事柄には虚構もあり、間違ひもあらうが、彼が自身に感得して來た當時の政治界の空氣といふものは實によく出てゐる、生なかな政治史や政黨史などをよむより、ずつと好く當時の政治運動のことが分かる。

戰時探偵は、國際的な軍事探偵のことであるが、これの小說になつたのは、さう澤山はない。小說としては半井桃水の『胡沙ふく風』、山田美妙の『女裝の探偵』、實話としては長田偶得の『戰時探偵』、尙ほ少し後になるが楓村居士の『橘英雄』の類もこれに入れていゝかも知れない。此の種の作が日清役以後に多いのは、日本の對外關係上、當り前のことだと首肯される。上島長久の『釋元恭』といふ傳記とも小說ともつかぬ面白いものがあつたが、あれなどもこの方面の文學に分類さるべきであらう。（中絕）

明治出版史骨

一

出版は古い語であるが、出版文化といふのは新しい語である。人間活動の一切を新に文化といふ規準から觀察する自覺がついてから以來のことで、ヒヨつとしたら大正年代以後の所產であらうも知れない。語そのものゝ鑄造された年代の考證は何としてもいゝとして、語意を一考する方がそれよりも必要であらう。既に出版文化といふ以上、單に出版といふことゝは違ふ。出版文化といふ語には、文化價値に力點を置く觀念が強くにじみ出てゐる。文化といふ語の定義には相當喧ましいものがあらう又正體が正體だけに立場立場でいろいろ喧ましくいふのも當然かも知れないが、極々大ざつぱにいへば、人間社會の精神的財產、知的蓄積、先づさういつていへぬことはあるまい。さういふ知的財產の蓄積過程に於いて（などといふと、何かひどく難しい議論をするやうでもあるが）、この出版といふ人間活動の一形式が何れ程の役目を演じてゐるか、その結果總ての人間文化といふものに對して何れ程

の價値をもつてゐるか、それの受ける分前は何れ程のものか、さういふ立場から、自覺的に出版のもつ意義を考へると、そこに出版といふものゝ姿がはつきり把捉されることにならう。そこで出版文化といふ概念も生じて來るわけである。

いふまでもない、文化は、人間の文明生活を維持發展させる根源的な役目をするものである。文化の蓄積過程は多く書物によるのであり、今日書物を離れては殆んど文化といふことが考へられない。人間の頭腦から書物(何等かの)の形で出版され、書物によつて蓄積される。その分配過程に於いても亦、書物によつて人間の頭腦に入るのである。從つて出版といふものゝ、文化に對してもつ責任なり使命なりは、甚だ重大である。從つて又、文化の進歩增大には、出版者の文化的關心の有無多少が、その國の文化の進展を決するといつても過言でない。この意味で、出版文化史の根幹は、技術進歩史でもなく、讀者層擴大史でもなく、出版制度整備史でもなく、販賣制度改良でもない。出版者自覺史即ち出版者側に於ける文化關心史でなければならぬ。

出版文化が一般文化に對してもつ役割はかく極めて大きなものであり、これなしには一般文化といふことも考へられぬ位であるが、こゝで忘れてはならぬことは、出版文化が一般文化を動かす力が強いと同時に、一般文化が出版文化に可成り強く影響するといふことである。兩者の關係は相互的であることを忘れてはならない。甲が進めば乙も進む、乙の刺激で甲も進む。極めて密接な相互關係がある

る。それだから、出版文化史は理想的なものを作らうとせば、一般文化史を根底とした綜合史でなければならぬ。

試みに今明治出版文化史といふプランを立てゝみるとする。先づ初には、何うしても明治時代の政治的、經濟的、社會的情勢の變遷を述べて明治文化一般の進展史を描き、これを基調として、出版文化の大勢、卽ち出版文化が如何にこの明治文化の進展に與かつて來たか、如何に明治の文化運動を動かして來たか、又反對に出版文化自身が明治文化から如何に動かされたか、それを敍する必要である。次に、細說として、出版文化の直接の現れとして、出版された書物について一言する、政治、法律、經濟、文藝、哲學、宗敎、科學、醫學、地理、歷史等々の各部門で如何なる書物が出版されて、如何なる影響を與へたかゞ吟味されなければならぬ。第三に、明治出版文化の一大特徵ともいふべき新聞雜誌について論ずる必要があらう。第四に出版技術進步史、印刷、製本、裝釘等の進步、寫眞版その他の發達、さういふ技術方面を觀察する。第五に出版書肆の硏究である、その歷史、その態度、業績乃至事業としての制度等を文化史的觀點から考察する要があらう。第六に、著者、編輯者、出版顧問等の功績をも一考しなくてはならぬ。

一言にいへば、明治文化史は、明治出版文化の動向に密に卽したものでなくてはならぬ。大正時代然り、昭和時代然り、この理は何れにも當てはめ得るものと考へる。

正直にいふと、これは理想であらう。乃至空想に近いといはれるかも知れない。明治文化の研究がまだ完全に行はれてゐない今日、私の注文するやうなプログラムで明治出版文化史が出來るものではないかも知れない。私も或る程度まではそれは認めるが、然し只今のところでは、今日の程度の明治文化研究に相應した出版文化史さへ出てゐないらしい。出版文化が今日の程度に達し、出版者側の文化關心が今日の如き盛んなものがあつて、而かもその歴史が一部もないといふのは、驚くべき怠慢である。いな、私は他を責めるのではない。私自身、吾等自身の怠慢を鞭撻したい。つまりさういふ氣持が、私を上のやうな理想を描かせもしたのである。

この篇の如き、上の如き理想の現れと見ていたゞいたなら、全く總身に冷汗の思ひを禁じ得ない。私の所期は別にある、この篇を私の理想的出版文化史の萠芽だなどゝ考へられることは、私の欲しないところである。こゝでは私はたゞ「さういふ理想をもつてゐる者がゐる」と知つていたゞけば足りるので、本篇そのものは、さういふ理想を抱いてゐる私の眞の隨筆と見流していたゞきたい。

二

明治維新は、日本の歴史上に於て兎もかく社會百般に革命的影響をへ與たものであるが、出版にと

つてもさうであつた。日本出版史は明治期に於いて劈頭一大革命に逢着したものといつて可い。木版から活版へと出版様式の變化、手摺から機械刷へといふ印刷様式の變化、和綴より洋裝へといふ製本様式の變化等に根本的な變化が幾つも幾つも行はれて、書物の生産高が次第に大量になる。交通の便利が益すにつれて書物の頒布販賣が容易になる、教育の普及につれて、書物に對する要求が增加して來る。如何なる點からいつても、出版革命の時期であつた。

活版技術の恩人としては、何といつても、長崎人本木昌造永久の名が第一に出るが、これは當然のことであらう。昌造が始めて活字を試作したのは、嘉永四年であつたといふ。その後自ら工夫し、人をして支那に學ばしめ、又米人に就て學ぶ等の苦心が種々あり、遂に長崎活版所を起すに成功した。これを東京に移したものが、築地活版所であるといふ。昌造を助けに人には、前に陽其二があり、後に平野富二がある。共に長崎の人である。其二は、上京後、横濱毎日新聞の創刊、その他の功績に見るべきものがある。平野は卽ち本木の事業を大成せしめたもので、明治五年築地活版所を建てた如きも、富二が與つて力があつたといふ。殊に富二は本木の第一の高弟といふべく、英學も出來、學問もあり、なかなかの人物であつた。今日吾等は、此の三人に先づ感謝するところが、なければならぬ。陽、平野二氏の如きは一般にその功績を忘却されがちであるが、これは注意されなくてはなるまい。

明治新政府でも、競ふて西洋文物を移入する風であり、いはゆる文明開化が先づ政府から首唱され

るのを常としたものであるが、出版の點に於いても活版印刷の利を認め、明治四年和泉橋の大學東校の構内に文部省直屬の活版所を設けて、盛に印刷出版をやつた。このことが何れだけ民間の活版印刷を奬勵したか知れない。この時文部省の命を受けて印刷に當つたのは、本木の弟子の平野富二及び茂中貞次等であつた。茂中は、後に大阪で記者及び小説家として名を馳せた宇田川文海の實兄であり、文海自身この活版所で職工として活版印刷を見習つたものであつた。

政府の出版印刷は、勿論種々な必要があつてのことであるが、これは前代幕府の聖堂でやつた官版の習慣をそのまゝ襲うた傾向が見える。出版に關係したのは、太政官、文部省、大藏省、その他であるが、何といつても職掌柄文部省が第一位を占めてゐた。文部省内には編輯局、飜譯局等があり、小學教料書の外に、西洋の各科啓蒙書、專門學術書等を飜譯出版したものである。（此等の出版の中、時代の古いものは木版が多いことを記憶されたい）。各國の歷史、哲學、科學、數學、工學、理科、文學等に關するものが、幾十種となく出版されてゐるが、代表的啓蒙出版は『百科全書』であらう。これは英國人ウィリヤム及びロバァト・チャンバアスの發行にかゝる『國民須知』（Information for the People）といふ一種の百科全書を何年がかりで全部刊行したもので、最初は一項目づゝ別冊に單行されたが、完成の後、明治十七年一月から翌年にかけて『百科全書』とした大判二冊に纏められた。內容は天文、地理、歷史、神話、哲學、理學、文學等各種に亘つてゐるが常識的啓蒙的な點が特色であ

る。これの完成に最も力を致したのは、長いこと文部省編輯局長をしてゐた西村茂樹（泊翁先生）であるが、彼自ら此の全書で第一卷の『天文學』を擔當してゐる。その他箕作麟祥の『自然神敎及道德學』、『敎育論』、坪井爲春（信道の養子）『養樹論』、大槻文彥『印刷術及石版術』、高橋是淸『衣服及服式』高橋達郞『交際論』、菊池大麓の『修辭及華文』等が注目されるものである。『修辭及華文』は、坪內先生の『小說神髓』に影響を與へたといふので明治文學硏究家の側から最も喧しいものである。

明治十一年以後、印刷局が獨立した一局になるに及んで、政府の出版事業が大に躍進したものと見え、文部省だけを例にとつても可成り大部な書物を何十種となく出版してゐるのが眼立つ。その中には、『心理學』（西周譯）、『思想之法』鈴木唯一譯）、『修身原論』（河津祐之譯）、『國家生理學』（文部省譯）、『主權論』（同）、『蘭均氏土木學』（水野行敏譯）、『毫氏法學講義節約』（大島貞益譯）、『靜重學』（矸付兼行譯）、『植物生育論』高山甚太郞、磯野德三郞共譯）、『維氏美學』（中江兆民譯）、『理學沿革史』（同譯）、『抵洛爾氏萬國史』（文部省譯）、『羅斯珂化學』（同）等々の名が見える。

印刷局の事業を獨立させ監督し發展させた局長得能良介の名も吾等の感謝に値するものであらう。得能氏は單に出版印刷に成功したのみでない、石版印刷に於いて、又洋紙製造に於いて忘るべからざる功績を立てゝゐる、誠に出版文化の恩人の一人である。

三

政府がかく上から出版奬勵の範を示せば、民間の知識階級もそれに負けずに出版に進出した。その或る人々の名は上に擧げたが、明治五年に平野富二が本木氏の助力で築地活版所を設立した。この築地活版を發展せしめて今日の築地活版印刷會社にしたのは、野村宗十郎の功である。この野村も長崎生れでかつて本木氏の弟子であつた。本木氏の功はその點でも明治出版文化界の蔽ふ大きなものであつたといつて可い。野村氏に日本印刷史上不朽の功といはれるのは、劃期的なポイント活字の創始である。

明治九年に秀英舍が出來たが、同舍の創立者佐久間貞一も、明治出版文化の上からは忘るべからざる恩人である。佐久間氏に取る點は、出版そのものを日本の文化を進める上に必須な文明的事業であるといふ自覺から、それに一身を委ねて悔いなかつた點である。佐久間氏は舊幕の士であるが、英人某から出版業の文明社會に必要なものであることを聞き、當時まだ日本式木版印刷の盛んであつたのに歐米式活版印刷が遂にこれを驅逐するに違ひないと見て、活版印刷に志したのは明治七八年のことであるといふ。勿論當面の目的として、宗教關係の新聞を發兌することになつてゐはしたものの、大體

はさういふ自覺から、一の文化事業として出版に向つたのであつた。明治以後の出版界に對する秀英舍の貢獻については、こゝで喋々するまでもない。

譯書及び新聞の出版で有名な老皂館萬屋兵四郎（福田敬業）は、活動時代が明治以前に屬するが、（文久年間）、知識階級出版者の嚆矢ともいふべきものであらう。これについで、明治に入つては、瑞穗屋（淸水）卯三郎がある。これも譯書その他新しい出版をして斯界に生鮮の元氣を與へた恩人である。瑞穗屋の仕事は初めは洋書輸入であり、これに附隨して兵書飜刻（敎科圖書）も盛にやつた。

尙ほ洋書移入で有名なのは、外商ではハルトリー、邦人では橫濱の早矢仕有的（丸善屋商社）、兩國の島屋一介、本所の吉田屋淸兵衞等がある。瑞穗屋の飜刻事業は、伊藤篤太郎、島屋（鹽島）一介、西宮利之助、松井忠兵衞、他一人（早矢仕有的ともいふ）等都合六人で六合館の名でやつたもの、瑞穗屋が代表であつた。

尙ほ少し後れて東洋館、細川書店、富山房も洋書販賣飜刻に貢獻してゐる。

その他金港堂を創めた原亮三郎、博文館を創めた大橋佐平（少し後になるが）、博聞社の長尾景弼、東洋館の小野梓、文學社の小林義則、普及舍の辻敬之、春陽堂の和田篤太郎．これが兎も角も當時の知識階級で、出版事業の有意義を自覺して（多い少いの別はあるが）この業に進出した人々である。法律書肆としての明法堂（何氏か）有斐閣（江原氏）、敎育書肆として牧野善兵衞も此の部に入らう。（此

の人々の外に、舊來の出版屋が澤山あつた。その中で山城屋、これは明治初年の出版界に大きな勢力を振つた、須原屋は諸省出入の御用書肆として可成りな勢力をもち續けた、その他わん屋事萬笈閣江島氏、これは謠本と魯文の作物で知られた、その他日本書籍會社の八尾新助等、まだまだ澤山あつたが、こゝでは新進の知識階級出身者に限つて置かう。)

以上の人々とは多少別の意味で出版文化に貢獻したのは、人もよくいふ福澤諭吉先生だ。福澤先生が出版に乘り出したのは、全く個人的理由からであつて、出版事業の文化的意義への自覺が出發點となつたのではあるまい。最初は自分の手で自分の本を賣る、自分の本で言論を天下に行ふといふ氣持から(勿論利得といふ觀念も加はつてゐたらうが)、出版に關係したものであらう。間もなく出版事業に文化的意義を見出したらうと思はれるのは、明治五年慶應義塾に出版局を設けたのでも知られる。こゝで出版した書物は主として先生自身の本であつたが、それは、『窮理圖解』(明治元年)、『英國議事院談』(明治二年)、『世界國盡』(同)、『啓蒙手習之文』(明治四年)、『學問のすゝめ』(明治五年)、『童蒙敎草』(同)、『かたわ娘』(同)、『改暦辨』(明治六年)等である。さうしてその或るものは發賣高、幾萬幾十萬に達したといふから、事業としての成功も察するに餘りある。

次に、福澤先生が實學的功利主義と稱されるに對し、儒敎に基督敎を加味して精神主義を唱へて對立的立場に置かれてゐる中村敬宇(正直)、この敬宇先生もあの有名な『西國立志編』を出版した時は

自費自家版であつたといふ。これもその後同人社に出版局めくものがあり、そこで一切出版の仕事をやつてゐたらしい。その後の敬宇の著述はこゝで出したものがある。然し事業といふ點からいへば、福澤のそれとは比較にならなかつたと思ふ。然し『西國立志編』や『自由之理』の如き何萬乃至何十萬部賣れて、福澤の著書とは反對な、又は相表裏する大きな感化を世人に與へたことは、事新しく述べるまでもない。(單によく賣れたといふ點では攻玉舍の近藤眞琴の數學物、やゝ後れて丹波敬三の化學物、澤柳政太郎氏の教育物など種々ある、これ等の人々の名も記憶すべきであらう)。

以上の二氏よりは少し後輩になるが田口卯吉も、出版文化の恩人として記憶さるべき人物である。彼も亦舊幕の士族だ。彼が東京經濟雜誌を發行したのは、明治十二年であるといふが、此の雜誌社が盛大になるにつれて、彼は餘力を利用して大に出版文化に貢獻するところがあつた。その最も著大なものに、『泰西政事類典』(明治十五年―十七年)、『大日本人名辭書』(明治十七年―十九年)、『日本社會事彙』(明治二十一年―二十四年)等がある。彼の志は完全な百科全書を作つて日本の文化文運を助けたい爲めであつた、從つて物質的の利得の如きは眼中に置かなかつた。それといふのも、自分自身著述の際に參考書籍の缺乏に散々苦んだからである。『政事類典』はボーンの『政治全書』の飜譯だつたから飜譯流行の當時のことで大に儲かつたものゝ『人名辭書』は豫約者の數は極めて少なかつた『社會事彙』に至つては、發表當時豫約者の數は九十名しかなかつたといふ。社會事彙の跋文に於いて彼

は三書を譯編した理由を述べてゐるが、實に吾等をして頭を低れしめるものだ。彼は多大な物質的負擔を致したに拘らず、社會の爲め、學者の爲め、後世のため、この大業を成就したとて欣然喜んでゐる。鼎軒の如きは、出版文化による社會奉仕を眞に實行したものである。

此の社がその後も種々な大部な出版をして社會に嘉惠を貽してゐる、『國史大系』、『群書類從』縮刷等々がそれだ。

德富蘇峯氏の民友社が、鼎軒の事業を模倣して起つたものであることは、有名な事實である。

四

明治初期の出版文化を論ずるに當つて忘れてはならぬのは、政治熱の旺盛といふ特殊事情である。この政治熱は普通「自由民權」といふ語で代表されてゐる（全體をこの語で代表することの出來ぬのは勿論であるが、中心がそこにあつたといふ意味で、今日でもこれを代表語として可からう）。政治熱は初めは多少暴力主義に傾いたが、後には主として言論戰に終始したので、言論戰の機關として新聞雜誌が大に勃興した。

此の間の歷史的事實については、種々先輩諸氏の研究があり、お蔭で今日可成り明白に知り得るが

然し遺憾ながらこの篇では諸氏の研究成果を概說してゐる餘裕もないので、それは止めるとして、唯この頃の新聞雜誌卽ちジャーナリズムなるものの、出版文化史上に於ける特別な意義を一言したい。此の頃のジャーナリズムは、今日のジャーナリズムとは精神が大分違ふので、今日のジャーナリズムはニュース本位、報道記事本位、興味本位であるが、此の頃のジャーナリズムは、眞の意味での社會の木鐸をもて任じ、人民の啓蒙的、指導的開化的先達となるのをもつて第一の任務としてゐた。勿論ニュースも重んじたがこの任務が第一であるから、何れが重いかといふ時になれば、ニュース本位の態度を捨てゝ惜まなかつた。この點で、當時の新聞雜誌は、形式は新聞雜誌であるが、その精神なり內容なりは、全く當時の啓蒙的開化的な出版物と多分に共通なものをもつてゐたのである。

この政治熱は單にジャーナリズムを勃興させるに役立つたばかりでなく、一般出版の方にも可成りな變化を及ぼした。卽ち政治法律經濟の如き書物の出版を壓倒的に多量なものにしたことである。（といふのも、この政治熱の根底には、時代の實際政治と關連する要求があつたからでもある。）この頃の一流出版書肆と見られる博聞社、集成社、東洋館等の出版目錄を一瞥しても、それが分かる。さうして中には著述もあるが、あつても西洋の受賣が多く、大部分は飜譯である。さては自由出板會社、日本出板會社、二大政書出板會社の如き、この政治熱を當て込んだ飜譯專門の出版社も出現した程であつた。勿論かくして出版されたものは、それぞれの意味での名著大作が多く（例へばバックルの『英

國文明史』、チェールの『フランス革命史』の如き)、當時の讀書人の文化的敎養を高めるには大に效があつたことと思ふ。

概していつて、この頃の文化は飜譯文化、啓蒙文化であり、功利實用の色彩が強い、從つてそれが直に出版文化の方にも反映してゐるわけだ。當時の出版物で最も多量なものはジャーナリズム關係のものであり、これに對する非ジャーナリズム關係の出版で又大多數を占めてゐるのが直接の功利を目ざすもの卽ち法學經濟科學化學等の一般的知識を盛つたものが多い。此等の書物でも高尙な研究思索の結果、卽ち所謂發見とか發明とかに屬する純粹な學問的興味に成るものは餘り出版されてゐない。それは直接の功利的要求を滿足させないからである。況んや本來直接の功利と緣の遠い文學の類は時代が歐化主義の洗禮を受けるまでは、表面的にいつて文化史的に殆ど勢力がない(二三の先覺が文學尊重論をやつたり、『經國美談』『佳人之奇遇』等の政治小說が時代人に感銘を與へた事實はあるが)、實學精神にノックアウトされてゐる。社會の文化的資產として最も尊重されるのは發明と創作といふ分子である。前者は純粹の學問的研究の所產であり、後者は文學藝術の獨壇場であるのに、初期の明治文化にはこのことが甚だ少ない。獨り初期とのみいはず、總體に明治文化は、移入的、啓蒙的、模倣的なものが多分に含まれて居り、嚴密にいつて獨創の面目を發揮し出したのは、大正時代に入つてからであらう。だが勿論その間、不斷に獨創的面目を發揮する準備をしてゐたのだし、その準備の段落

を示す幾つかの小段落は文化史上の旋回點として指摘されることも出來る。
出版の方でも、さういふ情勢に應じて、文化的資産を蓄積する仕事に與かつて來てゐる。現に文學といふものゝ文學的に無價値視されてゐる初期に於いてさへ、他日獨創を示す工作が潜行的に進んでゐたと見られるが、その第一の準備が西洋文學の消化だとするのは普通の說であり、その一面、西洋文學の光りをかりて日本文學を再檢討する機會が次第に多くなつてゐた。
この點から、出版文化史上の現象としては、私は若干の西洋文學書の紹介に對しても同じく、明治十四五年から擡頭して來た日本文學書飜刻の流行を興味ある事實と認める。明治十五年に東京稗史出板會社がまづ起つて馬琴の『里見八犬傳』等の稗史小說を提供した。同じ頃天狗書林兎屋誠なるものが、極めて廉價に各種の書物を出版したが、その中には種々な文學書もあり、飜刻小說もあつた。その中で特に注意を要するものとして、『やまと文範』の刊行を數へたい。これは明治十四年第一集を刊行し、第一、第二、第三、第四集まで及んだと思つてゐるが、內容は『淨瑠璃全集』といふ別名をもつてゐる通り、院本戲曲の全集である。第一集に編者小野田孝吾の緒言があるが、これが頗る面白いものである。「此大和文範ナル者ハ近松氏其他有名戲曲家ノ著ス所ノ院本ヲ纂輯シ其字態ヲ改正シ其巻帙ヲ合併セルモノニシテ人情風俗ノ微妙曲折此ニ曲盡セザルモノナシ實ニ彼ノセイキスピーヤ、ワータスコツト等ノ著作ト美ヲ競ル者ト云ベシ況ヤ其措辭ノ巧妙行文ノ流麗、之ヲ文章ノ上乘ト云フモ可

ナリ亦何ノ卑陋カ之アラン」云々。小野田氏は何ういふ人か知らぬが、これは當時として一寸とした見識といひ得る。戯曲小説の尊重すべきこと、西洋文豪の作と比して日本人の作が劣らぬこと斷言してゐるのは、この頃としては進歩した考へである。この集が慶應義塾出板社で出版されたといふことは、古くから聞くところであるが、若し小野田氏が義塾關係者であれば、一層面白いことにならう。この書は、餘り人が彼是いはぬが、當時の出版物として種々な興味あるものである。

五

歐化主義は種々に評され、概して惡評が多いが、それは鹿鳴館中心の猿芝居だけをさうと考へ勝ちになるからで、廣汎な歐化主義は、近代日本の立ち直るためには是非とも一度經なくてはならぬ精神的洗禮であつた。これを得て始めて日本は立ち直つて凡ての方面から世界的に足を蹈み出した形になつてゐる。歐化主義を貶す連中は、當時の日本が世界の無臺に乘り出すにはこれを經て立ち直らなくてはならなかつたのだといふ情勢を知らぬものだ。

歐化主義は日本人の物的生活から心的生活のあらゆる方面に浸み亘つた。從つて種々な點からの文化的改善が行はれたが（勿論或る意味での改惡もあつたに違ひない）、教育の普及、男女の社交による

知的生活の向上（皮相的にせよ）、婦人の社會的進出等々がその善の方であらう。而して出版文化の動きをいへば、歐化主義に伴ふ文學物の大流行に留意しなくてはならぬ。明治二十年を中心にした二三年間の文學書出版は驚くべきもので、一時流行した政治關係の書物などは全く下火になり、政治物に代るに經濟物、實業關係の書物が頭を擡げて來た。これは主として教育の普及と西洋模倣、社交生活の必要と女性進歩のためであらう。文學が盛んになつた結果、批評的精神が刺戟されて、批評といふものが興つて來る。それが出版文化にも及んで、「出版月評」などといふ甚だ有意義なる雜誌も出現した（二十年八月創刊）。勿論これは營利雜誌ではない、出版文化を重視し、良書を攢めて日本の文化を進めたいといふ初期のインテリ出版者の或る人々の抱いてゐた理想とそつくりな立場から出てゐるものである。その目的の程は、「我國著書、出版、印刷事業ノ改良進歩ヲ圖リ兼ネテ文教ノ上進ニ資セントス」といふ宣言にて知るべく、內容は批評、論說、雜錄、新刊書目、圖書賣買紹介、廣告の六項に別れてゐる。批評は新刊書の批評、論說は「著譯、出版、印刷ノ三業及此三業ニ直接又ハ間接ノ關係ヲ有スル諸事項ノ論說ヲ」掲ぐるもの、雜錄もこれと同じく、前記三業に關する一切事項を細大となく蒐集して記載するもの、實に當時の出版文化を知る好資料である。二十四年八月第四十號で終刊となつたといふが實に惜しい。その批評の如きは懇切丁寧、苟くもせず、奸譎と認められる出版者や著者に對しては實に痛烈

な態度で臨むを常としてゐる。その發行の趣旨を讀むに、「方今書籍出版ノ景況ヲ觀ルニ新刊ノ數日一日ヨリ多キ」を加へ、一見甚だ賀すべき如くであるが、これは出版費の低廉の爲めに大部の古書の飜刻が續々行はれる爲めで、眞に我が國の文化に直接影響する著譯書は幾干もない。且つその幾干もないうちで、眞に心をこめた著述といふのは殆んど稀で、多くは半譯半著であり、且つ著作出版共に容易になつたので、著作出版上の德義が失せ、甚だしい書物が橫行してゐる。これでは書物の量的增加は却て國家の爲めにならぬ。その弊を救ふの方法は如何。「公正ニシテ嚴肅ナル批評ノ高燈ヲ點シテ新刊書籍ノ眞相ヲ照現シ、世人ヲシテ容易ニ其善惡ヲ鑑別セシムル一方アルノミ」。それで「月評」の發刊となつたといふのである。これによつて我が國の出版文化の意識が次第に高まりつゝあつたことを知り、同時に當時の出版著作界の一面の如何なるものであつたかを知ることが出來やう。此の雜誌は杉浦重剛等の首唱に成るものといふのが、誌友の人名を見れば、杉浦を始め穗積陳重、依田百川、高田早苗、高橋健三、坪內雄藏、中村正直、中村秋香、井上圓了、大槻文彥、陸實、矢田部良吉、饗庭與三郎、落合直文、三宅雄二郎、志賀重昂、森田文藏、關根正直等が前後にその名を連ねて熱心に應援してゐる。

歐化主義の出版文化に對する影響として、一般婦人の敎學に關するもの、宗敎殊にキリスト敎關係の眞面目な著書が出たことなども敎へられやう。社會改良思想の浸透から來る、平民社會の勝利を謳

歌する聲が聞えて來る（德富氏の著書の如き）。

歐化主義に對しては勿論その全盛時代からして反對があつたが、歐化主義の目的たる對外策が不成功に終つてからは、その衰勢に赴くと同時に國粹保存の聲が汪然と盛んになつた。これは單に反動といふよりも、歐化を經て更にハツキリと國粹を認識したといふことにならう。この國粹意識の現れがやがて夥だしい國文學漢文學に關する出版となる。かゝる古文學の復活も、一應は西洋文學に眞向から反對して起つたものゝやうに見えるが、單に反對のため反對して起つたのではない。歐化主義に刺激されて强まつた文學尊重意識から、古文學に新な意義を見出してその再檢討に當つたと見なくてならぬ。さもないと坪内雄藏、内田魯庵、山田美妙等何れかといへば西洋文學畑出身の先驅者等が本氣に近松その他の研究にかゝつたといふ心理が說明されない。この人々は何れも單に時流に迎合して足れりとする人々ではないのである。時代は勿論、單に舊弊な漢學者又は國學者の復活跋扈を許しはせぬ、從つて一方では國學和歌の改良といふことが叫ばれてゐる。又、國粹の本家のやうにいはれた「日本人」の一派でも國粹保存といはず、國粹顯彰といひ、格別西洋文物を排斥する態度を示してゐない。この國粹運動は一つの發展であつて決して反動的退步ではない。國勢の現狀からいつてさういふ退步は許されなかつた。たゞ歐化主義の說明によつて、逆に自己の實力に對する認識が深まり獨立心が强まり、自己の實力によつて立ち直らうとする氣持が社會のあらゆる方面に出て來た。それがこ

の國粹思潮の根源である。排他的に自分の殼に閉ぢ籠もらうといふのではない、逆に積極的に自己の實力で進出しようといふ國粹である。從つて實力を賴む心から、實力養成、卽ち富國のために努める心も生じた、經濟知識、實業思想が一面で重視され始めたのはこの爲めである。且つ又、西洋文物の吸收は、日本が日本として自覺した今日、その滋養として益々必要になるから、啓蒙的知識の移入に對する要求は衰へない。實に當時の文化の現狀は混沌といへば混沌たるものである。この混沌に巧みに乘り込んで成功したのが、博文館大橋氏であつた。

從つて二十三四年から日淸戰爭頃までは、出版文化は大體古典と歷史に支配されてゐたといつて可い。一時全盛だつた飜譯は下火となつた。飜譯でも著作の形をとらないと賣れなくなつた。これは文學上でも同じことで、飜譯に代るに、漸く創作らしい創作が出るに至つて、紅露逍鷗などといふ名も唱へられたのである。然し面白いことには、長老の逍鷗卽ち逍遙鷗外には何れも歐化的の臭味がある のに對し、若手代表の紅葉露伴には國粹的な色彩がある。又批評家も、蘇峯對雪嶺といふ風に歐化と國粹の對立的な姿で見られる。これで見ても、歐化主義の皮相的な花々しさは去つたが、實質的に(その精華は)吾等の生活に案外深く浸み込んでゐることが知られる。これ故に、古典と歷史が全盛といふことは國粹意識の强い證據には違ひないが、著者なり學者なりのこれに對する態度は批判的になつて來る。古典復活に盡力した落合直文、歷史研究に努めた田口卯吉等の態度を見れば思半ばに過るも

のがあらう。

六

出版文化の特質は大體以上の如くであるとし、此の明治二十年前後を境界として、出版界に異常が起りかけて來た。それは、出版界に純然たる商法主義が擡頭して、出版業が資本主義的に大規模に行はれる風が出て來たことだ。

明治二十年頃迄の出版書肆、殊に知識階級出の出版者は、文化的動機から出版者になつた人人が、少くなかつたので、中には文化的理想に熱心する餘り、出版の商業的方面を離れて失敗したやうなことが少くなかつた（東洋館の小野梓の如きその好適例だ）。彼等の眼目は、良書の出版であり、專ら利他本願であり、自家の利益を第二第三とするところがあつた。從つて官省に關係がなく、敎科書に手を着けぬ出版者は、營利的に餘り成功しなかつた。それは當然のことだ。從つてその出版振りも概して家內工業的なところがあつた。（此の家內工業的なところは然し二十年代にはとりきれなかつた。）

ところがこの間に、日本の商工業が徐々に資本主義的組織經營に移つて來つゝあつたので、（これは日本の立て直し、世界進出の爲めには、何としても必要であつたのだ）。二十年以後にはそれが漸く

明確な形態をとり始めて來た。これが出版業の方にも及んで、出版も資本主義的に大規模に整然と經營されることになつた。

勿論出版業の方は方で、さうなる事情があつた、それは教育の普及と共に國民の文化的觀野が急に展け、出版に對する需要の激增から何しても著述家と出版者が分業しなければならぬ狀態になつてゐた。こゝからも、出版者が獨立して仕事又は商賣として出版事業を經營する必要が生じ、從つて資本主義化は當然の勢ひであつた。さうなると、勿論營利第一、文化的理想は第二第三以下として仕事を續けざるを得ない。從つて出版の標的も、良書といふよりは、賣れる本、何が賣れるかゞ問題になる。然るに、誰でも知つてゐるやうに、良書か良書でないかは、本そのものゝ性質にあるのだから、自分の眼で一見して分るが、賣れるか賣れぬかとなると、それは讀者即ち世間の評判が定めることであるから、必ずしも本そのものの良否と一致しない。且つ資本主義的營業となると、一家的に一定量の書物を生産しないと仕事を續けられなくなる。この二つの事情のため、出版は甚しく投機的性質を帶びて來ることになつた。いはば書物の生産行程に一大革命が生じて、書物が單なる商品となり、極端にいふとそこらに轉がつてゐる下駄や靴と餘り違はぬものとなつた。

とはいふが、又出版事業資本主義は、文化的にいつて利益もなくはなかつた。それは出版形式が統一され便利になつて來た。大部の出版が可能になつた。又無名の著作家が比較的樂に社會に出る機會

を與へられた。又出版物にヴアライテイが加はつて來て、研究者も讀者も便益を受けることが多くなつた。それ等はその利益ともいふべき點だ。

そこで以上の事情は事情として、安全第一を狙ふ連中は教科書參考書へと奔る。それでは營利事業として安全であらうが、出版本來の目的たる文化への貢獻といふ點からいへば、甚だ十分とはいへない。勿論教科書も、初期は飜譯で間に合せてゐたのに比較すると、その著作發表の始めに當つては正に一の獨創であり、著者の學問的業績の發表に違ひないので、啓蒙以上の意味をもつてゐたが、後々と踏襲的に續出するに及んでは、專ら編纂の巧妙を誇るやうになり、次第にその獨創的價値を失つて來て單に普及を生命とするやうたなつたわけだ。教科書に向ふ人々はこれで可いとして、然らぬ人々は何方に奔るか、時好への迎合、際物本位といふことになる。これは出版中最も投機的なものであり、一時に巨利を博する代り、往々甚だしい損失を蒙むるを免かれない。それでは出版界は墮落するのみである。文化的貢獻といふ理想を失へば、苟も利のある限り爲さゞるところなしで、出版者としての本來のプライドなど問題でなくなる。

かうしてこれ以後の出版者は、文化理想を忘れて、專ら商人意識をのみ出した人々が多かつた。中には雙方とも程よく示した人々もゐた、最も成功したのはこの種の人々である。此の種の人々をして多少でも文化理想に貢獻させたのは、多くはその顧問乃至補助役たる知識階級の人々の功であつた。

大出版書肆の成功には大抵さういふ助言者や助力者がゐるものである。出版史を書く人は、此等の助言者の事にも言及する必要があらう。

勿論出版が資本主義形式で行はれるやうになつたとて必ずしも悪い事ばかりではなかつた。書價が廉くなつたこと、書物が容易に手に入るやうになつたこと、大部の書物が比較的樂に出版されるやうになつたこと等々は、その利と見て可からう。目立つて大部な出版物は、『やまと双書』、『東洋文藝叢書』、『日本文學全書』、『國文全書』、『日本歌學全書』、『支那文學全書』、『帝國文庫』(正續)、『群書類從』、『故事類苑』、『通俗百科全書』等々。以上が古典の保存を目的としてゐるに對し、時代の歴史趣味を語るものとしては、島田三郎『開國始末』、德富蘇峯『吉田松陰』、吉田東伍『日韓古史斷』、田口卯吉の歴史雜誌『史海』等々、編纂物としては、大槻文彥『言海』、山田美妙『日本大辭典』、田口卯吉『日本社會事彙』等がある。日本人一派の『日本叢書』は、別の意味で面白いものであつた。

七

明治時代で有名な出版書肆は多くは明治時代に新に起つたものであり、前代の出版書肆でそのまゝ明治に入つても成功してゐたものは寥々たるものだ。こゝにも明治の出版界の革命的變動が如何に激

しいものだつたかゞ語られてゐやう。

山城屋、わん屋、須原屋、近江屋、何れも前代江戸時代から轉向した出版者であるが、わん屋と近江屋の吉川弘文館が最も長く生きのびたのみで、他は有耶無耶になつた。山城屋稻田政吉の如きは、明治時代の初期には出版界を獨占する勢ひがあり、餘力を驅つて政治界へ進出したりしたが、遂に失敗してしまつた。

明治時代の代表的出版書肆は、明治十年から二十年頃まで起つたものが多い。十字屋、金港堂の如きは十年以前であるが、これ等は極めて早い方である。金港堂の起つたのは横濱であり、そこで金港の屋號も意味をなすわけである。十字屋は、元來から耶蘇敎書肆で、戸田欽堂、原胤昭氏等が創めたもの。これが音樂店に代つたのは欽堂新發明の紙腔琴が當つてからである。十字屋の先代の老母が音樂好きで何うとかいふのは、全然違ふ、老母の關係からでない、欽堂の好みからである。十一年老鶴圃、十二年春陽堂、但しこの頃の春陽堂は繪草紙屋兼の赤本屋で啓蒙的な法律物や早わかりものを出して儲けた、その利益で文學へ向つて來たといふわけ。硬派物出版共益商店の方も早い部に屬する。

十四年三省堂、十五年文學社、名は文學社だがこの頃から敎科書風の物にばかり手を出し、本物の文學へは餘り振り向かなかつた。同じ頃天狗書林兎屋誠が活躍したことは、前に一寸述べた、これは然し二十年頃殆んど滅んだらしい。十六年東洋館、小野梓先生の經營、富山房の前身といはれるもの

だが、それは同じ出版業をやつたからさういふので、十九年に起つた富山房が十八年閉店した東洋館を居抜きで引受けたと解されるから、前身云々はたゞ謙辭として受け取るべきであらう。二十年六合館の合同が成り、同じ年博文館が越後から東京に進出、これで先づ明治出版界は一時期を劃すことになる。(杉浦重剛の『教育論纂』や、飯島魁氏の動物學、その他學術方面出版で一時有名となつた敬業社も此の頃創業であらう。)

二十一年警醒社の前身福音社、目黑書店、二十三年民友社、これより前、日本人派の政敎社、二十七年至誠堂、二十九年同文館、明治書院が起つた。三十年實業之日本社、同時に新潮社の前身新聲社が出版を始める。かういふ型變りの出版者の續出は、又新に一時期をつくる原因となつて來やう。三十四年寶文館、この岡山縣悌三郎氏の內外出版協會が創立されたかと思ふ。又大阪の青木嵩文堂が東京へ進出して來たのが日清戰役の前後からであらう。三十六年東亞堂、三十七八年頃國民文庫刊行會、これより可成り前に金尾文淵堂が活躍をした。大正元年誠文堂が出るが、その前に大日本雄辯會講談社が擡頭してゐる。

改造社、岩波書店、春秋社、アルス等は大正年代の創立らしい、平凡社に至つては昭和年間に屬する。これ等の出版書肆が勃興して來たのは、歐洲大戰から圓本時代にかけてゞあるが、この間に別に左翼出版書肆が續出したことをいひ添へやう。

八

手に任せて『富山房』と『大橋佐平翁傳』をとつて見る、何れも符節を合したやうに、日清役前後に一飛躍したこと日露役前後に一飛躍したことが書いてある。これは、他の何處の出版書肆とて同様であつたことと思ふ。種々な統計も擧げてあり、數量的な見地からは大なる飛躍であるが、文化的見地からは何うか。勿論文化的な進展なり貢獻なりも可成り多い。然し明治初期の出版界に比較すると、出版が技術又は事業として進歩してゐる割合からせば文化的な貢獻は多いとはいへない。これはつまり二十年以後の國粹主義から飜譯を盛んにしなくなつた爲め、西洋文學の刺激が鈍らされた爲め、學問研究の方法がよく把握されなかつた爲め、出版が營利本位になつた爲め、等の原因からだと見て可いであらう。然るに日清役に勝ち、日露役勝つて、日本がノツシノツシ大股に世界的舞臺に登場して來るにつれて、又々日本と世界文化との急激な接觸が始まつた。その爲めに、歐化國粹の爭ひが、世界主義と日本主義といふ風に形を變へて出現し、諸方に猛烈な論爭が行はれた。ロマンチシズム、厭世思想、世紀末思想、ニイチェ主義は何れも世界思潮との急激な接觸によつて、思想の甚だしい混亂となり、その揭句が自然主義の大波が、文學といはず、哲學、戲曲、その他の文化的活動を一色に沒入

した。

此の間に出版界の事情は、早くも又も漸く變じて來つゝあつた。それは單なる營利事業として出版界が行詰つたことである。教科書地だは絶對安全とされていたゞけに、誰も誰もと損を恐れる連中は逃げ込んだ。教科書地帶が滿員となり、超滿員となるに從つて、恐ろしい競爭だ、利のためには手段を選ばぬ。實に醜惡な裏面運動が續いた。だが自然は欺くべからず。蒔いたなら刈らなければならぬ。時なる哉、三十六年所謂教科書事件なるものが起つた。勿論かくあるを察した心ある出版者は、早く教科書出版から手を引いた（博文館、富山房、その他）。これは、出版界の極端な墮落を示すものとして、額に烙印を押されたものであつた。かゝる醜狀を示したのも、出版といふものゝ文化的使命、その理想を忘れたからに外ならない。そこで明治初期とは別種の知識階級人が、それぞれの文化理想を出版界に注入して、出版界の更生を計るといふ形になる、實業之日本、新潮社、內外出版協會、かういふ出版者の擡頭出現は、私はかういふ意味があるものと見たい。さては、講談社の勃興も、この氣運を利用したものといへるであらう。況んや大正昭和時代に出た名のある出版書肆に至つては、勿論大きな文化理想を抱いて立ち上つたのであつた。

私は日淸から日露までの出版界に、營利意識が強く、文化意識が弱いやうなことをいつたが、それは初期に比較して退步したといふのではない、進步が鈍つた位に解していたゞくべきだ。いふまでも

なく一般文化の進展につれ、出版文化の各方面も、新しい分子を取り入れ、新しい經驗に接觸して、それ相應に增加して來てはゐるわけである。日本主義と世界主義、ニイチェ主義、自然主義と種々な洗禮の段階を經る每に、出版文化の知的資産が蓄積されて行つたことはいふまでもない。寧ろ、此の期に於いて、始めて出版文化の名に値する文化的價値のある收穫を得つゝあつたといつても可い。尾崎紅葉『紅葉全集』(明治三十六年)、高山樗牛『樗牛全集』(同年)、大西祝の『大西博士全集』(三十七年)、『二葉亭全集』(四十三年)、坪內博士譯『沙翁全集』(明治四十二年以後)は、それ等の文化的價値ある收穫中、最も見るべきものであらう。三省堂の『百科辭典』、富山房の『漢文大系』、『家庭百科事彙』同文館の工業、醫學等の大辭書類の如きは、皆此の種出版で空前のものであつた。別に學問的編纂物としては、吉田東伍の『大日本地名辭書』(三十三年第一分冊刊行)の如き、史料編纂所の『大日本史料』の如きものを擧ぐべく、又古典の保存、飜刻乃至研究資料提供の意から出發してゐるものに『大日本史』、『國文大觀』、『德川文藝類纂』その他を擧げることが出來る。量からせば、大部な出版物はまだまだ澤山あるが、さう一々擧げるまでもなからうし、その餘裕もないので、暫らく以上に止めて置く。

出版現象としては、日露戰爭前後から、再び西洋文學への關心が冴え返り、主として北歐、ロシヤフランス等大陸の文學が移入された。かゝる文學の移入が自然主義の發展を助けたことはいふまでも

ない。

九

自然主義は正しく當時の日本の物質生活の混迷矛盾の現れで、遂に來るものが來たといふ絶望的な氣持を與へたが、否定から肯定の生れるやうに、絶望の灰燼から希望が生じ、人道主義の救ひが來た。人道主義が文藝方面で勢を張つたに對して、一般思想界ではもつと強いデモクラシイの主張が勢力を得てゐた。これはいはゞ歐化主義、世界主義の系統を引くものであるが、これに、更に相當な社會主義的分子が加味されてゐたことは、デモクラシイの主張を、ずつと強い、且つ實際的な力のあるものにした。社會主義的思想は資本主義の社會が進歩性を失ひかけて來ると共に擡頭して來たもので、日露戰爭前後から、漸く世人の注意を牽き始めたものだ。

大正時代に入つては、出版界は知識階級出の出版書肆の進出時代である。尤も讀者の要求も複雜になつたし、知的に高尙になつて來たので、單に營利一點張りの出版者の眼からは時代の要求をつかむといふやうなことは、出來難くなつた。出版事業は、この點で、算盤の仕事といふよりも、頭腦の仕事となりつゝある。「良書を多く賣らう」、それが是等出版者の理想となつて來た。これが商人式出版

書肆が第一線を明け渡さなくてはならぬ一理由でもあつた。良書多賣の理想から、廣告宣傳の術の發達が促されて來る。この點も出版文化からは、一考察すべきところであらう。出版界の大勢は、大正の初期から中期へかけて、哲學物、思想物、宗教物が恐ろしい勢ひで賣れ出したこと（歐洲大戰の關係がある）、某々文庫といふ叢書物（中で劃期的なものは有朋堂文庫であるが）、大正末期から所謂左翼物が流行し出し、社會主義、經濟思想等に關するものも、その餘波で大に出た。

大正末から昭和時代で中心になるのは、圓本全集續出の騷動である。改造社が、『現代文學全集』をもつて先づ立ち、新潮社の『世界文學全集』、これに次ぎ、春陽堂の『明治大正文學全集』、春秋社の『世界大思想全集』、平凡社の『現代大衆文學全集』等々が、多くて約五十萬から、少くて十萬位の讀者をかち得た。この出來事は、各全集の內容から、宣傳戰の大掛りなこと、仕事の大量なこと等々を考へて、日本出版史上空前にして且つ恐らく絕後の出來事であらう。私は二三社の計畫に參加したので、當時の各社の緊張振りの一端を知つてゐるが、それは文字通りし乾坤一擲で、實に悲壯なものであつた。全く明治初期の出版革命以後の革命的出來事であつたと思ふ。書物といふものゝ價値を下げたとて、種々な方面から惡評があつたが、それ等の惡評は無理がないとしても、自ら又取柄がなくはない、比較的多くの良書を廉價で普及せしめた點は、何といつても功績であらう。且つ當時より今日までの經過で見ると、可成りな恩惠を讀書社會學者社會に與へてゐる。中には大にその價値を認識さ

れて、必須の參考書となつてゐるものもある。廣く文化史的立場からいつて、弊よりも利の方が多かつたやうに思はれる。然し正直にいへば、圓本の動機は各社ともさう純な文化意識からのみ出たのではなく、出版界の行詰から各社ともに何等かの打開策を必要としてゐたのである。偶ま案出された打開策が、奇想天外式的のものであつたので、意外に大當りを取つたと見るのが眞實であらう。たゞそれが各科に亘つて行はれたので、國民の文化的資産を富ますところが多かつたといふわけである。

一〇

以上の九節に亘つて出版文化史について私の考へてゐるところを述べて來たが、勿論眞の走筆でこれで私の考へてゐるところを述べ盡したものでない。それでも大綱には觸れたつもりであるが不足なところがいろいろある。だがこの篇も終りに近くなつてゐるので、不足は不足とし、他日の補充擴大を期することゝして、こゝで技術的な方面を一瞥して筆を收めることにしよう。技術的といつても、單に印刷だけでなく、製本や製釘のことも含めて見ることにする、それも皆人の言ひ古した、知り盡したやうな事ばかりであるが、それは諒されたい。

先づ印刷樣式のことであるが、私は主として文學方面の書物より見てゐないから、技術方面の私の

知識が局限されてゐるものと思つて頂く。印刷は明治十年頃までは、木版で和紙に印刷したものゝ方がずつと多いことゝ思ふ。勿論和紙に活版で印刷したものもある。中で官省邊の仕事として、純白な精良な用紙に活字で鮮明に印刷し、洋綴にしたハイカラなものもあるが、先づ大體は木版和紙である。明治十二年頃から印刷樣式が混亂し始めるが、和紙に活版印刷をした本が可成り殖えて來る、中には和紙又は洋紙に石版で印刷した小說なども出てゐる。それが私の見た限りでいへば、東京版よりも大阪版の方に多い。字體は明朝が多かつたが、十五六年から二十年頃まで淸朝體が馬鹿に流行し、半紙判の本などは大抵それだつた。その好い例は坪內先生のこの頃の著書の初版を見られたら可い。文字の大さは五號から四號、四號は半紙判の本に多く用ゐられたが、然し四六判でも四號を使つたものが澤山あつた。

ポイント活字は前にもいふ如く、明治三十年以後出來たものである。

印刷は印刷屋で引受けてやるのは當然だが、各新聞社で片手間に出版印刷を引き受けたりした。政府の印刷局でさへが、民間の注文を引き受けてドシドシ印刷してやつたりした。博文館が東京に創業したころの出版物は皆印刷局でやつたものであるといふ。印刷局の仕事は、流石お上のものだけに、印刷もよく、字も綺麗で、期日が正確であり、工賃も貪らなかつたので、出版者は大さう得をした。博文館の創業時の成功の原因は、一つはそれにあるといはれさへした。だが印刷局の仕事は、その後

民業を壓迫するといふ抗議が出て、注文を受けつけることを止めた。新聞社の印刷注文引受けは當然のことゝなつてゐたので、東京日日が太政官御用の看板を上げたり、郵便報知が集成社といふ出版書肆の書物の印刷を一手に引き受けたり、まだいろいろある。或は逆に、新聞社で活版屋に印刷を賴むものもあつた。東京横濱毎日の秀英舍に於ける、自由新聞の旭活版所に於ける皆その例である。

今日は紙型から鉛版にとつて刷るのが普通で、原版刷は餘程好事的な凝つたことと考へられてゐるが、初期のものは勿論原版刷であつた。原版刷は組版の締めがよく利いてゐないと、刷つてゐる最中活字がズリこけたりする恐れがある。それで活版職工の腕といふのはさういふところにあるとされ、原版のまゝ指三本で組版の片隅をつまんで差出して、一本の活字も拔けないと先づ一人前はあると認められたといふ。今日の組版をそんな眞似をしたら、一ゲラとして滿足な組版がなからう。この點では機械的には進歩したらうが、技術的には退歩だといつても可い。

又職工も、士族出やインテリ連中が多かつたせゐか、學問も相應あり、文化意識も可成りもつてゐて、なかなかプライドがあつたものらしい。新參記者の下手クソな文章や誤字など、ドシドシ直したものだといふ。記者が文句をいふとアベコベに嚇された。それはさうかも知れない、宇田川文海や饗庭篁村などといふ連中が文選工をやつたことがあるといふのだから。

此の頃の新聞社では印刷を非常に喧しくいつたものらしく、誤植など餘りない。それで校正者の學

識も知られる。又今日では新聞といへば編輯の方だけ世間から認められ、印刷の方は一向何ともいはれないが、この頃は、編輯長に對して印刷長といふものが置かれ、この方には寧しろ編輯長より立派な人物を据ゑたものだ。高畠藍泉、染崎延房、假名垣魯文等第一流（當時では）の文學者が一度も二度も各新聞の印刷長に置名してゐる。校正も、此の頃の連中はなかなか鼻息が荒かつたもので、少し後になるが、中西梅花が讀賣記者をしてゐた頃（二十一二年頃）校正は梅花を無學としてよく意地惡いイタヅラをしたものだといふ。梅花は後に狂氣して死んだが、その原因には、この連中の意地惡に對して平生イライラしてゐたことなども一因となつてゐはしないかといふことだ。が、これは餘談だ。

印刷機械は始めは足で蹈む平壓印刷機、それから十年代になつてはロール機といふ筒式なもの、勿論動力などはなく手でハンドルを廻した。だが、速度の要求が問題となるにつれて、次第に廻轉式凸版印刷機更にマリノニ式輪轉印刷機などが輸入されて、大きな進歩を遂げることになつた。勿論かく生產額を迅速に多くしなければならなかつたのは、出版業の資本主義化と並行してのことである。

製本裝釘にいつていへば、木版和紙刷のものは原則として從來の如き和綴であつた。大抵は實用一方で裝釘などを考へたものがない。中には刷つたまゝのを紙よりで二箇所綴ぢただけのもある。洋紙活版刷は大抵洋裝と定つてゐる。この洋裝とて、初めは格別の意匠をつけるではなし、たゞ西洋の御手本通り馬鹿正直に眞似たものが多い。勿論本綴で假綴のものは少く、厚いボールを表紙にしたゴツ

ゴツしたものだ。製本に必要なボール紙の國産は、明治九年か十年の頃、佐久間貞一が發明したといふ。戸田欽堂もその發明に熱中したものだ。二者の間に何の連絡もなかつたか何うか。明治十一二年以後に於て一時妙な裝釘の本が出た。卽ち前にいつた活版和紙刷のもので、これは多く和紙色繪刷の表紙を西洋の假綴につけて出た。當時としてはハイカラなものであつたらう。然し私の見た範圍でいへば、十五六年頃までは小說戲作としてもまだまだ昔の草双紙そのまゝのものが多い。その中で飜譯だけは早くから洋裝ボール表紙となつてゐたが（十一年『花柳春話』を見よ）、その飜譯でさへ唐本裝和裝のものがあつた。然るに十六年頃を境として俄然洋裝が進出し、十八年十九年となると、草双紙式のものが次第になくなり、洋裝ボールとなる。草双紙式のものがあつても和唐紙へ活版刷にしたもので、木版のものは一二種位しかない（萬亭應賀『明良二葉草』。先づ二十年を境として製本術の更新期に入る譯である。さうして裝釘が問題になり出すのも、かく製本形式が大體洋式に統一されてから以後のことである。（かく統一されたのは、製本が手工業を離れて機械的に多量生產をされ出したところから來てゐる）。勿論草双紙の色繪表紙を裝釘の中に入れずとも、あの袋は一種の裝釘と見られぬこともあるまい。又洋裝本でも、十七年の『自由太刀餘波銳鋒』（坪內先生譯、東洋館發行）の如きは實によく裝釘に意をくばつてゐる。然しそれが一般的に注意され出したのは何うしても二十年以後と見て可い。その注意といふのは、紙數の厚薄につり合ふやうな製本樣式をすること、內容を考へて裝

飾を施すこと、表紙に紙だけではなく、布その他を利用して趣味を示すことなどに向けられて、漸次今日のやうな複雜なものと發展して來た。だが、文學方面からいふと、二十年以後明治の書物を美しくしたのは、春陽堂の功といふべく(これは博文館が明治の書物を廉くした點と匹敵する)、これは何人も否定出來ない。明治三十年以後、大橋乙羽がその自著を自刊するに及んで、持前の凝性から自著の裝釘に種々な工夫を試みたが、これが又裝釘界に一轉機を劃し、遠く今日の裝釘界發達の基礎となつてゐるといふ。

私は、更に出版法規の變遷、發賣禁止の歷史、出版書肆の組織制度史にまで筆を延べるつもりであつたが、もう餘紙がない。勝手ながら丁度第十節のこの邊で打ち切つて置くことにしたい。

(昭和十一年秋執筆、昭和十一年十月「富山房五十年」)

人物篇

若き日の幸田露伴

一、誕　生

露伴先生の生家の幸田家は代々幕府の表お坊主といふ家柄で、今の神田の山本町から、下谷の練塀町あたり、その頃俗に新屋敷とよばれてゐたところに組屋敷をいたゞいてゐたのだが、先生は慶應三年七月二十三日（或は七月二十六日ともいふ）そこに生れた。父は成延（當時二十七歳）母は猷子、（當時二十五歳）成延氏は奥お坊主の今西家の出で、家附の猷子さまのところにお婿さんに來たのだ。先生の本名は成行(しげゆき)といふのだが、幼名は鐵四郎とよばれた。第四男だつたからだ。

お坊主といふと、幕臣としての家格からいへばさう立派なものではない、今日でいふと式部官か宮内官の下役になるのであらうが、平日から將軍や幕府の高官に直接に接觸する役目であるから今日では思ひもかけぬ內々の權力があり、權力のあるところ自然富も集るといふわけで、その生活などは一寸した旗下位ゐの及びもつかぬ立派なものであつた。先生の生れた頃の幸田家の生活もなか〳〵盛んなもので、邸には銅の金具をうつた立派な門があり、疊數が七十餘もある大きな家であつたといふ。

幸田家の系統からは、古くから數學とか儒學とか又は音樂とかに秀でた人々が、幾人も出てゐる。現に人名辭典などに名の見える人々も二三ある。先生の父成延氏は、當時の武士階級としては相應以上に學問教養のある眞面目な人物で、文筆の才も多少あり、音樂の趣味を解した。維新後大久保一翁が東京府知事になつたころ、一翁の下で下谷區長になつたこともある。音樂の趣味といへば、母の猷子は殊にその方の趣味があり、又才分も多かつたといふが、先生の令妹に名ある音樂家が二人までも出てゐるのは（幸田延子、安藤幸子）その遺傳であらう。先生自身の場合、音樂の嗜好についてはあまり耳にせぬが、この藝術的血液の遺傳にあづかつてゐることは當然考へ得るところだ。

尙ほ報效義會で有名であつた海軍大尉郡司成忠氏は成延氏の次男で、先生の令兄であり、今日、史學の大家たる幸田成友博士は先生の令弟である。

一體幕府の末ごろ、旗下の士風が衰へ、武士の家の如きも亂脈なのが多いとなつてゐるが、それは一般的に幾分事實で、大衆文學の種子を提供するだけのことはあるにしても、きちんと嚴格な家庭もあるにはあつた。幸田家などもその武士らしく嚴格な方で、先生の子供の時は相當嚴しく仕付けられたものであつた。

それは後として、順序を追うて語ると、先生の生れた翌年の五月が上野戰爭だ。彈丸の飛ぶ危い中

を、お母樣に負はれて淺草諏訪町の控家に立退いたといふ。先生は、何ういふものか大變弱い生れつきで、生後二十七日目にもう病氣をして醫者の手を煩したといふが、それからとて幾度醫者にかゝつたか知れない。醫者は「可哀さうなお兒さんだ、何うもお丈夫にはなれんかも知れぬ」と、いつも言つた。だが、その先生が七十餘年も長生をして今日の榮を享けてゐられるのだから、人間の身體には肉體の健不健以外、矢張り眼に見えない何ものかゞついてゐると思ふのが眞實らしい。

維新後幕臣の家が微祿する。幸田家もその例で、先生が三つになる頃から生活が大分苦しくなつて來た。勿論その日が越せぬとか何とかいふのではないが、ともかく儉約第一といふので新屋敷の大きな家は人手に渡して中御徒士町の狹い家に移つた。すると、何も知らぬ先生は、この家はイヤだ、前の大きな家に歸りたい、歸りたいといつて泣いて困つた。何うしても泣き止まぬので、お母樣はそれではといふので、前の家に連れて來て見せた。すると、もう他の知らぬ人達が住まつてゐて大變樣子が變つてゐたので、子供心にも納得がいつたものか、その後は歸りたいとはいはぬやうになつた。

二、手習ひ始め

明治五年、先生の六つのとき、闊雪江の姉に當るお千代女史に就いて手習を始めた。その頃の手習

ひは先づ「いろは」だ、それが終ると「上大人丘一己」といふやうなものを習つた。

關雪江、名は思敬、字は鐵卿、通稱は忠藏、江戸の人で、當時有名の書家だ。その姉の千代子は學問もあり、手蹟も見事で、人物も立派であつたので、後に女子師範學校教師に拔擢された。女史のことは、蒲生重章の『佳人傳』といふものに出てゐる。幸田家では先生の父君も兄君も皆この雪江に學んだので、その緣で小さいながらも關先生の厄介になつたのだ。手習ひ兒の人數も多いので、さうさう關先生自身で一々世話が燒き切れぬから、大きい兒が小さい者の面倒を見ることになつてゐるが、先生はお蝶さんといふ娘によく世話になつたといふ。

弱い身體はそのころでもまだ丈夫になりきらなかつたものか、この手習の時代にひどく眼を患つたことがある。光を見ると眩しくてならぬので、毎日戸棚に入つて、突つ伏して泣いてゐた。子供心にも、これで、おれは、もうだめだ。盲人になるのだと思つて大層悲しかつた。この眼病は何十日間も續いたので、醫者にも掛つたが、當時のことだから願掛けもし、お灸も据ゑた。だがいろいろ丹精したお蔭で快よくなつた。願を掛けたのは日朝上人で、これはお祖母樣につれられていつた。お灸の方は根岸の二十八宿の灸といふので、これへはお父樣と俥で通つた。俥の上でもまぶしいので、お父樣の膝の上に突つ伏してゐたが、或る日歸途に不忍辨天の池の端を通るとき、ソウツと薄眼を開いてみると、蓮の花や葉がありありと見えたので、あゝこれで盲人にならずにすむのだと、飛び立つやうに

思つた。

手習ひ時代の逸話だが――

先生は子供の時は、犬が馬鹿に嫌ひだつた。ところが、毎朝手習ひに通ふ道筋に柳屋といふ豆腐屋があつて、この近所にいつも大きな犬がよく寝ころんでゐる。ツヒ江戸名所圖繪などにありさうな圖だ。先生は怖々と犬に見られぬやうに成るべく遠くの方をソウつと通る。犬は敏感だから却つてその樣子を怪んで、すぐ吠え立てる。夏の朝習ひの時などには、時間が早いので人通りはなし、實に弱つた。或る朝など、犬々と犬にばかり氣を取られて道の端を通つたので、溝の中に落ちて泥まみれになつたこともある。すると、親戚の人はこの話を聞いて、それには好いものがあるといつて、豹の皮か虎の皮でこしらへた大巾着をくれた。これを腰に下げてゐると犬の方で怖がつて寄りつかぬといふのだ。そこで先生は喜んで早速それを下げて通つたところ、犬の方では、何だか怪しいものをブラ〳〵さしてゐるといふつもりか、いつもよりも激しく吠え立てたのには、全く閉口したといふ。

然しこの巾着が一方では無邪氣ないたづらの種になつた。關先生のところへ行つて、これを下げて机の前に坐つて手習ひをしてゐると、女の兒が起つたり坐つたりする時に、やゝもすると知らずに踏みつける。すると、毛皮のもじや〳〵があるので、吃驚してキャつといふ。先生はそのキャつといつて吃驚するのが面白いので、後にはわざと巾着の紐を引ぱつて皆の踏みさうなところへ出して置いて

吃驚させるといふ風にする。例のお蝶さんも、お清書の世話をやく時などにその巾着でびつくりした一人であつた。

三、會田塾から小學校へ

手習ひの傍ら、七つのときから、御徒士町にゐた會田某といふ漢學者の塾に行つて素讀を習つた。一番初めは孝經であつた。

九つのとき、關女史が女子師範の教師になつたので、もう手習ひは教へないことになつた。そこで先生は關女史の許を下つて、お茶の水の師範學校附屬小學校に入つた。これは關女史の勸めで入つたのだ。

その頃の小學校は八學年が上下二等に分れ、各等四年が一級から八級までに分れてゐた。附屬小學校に入る際、試驗をしたわけではなかつたが、もういろはも素讀もやつたのだからといふわけで、下等の七級に編入された。ところが、教場に出てみると、他の生徒に比べて何も彼も出來が惡い、それでたうとう最下級の八級に落された。これは然し、眞實先生が出來なかつたのではなく、全く學校に馴れぬせゐであつたのだ。だから次第に學校馴れると、出來るやうになつた。且つ一度級を下げられ

て小さい子供の仲間に入れられたといふことが、先生には堪らない屈辱のやうに感じられて餘計奮發したのだ。この頃は又學校で拔擢といふことをやつた。他の生徒より出來のよいものは、試驗の上どし〳〵上級へ進めてやる、そこで出來のよい生徒は出來の惡い生徒の半分の年限もかゝらずに卒業するといふことになる。先生もこの拔擢でどし〳〵他の生徒を乘越し、十三の年に小學校を卒業した。後年これも小說家として明治文壇に名を揚げた宮崎三昧（名は璋藏）はこの師範學校の出身だが、先生が在學當時、見習ひの爲めか何かで附屬小學校の敎師をしてゐたので、先生なども敎はつたことがあつた。だから、先生が露伴の號で文壇に出てもう立派に名を成してから、或る處で宮崎氏に會つたところ、宮崎氏は、さうとは知らず、ヤア幸田さん、大きくなりましたナアといつて、先生を苦笑させたことがあつた。

四、讀書の樂み

尤も先生だつて子供の時からムヤミに勉强ばかりしてゐたのではない。友達と角力をとつたり喧嘩をしたり、泣面をしたり、その邊のことはやはりたゞの小學生たるに變りはなかつた。

然し注意しなくてはならぬことは、この小學時代に、先生は人生に讀書といふ樂みがあることを知

つたことだ。

草双紙の類を讀み始めたのは、先生が十一位の事であつたといふ。草双紙は誰も知つてゐるやうに變な假名ばかりの文章だから、初めは先生も讀みにくゝて困つた。然しそれを我慢して讀んでゐるうち段々に馴れてスラ〳〵と讀めるやうになると、サア面白くて堪らない。家にあるのを讀んでしまふと、親類の家などへ往つては自雷也物語・弓張月・白縫物語・田舍源氏・妙々車などといふものを借りて來て、片端から讀んで一人で樂しんでゐた。その頃のことだ、お祖母樣が先生に向つて「お前は何をしてゐたいか」ときかれたので「芋を喰つて本を讀んでゐれば澤山だ」と答へたといふが、芋と本が先生の當時の二大嗜好であつたのらしい。

勿論先生の讀書癖は友人關係からも助長された。小學校の友人に野崎某といふのがあり、家が湯島の明神前で、袋物などを商ふ傍ら貸本屋を渡世してゐたが、こゝは丁度學校への通路で、朝夕その前を通るので、毎日のやうに遊びに寄つて、種々の讀本類を引張り出しては、繪を見たり繪解を聞いたりするのを樂しみにしてゐた。又學校友達に今一人清川伊太郎といふのがゐた。これは蒔繪職の子で先生より少し年長であつたといふが、仲のよい友達で折々遊びに行つた。この淸川が又なか〳〵の本好きで、讀本を家でよんで來ては、學校のお休時間に、先生やその他の友達を集めて、九紋龍史進が何うしたかとか、豹子頭林沖が何うしたとか、玄德關羽孔明が云々だとかいふ話しをしてきかせた。

それが先生には大變面白いことに聞かれた。
かうしていつとなく、先生は讀書の樂みを解し、又文學の好さといふものを身にしみて味はつたのだ。

五、家庭の教育

前にも一寸述べたが、先生に對する家庭の仕付けは世の常を越えた嚴重なものであつた。これが又先生にとつて何れ程の益をなしたか知れない。勿論、理窟から割出してどうかうといふのではなく、兩親の體驗と性格と家庭の空氣とがさうさせたものであつた。
まづ先生が師について物を學ぶやうになつてからは、毎日復習をしてからでないと決して遊ばせなかつた。そこで先生は、毎日朝暗いうちに起きて、蠟燭を小さな本箱兼見臺といつた箱の上に立てゝ大聲で復習をするのが常であつた。かうすると、先生の所から歸つて來て、すぐ遊べるといふのだ。それで、家の人のまだ寢てゐるのも何も構ふことなしに、家中に聞えよがしに、大聲で練習をした。これは會田塾から小學校に往つてからも、やかましくいはれて續けた。だが、子供のことだから、毎日々々となると、時々ズルをきめる。何度もやるのだから文句も何もすつかり覺えてゐる。そこで本

の初めの方を二三枚開けただけで、後は少しも本の方へは眼を向けず、机に向つて出任せに大聲で背誦をつゞける。それをつゞけながらこつそり豆鐵砲などを取り出して、眼と手はその方に忙しいことがある。時々それが見つかつて、大叱言を頂戴したこともあつた。

それから幸田家の家風の一特色は神佛祖先の崇敬といふことだ。先生は毎朝學校へ行く前に定められた日課として神樣佛樣へお茶湯や御飯を供へさせられる。晩には燈明を上げさせられる。それも數が多いので一通りのことではない、平生の日でも十以上、多い日は二十もその餘にもなる。餘程朝早く起きて手早くやらぬと學校へ行く間にあはぬ、のみならずこれが濟むまでは誰も朝飯を食べることが出來ぬといふ仕來りであつた。それで何んな日でも、幼い先生が朝夕にやらなければならぬ義務は大變なものであつた。

そればかりでない、朝夕、學校の事が手すきな時には掃除や雜巾がけも遠慮なくやらされた。家中の人が揃ひも揃つて奇麗好きなのに儉約儉約で下女子守りもゐない、お父樣は晝は家にゐないし、お母樣は先生の妹や弟やらを三人も四人も抱へてゐるので、何うしても先生が手傳はなくてはならぬことになる。或る時など、大きな三尺柄の薪割を持ち出していたづらをしてゐると、重さのせゐか何かで膝頭に怪我をした。堪らなく痛かつたが、それといふと叱られるから、自分でこつそり縛つて、人前は跛もひかず我慢してゐた。ところが、晩に雜巾がけのときになつて、前屈みに膝をつくのが痛く

て痛くて閉口した。然し叱られるのが怖さに、とうとう我慢し了せたといふ。
前にもいつたやうに、當時の幸田家は、微祿したとはいふものゝ、無財産になつてその日に困るといふではなかつたが、兎に角非常に質素な生活をしてゐたので、先生の言葉をかりると、「どうかすれば大工の木ッ葉拾ひにでも遣られようといふ勢ひ」であつて、いはゞ學校さへ漸く通はして貰へるといふ始末なのだつたから、物を粗末にしてはならぬといふことを盛んにいはれた。それで石筆でも墨でも、小さくなつたからとてみだりに棄てず、指に持ちにくゝなつた鉛筆などは必らず少し太い筆軸に挾んで使つて、それが當り前のことだと思つてゐたのだ。
家庭がさう嚴重であつたので、家庭よりも學校の方が寛ろげたから、學校が面白くて、一日も休んだことがなかつたといふ。
嚴格とはいつても、やたらに嚴格なだけでなく、そこには子供相當の娯樂があつた。時々お祖母様のお伴をして樂しく方々にお詣りに出かけたり、獨樂や鳶凧遊びに我を忘れたりしたこともあつた。このお祖母様は注意深い人で、よく星の位置をみて時刻をあてたり、庭の雜草の名や効能を先生に敎へたりしたが、これが又それとなく先生の注意と觀察の力を養ふに役立つた。

六、中學校・英語學校

明治十二年、小學校を卒業して間もなく、元一ツ橋にあつた東京府中學に入つた。その頃の學制で内部は正則と變則とに分れてゐたが、正則の方は一般の普通學をやり、變則の方では英語を重にやつた。先生はその正則の方をやつたのだ。後に法學博士になつた春木一郎、硯友社文士の川上眉山、讀賣新聞の美術部長などをした關如來、新講談の細川風谷などが同窓であつたといふ。尤も細川風谷は小學校でも先生の同窓で、極く親しい仲間であつた。

中學校は一年餘で退學したので、在學中の先生は、格別頭角を出すまでにはいかなかつたらしい。たゞ小學校時代もさうだが、中學校でも、數學が頭抜けてよく出來た。それはいつも滿點であつた。そこは普通の文學者の卵と先生と違ふところだ。物を書くことも、小學時代から長じてゐたもので、小學時代には、いたづら好きな先生は、よく節用集などから妙な文句やむづかしい語句など覺えて來てそれを文章に織り込んで敎師を惱ましたものだ。又敎師が文は簡を貴ぶと敎へると、その次にはわざと一行の文章を書いてみせたりしてからかつたので、時々敎師に怒られたにもいふ。

中學時代には作文の先生は、村上珍休といふ漢學者で、この人には始終賞められたものだ。この村

上といふ先生は、明治初期の漢文學者としては一寸高名な人で、文集なども利行されてゐる。小田原の人で、從つて號を函峰といつた。後に金澤の第四高等學校の教授などになつたので、一部には知つてゐる人が多い。

中學校を退いたのがいつ頃かはつきりせぬが、明治十三年頃のことでゞもあらう。それから暫くして、先生が何處かの學校に入りたいとお父樣に願つたところ、それではといふので築地某英學校に入學さしてくれた。これは西洋人の經營で、英語專門といつていゝ學校であつたといふ。先生はこの學校にも一年ばかり通學してゐたが、持前の努力主義で相當の語學力を得た。先生が今日東洋文化研究の必要から種々な英書を悠々讀破してゐる土臺は、全くこの學校に一年通學したお蔭であるらしい。先生の勉强もさることながら、この學校の功德も大したものだと思はざるを得ない。それで私はこの學校が何學校かはつきり知りたいと思ひつゝ未だにそれなりにしてゐるが、あの頃のことだし、西洋人の學校といふのだから、さう澤山あるわけではない。いづれはつきり突き留めることが出來ると思つてゐる。

此の英學校通學が恐らく明治十四五年へかけてのことであらう。さうしてこの英學校を退かぬ中に先生は一方菊池松軒先生の夜學塾へ通ひ始めた。英學校を退くと共に、晝間の勉强所は、何々學校ではなしに湯島の圖書館と代つたのだ。

七、菊池塾の思ひ出

菊池松軒先生は幕人だといふ。名は駿助、字は千里、佐藤一齋の門下で、安井息軒・安積艮齋・鹽谷宕陰などと友達で、朱子學の尊奉者だつた。その塾は神田めがね橋近くにあつたのだが、松軒先生自身はその頃司法省囑託か出仕かで、晝間は役所に出てゐたので、これは夜學の塾であつた。さういふわけで別に塾生の月謝で生計を立てゝゐるのではない、いはゞ好意的に松軒先生自身の樂しみといつた風に開いてゐる古風な塾であつたから、月謝なども廉いものであつた。又それだけに可成り塾生が多勢來たといふことだ。此の塾については先生はながい追憶的談話をしてゐる。

（前略）私の就學した塾なども矢張り其の古風の塾で、特に先生は別に收入の途が有つて、立派に生活して行かるゝ仁であつたものですから、猶更寛大極まつたものでした。紹介者に連れて行つて貰つて、些少の束修、金員でも器物でもを献納して、そして叩頭して御願ひ申せば、直に其の日から生徒になれた譯で、例の世話燒をして呉れる先輩が宿所姓名を登門簿へ記入する。それで入學は濟んだ譯なのです。

銘々勝手な書を讀んで行て勝手な質問をする。それが唯一の勉強法なのでしたが、中には何を讀

んで好いか分らないといふ向がある。すると、正直に先生に其の旨をいつて御尋ねする。それなら何々を讀んだら宜敷からうと、學力相應に書物を指定して下さるといつたやうな事で誰しも勉強したものです。（下略）

さういふ譯で銘々勝手な本を書みますから、先生は隨分うるさいのですが、其の代り銘々が自家でもつて十分に苦しんで讀んで、字が分らなければ字引を引き、意味が取れなければ再三思考するといふやうに勉强した揚句に、いよ〳〵分らないといふところだけを先生の前に持出して聞くのですから、一人が先生の何分間をも費すのではありません。よく〳〵勉强の男でも十分間も先生を煩はすと云ふのは無い位でした。（下略）

それで、『誰某は偉い奴で、史記の列傳丈を百日間でスツカリ讀み明らめた。』といふやうな噂が塾の中に立つと『ナニ乃公なら五十日で隅から隅まで讀んで見せる』なんぞといふ英物が出て來る、『乃公はそんなら本紀列傳を併せて一ト月に硏究し盡すぞ』といふ豪傑が現はれる。そんな工合で互に勵み合ふので、ナマケル奴は勝手にナマケて居るのでいつまでも上達せぬ代り、勉强するものはグングン上達して、公平に評すれば畸形的に發達すると云つても宜いが、兎に角發達して行く速度は中々に强いものであつたのです。

併し自修ばかりでは一人合點で濟まして居て大間違ひをして居る事があるものですから、そこで

輪講といふ事が行はれる。それは毎日輪講の書が變つて一週間目にまた舊の書を輪講するといふやうになつて居るのです。卽ち月曜日には孟子、火曜日には詩經、水曜日には大學、木曜日には文章軌範、金曜日には何、土曜には何といふやうになつて居るので、易いものは學力の低い人達の爲、むづかしいものは學力の發達して居るものゝため、といふ理窟なのです。これで順番に各自が宛がはれた章を講ずる、間違つて居ると他のものが突込む、論爭をする、先生が判斷する、間違つて負た方は黑玉を帳面に記されるといふ譯なのです。(下略)此の外に復文といふ事をする。これは譯讀した漢文を原形に復するので、ノーミステークの者が褒詞を得る。闘文闘詩が一月に一度か二度ある、先生の講義が一週一二度ある、先づそんなもので、其の他何たる規定は無かつたのです。わたくしの知つて居る私塾は先づそんなものでした。で、自宅練修としては銘々自分の好むところの文章や詩を書寫したり拔萃したり暗誦したりしたもので、遲塚麗水君とわたくしとは互に相爭つて莊子の全文を寫した事などは記憶して居ます。

これで菊池塾の教育といふものが何ういふものであるかゞ大抵分る。先生の品性なり、學力なりが菊池塾にゐる足かけ二年の間に大分底光りのしたものになつた。

遲塚麗水、名は金太郞、氏も亦露伴先生に少し遲れて明治文壇に名乘り出た一文星であり、小說でも名を成したが、殊に紀行文の名家として嘖々されたものである。遲塚氏は、この菊池塾時代に於け

る先生の親友の一人であつた。

その遲塚氏との間に面白い話がある。

先生がいつか芝の兄君郡司氏の宅にゐる頃（十六位だつたといふ）、丁度遲塚氏も芝に移つてゐたので、よく二人で種々な事をして遊んだ。そのうちに二人で相談して、新聞紙を張り固めた大砲を造り火藥を調合して、それを芝浦の濱に持ち出して試射して見た、初め導火線をつけるのに困つたが、つひに弓形の導火機を工夫して見事導火に成功したので、二人は大得意であつた。二人は、これが巧くいつたら小鳥でも取るに使はうといふつもりだつた。ところが、先生が、兄君の宅の二階で火藥を調合してゐるとき、何かのはづみでそれが爆發し、恐ろしい音と共に煙がどつと出た。幸ひ怪我はしなかつたものゝ、これで兄君に大砲一件が知れて、大目玉となり、それきり取り止めになつたといふ。

八、圖書館、そのほか

若し淡島寒月の記事が誤りがないものとせば、露伴先生の圖書館通ひは、明治十三年、先生が十四の時あたりから始まつたことになる。今圖書館といふと、すぐ上野とか日比谷を聯想するがその頃のは違ふので、上野圖書館の前身ともいふべきものが、只今の湯島聖堂のあたりにあり、俗に聖堂の圖

書館と呼ばれてゐた。この圖書館に、明治十三年頃から通ひ初めたといふわけである。當時は閲覽料は二錢とかで、閲覽者には必要に應じて、鉛筆を貸し紙をくれたりしたものだ。形は整はなかつたが今よりもずつと圖書館らしい圖書館であつた。

先生が本當に圖書館の味を知つたのは、例の築地の英語學校をやめてからだが、別に何といつて纏まつて研究的に讀んだのではない。たゞもう讀みたい讀みたいの一念に任せて、何でも構はず讀んだものだ。歴史・傳記・戯作・狂歌・俳諧、あらん限りの書物を渉獵した。その頃毎日先生と顔を會はすやゝ年長の閲覽者があつたが、この人は又先生と違つて毎日同じ本を借りてそれを寫してゐる。それは燕石十種といふ叢書本だ。これは卽ち淡島寒月居士で、毎日顔を會はすところから、二人の間に自然親密な交際が成り立つた。寒月居士は一面藏書家でもあつたから、その爲めに先生は大に益を受けたものであつた。

尙ほ菊地塾では、塾主が程朱學の老先生であつたので講義してきかせるものは經書か硬いものばかりで、老子・莊子などを公然と讀んでも叱られる位ゐであつたから、支那の俗文學、卽ち小說や戯曲の類などは勿論教へるどころではなかつた。然し塾にはその種の本も少くなかつたので、こつそりそれをひねくり廻してゐるうちにいつとなく俗文學も讀めるやうになつた。

それから先生から叱られる老子・莊子の書も、この頃露件先生の愛讀書であつた。麗水氏と競爭し

で莊子の全文を寫したといふのでも、その熱愛の度が知れるが、この老莊は今でもお嫌ひではないらしい。

明治十四五年は先生が十五六のころだが、丁度この頃（卽ち菊地塾にゐるころ）四方に演說會・講話會のやうなものが大に流行した。原因は、世人啓蒙の必要、時人の知識慾の要求から出てゐるのだが、先生もよくかういふ講話會を聞いたものだつたといふ。その中で、佛敎家中の新思想家ともいふべき連中が、和敬會といふのを組織して、盛んに佛敎思想普及の爲めに奮闘してゐた。先生は、初めこの連中の說くところが老莊の思想に似たところがあるのに興味を感じて、いつも面白く聽いてゐたが、そのうちに自分で佛經佛典を讀んでみたいといふ程關心をもち始め、ぼつぼつ手を延ばした。先生の文學と密接な關係がある佛敎思想、佛敎文學との交涉が早くこの時から開けたことは、十分注意を要する點だ。（先生の精神をこの方面に傾かしめた一因としては、前述の如き家庭に於ける崇佛の空氣、幼時の習慣等もあつたに違ひない。）

九、電信修技校

十七のとき、又も菊池塾を止めて、今度は芝の汐留にあつた電信修技校といふのに入つた。これは

遞信省で電信技術者養成のため新に設けた官費學校であつた。

幸田家の近くに、これも舊旗下の士で（可成り大身であつたか）稻葉某といふ人がゐた。この人は何ういふ動機からか又は誰に聞かされたものか、これからの人間は學問などでは駄目だ、何でも實業でないといけない、手に職をもつのが一番だといふ持論を口癖のやうに語つた。餘程維新の大變動に懲りたものであつたらうが、それには、學問をしても、舊幕出身者では立身の目的がないといふこともあつた。先生の父君は大にこの稻葉氏の議論に感動して、露伴先生にも學問を止めさせ、何か實業家か職人かに仕立てようとした。先生は然し何うしても學問がしたいのだが、肝腎のお父樣がさういふ意見では、いくら頼んだところが何うなるものでもない。そこで一人でつく〴〵考へた末、官費を取柄にこの學校に入學したのだ。何もかもあきらめて、先づ手取早く自給生活に入らうといふ決心からであつた。

學校の課程が一年、それから實際練習が一年ばかり續く。それて十七年に修技校を卒業したが、十八年まで東京の中央局で實務を執られた。この二年間は好きな讀書もあまり出來なかつたらう。さて實務練習が終つて、判任官の技手として月給七圓を頂き、北海道、後志の國余市町の電信局に赴任することになつた。

先生は心ならずもこゝに足かけ三年、十九から二十一まで過した。

一〇、北海道時代

此の頃の北海道は、よく云へば清新の天地であり、露骨に云へば新開地の金儲氣分の充滿した土地で、到るところ活氣が溢れてゐた。例へば、余市に警察が出來て署開きをやつた。ところが署長は醉つた揚句、土地の有力者と喧嘩して、有力者をしたゝか擲りつけた。さうして翌日辭職して早速船問屋となつたといふ話しもあつた。

然し何しろ僻地の余市のことであるから、土人の無教養の點ではお話しにならなかつた。先生の話相手になる人間は全然ない、學問讀書の益を分け合ふやうな人は一人もない、況んや上に立つて指導を與へるやうな人に於いてをやだ。從つて先生は「孤影孑然朋友も無く交際もせまく談話を交換し知識や感情をやりとりする者もなくさびしく」暮したものである。この間先生の心を慰めだのはたゞ書物だけだつた。

電信局は、局長と先生と二人、事務は閑散であつたので、先生は出來る限り多くの時間を讀書に向けた。先生は、田舍のことだから本もなからうと、出かけて來るとき行李に一杯の漢籍（經書子類など）を仕入れて來たが、毎日毎日讀書を續けたので、いくらも經たぬうちに持つて來た本は讀んでし

まつた。勿論人からも借りて讀んだが、狹い土地だからそれもすぐ無くなつてしまふ。すると、此の土地に禪宗の寺があつて、その坊さんが、先生の讀書好きなのを聞いて、それではチトこれでもお讀みなさいと、佛書・佛經を澤山貸してくれた（これは噂話だが）。丁度讀むものがなくて困つてゐた先生は、これは有難いとばかり、その佛書・佛經を片端から讀破した。他日漢文學・佛教文學の大家として卓然立つた土臺は、この北海道時代に養はれたものであつた。

かういふと先生は仕事も何も放つて自分の樂みにばかり耽つてゐたやうに見えるが、一面又、土地の人と親んで、いろいろ農耕の事や養蠶などについて氣づいたことを話してやつたりしたといふ。然しながら、若い先生の心には色々な意味で不平があつた。こんな田舍にいつまでゐなくてはならぬのだ。早く東京へ戻りたい、戻つてもつと學問修業がしたい。何といつても、血氣の頃だ、酒も少しは覺えた、不平が嵩じては亂暴な生活もした。だが、なか〳〵歸してもくれず免職もしてくれぬ。辭職願ひを出しても許されない。そこは官費修業のつらさだ。この時先生に同情したのは、戶長の須藤某といふ人である。先生はこの人に歸京の決心を打ち明け、書籍を典じて旅費の調達をした、さうして斷然職務を抛擲して歸京してしまつた。丁度明治二十年八月のことだ。この時の紀行を「突貫紀行」といふ。

身には疾あり、胸に愁あり、惡因緣は逐へども去らず、未來に樂しき到着點の認めらるゝなく、

目前に痛き刺激物あり、慾あれど錢なく、望みあれども縁遠し、よし突貫して此逆境を出でむと決したり、五六枚の衣を賣り、一行李の書を典し、我を愛する人々にのみ別をつげて忽然出發す、時まさに明治二十年八月二十五日午前九時なり云々

それが「突貫紀行」の冒頭であるが、當時の露伴先生の暗い心境がそこにはつきり出てゐる。先生は小樽から船で函館に着き、こゝで職務拋棄の後始末をしてさて青森に渡り、それから陸路を青森・盛岡・仙臺・郡山まで歩み、郡山から汽車で東京に歸つた。二本松から郡山までの途中は徹夜して歩いたが、疲勞困憊の極、時々自暴自棄的に野末に身を投げ出して休んだ。——

里遠しいざ露と寢ん草まくら

といふのは、この時の實感を詠じたものだ。露伴の號はこの句を出所としてゐる。露伴、つゆとも、は卽ちこの「露と寢ん」から出てゐるのだ。

先生が明治新文學の曙光に觸れたのは、この北海道時代であつた。こゝで露伴先生は『小說神髓』を讀み、『佳人之奇遇』を讀み、その他明治文學の先驅的著作數四に接した。さうして東京を中心に新しい文學が活潑に起りつゝあること、新しい作家が次から次へと勇ましくスタートを切ることに氣づいた。

『小說神髓』の出たのは、先生が北海道に赴任した十八年であるが、それの出る前、同じ年二月美妙

紅葉一派の硯友社が形成され、五月から筆寫の廻覽雜誌「我樂多文庫」が編輯されつゝあつたことは恐らくまだ先生の氣づかぬところであつたらう。

一一、文學の道へ

先生が北海道から歸つて來たのは、何とかお父樣に願つて學校生活に戻してもらふか、さもなくとも今少し讀書勉强して一かどの者になりたいといふやうな氣持ちからであつた。だが、官を棄てゝ無斷で歸京したといふ廉があるので、お父樣の御機嫌がいゝわけはなかつた。さうして、一種窮命の意味で、當時成延氏がやつてゐた紙店の店番をいひつけられた。

色々なものに、當時幸田家ではひどく困つて紙屋を開いて生計を支へたやうに書いてあるが、これは違ふので、再び云ふが、微祿したとはいつても、何も生計に差支へるといふ程ではなかつた。この紙店は寧ろ成延氏の理想實現のために經營されたものなのだ。成延氏が稻葉某から、無職不可論を吹き込まれて賛成したことは前に述べたが、このころ成延氏はキリスト敎に熱心し、當時下谷敎會を預かつてゐた植村正久師の說敎に頗る感心してゐた。そこで植村師が、キリスト敎の主義から勞働の福音と遊食の罪惡を說くと、成延氏はすつかりそれに共鳴した。さうしてわざわざ別の通街(とほり)に一軒の家

を借り、そこを通ひ店にしてこの紙店を始めたのである。さうして自分は自宅から通勤して働く、日曜日には休んで教會に行く、店のもうけはすつかり教會の費用にさし出すといふ有樣であつた。

先生はこの紙店の番頭役にされたのだ。

お父樣がさういふ態度であつたので、一家の人達も、先生に公然同情することが出來なかつたものか、折角突貫して逆境を拔けた先生は、日每に別の逆境に沈みつゝあつたかに見えた。先生の不在中に一家は猛烈なキリスト信者になつたが、先生は聞き入れない。あべこべに、屑屋に拂下げられようとした摩利支天像を、勿體ないからと請ひ受けて自室に安置して朝夕禮拜する。これといふ事もせず暇があれば本を讀む。折角月給とりとして好いスタートを切つたのに、我からそれを棄てゝ來るといふ困つた奴だと思はれたらしい。家內では、先生のことを「偶像」とやゝ冷笑のやうな名でよんだものであつたといふ。摩利支天一件からのことだ。先生自身、このころを――

面白く無くて、面白くなくて痛癖が起つて痛癖が起つて、何とも彼とも仕方の無い、腹に不平の煙り絕ゆる間無く渦卷ける

頃だといつてゐるが、全く同情に堪へない。たゞすぐ下の妹さん（延子）は先生の心事に深い理解をもち、時々小使などを貢いだといふ（もう音樂學校の助手か何かであつたのだらう。）

先生が店番をしてゐると、淡島寒月を始め、友人の誰彼が、や、お歸りなさいといふわけで、入り

代りやつて來る。話がはずんで好きな文學の方のことになる。さうすると、紙買ひの客のことなどもう忘れてしまふ。一人で居る時は本讀みで夢中だ、矢張り客のことなど考へてゐない。先生は店番としても困つた店番であつたらしい。

淡島寒月は名を寶受郎といつて、江戸の人だ。それ自身の文學的才能は何れ程のものであつたか、それは分からぬが、先生や紅葉に西鶴の味を敎へた點で、いつも明治文學の恩人視される人だ。又、事實さうに違ひない。人間的にも極めて面白い人であつた。先生は、寒月と圖書館通ひで知り合つたのだが、歸京後は一層親密な交際をした。先生が紅葉を始め、硯友社の連中と知り合つたのも、寒月を介してゞあつた。

寒月が先生に西鶴の本を、半ば無理押しつけに押しつけて讀ましたのも、この店番時代のことであつたらう。寒月から西鶴本を押しつけられて、借りて歸つて先生は、翌日早速持つて返しに來た。さうして（寒月の語をかりると）「いやとんに色ぽい本だ、こんなものを讀むと兩親に叱られるが落だ」と苦い顏をした。これまで京傳の黃表紙や、こんにやく本や、さう云ふ類の戲著戲作は澤山に涉獵した先生であつたが、然し西鶴の、あのエグ味のあるエロチシズムには一寸參つたものらしい。

然し寒月はそんな事で往生するやうな先生ではなかつた。それで尙ほ西鶴をむりやりに貸しつけてやつて、たうとう或る程度まで先生を西鶴宗の信者にしてしまつた。

紅葉の場合にも同じであつたといふ

一二、處女作『風流禪天魔』

先生は店番をしたり、寫字や文章の代作をして小遣錢を稼いだりする一方、あひ間あひ間を見て小說の筆をとり始めた。勿論これといふ大抱負があつてのことではなく、又大文豪を目ざしてのわざくれでもない。一つは、さういふものでも書いてゐないと、氣を紛らすことが出來なかつた。又一つは過去十年間に先生の頭腦の中に蓄へられた文學的遺產から自然にしみ出て來たものだとも言へる。當時の小說界に對する輕い不滿、おれならかういふ趣向のものをかう書きたいといふ氣持ちも多分にあつてのことではある。あれ位の技倆でさう有名になれるものなら、自分にも出來さうだといふ自信もあつた。さういふ色々な氣持ちが一緒になつて先生を動かし、いつとはなく、小說の筆を執らせたのであつた。

先生の處女作は從來『露團々』だとなつてゐる。それで、また大體は間違ひではないのだが、然しやかましくいふと、『露團々』ではない、『風流禪天魔』といふのが眞の處女作だ。たゞこれは公刊されずに終つたので、最初に公刊された「露團々」が處女作となつてゐる。

た。

『風流禪天魔』は明治二十一年に成つたもので、いはゞ一篇の戯作で、先生としては小手調べであつた。

蒟蒻本の洒脱なるを愛讀したる折の事とて、たゞ二三友人間に一笑を博さんが爲め、友人某氏の佛に倣し、禪に溺れたる餘り、甚だ人情に遠き振舞ありし實際を誇張して、描きたるに過ぎず、

右は糊細工せる折下貼となしたれば尾崎、淡島兩氏の外見たる人無し。

先生はこの處女作についてかう語つてゐる。紅葉が淡島寒月の許で先生のこの作を讀んでその文才に感じ、寒月を介して交りを求めたのであるとも傳はつてゐる。

「禪天魔」は以上の如く、蒟蒻本の形式をとつた戯作だが、三段から成り、「一風變つた能樂ものが」三人で遊里に出かけるといふのが發端で、卽ち第一段、第二段は現代の場面で、「何々の潮けふり」といふ題、その能樂連中の一人が北海道某地の賣女町のことを想ふところ（これは作者自身余市での見聞が取入れてある）、第三段は、わざと江戸時代にして、「とろば（香の名）のけむり」と題し、禪に凝つて、女郎屋で坐禪する男のことを書いたものであるといふ。

その次に書きかけたのは、馬琴の夢想兵衞めく一種の寓意小說だが、これは未完成で終つた。

一三、『露團々』出づ

その次に成つたのが、『露團々』である。これは可成りの長篇であり而かも二十一年の冬以前に脫稿したものらしいから、或は一番最初に考案し乃至着手したものかも知れない。その意味でこれを處女作と考へるのはさう見當違ひでない、が然し明證がない限り脫稿の順序によつた方が正しからう。ただ世間的にいへば『露團々』が先生の處女作たることは、勿論だ。

『露團々』の刊行については寒月も關係があるので、その直話といふものを揭げることにしよう。

「露伴君の處女作の『露團々』については面白い話がある。兎に角先生は此作には三年間の苦心を要したのだから自分でも傑作の積りで居た。得意の作なれば世にも示したかつたのでせう。僕の所へ來て實は斯う云ふものが出來ましたが、何うでせうと云ふので、讀めば中々面白いから、君一つ出版させて見ては何うだ、と氣を引くと、先生直ぐに快諾して、エヽ私も其氣なのです、何卒依田さんに紹介していただいて一閱を乞うて出版したい、あゝ容易ことよし〳〵と言つて手紙をかいてやりました。それから依田君の家を訪れて一閱を乞うたさうです、ところがです、ところが依田君は、寒月さんも面白いと言うてる位だから面白く出來てるには違ひないでせう、直ぐ本屋へ御持ち

になつて宜いでせうと何氣なく言つて折角の得意の作を手にも取られなかつたので、露伴君が、「僕は羊頭をかゝげ狗肉を賣る者ではありません」と言つたさうだ、「それでは」と云つて、依田君は、兎も角も拜見しませうから置いてつて見て下さいと挨拶して露伴君を歸して、さて其後で僕に寄した手紙はこれです、小生の一見してよしと見たるものは矢張り善きものであつたなどとあります。かうして依田學海翁の推薦を得、友人の世話で當時文學物の出版社としては第一流の金港堂に買つてもらつた（翌二十二年二月の「都の花」から連載、後に單行本）。その時の稿料は百圓であつたとか、金港堂の使ひが「露伴先生はおいでゞ」と尋ねて來て、家人を驚かしたとか、色々傳説めく話が傳つてゐるが、それ等は何處まで信じていゝものか分からぬので、一々は擧げない。

たゞ『露團々』の賣れたのは二十一年の暮の大晦日であつたこと、その金で友人と祝酒を汲み、殘金を懷中にしてそのまゝ旅行に出かけ、中仙道から京阪地方に出て一月程して歸つて來たのは事實だ。此の時の紀行を『酔興記』といふ。旅中、木曾街道で得た材料を使つて、傑作『風流佛』を書いた。『風流佛』は先生の出世作であつて、それと共に先生の文壇的位地が定まつたのだ。

先生がかつて匿名（亂筆狂士）で讀賣新聞に書いた「硯海水滸傳」といふものがある、「水滸傳」に擬して明治文學勃興の由來を書いたものだが、極めて面白いものだ。この篇から先生に關係のある所を數節拔いてお目にかけよう。

んで好いか分らないといふ向がある。すると、正直に先生に其の旨をいつて御尋ねする。それなら何々を讀んだら宜敷からうと、學力相應に書物を指定して下さるといつたやうな事で誰しも勉强したものです。（下略）

さういふ譯で銘々勝手な本を書みますから、先生は隨分うるさいのですが、其の代り銘々が自家でもつて十分に苦しんで讀んで、字が分らなければ字引を引き、意味が取れなければ再三思考するといふやうに勉强した揚句に、いよ〳〵分らないといふところだけを先生の前に持出して聞くのですから、一人が先生の何分間をも費すのではありません。よく〳〵勉强の男でも十分間も先生を煩はすと云ふのは無い位でした。（下略）

それで、『誰某は偉い奴で、史記の列傳丈を百日間でスッカリ讀み明らめた。』といふやうな噂が塾の中に立つと『ナニ乃公なら五十日で隅から隅まで讀んで見せる』なんぞといふ英物が出て來る、『乃公はそんなら本紀列傳を併せて一ト月に硏究し盡すぞ』といふ豪傑が現はれる。そんな工合で互に勵み合ふので、ナマケル奴は勝手にナマケて居るのでいつまでも上達せぬ代り、勉强するものはグングン上達して、公平に評すれば畸形的に發達すると云つても宜いが、兎に角發達して行く速度は中々に强いものであつたのです。

併し自修ばかりでは一人合點で濟まして居て大間違ひをして居る事があるものですから、そこで

輪講といふ事が行はれる。それは毎日輪講の書が變つて一週間目にまた舊の書を輪講するといふやうになつて居るのです。卽ち月曜日には孟子、火曜日には詩經、水曜日には大學、木曜日には文章軌範、金曜日には何、土曜には何といふやうになつて居るので、易いものは學力の低い人達の爲、むづかしいものは學力の發達して居るもの丶ため、といふ理窟なのです。これで順番に各自が宛がはれた章を講する、間違つて居ると他のものが突込む、論爭をする、先生が判斷する、間違つて負た方は黑玉を帳面に記されるといふ譯なのです。(下略)此の外に復文といふ事をする。これは譯讀した漢文を原形に復するので、ノーミステークの者が褒詞を得る。鬪文鬪詩が一月に一度か二度ある、先生の講義が一週一二度ある、先づそんなもので、其の他何たる規定は無かつたのです。わたくしの知つて居る私塾は先づそんなものでした。で、自宅練修としては銘々自分の好むところの文章や詩を書寫したり抜萃したり暗誦したりしたもので、遲塚麗水君とわたくしとは互に相爭つて莊子の全文を寫した事などは記憶して居ます。

これで菊池塾の教育といふものが何ういふものであるか丶大抵分る。先生の品性なり、學力なりが菊池塾にゐる足かけ二年の間に大分底光りのしたものになつた。

遲塚麗水、名は金太郎、氏も亦露伴先生に少し遲れて明治文壇に名乘り出た一文星であり、小說でも名を成したが、殊に紀行文の名家として嘖々されたものである。遲塚氏は、この菊池塾時代に於け

る先生の親友の一人であつた。

その遲塚氏との間に面白い話がある。

先生がいつか芝の兄君郡司氏の宅にゐる頃（十六位だつたといふ）、丁度遲塚氏も芝に移つてゐたので、よく二人で種々な事をして遊んだ。そのうちに二人で相談して、新聞紙を張り固めた大砲を造り火藥を調合して、それを芝浦の濱に持ち出して試射して見た、初め導火線をつけるのに困つたが、つひに弓形の導火機を工夫して見事導火に成功したので、二人は大得意であつた。二人は、これが巧くいつたら小鳥でも取るに使はうといふつもりだつた。ところが、先生が、兄君の宅の二階で火藥を調合してゐるとき、何かのはづみでそれが爆發し、恐ろしい音と共に煙がどつと出た。幸ひ怪我はしなかつたものゝ、これで兄君に大砲一件が知れて、大目玉となり、それきり取り止めになつたといふ。

八、圖書館、そのほか

若し淡島寒月の記事が誤りがないものとせば、露伴先生の圖書館通ひは、明治十三年、先生が十四の時あたりから始まつたことになる。今圖書館といふと、すぐ上野とか日比谷を聯想するがその頃のは違ふので、上野圖書館の前身ともいふべきものが、只今の湯島聖堂のあたりにあり、俗に聖堂の圖

書館と呼ばれてゐた。この圖書館に、明治十三年頃から通ひ初めたといふわけである。當時は閲覽料は二錢とかで、閲覽者には必要に應じて、鉛筆を貸し紙をくれたりしたものだ。形は整はなかつたが今よりもずつと圖書館らしい圖書館であつた。

先生が本當に圖書館の味を知つたのは、例の築地の英語學校をやめてからだが、別に何といつて纒まつて研究的に讀んだのではない。たゞもう讀みたい讀みたいの一念に任せて、何でも構はず讀んだものだ。歴史・傳記・戯作・狂歌・俳諧、あらん限りの書物を渉獵した。その頃毎日先生と顔を會はすやゝ年長の閲覽者があつたが、この人は又先生と違つて毎日同じ本を借りてそれを寫してゐる。それは燕石十種といふ叢書本だ。これは卽ち淡島寒月居士で、毎日顔を會はすところから、二人の間に自然親密な交際が成り立つた。寒月居士は一面藏書家でもあつたから、その爲めに先生は大に益を受けたものであつた。

尙ほ菊地塾では、塾主が程朱學の老先生であつたので講義してきかせるものは經書か硬いものばかりで、老子・莊子などを公然と讀んでも叱られる位ゐであつたから、支那の俗文學、卽ち小說や戯曲の類などは勿論敎へるどころではなかつた。然し塾にはその種の本も少くなかつたので、こつそりそれをひねくり廻してゐるうちにいつとなく俗文學も讀めるやうになつた。

それから先生から叱られる老子・莊子の書も、この頃露伴先生の愛讀書であつた。麗水氏と競爭し

で莊子の全文を寫したといふのでも、その熱愛の度が知れるが、この老莊は今でもお嫌ひではないらしい。

明治十四五年は先生が十五六のころだが、丁度この頃（卽ち菊地塾にゐるころ）四方に演說會・講話會のやうなものが大に流行した。原因は、世人啓蒙の必要、時人の知識慾の要求から出てゐるのだが、先生もよくかういふ講話會を開いたものだつたといふ。その中で、佛教家中の新思想家ともいふべき連中が、和敬會といふのを組織して、盛んに佛敎思想普及の爲めに奮鬪してゐた。先生は、初めこの連中の說くところが老莊の思想に似たところがあるのに興味を感じて、いつも面白く聽いてゐたが、そのうちに自分で佛經佛典を讀んでみたいといふ程關心をもち始め、ぽつぽつ手を延ばした。先生の文學と密接な關係がある佛教思想、佛敎文學との交涉が早くこの時から開けたことは、十分注意を要する點だ。（先生の精神をこの方面に傾かしめた一因としては、前述の如き家庭に於ける崇佛の空氣、幼時の習慣等もあつたに違ひない。）

九、電信修技校

十七のとき、又も菊池塾を止めて、今度は芝の汐留にあつた電信修技校といふのに入つた。これは

遞信省で電信技術者養成のため新に設けた官費學校であつた。

幸田家の近くに、これも舊旗下の士で（可成り大身であつたが）稻葉某といふ人がゐた。この人は何ういふ動機からか又は誰に聞かされたものか、これからの人間は學問などでは駄目だ、何でも實業でないといけない、手に職をもつのが一番だといふ持論を口癖のやうに語つた。餘程維新の大變動に懲りたものであつたらうが、それには、學問をしても、舊幕出身者では立身の目的がないといふこともあつた。先生の父君は大にこの稻葉氏の議論に感動して、露伴先生にも學問を止めさせ、何かな實業家か職人かに仕立てようとした。先生は然し何うしても學問がしたいのだが、肝腎のお父樣がさういふ意見では、いくら頼んだところが何うなるものでもない。そこで一人でつくぐ考へた末、官費を取柄にこの學校に入學したのだ。何もかもあきらめて、先づ手取早く自給生活に入らうといふ決心からであつた。

學校の課程が一年、それから實際練習が一年ばかり續く。それで十七年に修技校を卒業したが、十八年まで東京の中央局で實務を執られた。この二年間は好きな讀書もあまり出來なかつたらう。さて實務練習が終つて、判任官の技手として月給七圓を頂き、北海道、後志の國余市町の電信局に赴任することになつた。

先生は心ならずもこゝに足かけ三年、十九から二十一まで過した。

一〇、北海道時代

此の頃の北海道は、よく云へば清新の天地であり、露骨に云へば新開地の金儲氣分の充滿した土地で、到るところ活氣が溢れてゐた。例へば、余市に警察が出來て署開きをやつた。ところが署長は醉つた揚句、土地の有力者と喧嘩して、有力者をしたゝか擲りつけた。さうして翌日辭職して早速船問屋となつたといふ話しもあつた。

然し何しろ僻地の余市のことであるから、土人の無教養の點ではお話しにならなかつた。先生の話相手になる人間は全然ない、學問讀書の益を分け合ふやうな人は一人もない、況んや上に立つて指導を與へるやうな人に於いてをやだ。從つて先生は、「孤影孑然朋友も無く交際もせまく談話を交換し知識や感情をやりとりする者もなくさびしく」暮したものである。この間先生の心を慰めだのはたゞ書物だけだつた。

電信局は、局長と先生と二人、事務は閑散であつたので、先生は出來る限り多くの時間を讀書に向けた。先生は、田舍のことだから本もなからうと、出かけて來るとき行李に一杯の漢籍（經書子類など）を仕入れて來たが、毎日毎日讀書を續けたので、いくらも經たぬうちに持つて來た本は讀んでし

まつた。勿論人からも借りて讀んだが、狹い土地だからそれもすぐ無くなつてしまふ。すると、此の土地に禪宗の寺があつて、その坊さんが、先生の讀書好きなのを聞いて、それではチトこれでもお讀みなさいと、佛書・佛經を澤山貸してくれた（これは噂話だが）。丁度讀むものがなくて困つてゐた先生は、これは有難いとばかり、その佛書・佛經を片端から讀破した。他日漢文學・佛教文學の大家として卓然立つた土臺は、この北海道時代に養はれたものであつた。

かういふと先生は仕事も何も放つて自分の樂みにばかり耽つてゐたやうに見えるが、一面又、土地の人と親んで、いろいろ農耕の事や養蠶などについて氣づいたことを話してやつたりしたといふ。然しながら、若い先生の心には色々な意味で不平があつた。こんな田舍にいつまでゐなくてはならぬのだ。早く東京へ戻りたい、戻つてもつと學問修業がしたい。何といつても、血氣の頃だ、酒も少しは覺えた、不平が嵩じては亂暴な生活もした。だが、なか〳〵歸してもくれず免職もしてくれぬ。辭職願ひを出しても許されない。そこは官費修業のつらさだ。この時先生に同情したのは、戸長の須藤某といふ人である。先生はこの人に歸京の決心を打ち明け、書籍を典じて旅費の調達をした。さうして斷然職務を抛擲して歸京してしまつた。丁度明治二十年八月のことだ。この時の紀行を「突貫紀行」といふ。

身には疾あり、胸に愁あり、惡因緣は逐へども去らず、未來に樂しき到着點の認めらるゝなく、

目前に痛き刺激物あり、慾あれど錢なく、望みあれども縁遠し、よし突貫して此逆境を出でむと決したり、五六枚の衣を賣り、一行李の書を典し、我を愛する人々にのみ別をつげて忽然出發す、時まさに明治二十年八月二十五日午前九時なり云々

それが「突貫紀行」の冒頭であるが、當時の露伴先生の暗い心境がそこにはつきり出てゐる。先生は小樽から船で函館に着き、こゝで職務拋棄の後始末をしてさて青森に渡り、それから陸路を青森・盛岡・仙臺・郡山まで歩み、郡山から汽車で東京に歸つた。二本松から郡山までの途中は徹夜して歩いたが、疲勞困憊の極、時々自暴自棄的に野末に身を投げ出して休んだ。——

里遠しいざ露と寢ん草まくら

といふのは、この時の實感を咏じたものだ。露伴の號はこの句を出所としてゐる。露伴、つゆとも、は卽ちこの「露と寢ん」から出てゐるのだ。

先生が明治新文學の曙光に觸れたのは、この北海道時代であつた。こゝで露伴先生は『小說神髓』を讀み、『佳人之奇遇』を讀み、その他明治文學の先驅的著作數四に接した。さうして東京を中心に新しい文學が活潑に起りつゝあること、新しい作家が次から次へと勇ましくスタートを切ることに氣づいた。

『小說神髓』の出たのは、先生が北海道に赴任した十八年であるが、それの出る前、同じ年二月美妙

紅葉一派の硯友社が形成され、五月から筆寫の廻覽雜誌「我樂多文庫」が編輯されつゝあつたことは恐らくまだ先生の氣づかぬところであつたらう。

一一、文學の道へ

先生が北海道から歸つて來たのは、何とかお父樣に願つて學校生活に戾してもらふか、さもなくとも今少し讀書勉强して一かどの者になりたいといふやうな氣持ちからであつた。だが、官を棄てゝ無斷で歸京したといふ廉があるので、お父樣の御機嫌がいゝわけはなかつた。さうして、一種窮命の意味で、當時成延氏がやつてゐた紙店の店番をいひつけられた。

色々なものに、當時幸田家ではひどく困つて紙屋を開いて生計を支へたやうに書いてあるが、これは違ふので、再び云ふが、徵祿したとはいつても、何も生計に差支へるといふ程ではなかつた。この紙店は寧ろ成延氏の理想實現のために經營されたものなのだ。成延氏が稻葉某から、無職不可論を吹き込まれて贊成したことは前に述べたが、このころ成延氏はキリスト教に熱心し、當時下谷教會を預かつてゐた植村正久師の說教に頗る感心してゐた。そこで植村師が、キリスト教の主義から勞働の福音と遊食の罪惡を說くと、成延氏はすつかりそれに共鳴した。さうしてわざわざ別の通街(とほり)に一軒の家

を借り、そこを通ひ店にしてこの紙店を始めたのである。さうして自分は自宅から通勤して働く、日曜日には休んで教會に行く、店のもうけはすつかり教會の費用にさし出すといふ有様であつた。

先生はこの紙店の番頭役にされたのだ。

お父様がさういふ態度であつたので、一家の人達も、先生に公然同情することが出來なかつたものか、折角突貫して逆境を拔けた先生は、日毎に別の逆境に沈みつゝあつたかに見えた。先生の不在中に一家は猛烈なキリスト信者になつたが、先生は聞き入れない。あべこべに、屑屋に拂下げられようとした摩利支天像を、勿體ないからと請ひ受けて自室に安置して朝夕禮拜する。これといふ事もせず暇があれば本を讀む。折角月給とりとして好いスタートを切つたのに、我からそれを棄てゝ來るといふ困つた奴だと思はれたらしい。家内では、先生のことを「偶像」とやゝ冷笑のやうな名でよんだものであつたといふ。摩利支天一件からのことだ。先生自身、このころを——

面白く無くて、面白くなくて癇癪が起つて癇癪が起つて、何とも彼とも仕方の無い、腹に不平の煙り絶ゆる間無く渦卷ける

頃だといつてゐるが、全く同情に堪へない。たゞすぐ下の妹さん（延子）は先生の心事に深い理解をもち、時々小使などを貢いだといふ（もう音樂學校の助手か何かであつたのだらう。）

先生が店番をしてゐると、淡島寒月を始め、友人の誰彼が、や、お歸りなさいといふわけで、入り

代りやつて來る。話がはずんで好きな文學の方のことになる。さうすると、紙買ひの客のことなども
う忘れてしまふ。一人で居る時は本讀みで夢中だ、矢張り客のことなど考へてゐない。先生は店番と
してもも困つた店番であつたらしい。

淡島寒月は名を寶受郎といつて、江戸の人だ。それ自身の文學的才能は何れ程のものであつたか、
それは分からぬが、先生や紅葉に西鶴の味を敎へた點で、いつも明治文學の恩人視される人だ。又、
事實さうに違ひない。人間的にも極めて面白い人であつた。先生は、寒月と圖書館通ひで知り合つた
のだが、歸京後は一層親密な交際をした。先生が紅葉を始め、硯友社の連中と知り合つたのも、寒月
を介してゞあつた。

寒月が先生に西鶴の本を、半ば無理押しつけに押しつけて讀ましたのも、この店番時代のことであ
つたらう。寒月から西鶴本を押しつけられて、借りて歸つて先生は、翌日早速持つて返しに來た。さ
うして（寒月の語をかりると）「いやとんに色ぽい本だ、こんなものを讀むと兩親に叱られるが落だ」
と苦い顏をした。これまで京傳の黄表紙や、こんにやく本や、さう云ふ類の戲著戲作は澤山に渉獵し
た先生であつたが、然し西鶴の、あのエグ味のあるエロチシズムには一寸參つたものらしい。

然し寒月はそんな事で往生するやうな先生ではなかつた。それで尙ほ西鶴をむりやりに貸しつけて
やつて、たうとう或る程度まで先生を西鶴宗の信者にしてしまつた。

紅葉の場合にも同じであつたといふ

一二、處女作『風流禪天魔』

先生は店番をしたり、寫字や文章の代作をして小遣錢を稼いだりする一方、あひ間あひ間を見て小說の筆をとり始めた。勿論これといふ大抱負があつてのことではなく、又大文豪を目ざしてのわざくれでもない。一つは、さういふものでも書いてゐないと、氣を紛らすことが出來なかつた。又一つは過去十年間に先生の頭腦の中に蓄へられた文學的遺產から自然にしみ出て來たものだとも言へる。當時の小說界に對する輕い不滿、おれならかういふ趣向のものをかう書きたいといふ氣持ちも多分にあつてのことではある。あれ位の技倆でさう有名になれるものなら、自分にも出來さうだといふ自信もあつた。さういふ色々な氣持ちが一緒になつて先生を動かし、いつとはなく、小說の筆を執らせたのであつた。

先生の處女作は從來『露團々』だとなつてゐる。それで、また大體は間違ひではないのだが、然しやかましくいふと、『露團々』ではない、『風流禪天魔』といふのが眞の處女作だ。たゞこれは公刊されずに終つたので、最初に公刊された「露團々』が處女作となつてゐる。

た。

『風流禪天魔』は明治二十一年に成つたもので、いはゞ一篇の戯作で、先生としては小手調べであつた。

蒟蒻本の洒脱なるを愛讀したる折の事とて、たゞ二三友人間に一笑を博さんが爲め、友人某氏の彿に倣し、禪に溺れたる餘り、甚だ人情に遠き振舞ありし實際を誇張して、描きたるに過ぎず、

右は糊細工せる折下貼となしたれば尾崎、淡島兩氏の外見たる人無し。

先生はこの處女作についてかう語つてゐる。紅葉が淡島寒月の許で先生のこの作を讀んでその文才に感じ、寒月を介して交りを求めたのであるとも傳はつてゐる。

「禪天魔」は以上の如く、蒟蒻本の形式をとつた戯作だが、三段から成り、「一風變つた能樂ものが」三人で遊里に出かけるといふのが發端で、即ち第一段、第二段は現代の場面で、「何々の潮けふり」といふ題、その能樂連中の一人が北海道某地の賣女町のことを想ふところ（これは作者自身余市での見聞が取入れてある）、第三段は、わざと江戸時代にして、「とろば（香の名）のけむり」と題し、禪に凝つて、女郎屋で坐禪する男のことを書いたものであるといふ。

その次に書きかけたのは、馬琴の夢想兵衞めく一種の寓意小説だが、これは未完成で終つた。

一三、『露團々』出づ

その次に成つたのが、『露團々』である。これは可成りの長篇であり而かも二十一年の冬以前に脫稿したものらしいから、或は一番最初に考案し乃至着手したものかも知れない。その意味でこれを處女作と考へるのはさう見當違ひでない、が然し明證がない限り脫稿の順序によつた方が正しからう。ただ世間的にいへば『露團々』が先生の處女作たることは、勿論だ。

『露團々』の刊行については寒月も關係があるので、その直話といふものを掲げることにしよう。

「露伴君の處女作の『露團々』については面白い話がある。兎に角先生は此作には三年間の苦心を要したのだから自分でも傑作の積りで居た。得意の作なれば世にも示したかつたのでせう。僕の所へ來て實は斯う云ふものが出來ましたが、何うでせうと云ふので、讀めば中々面白いから、君一つ出版させて見ては何うだ、と氣を引くと、先生直ぐに快諾して、エヽ私も其氣なのです、何卒依田さんに紹介していただいて一閲を乞うて出版したい、あゝ容易ことよし〳〵と言つて手紙をかいてやりました。それから依田君の家を訪れて一閲を乞うたさうです、ところがです、ところが依田君は、寒月さんも面白いと言うてる位だから面白く出來てるには違ひないでせう、直ぐ本屋へ御持ち

になつて宜いでせうと何氣なく言つて折角の得意の作を手にも取られなかつたので、露伴君が、「僕は羊頭をかゝげ狗肉を賣る者ではありません」と言つたさうだ、「それでは」と云つて、依田君は、兎も角も拜見しませうから置いてつて見て下さいと挨拶して露伴君を歸して、さて共後で僕に寄した手紙はこれです、小生の一見してよじと見たるものは矢張り善きものであつたなどとあります。かうして依田學海翁の推薦を得、友人の世話で當時文學物の出版社としては第一流の金港堂に買つてもらつた（翌二十二年二月の「都の花」から連載、後に單行本 。その時の稿料は百圓であつたとか、金港堂の使ひが「露伴先生はおいでゞ」と尋ねて來て、家人を驚かしたとか、色々傳說めく話が傳はつてゐるが、それ等は何處まで信じていゝものか分からぬので、一々は擧げない。

たゞ『露團々』の賣れたのは二十一年の暮の大晦日であつたこと、その金で友人と祝酒を汲み、殘金を懷中にしてそのまゝ旅行に出かけ、中仙道から京阪地方に出て一月程して歸つて來たのは事實だ。此の時の紀行を『醉興記』といふ。旅中、木曾街道で得た材料を使つて、傑作『風流佛』を書いた。『風流佛』は先生の出世作であつて、それと共に先生の文壇的位地が定まつたのだ。

先生がかつて匿名（亂筆狂士）で讀賣新聞に書いた「硯海水滸傳」といふものがある、「水滸傳」に擬して明治文學勃興の由來を書いたものだが、極めて面白いものだ。この篇から先生に關係のある所を數節拔いてお目にかけよう。

（前略）　夫等とは引き違ひて呂伴和尚といへる方外の異人ありて、此頃は長安市中黄塵堆裏に眠りを貪ぼり痴夢をたづねて世間の事をきかず悠々と蝸牛の明家を借りて空房獨り咬む三河島の菜根（第七回）

呂伴和尚が菩提の道の友に露鶴軒といへる隱士あり（中略）或時紅鷹容を改め露鶴軒に問て我願くは懷を濶くして自己を低くして洽く俊士に交らむと欲す先生幸ひに知る人あらば教へ玉へ（中略）露鶴軒曰くあり〳〵尙爰に我が舊友に呂伴和尙といふものあり此尙和長く南北に流轉して當時此地に還り來り居れり隨分栗たれなりといへども亦可憐のところありて滿身の血中多少の山光水色を染み込しめ自ら咏ぜし詩にも亦是れ丹桂籍上の仙多情謫せられて閭鄽に在りといへる句ありて頃日はたゞ馬糞をあつめて芋を燒くの痴を盡し得々たりと、紅大に笑つて曰く此人必ず偏ならむ願はくば此人に逢はむ（第八回）

適々呂伴露鶴軒を訪ふに席上一箇の秀才を見る即ち禮して曰く足下は誰ぞや彼人曰く我は是紅鷹山人なりと是に於て三人相共に談話す紅鷹呂伴を激して曰く和尚能く爲すあらば我が荒久多の軍中に來つて一根の如意を揮れと、呂伴遂に硯友社に居候たりしが紅鴈一日說て曰く今天下三に分れて見や此花新正雪組と我黨たり和尚嘗つて見や此花に緣ありといへども我黨に入つて第五隊に出馬せよと、呂伴一諾して變人形を作る（第九回）

「變人形」とは『風流佛』の事である。その他の人名は一々說明を要せずして判然してゐると思ふ。當時先生の作には佛教思想があり、文章にも佛語を驅使したことが多かつたので、和尙の綽名があつた、そこで洒落にも、それを篇中にそのまゝ用ゐたのだ。

『風流佛』以後の先生は、もう明治文學史上の立物としてその天才を謳はれてゐる。こゝで今更喋々するまでもない、よく人の知るところだ。

一四、明治二十二年以後の先生

明治二十二年の冬、先生は讀賣新聞に招聘されて客員めくものになつた。これは當時の主筆高田早苗氏の案で讀賣を立派な文學新聞に仕立てようといふので、坪內逍遙を文學主筆とし、紅葉と先生とを迎へて陣容を立て直したのだ。

讀賣に約一年位關係してゐたが、二十三年の秋、今は東京朝日に合倂されてとつくになくなつてしまつたが、國會といふ新聞が東京朝日の姉妹新聞として同じく村山龍平氏の手で出ることになり、先生は讀賣をやめてこれに轉じた。これは讀賣から東京朝日に轉じてゐた饗庭篁村などのすゝめもあつたらうし、舊師宮崎三昧などもすゝめたものであつたらう、先生と國會との關係は國會の廢刊まで約

六年間つゞいたが、國會では可成り先生を優遇し我儘もよく聽き入れてくれ、先生の氣持ちなども理解してゐたので、この六年間、先生は先づは何の苦もなく創作と勉强とに專念することが出來た。先生の代表的傑作は大抵この頃出たものであり、新文壇の第一人者として、紅露と天才をうたはれたのも、この頃である、又先生個人としても、一番張りきつた樂しい生活をしてゐた時代だ。朝早く起きて、その日の新聞原稿を片づけて、それから自分の勉强をした。この頃の勉强が一番實になつた、とはよく先生の口をもれる述懷だ。

谷中、向島と、偶然か何うか根岸派の本尊饗庭篁村と居を近くし、その上、旅行にもよく同行したりしたので、先生も文壇的には根岸派とされた。根岸派は、別に意識的にではないが、當時巧みにジヤーナリズムを操つて文壇の實質的覇權を着々と握つてゐた紅葉及び硯友社の連中と對立する一團と解されてゐた。先生に、勿論對硯友社競爭などといふ意識のなかつたのは、當然過ぎる程當然なのだが、作風の對立的相違から、先生と硯友社一派とは相容れぬものと、世間では考へてゐたので、先生が、硯友社反對の根岸派と行動を共にすることが多いのも自然なことだと見られてゐた。

明治二十八年暮に國會は廢刊して朝日に合併することゝなつた。この頃の先生はもう大家中の大家で、批評家は露伴時代を頻りに謳歌してゐた。先生に次ぐものは一葉の名であり、紅葉の全盛時代はやゝ過ぎ去つたかの觀があつた。

翌年先生は春陽堂から新小說を創刊した。嚴密にいへば創刊でなくて再興ともいへよう。二十二年の頃同名の雜誌が春陽堂から出てゐたからだ。然しそれとこれとは精神的つながりは何もなかつた。前期のも、勿論新型新作の小說といふ意味だが、作者には生き殘つてゐた舊戲作者型の小說家が多かつた。先生の新小說はそれとは違ふので、これは、日淸戰後當然日本文化が一轉すべき機にあることを認め、眞實の意味で後繼の新人を養成しようといふ意圖から出たものであつた。さうして事實又、この新小說によつて文壇に出た新人は澤山あつた。創刊號から二號に渡つて、先生が新人の奮發を促した檄は、今日歷史的のものとなつてゐる。

先生の新小說主宰は三十一年頃まで續いたが、それから再び創作と著述と讀書の生活に還つた。その創作も三十七年に『天うつ浪』が中絕してからあまり多くなくなり、その反對に、史傳・隨筆・修養關係の著書が次第に多くなつた。先生の書くものにも露伴學人といふ署名が多くなつた。

そのうちに、明治四十一年、先生が新設の京都帝國大學に講師として迎へられた。主として日本文學の講座であつたといふが、推薦したのは湖南內藤虎次郞博士であつたといふ、眞とせばいかにも先生にふさはしい推薦者であつた。

就任の始め、先生にも種々抱負があつたらしい。私なども、新聞でその事を讀んだ記憶が今だにかすかに殘つてゐる。だが、大學講師の椅子は先生には、さう快よいものではなかつたかして、一年後

には飄然と辭し、隅田河畔の舊草廬に歸つた。裏面には何やら苦々しい事情があつたやうにもいはれたが、それはこゝで述べる限りではない。

その後の先生は又も讀書と著述の生活に入つた。明治四十四年に文學博士の學位を授けられたときには、當然の事として、世間でも怪しみはしなかつた。それ程この頃の先生の生活はもうすつかり學者的なものになつてゐたのである。大正十二年の大震火災後、向島から山の手の小石川に移り、それ以後、ずつと讀書生活を續けて今日に及んでゐる。

一五、先生の著作

先生の著作の主なるものは、昭和四年十一月から昭和五年十一月に亘つて『露伴全集』全十二卷として刊行されたから、それに就いて見ることが出來る。左に、單行著作を年代順に擧げてみよう。

第一に、小說で主なものは――

『風流佛』(明治二一年九月)

『葉末集』(同二三年六月)　第一短篇集で、有名な「對髑髏」はこの中にある。

『露團々』(同二三年十二月) 所謂處女作の單行である。
『新末葉集』(二四年十月) 『いさなとり』前後(二四年十一月、二五年三月)
『尾花集』(二十五年十月) 第三短篇集、代表作とされる「五重塔」はこの中に入つてゐる。
後に、この集は「五重塔」と改稱されて出てゐる。
『有福詩人』(二七年一月) 創作集が、表題のもの丶外に三四篇入つてゐる。
『さゝ舟』(二八年十二月) 『菊の濱松』(二九年二月)
『ひとり寢』(二十九年五年) 『雲の袖』(二九年八月)
以上は四部連續で、『風流微塵藏』といふ總名をもつてゐる。四部を合すると先生の作中第一の長篇となる。
『ひげ男』(二九年十二年) 歴史小説で、長篠合戰の表面裏面を描いたものである。
『僥倖』(三十年一月)
『新羽衣物語』(三十年八月) 後に増補して『新羽衣物説』、『三保物語』の二部に分けて出す。
『小萩集』(三二年一月) 中に「日ぐらし物語」といふ小品集と、戲曲「滿壽姫」が入つてゐる。
『雪紛々』(三四年一月、堀内新泉合著)

『新生田川』（三十六年四月）　先生の作としては「新生田川」「白眼達磨」の二篇が入つてゐる。世界之日本に載つた小說の集である。（この集は『明治小說集』、『はるさめ』などと改題されても出てゐる。）

『天うつ浪』（三九年一月第一、同六月第二、四十年一月第三）　第四は豫告されてゐるが、新刊されずに中絕したのである。

「不藏庵物語」（三十九年十二月）

『はるさめ集』（四十年五月）　傑作「一口劍」、「風流佛」、「未練」が收まつてゐる。

『玉かつら』（四一年一月）　短篇小說集である。

『小品十種』（四一年六月）

此の外に、單行本に入らぬ作品で「風流悟」その他の如き有名なものがまだ〳〵ある。

第二に隨筆、これは文學的なものと修養的なものとに分けられる。前者としては――

『讕言』（三四年九月）

『長語』（三四年十一月）　卷末には近作の短篇かいくつか附錄になつてゐる。

『潮待ち草』（三九年三月）　附錄の小說「土偶木偶」は先生の晚期の傑作である。

『蝸牛庵夜譚』（四十年十一月）

修養的なものゝ中には次のやうな纒まつた論文めくものもある、

『努力論』　四五年七月）　　『修省論』（大正三年四月）

『洗心錄』（大正三年八月）　　これには再び文學趣味が加味されてゐる。

『立志立功』（同三年十二月）　『悅樂』（同四年八月）　『洗心廣錄』（同十五年六月）

等あがる。

第三に少年文學、先生の少年文學は單なる敎訓を含むものでなしに、生活に切實な實行的なものを含ませてある點で、巖谷小波氏の作物などとは違つたものである。

『二宮尊德翁』（明治二四年十月）

『寶のくら』（同二五年七月）　佛經中に散見する小話を拾ひ集めたもので、東洋のイソップ物語の觀がある。後に『寶の藏』『寶の山』として再刊。

『日蓮上人』（同二七年二年）『番茶會談』（昭和十一月六月）

以上の外に「休暇傳」の如き好いものもある。

第四に新體詩――

『出廬』（明治三八年一月）　　これは『心のあと』といふ長詩の序詩であるが、或る人々によつて「始めて國詩あり」と褒められたものである。

第五は戯曲、これは上の創作集中にも入つてゐるが、中には戯曲體の小説もある。

『名和長年』（大正十五年三月）と、『龍姿蛇姿』（昭和二年一月）中の成吉思汗に關するものとの二つが立派なものだと思ふ。

第六は紀行——

『枕頭山水』（明治二六年九月）　主に若い頃の紀行文集で、文章も元氣がいいし、觀察にも面白い所がある。

第七は史傳風の讀物で、これも相當多い、——

『眞西遊記』（明治二六年三月）唐の玄奘三藏の天竺入りの實錄である。

『伊能忠敬』（同三二年八月）『賴朝』（四一年九月）

『幽情記』（大正八年三月）　主に支那の詩詞に關する物語で、有名な詩人・女流の傳記小説風の物語。

『幽秘記』（大正十四年六月）　これは『幽情記』に、傑作「運命」を添へて再刊したもの。

『蒲生氏鄕・平將門』（大正十四年十二月）『賴朝・爲朝』（同十五年四月）

この他に、「日本武尊」、「武田信玄」、「今川義元」の如き短いものがある。

最後に晩年の大仕事としては、俳諧七部集の注釋を擧げなければならぬ。

『冬の日抄』（大正十三年九月）『春の日・曠野抄』（昭和二年六月）
『ひさご・猿蓑抄』（昭和四年十二月）『炭俵・續猿蓑抄』（同五年一月）
尙ほ前記『露伴全集』以前に出た全集乃至選集やうのものには、——
『露伴叢書』（明治三五年六月）四十二年にこれを訂正增削して二册として再刊した。
『露伴集』二卷（四四年一月五月）
その他改造社の現代日本全集、春陽堂の明治大正文學全集にそれぞれ先生の集があることは周知の通りだ。此等の選集類を讀破せば、先生の業績を一わたり知ることが出來よう。

〔附記〕露伴先生のことは、今迄度々自分も書き他人も書いてゐる。又業績といつても、旣に文學史的常識であつて、今更その價値を問題にするのは野暮であらう。そこで寧ろ若い時代の先生の面影を詳しく傳へた方が、私自身として書く興味もあり、讀者にも面白からうし、又却つてその方が後進の刺激となりはしないか、と思はれたので、靑年期以後は眞の略傳の程度にとどめた次第である。

（昭和十二年八月「文化勳章に輝く人々」）

山田美妙

（一）山田美妙集序

二十歳前後には忽然東洋のシェークスピヤといふ羨望的綽名を得た、二十四五ではそろ〳〵忘られかけた、三十前後輕薄文士、放蕩漢の名をうたはれた、その後は日蔭者だ、死ぬときには、大事にしてゐた見舞物のシュークリイムの食べ殘したカビの生えたのが形見だ。評判は當にならぬと誰でもいふ。明治以來世間の評判に苦い杯を嘗めさせられた文人詩人は幾人あるか知れない、山田美妙の如き正にこの苦杯を滿喫した點で斷然代表的人物だ。彼程花やかにもち揚げられて彼程みじめな捨て方ですてられた人はない。美妙はその小說にも、詩にも多くは悲劇的情緒の勝つたものを描かうとつとめた。だが彼自身は知るや知らずや、自分の一生が一番描き榮えのある悲劇だつたのだ。

先驅者の生涯には悲劇が伴ふ。美妙は先驅者だ。だが不朽の事業は天才でなければ出來ない。美妙は天才ある先驅者であつた。彼は天才を持ち續ける氣力と忍耐と環境を缺いてゐた。自分は何も美妙の生涯を天才者の一生だと强辯するのではない。だが先驅者として立つた二十歳前後の美妙の胸には

天才の火が宿つてゐた。彼はこれで二三年の間に、凡クラ文士が百年かゝつても出來ない大きな仕事をした。例へば言文一致の創唱の如き、中でも大きなものだ。これは從來の文學史家の考へてゐるやうなお手輕なものではない。新興文學の life or death を決する重大な技術的革命だつたのだ。その證據には、この後の明治の文學史は、一面からいつて言文一致と雅俗混淆、その他の文章との戰鬪の記錄であり、やがては前者の勝利を語るものに外ならぬではないか。

小說に悲劇的情緒を紹介したのも美妙だ、歷史小說に主情的心理的分子を入れて復活させたのも美妙だ、新體詩の振興には音韻硏究から始めなければならぬと論じたのも美妙だ。辭典編纂の形式に新機軸を出したのも美妙だ。口語詩、少年文學、女性文化、ともに美妙の息がかゝつてゐる。大風呂敷と笑ふなかれ、先驅者は完成の義務を負はない。その口火をつけたものが立派に生長して人間生活を豐富にし便利にし光明あらせるに役立てば、それは先驅者として立派に義務を果したのだ。

美妙個人は幾多の缺點をもつた人間であつたらう。或る人は、社交性がなかつたといふ、或る人は人好きが惡かつたといふ。又或る人は、大家ぶつたといふ、又或る人は、淺薄で氣障なお先走りだつたといふ。數へたてると、もつともつと多くの個人的缺點をもつてゐたと思ふ。だが個人的缺點は個人的缺點だ。これだけ缺點があるから、それだけ仕事の方で差引をつけるといふ論法が、今迄の美妙論に多い。

實際美妙に對する反動的批評は長過ぎた。たまに幾分の功績を認めてやつても、恩惠的に認めてやるといふ口吻があつた。自分の考へだと美妙に對する反動的批評は、明治文壇に於ける硯友社閥勝利の空氣が强すぎたのが一原因になつてゐると思ふ。硯友社に對して所謂不義理をした美妙が、硯友社閥の空氣が隅から隅まで通つた文壇では頭を擡られる道理がない。而も、その空氣も亂れて頭をあげられさうになつたときには、彼自身がすでに天才のミイラとなつてゐた。これは氣の毒なことだつた。だが然し、反動は反動として淸算してしまふべきだ。もう個人的好惡を離れて美妙の天才的先驅者としての功績を正しく認めてやつていゝころではないか。自分は輓近少數の人々によつてかゝる正しい見地から美妙研究がなされつゝあるのを喜ぶものだ。（改造社「現代日本文學集」第五十三編）

（二）　美妙作『いちご姬』について

一

めづらしくもないが、山田美妙の時代小說（先づ力作の二字を加へても可からう）『いちご姬』に見える外國文學的分子について一寸申上げよう。

もつとも『いちご姬』を撰んだのは、何も特別の用意があつたからではない、むしろ偶然卒然と撰

ばれたものである。今年の夏はいつまでも暑いが、その暑い最中の八月初旬の某日、朋有り遠方より來るの格で、折柄訪れた臺灣大學の島田謹二氏と、西洋文學、明治文學、比較文學研究法など、いろ〳〵話して、狹い書齋の半日を心涼しく過したことがある。その際、美妙紅葉などの文學に見える西洋文學的分子のことなども種々な方面から話し合つて、主客二人ともまことに興に入つたわけであるが、數日過ぎて、近藤さんから、手すきなら何か書いてくれぬかとのお話だつたので、先日の話の面白さが頭にあつたまゝ、ふと『いちご姫』のことでも書きませうかと、『いちご姫』をもち出してしまつた。『いちご姫』を撰んだのは、さういふわけである。

然し私はこの作については何か書いてみたいといふ意圖が前から時々動いてゐたのだから、これを撰んだことを悔いるのではない、たゞもう少し愼重に用意をしなかつたことを重々遺憾に思ふ。用意といふと、何かしら大層な響きをもつが、つまり原作や、その他種々の作物を讀み直すだけの勞を執ることである。これだけの勞は執筆者として當然のことであるのに、折惡しく他の仕事とかち合つて只今それに充る時間があまりない。だから大部分は記憶によつて書く外はないのだが、この點だけは深く何方にもおわびする。

二

『いちご姫』に外國文學からの借り物があることは、作者美妙自身、この作を掲げる前口上に斷は

つてある。『いちご姫』は明治二十二年七月二十一日の都の花第十九號から掲載されたのであるが、同誌第十八號（同年七月七日刊）に『いちご姫』を掲げる前口上が出てゐる。そこで美妙がかう談つてゐるのである。

（前略）しかし突然に來た趣向でも有りません、一つの奬勵の原因が有つたからです。われ面白の至りながら一寸その仔細を爰で言ひましやう。この（二十二年）六月廿二日には中村座で演藝矯風會が有つた、その時私と同席して居られたのは春廼舍主人坪內君でした。何かの話のついで、一寸今日の泰西小說大家何某（讀者諸君、あてゝ御覽なさい）の事に話が移り、その新作の趣向を坪內君がかいつまんで話された。それが此小說の原となりました。その小說を借りることに約束し、二三日過ぎる內、坪內君御自身その小說を持つて來て貸して來さつた、その夜です、われとわれを忘れて走り馬に讀み過ごして、ほつと一息ついたと言ふのは外でもなく、如何にもその小說の主意が雄大であることでした。

元來此の『いちご姫』の趣向は、前からもつてゐたのであるといふ。だが、此の作を讀んだ人々にはよく分つてゐると思ふが、『いちご姫』は當時としては思ひきつて大膽な試みの小說であり、從つて流石美妙も、何處やら世を憚る心があつたので、筆をつけかねてゐた。然るに、春廼舍主人から借りた西洋小說を讀んだ美妙は「著者が世をおそれず自身の外に讀者も無く、大膽に、すさまじく、滿足す

るまで書き――書き放したその勇氣、はるかに想像する身にはとてゝ言ひ盡せぬとまで思ひ凝りました」云々、そこで自分自身が今更恥かしくなつて、遂に他人の勇氣に驅られて急に『いちご姫』の筆を取ることになつたといふのである。

さて、この美妙を動かした泰西小說とは何か、といふところへ筆を移す筈であるが、一寸、その前に氣になるから文献じみた記述を濟ましてしまはう。

此の前口上には七月七日といふ日附があるから、假に二十二年六月二十五日に右の小說を讀んだものとして約二週間の間に略ぼ『いちご姫』の腹案を立てゝ、いつでも筆がつけられるやうになつたものに違ひない。ところで美妙は此の年七月中旬信濃に赴き（恐く父を長野に省したもの）、七月十五、十六の兩日戶隱山に遊んだ。此の戶隱山滯在中に美妙は『いちご姫』の初回を起草したと單行本（二十五年二月　のトビラに自筆で斷はつてある。然るに此の戶隱山行にはちやんと紀行があるのだが、その中には別に『いちご姫』を書いたといふ記事もなく、又可成り急がしい山遊びであつたらしいから、そんなことをしてゐる餘裕はなかつたらしい。たゞ紀行の末段に、神主宅で給仕に出る少女に興味をもつて、この少女の面影を使つて詩なり小說なりを書いてみたいといふやうなことをいつてゐるが、或はこの少女にインスピレーションを動かされて、その夜の中にでも急草したのかもしれない。然し此の戶隱山で起草したといふのは、何うも私は美妙のロマンチシズムであらうと思ふ。今試みに

『いちご姫』の雜誌掲載の初回分を四百字原稿紙にすると十四枚ばかりにならう。これを十六日夜認め終つて十七日急に郵送しても、早くて十八日の夜か十九日でないと、金港堂（雜誌發行所）にはつくまい。本文はすぐに組めるとしても挿繪もある（武内桂舟畫）、二十一日發行では、十九日乃至二十日に雜誌が出來てゐないと、無理である、何うも初回分を戸隱山で書いたものとしては雜誌に間に合はぬことになる。恐らく單なるロマンチシズムから戸隱山起草と書いた物であらう。信濃行は、『いちご姫』の初回も起草し、雜誌の編輯も大體終つてから（美妙は當時「都の花」の實際上の編輯主筆であつた）幾分のびのびとした氣分で出かけたものであらう。從つて、私は、美妙の言があるに係らず、この戸隱山で第一回を起草したといふ事實を、美妙が意識してわざとかう作意を見せたものとして抹消したい。

もつとも戸隱山でこの少女に動かされて、『いちご姫』の第二回あたりに筆をつけ初めたか何うか、或は、これから後の『いちご姫』のモデルとしてこの少女の面影が使はれたか何うか、それは知らぬが、女性の美や肉體に異常なセンジュアルな敏感さをもつた美妙のことだから（婦人だけの手で生長した人には、往々かういふことがある）、この少女の面影を『いちご姫』の中に籠めて使つたものと思つても可い。

『いちご姫』は第三十八回で、二十三年五月十八日發行の都の花第三十九號で終り、前記の如く、二十

五年二月單行本となつた。この單行本は、人も知る如く、明治初期文學書中での珍本中白眉の一つである。

そこで、いよいよ本題に入るのであるが、その前に今一つ、順序として『いちご姫』の内容が何ういふものか、極簡單に掲げてみよう。勿論『いちご姫』など讀んだことのない人々のために、ほんの心覺え程度でするのであるから美妙自身の前口上の言葉を再びかりることにする。

頃は足利の末年で、主人公は外題のとほり『いちご姫』といふ美人、ある公卿の姫君です。その頃禁裡のあれはてたのは鹿が大内の墻に通ふといふ程であつた、その有樣を力めて描いて見たいといふ野心が先づはじめに働らいて、之にすこしばかりの理窟が加はつたものです。社會の義は政體と共に亂れ果てたところ、また武家の勢ひはうじ蟲をさへ睨み殺すといふ程であつたところ、これらが重に出る條で、そして主人公のいちご姫は表向は貞操に見え、淑德の備はつた婦人と思はれてもその實は非常な思ひ切つて――婬婦であるといふのが先主眼です。いちご姫は婬婦である。しかしその形跡は中々人にわからない、そして一方に於ては多婬といふ惡癖をつぐなふだけの美德を持つて居た、すなはちそれは心が雄々しくて尊王の心が篤かつたといふ一點です。

これで『いちご姫』の細かい出來事や人物は兎もかくとして、作の大體の筋道が分かる。これだけの知識を基礎として『いちご姫』の據つたといふ外國小説のことに進みたい。

三

さて前口上で美妙が述べてゐる通り『いちご姫』は、外國小說の影響に出來たことは事實であるが、この外國小說の何であるか、誰の作であるかは、美妙自身語らない、(あてゝ御覽なさい)といふ語でも察しられるが、これはわざと言はなかつたものに違ひない。讀者を釣る賢明な有効な一手段なのである。それで美妙が言はず、春廼舍が默してゐる限り、この外國小說は何か、五里霧中に迷ひこむ譯であるが、そこはよくしたもので、當時の文壇の飛耳張目たる內田不知庵が、恐らく春廼舍から聞いたものであらう(聞かずとも、此の原小說を讀んでゐれば別に問題はない)、此の外國小說とは當時フランス文壇の泰斗として有名なエミール・ゾラの『ナナ』なのだと語つて置いてくれた。私なども幸ひにして、不知庵卽ち魯庵氏のこの語を生前口づから聞くことの出來た一人で、この點は實にあり難いことだと思つてゐる(もつとも、魯庵氏の談では、同じゾラの『アツベ・ムーレの墮罪』を燒直したものだといふ風評も當時出たとのことだ、然しこれは別に根據があつての上ではなく、誰か批評家か作家かの中にゾラの此の作を偶然讀むか聞くかしてゐた人がゐて、たゞ「あれ」ぢやないかナと風評した程度に止まるものだと魯庵氏は附言した)。若しこの魯庵氏の言葉がないと、美妙の前口上で見て原作を知らうと思つた人々が、いかに思ひあぐねて茫然と手をつかねなければならなかつたか分らぬからである。思ふに當代の大家の作で、女性を主人公とした歷史小說といへば、ジョオジ・イリオツ

トの名作『ロモラ』あたりが第一に指を屈されるに違ひない。美妙の前口上を讀んで雄大の二字に意外の印象を受けた人々は直ちにこの『ロモラ』を思ひ浮べまいものでもない。『ロモラ』を一度でも讀んだ人であれば、『いちご姫』が『ロモラ』から出てゐないことは、判然と了解されるのであるが、然し魯庵氏の明言がないと、私は『いちご姫』即『ロモラ』説の如きものが可成り後にまでも妖氣を漂はしてゐたことだらうと思ふ。

キングスレイの『ハイペシア』サツカレイの『ヴアニチイ・フェイヤ』のことも考へられるが、サツカレイは美妙の愛讀書であり、キングスレイは現代の大家とはいへまい。共に少々的を外れてゐるからこゝでは問題とならない。

そこで、問題の外國小説がゾラの『ナナ』に違ひないとして、美妙はそれを春廼舍主人即ち坪内逍遙から借りたといふ。私は、いつかこの點を逍遙先生に質問したことがあるが、先生は、ゾラの小説を自分が最新文學として、愛讀したのは明治二十三四年頃のことで、美妙に借した覺えはないやうに思ふが、若し借したとせば何うも『生の悦び』と『ナナ』と『アツベ・ムーレ』と、この三篇の中の何れかに違ひない。それは自分が當時讀んだゾラは此の三篇だからだといふことであつた。

ところで、この逍遙先生がゾラを愛讀した年代だが、これは事實は今少し早く、先生の日記殘片によると二十一年頃から愛讀してゐるのである（日記の本文を引用出來ないのは遺憾であるが、要する

にゾラとサツカレイを特に愛讀し、ノートをとり、字を引きなどして讀み、處々飜譯を試みたりしてゐる）。

以上によつて、春廼舍主人が美妙に『ナナ』を貸した可能性は濃いものになり、十分に美妙の言を裏書き出來るわけである。

四

さて、そこで美妙の『いちご姫』は春廼舍主人から借りたゾラの『ナナ』を使用したものであるとし、その使用の程度は何ういふものか、その程度によつては、作家としての美妙、作としての『いちご姫』が共に評價割引の憂き目を見ないものでもない。

美妙自身はこの程度について何といつてゐるかといふと、それは前に述べてある通り、『いちご姫』の根本趣向は『ナナ』から得たものではない。元來自分からもつてゐたものである。

（上略）たゞ御斷り申しすまのは、私を奬勵した原小説は有つたにしろ、その趣向を私がまねたのでは有りません。たゞその勇氣その主意の雄大なのを似せて見ただけです。

かういつてゐる。主意の雄大とは、何ういふことか、これは所謂意味では『ナナ』には無いものであるが、恐らく廣く社會を觀て、舞臺を十分にとつて書いてあるといふ位ゐに解釋すべきであらう。

美妙の言を踏へて『いちご姫』と『ナナ』の記憶を比較してみると、『いちご姫』と『ナナ』の關係

は美妙が前口上で斷はつてゐる如き、單なる精神的勇氣の授受だけの關係に止まりはしない。もつと技巧的に、technically に兩者の關係が入り組んでゐると思はれる。

『ナナ』の背景には普佛戰爭直前の空氣があるが、『いちご姫』の舞臺たる應仁亂直後の京都といふのは別に『ナナ』から暗示されたのではなからう。疑へば疑へないことはないが、强て兩者を結びつけずともである。たゞ作の主人公たるいちご姫と女優のナナの性格に至つては、全く双生兒（日本の足利時代、十九世精のフランスといふ外的境遇を問題外として）といつても過言でないやうな相似性が示されてゐる。

いちご姫とナナは、その出身に於いて正反對になつてゐる。ナナが卑賤の身分の出であるに對し、いちご姫は右少辨藤原の夏代の女である。だが現在の生活からいへば左程の懸隔はないので、いちご姫も、時代だけに刀の鞘卷の內職をして家計を助け、ナナは造花女工であつた。それに年の程もさう違はない。いちご姫の十六七に對し、ナナは凡そ一歲程の年長と思へばよい。肉體的には餘程相似た條件を備へてゐる。男性を魅惑する美貌、單なる美貌といふだけではなく、俗語にいはゆるイットを肉體的に多分にもつてゐて、特に男性の性慾に訴へる。而かもそれ自身、そのイットの効果をば意識して、これによつて男性を征服することを欣ぶが、さてこのイットに慕ひ寄つて獸めく本性を現す男性を見ては淺ましさに堪へず、多くの男性がいかにも厭はしいものに見える。その心理はいちごもナ

ナも同じことである。

美妙は、いちご姫の性格を表すに婬婦といふ語を用ひてゐるが、ナナの性格にも勿論この語が用ゐられて差支へがない。男から男へと移つて更に婦徳の觀念がない。この點は二人とも正に婬婦の典型的なものがある。自ら醜惡を犯してその醜惡を無邪氣に堪へ、殆んど悔恨の情がないかに見える。この點も同じである。而かも悔恨の情が表面的には何等無いらしく見えるに係らず、意識の底の底には何ものか、彼女等の行爲の正道に違ひ、天人に咎めを負ふものがあるのを責めるものがある。この點もよく似てゐる。然りとはいふものゝ似てゐる中にも自ら異なるところがなくはないので、例へばナナは、いちご姫に比してより多く金に動かされ、いちご姫は野心により多く動かされる。出身と時代とに調子を合せるためか、いちご姫はナナのやうな平凡な女性でなく、女丈夫型に出來てゐる。然し意識的に多くの男性を操つて、自分の望みを遂げようとする心持の裏に、淡い自暴自棄的な氣が潜んでゐるところは、又頗る歸を同じくしてゐる。

いちご姫には婬婦としての醜を補ふに足るものとして、勤王の美德があるといふが、ナナにもそれがなくはない。即ちわが子を深く愛する心、それである。いちご姫の墮落が、この勤王の心の横逸れしたものとせば、ナナの墮落は子を愛する心から一切が說明されてゐるのである。

たゞナナが遺傳的に婬婦であるに對し、いちご姫にその邊の說明がないから、たゞいちご姫一人の

異常心理又は異常體質の故と見なくてはならぬが、二人が違ふといへば、この點こそ根本的に違ふところであらう。

『いちご姫』を讀んで『ナナ』を想起すると、美妙が趣向に於いては、敢て學ばぬと聲言してゐるに係らず、必ずしもさうではないことがわかる。

例へば、肉慾のみであつて戀を知らぬナナが、美少年ジョルジュには、一時にせよ清い戀愛めくものを感じた。喜劇役フォンタンとの紛糾も少し汚いが、戀といへばいへやう。いちご姫と夢王二郎こと與謝の小二郎との戀は、恐らくこの二つを合せた氣持ちを變化させたものだといふことが可成り明瞭に看取される。更に、ナナがジョルジュと知りあふ田舍の別莊で、初めて自然の美しさに接して夢中になるところがあるが、いちご姫が夢王に救はれて京都を離れて丹波路に行くあの邊の氣持ちとそれがそつくりである。

だがその邊の氣持ちは、或は暗示といふ程度に止まつてゐるといふ辯解も成り立たう。然しナナといちご姫の最期の場面の類似に至つては、到底、他が一を模したものであることを免れない。いちごは夢王に誘はれて丹後の館に行く、夢王は小さいながら領主だ、いちご姫は領主の奥方の權威を夢みつゝそこに行く、これは丁度ナナが何かしら大きな權力か野心を目的に、イヂプトのパシヤとかロシヤの大公とかと關係し、遂にロシヤまで出かけて貴族夫人を夢みるのと同じである。さて、先方の館

に着いてみると、正妻はゐる。ナナの場合とて、これと同じことが想像される。新人と舊人との間にいろ〳〵のごた〳〵があり、遂に失敗して悲慘な死を遂げる。いちごの方は明白に狂死であり、死の間際にも「大内の女御」になると口走る。ナナの死因は天然痘であるが、彼女の狂氣は疾うに始まつてゐるのである。ナナは病院で尋常に死ぬ上に、多年藝の上の敵手として憎しみあつてゐた女優ローズが、死にかけてゐるナナと和解して介抱する。あれは、ゾラの『ナナ』全篇中でも最も光明に富んだ一節であるが、いちご姫は悲慘の點では『ナナ』以上で、彼女の死は野たれ死であり、死骸の腹を野良犬がなめてゐたといふ。こゝの空想は、美妙一代の大出來ともいふべきもので、いつも言ふことであるが、このいちご姫の最期のところは、實に立派な藝術的な光りがある。こゝまでこなせば、たとひ種子があつても、美妙は十分創作の才を示したといひ得やう。然しこのいちご姫の最期が總體としてナナのそれを學んだものであることは、爭ひ難からう。

なほ、ナナがミュツフアと公然の關係をつゞけながら、同時に自暴自棄的に又環境的に、數人の男性を同時に操るところがあるが、これが、盜賊の女首領となつてからのいちご姫の立場を暗示する。いちご姫は、戀人窟子太郎（うろこの）を慕つてさまよひ歩くうち、思はぬ人に身を汚し、つひに墮落して盜賊野武士團の女首領となるのである。さうしてその主な野武士を同時に四人程男妾の如く操つて、互ひに手柄を競はせ、自分の權力の安固を計る。かういふ趣向もナナの前記の如き趣向から學んだものであ

るやうな氣がする。

いちご姫の戀人宿子太郎は、强て關係を求めると、ナナに對するミユツフアに相應するものかも知れないが、女主人公に對する關係が反對であるに對し、個人同志は似たところが多い。宿子はいちごから慕はれてもきかぬ。ミユツフアは、ナナを慕ひぬくがナナは嬉しいとも思はない。こゝは違ふ。然し、二人とも宗教的雰圍氣をもつてゐること、君主の侍側の臣であること(宿子は東山義政の近侍ミユツフアはナポレオン三世の侍從か何か)、この邊はよく似てゐる。それから、いちご姫は宿子を慕つて墮落し、ミユツフアはナナを慕うて墮落する。この邊は知つてゐてわざと反對に趣向を立てた氣味がありはしないか。宿子太郎は遂に道に入るが、ミユツフアは迷ひの方に深入りする。これも意識的に對立せしめた氣味がある。さういふと女主人公との關係も、わざと逆にしたやうに見えるではないか。又、此の兩者の關係でも、前にいふ如く、いちごは眞に相手を愛し、ナナは愛してゐないことは違つてゐるが、然し兩人とも自分のもつイツトの力を信じ、これの力を試めさうとして男にかゝつて行くところは、頗る似てゐる。私はいちご姫が、わざと男の心を動かさうとして、ヂリヂリと迫るあの光景が何うしても日本的なものと思へない。あの時のいちご姫の背後にも、矢張りナナの面影があるやうな氣がするのである。

大體の印象を比較すると、自然不自然の差はあるが、いちご姫とナナは双生兒の姉妹といつていゝ

位ゐには似てゐる。强ていへば、いちご姫の方がナナより智慧が逞ましく、自己の行動を辯解することが出來、慘忍の度も深いかと思はれる。たとへば、自分の心を安めるため新しい情人を誘かして昔の戀人を刺させたりする。かういふ智慧はナナにはない。然しナナも自分の行爲が原因で種々な悲慘事を釀し出してゐることは、いふまでない。破產、自殺、逃亡などといふ出來事が連續して起るのである。いちごは賢く、ナナは愚である。これは然し兩女性の出身の差、貴族と賤民といふ階級的種別の反映とも見える。

そこで、私は『いちご姫』の作に於いて、美妙は、主人公のいちご姫の性格描寫上、ゾラの『ナナ』を可成りな程度まで深く模倣したといひ得るかと思ふ。又、作全體のプロットとしても、相當程度模倣してゐるといふこともいへやう。たゞ背景、事件、環境、さういふ、道具立ての點では、思つた程『ナナ』の厄介になつてゐない。この點は美妙の前口上の通りである。だが、美妙の前口上の言の如くこのいちご姫の性格を、最初から美妙が案じてゐたものとせば、その全部を『ナナ』から學んだとするのは過酷であらうから、美妙の萠芽が『ナナ』を滋養分として、あの如きいちご姫と生長したのだといふことはいひ得ると思ふ。

要するに小說のテクニック中、日本小說の短所たる性格描寫、プロット構成の二點を西洋小說から學び、これを日本的な事件環境に上手にきりはめた靑年美妙の作家的手腕は、當時としては老成過ぎ

る程巧者だといひ得やう。

『いちご姫』について、私の語ることは、以上で大體形がついたのであるが、餘説をいさゝか添へよう。

五

私どもがこの頃顏を合せると、よく口にすることであるが、もう明治文學研究も下火だとか行詰つたとかいふ。成程面表から見ればさういふことになつてゐる。研究團體などもいつの間かに消散といふ形になつてゐるし、研究會合なども稀れになり、第一個々人の研究家に頗る熱がなくなつた。古本屋方面でも明治ものはさつぱりいけませんといつてゐる。それがいゝ事か惡い事かは別として、一應現在の事實として以上の如き有樣を承認せざるを得ない。

私は然し、明治文學研究がこのまゝ行詰つてグヅグヅに潰れてしまふものとは考へない。第一學問研究上そんな馬鹿氣たことがあるものではない。これは蓋し一時的の中たるみなのだ。舊から新へ移る過渡時代によくある淀みなのだと思ふ。淀めば迷ふわけで、迷へば氣勢も揚らなくなるのは當然のことであらう。この淀み、行詰りが何で來たか、それは一つの無方針無批判の好事的研究の行詰り、資料蒐集の表面的行詰り、研究家同志の經濟的行詰りの反映、瑣末的割據主義の行詰り等々いろいろな原因を擧げることが出來るであらう。然し要するに、明治文學乃至明治文學研究に何の責任がある

のではなく、研究者の態度なり頭腦なりの問題に歸するのであるから、これは眞實の意味での行詰りではない。若し何等か國家的理由か何かで、明治文學なるものを研究することは許さぬといふのであれば、始めて行詰つたことになる。さうでない限り、明治文學研究が行詰つたのではない。吾等研究者が迷つて居り、間違つて居り、方向を取り違へて居り、獨り合點をして居るのである。お互ひに猛省すべき時であらう。お前などは明治文學と心中するやうに、社會的使命を負はされてゐるのだ、おのいふことばかり聞けるものかといふ人もあるかも知れぬが、さうおつしやらずに一つウント踏み堪へて欲しいものである。

そこで私は、この表面的行詰りを打開する一法として、比較文學的研究をおすゝめする。已に前記の島田氏なども今盛におやりとのことであるが、明治文學中に於ける西洋文學的なものを見、それが如何やうに利用され、明治文學發展に何れ程の效果を成してゐるか。從來も極く大體的なこの種の記述はあつたのだが、これをもつと文學に卽し、作に卽し、作家に卽して、組織的に研究して行きたいものだと思ふ。或る人々は、傳統を重んじ、國粹を云爲して、この外國文學的分子をまゝつ子扱ひをしてゐるが、私の考へによると、傳統は生きてゐるもので死物ではなく、又固着したものでもない。傳統は不斷に新しい傳統を生む。國粹とても然り。國粹は粹を守ることではない。粹を練り上げて發展させてゆくことである。つまり、不斷に新な自己を創造して行く。そこに傳統も國粹も生きてゐる。

つるべがつるべ縄にブラさがつてゐる如く、こゝを先途と喰ひ下るべきものではない。傳統の研究などと事もなげにいふ人があるが、傳統ほど面倒な研究はない。よく「日本的なもの」を探すといふ、思ふに、不斷に新な自己を創造して行く、その態度なり行き方なりを別にして何の日本的なものがあるか。この際必ず歴史を忘れない。それが日本的な自己創造の態度なのだ。今日、日本的なものは永久に進むにあり、退いて守るのは非日本的と知れ。往々論議されるロマンチシズムなどもこの立場から論議さるべきであらう。國粹や傳統は生きて續いてゐるものである。老人や病人が後生大事としつかりかゝへてゐる懷爐の如き、いくぢのないものではない。吾等が生活で文學で政治で戰爭で毎日創造しつゝあるものである。これを逃避精神、隱居精神に利用するが如きは以ての外である。ところでこれを實際に徵するに近代日本の自己創造、自己發展の際刺戟となつたものは西洋文明、西洋文物だ。これは私がいふまでもない、近代日本文明發展の公理といつて可い。文學も亦然り。日本の近代文學は、何といつても西洋文學の刺戟によつて新な自己を創造して來たことには問題がない。その自己創造の際いかなる西洋文學を如何に使用したか。それを知れば西洋的なものが分ると共に、日本的なものも分り、將來の文學の進路に對する見通しの參考ともならう。比較文學的研究を大に盛にしたいと私が望む所以である。又かゝる研究によつて必ずや明治文學研究は新な局面を展開して來て、決して眞に行詰つてゐるのではないことが分るであらう。（昭和十二年十一月「文藝復興」）

二葉亭四迷

（一）『浮雲』を中心にして

一　『浮雲』について

此のたび「文學」が二葉亭に關する特輯號を出すについて、何か二葉亭のことを書いて見ぬかといふので、比較的豐富に紙面を割いて頂いたのは、まことに有難い。

そこで私は、この發言機會を利用して、平生二葉亭について考へてゐる二三の問題をこゝではつきりさしてみたいと思つた。かういふ機會は、こつちから無理に作れば格別だが、今度のやうに、自然に提供されることは、まづ稀れであらう。それだけに、私はさう思つたのである。尤も、はつきりといつても、はつきり解決するとか何とかいふのではない。「私はかう考へてゐる」といふことをサラけ出して、この上腹のふくるゝことを助かりたいといふのだ。

私の述べたいと思ふ問題は、一つは『浮雲』について、一つは、二葉亭と逍遙との關係について、今一つは、官報時代の二葉亭について、と、凡そ三つある。さうしてこの三つとも、實は、私が前置

きをつけて力む程の大問題ではない、知つてゐる人々はもう疾くに知つてゐることであるが、それに氣づいてゐない人々も相當あるかに見える。そのことが、私をして、「枯箕を嚙んで午枕に喧し」と叱られるのを覺悟で、老婆心を敢てせしめる所以である。

第一の、『浮雲』についての問題を語らう。

問題といふと大袈裟だが、端的にいふと、『浮雲』は、現存する形では未完成のものだといふことである。二葉亭がイヤになつて投げた作品だといふことである。一、二、三と三編揃つて完成してゐるかに見えるが、事實その三編は中途で筆を投じたもので、腹案の半分位しか實現してゐない。從來明治文學研究家が『浮雲』を賞美する一條件として、形式の上から、あの最後のキレのところが、所謂小說的大團圓として巧まれてゐない、あすこでポツンと筆を終つたところが實に可いなどゝいはれてゐる。あの終末が藝術的にいゝか何うかは別として（二葉亭自身がちつともいいと思はなかつたらしいことは確かだ）、まだ書き足りないのだが、もうイヤになつたから途中で投げたといふのが、二葉亭の立場である。イヤその投げたところが有難い、ソコに却つて面白味があるといふのも一つの見方かも知れないが、それは、『浮雲』を未完成の作品、投げた作品と認めての上にして貰ひたい。あのキレを讃嘆するのは、自然主義時代の文學眼を語る一特徵であるといへるが、然し『浮雲』が未完成の作品、作者がイヤになつて中途で投げた作品といふことになると、キレを讃嘆する氣持ちも違つたも

のになりはしないか。

『浮雲』の第三編が作者二葉亭にとつて如何にイヤなものがあつたかは、『落葉のはきよせ』の中の第三編發表に關する感想のところをよむとよく分るが、かういふ氣持ちでは、いかに腹案があつても筆を續けられるものではない。そこであそこまでで止めてしまつた。『浮雲』の結尾は何ういふことになるかといふ新著月刊の記者の問ひに對して、二葉亭は、——

大體の筋書見たやうなものを書いのたが遺つてありましたがね。彼(あれ)は本田昇が一旦お勢を手にいれてから、放擲つてしまひ、課長の妹といふのを女房に貰ふといふ仕組でしたよ。其れで文藏の方では、爾なることを、掌上の紋を見るが如く知つてゐながら、奈何することも出來ずに煩悶して傍觀してしまふと云つたやうな趣向でした。

といつてゐる。此の文三の心持の半面は今の『浮雲』第三編にも可成り出てゐるが、本田對お勢の關係の發展が、この談話のやうになると、文三の心理が一段の深刻を加へたのではないか。そこまでいつて始めて、文三の性格がほんとに生きもし、又『浮雲』の小說的構成も、今のまゝのものより秀れたものになつたらうといふ氣がする。

二葉亭のこの談話は、『浮雲』が未完の作だといふことを證明して餘りがあるが、これを裏書きするのが、談話中にある「筋書」云々である。この「筋書」めいたものは今日殘もつてゐる。丁度明治四

十三年、二葉亭の全集が朝日新聞社から初めて出たとき、これが寫眞にとられて第一卷に入れられたので、今日でも讀むことが出來るのだが、この頃は此の朝日新聞社版の全集が比較的少なくなつた上又その寫眞の文字がクチヤクチヤでよめぬので、何うもこれを讀んだ人は、餘りないらしい。そこで私は、蟲眼鏡を使つてこれの讀める限りを讀んでみて、或る程と合點するところが多かつた。この筋書といふのは、『落葉のはきよせ』の一節らしく、二十二年の日記の斷片となつてゐる。文中の日附は『浮雲』中の出來事の日附で、立案のそれではない。兎もかく、私の讀んだ結果は左の通りである。

『浮雲』第三編筋立

（十一月五日）

第十三回　諍論せし後昇來りし時のお勢のさま

附文三の殘念サ

（六日、七日、八日、九日、十日、十一、十二、十三、十四）

第十四回　諍論後文三の自惚、お勢と千話喧嘩してゐるやうにおもふ事

附文三の後悔、お勢にはぢかるゝこと

附お勢の昻に於ける有樣

（十五）

第十五回　文三散步して思はずお勢昇のそぶりをいぶかること、編物の稽古先の歸り
　附文三忠告を決する事
（十六）　此日よりお勢本田に迎（？）ふ、文三注意す
第十六回　文三お勢と仲直りする事
第十七回　文三の財政困難。靑雲の小ロを得る事。文三お勢にそれを咄して失望する事。
第十八回　十二月十二三日の事
（その他細々と書いてあるが一々消してゐるので、何が何やらわからない、少しは讀めるが、まとまらぬのでこゝには揭げない）。
（十二月十五日）
第十九回　孫兵ヱ歸宅
　お政孫兵ヱをくるめること
第二十回　孫兵ヱの意見、文三に相談をかけること
　文三、お勢の本田の下宿に入るを見（以下數字讀めず）
（十二月十六日）
第二十一回　本田お勢あひゞきのさま

（七）

（八）

（十二月十九日）

第二十二回　文三の despair、昇の不義發見、母子喧嘩

寫眞はこゝで切れてゐるが恐らくまだ續いたものに違ひないことは、前段の二葉亭の談話で明らかである。そこで現存の『浮雲』は此の第十三回から第十八回までに相當するので、第十九回以後は筆をつけられてゐない。然し第三編に出てゐる、お勢の編物稽古、本田がお勢の家に足を遠くしたわけはこの未完の部分で證明がつけられることになつてゐる。

つまり此の談話及び筋書によると、二葉亭は『浮雲』をあのサスペンスのまゝで置くつもりではなく、お勢と昇との關係をチヤンとつけ、昇の性格をもつとはつきりさせるつもりであつた。お勢對昇の關係がハツキリすれば、文三の氣持ちも、或る種の解決を得ることになり、サスペンスがなくなつて、讀者の期待心理がやゝ滿足され、そこに一種の大團圓めく結尾が生れる。かういふことになる。たゞ書かなかつたゞけである。

さう分つてみると、現存の『浮雲』のキレを矢鱈に賞めるのは、別に惡いことではないが、何だか

然し妙な見當外れのやうな氣がする。勿論、だからといつて、『浮雲』が、時代を背景にしていへば、超時代の佳作であることには文句はないが、たゞこれを未完成の作品と見るか見ぬかによつて、『浮雲』を扱ふ態度なり觀念なりに相當影響があるかと思ふ。私としては、今日の『浮雲』研究は、これを未完成の作品と認めて進められるべきものだと考へる。

今一つ『浮雲』について、一寸言ひたいことがある。『浮雲』の興味は、私どもからいふと、主としてあの文三なるインテリ的性格と時代との交渉にあるが、『浮雲』全體を歴史的に眺めるとき、二葉亭がこの小說で何を書くつもりであつたかといふことが考へ直させられる。二葉亭は果して文三的性格や心理を表現しただけで滿足したものか何うか。二葉亭自身の言葉をきくと、何うもさうではないらしい。同じ新著月刊の記者に語つたところによると、『浮雲』には一貫した思想がないといふことである。それから、『浮雲』はすつかり眞似たもので、手本はロシヤ文學だといつてゐる。彼によると、最初一、二編の中心になつてゐる思想は、官尊民卑といふことに對する嫌惡の氣持ちで、つまり、彼がロシヤの小說を澤山讀んで、ロシヤの官吏といふものがヒドク嫌ひになつた、その感情を日本に移して、あの小說に現はさうとしたもので、いはゞ、ロシヤの官尊民卑を和譯したものだといふ。第三回(二葉亭のいふ第三回は第三篇の意)あたりから、日本の新思想と舊思想をかいて見る氣になつた。お政は日本の舊思想の代表、昇、文三、お勢などは新思想の代表である。舊思想の根柢は中々深いの

で、新思想は、これと調和しないと勢力を得られない。その邊で文三は非妥協調和、昇は調和派だ。文三的性格は、新思想中でも最も進んではゐるが、然し新思想者中最も多數でもあり、又當時の日本で成功し、勢力もあるのは、本田昇一流の人物である。學校時代書生時代には、種々高尙な理想をもつてゐても、世間に出ると、附燒刄だから、皆昇のやうな人物になつてしまふ。そこを狙つた點がある。かういふのが二葉亭の說明である。この新舊思想の衝突といふことも、ゴンチャロフの名著『頽れ岸』の中によく書いてあるのを見て、日本に應用したものだといふ。

以上によつて、『浮雲』がいかにロシヤ文學に負ふところがあるかは略ぼ明白であるが、さうなると肝心の文三的性格にもこのロシヤ文學（例へば二葉亭の愛讀したゴンチャロフの『オブローモフ』の如き）からの模倣的分子がありはせぬか。必ずそれはある。文三的性格は、恐らく二葉亭の自畫像のみではなく、彼の創造だけでもなく、ロシヤ文學の模寫といふ點が可成り入つてゐるやうに思ふ。然しそればかりでないのは勿論だ、私は、文三的性格にロシヤ文學の分子が入つてゐるのを認めるが、同時にそれは、二葉亭の性格のもつロシヤ文學的分子の反映でもあることを認めたい。さうして此の新舊思想云々を、二葉亭の家庭にあてはめて、お政を彼の母たる人をモデルにしたものではなからうかとも疑ひたく思つてゐる。ともかく此の文三的性格は、今日その時代を背景にして考へるとき、實に複雜な、象徵的と思はるゝまでの拔け出た意義をもつので、その意義の解釋が、多くの『浮雲』研

究の中心題目となつてゐるといつてもいゝ。『浮雲』を評價するときは、何といつてもこの文三的性格の解釋に重點がある、この解釋には、矢張り時代に對する意義を見失はぬやうにしたい。往々見受ける二葉亭、『浮雲』、それから文三的性格への主觀解釋は、かつての自然主義的な文學眼に對抗するものといふ點からは、十分諒解されるものだが、時代を無視して、いたづらに體當りをするのは宜しくないやうだ。

以上、二葉亭の告白、『浮雲』が何を示さうとしたものかといふ談話は、主觀專一の研究者に對して十分な警告を與へるものともいひ得る。

『浮雲』はこの位にして次の問題に移らう。

二　逍遙と二葉亭との交渉

普通文學史的には、二葉亭は坪内逍遙の門から文壇に出たことになつてゐる。さうして、これは一應は事實であり、『浮雲』の署名の問題などから考へても、逍遙の「門」から出たとすることが不當ではない、然しこの事を以て直ちに、二葉亭を文學的に逍遙の弟子であつたとするには、可成り說明がいる。二葉亭は、いはゆる意味で逍遙の弟子であつたのではないらしい、少くとも受動的に敎へを受けたものではない。寧ろ先輩後輩の關係の少し深いもので、嚴密な師弟の關係ではなかつたのだと考

へられる。かういふことも、知つてゐる人々は、早くから知つてゐるのだが、知らぬ人々は、いまだに簡單に弟子だと片づけてゐる。然し二葉亭を全く逍遙の文學的弟子としてしまつたのでは、二葉亭の文學の說明がつかなくなる恐れがあらう。弟子といふ點では、矢崎嵯峨の屋氏の方がずつと弟子らしい弟子であつたといへる。

逍遙と二葉亭の關係を詳しく語つたものは、逍遙の隨筆『柿の蔕』に若くはない。而かも此の隨筆が案外二葉亭研究家の讀むところとなつてゐないのは、不思議な位だ。內田魯庵の『思ひ出す人々』も、勿論二葉亭研究として權威的なものであり、又讀物的にも隨分面白いものであるが、逍遙の『柿の蔕』中にある「二葉亭の事」といふのも、菊判細字の約九十頁で、これだけでも單行本になる位ある。さうして自分と二葉亭の交涉を主としたものであるだけに、殊に晚年の心境からの回顧であるだけに、なかなか面白い。二葉亭研究家が是非讀むべきものと私は思ふ。

その「二葉亭の事」によつて、逍遙對二葉亭の關係交涉を察するに、初めは、文學的交涉だけであるが、次第に人間的影響に入つたものであるらしい。さうして文學的、人間的兩面の交涉に於いて、一は能動的の師、他は受動的の弟子といふのではなく、多少の分違ひはあつても、その影響は相互的なものであつたと見るのが至當であらう。勿論、二葉亭はあれで禮儀の正しい人であつて、逍遙に對して先輩はチヤンと先輩と立て、師兄に對する態度を持してゐたから、世間的には弟子のやうに見え

たらうし、又彼自身、或る意味で弟子のやうに振舞つてゐたらうから、單に、簡略な文章や敍述の際に彼を逍遙の弟子と書いたとて、必ずしもウソといふのではない。然し事實は先輩後輩の關係で、文壇に出るについて可成り世話になつたに止り（これも然し當時としては大きな世話であつた）、一も二もなく逍遙に養成された弟子ではない。兩者の影響は、今もいふ如く相互的といふのを至當とする。さうしてこれは、當の逍遙の認むるところ、且つ語るところである。

逍遙が二葉亭に如何なる文學的影響を與へたか。これは、今日の二葉亭研究家からは餘りよくいはれてゐないので、逍遙の文學的影響が、二葉亭を戲作化せしめたのだなどゝいふ風に考へられてゐるが、私はこの點では、一寸違つた考へをもつてゐる。それは、二葉亭は元來戲作的素質なり趣味なりをもつてゐた人だと思ふ。その點を詳しく述べることは、只今止すが、それで例へば、あの『浮雲』の文章の戲作的分子などを悉く春の屋先生（逍遙）のせゐばかりだとするのは、酷だと思ふ。が、それは兎に角として、逍遙の二葉亭に對する影響は、先づ小說のテクニク方面のことが多かつたことは今更私が說明するまでもない。今の『浮雲』の文章の問題なども、その一例とならう。

そこで逆に、二葉亭が逍遙に何んな影響を與へたか。これは、二葉亭の受けたものと違つて、ずつと深刻で、文學に對する態度（文學觀といつても可い）、文學と眞理、文學と社會等の問題、文學の原理的問題等、要するに「文學とは何ぞや」といふ根本問題について、逍遙が大に啓發されたものに違

ひない。『小說神髓』の著はあつても、根底に文學論なり、文學觀なりをしつかり踏へてゐない逍遙は二葉亭の質問攻めには、內心閉口した。それで、二葉亭に會つて、質問攻めにされて以後（十九年以後）彼は、『小說神髓』の所論をもつと掘り下げて、その根本を究明する努力をつゞけてゐる。例へば「美」とは何ぞや、とか、「美術論」（藝術論）とかいふ論文をしきりに發表してゐる。つまりこれで、一つは『神髓』の所論を訂正し、一つはそれを掘り下げようとしたもので、これは悉く二葉亭からの刺激でだけなされた努力とはいへぬまでも、主として二葉亭との接觸によつて、かゝる努力がなされるに至つたことは、事實であると思ふ。つまり二葉亭の『神髓』質問が、逍遙の文學眼を大に覺醒させたといふことになるのである。

ひとり、文學論的な根本問題についてだけではない。作そのものについても、逍遙に、『書生氣質』的の戲作者振りを脫却しなくてはいかんといふ覺悟を起させたのは、二葉亭の影響が可成り與つてゐるやうに思ふ。「浮雲」を社會に出してやつたのは、文字通り逍遙の力であるが、然しその逍遙が、この作から大きな影響を受けたことは、餘り注意されぬ面白い事實である。逍遙の作『松のうち』（二十一年）は刊本が少なかつたせゐか、從來餘り問題にされなかつた作であるが（今日は逍遙選集中で樂に讀める）、あの作をとつて、『浮雲』と比較すると、逍遙がいかに、『浮雲』から學ぶところがあつたかといふことがよく分る。『松のうち』の主人公的人物の風間銑三郎と、『浮雲』の內海文三とを比較する

と、風間の神經質的性格が可成り强く文三から傳染したものだといふことに、氣がつく。風間の心理描寫の文字も、文三の心理描寫の行き方と一寸似てゐる。勿論、逍遙とてあれ程の才物だから、立派に文三的性格を消化して我がものとして傳へてゐるが、然し文三對銑三郎の血緣は何うしても切れないところがある。

逍遙は明治二十年、二十一年頃から、頻りに人生問題を考へ、社會問題に心を留め、一度などは、孤兒院を題材にした社會小說を書く氣になつた。これは、直接の影響としては、英國のヂツケンズの。例へば『オリヴア・トウィスト』の如き作品を愛讀したからといふことも考へられるが(その方が多いであらうが)、然し二葉亭の對文學態度、乃至人生探究熱、「ジージニ」(人生)の味ひへの魅力に動かされたところがないといへようか。

かうして、逍遙と二葉亭との文學的交涉は結局人間的なものにまでなつて來たのである。これについては、逍遙は、自分が如何に二葉亭に負ふところがあるかといふことを、「二葉亭の事」の中で明白に述べてゐる。

逍遙が二葉亭と文學的に交涉をもち始めたのは、明治十九年であるが、その時の逍遙は、人間的には、人生の理想も、主義もない、安易な、暢氣な、常識的な現實主義者であつた。それが、二葉亭といふ理想家、「眞摯ではあるが、窮屈な、謙遜ではあるが狷介な、懷疑の結晶でゞもある」やうな二葉

亭と接したのである。性格、態度、主張は眞反對であつた。その眞反對であることが、聰明な逍遙にとつては、自己の缺陷を照す明鏡となつたわけだ。二葉亭に接する度數の增すにつれて、逍遙は自分の態度の非を覺つた。作家としての不眞摯を、處世人としての墮落を自然に反省せしめられた。切に自己改造の必要を感じ始めた、即ち「主義なき理想なき自分を愧ぢた」。それで、二十年、二十一年と經ち、二十二年に入ると、二人の話柄は――

主として互ひの性格論、修養論で終始するのが例であつたが、謙抑な彼れは、私の慚愧を聽くといつもそれを遮つて、君には云々の美德があり、長所があるが、自分にはそれが悉く缺けてゐる、自分には云々の短所があり、云々の惡癖がある、と得意の自己批判を始めるのが常であつた云々。

かうした逍遙は、二葉亭と接觸したのが切掛けで、彼のいふ現實主義者から理想主義者に轉向し始めた。然しこれは二葉亭によつて植ゑつけられたものでなく、逍遙元來の遺傳的なものが、二葉亭によつて目覺まされたのだと見る方が正しからう。然し逍遙自身、二葉亭から人間的影響を受けたことを認めてゐるのだから、その點は、彼れ是れと疑ふまでもない。「二葉亭の事」では、逍遙自身が二葉亭から文學的に又人間的に如何なる影響を受けたかについては詳しく語られてゐるが、逆に、逍遙が二葉亭に對して、人間的に如何なる影響を及ぼしたかについては、殆んど語つてゐない。これは語つてゐないのが當然で、それを語るのは、矢張り二葉亭自身の役割だからである。然るに、肝腎の二葉亭

にはさういふことを詳しく語つた文獻は無いから、此處が何うも、推定と想像で行くより仕方がない。私の想像によると、何うも、二葉亭の方でも、逍遙から人間的影響を多少受けたものと思ふ。前の引用でも知られる如く、二人顏を合せる度に性格論や修養論をしてゐながら、二葉亭自身の方で何の人間的影響をも受けとらぬ筈はあり得ない。殊に當時の二葉亭は、逍遙に對して、長者として、文壇の先輩として、作者中の才物として接觸してゐるのであるから、何等かの點で彼を學ぶ氣持ちがある。質問も批判も、畢竟この氣持ちの現れだといつても可い。つまり、二葉亭は、逍遙から、一種の現實主義者として生き方を見せられて、それに動かされた點はあると思ふ。二十二三年以後、理想主義一點張りの二葉亭が一種の現實主義者として生きんと努める。この人生的立場や、主義主張やは、勿論逍遙が教へ得るところではなかつたにしても、かゝる生き方の何の點かに於いて、二葉亭は逍遙的なものを學んだに違ひない。彼が、二十一二年頃頻りに英書などを學んだといふのも、英語英文學によつて處世の根底をつくつたかに二葉亭が考へてゐた逍遙に影響されてゐることではなからうか。勿論他にも有力な種々な原因はあつたらうが。

この兩者の交渉については、兎も角も、逍遙の「二葉亭の事」を參照していたゞきたい。その方が具體的にはつきりすると思ふ。

三　二葉亭の官報局時代について

二葉亭の官報時代は、文學者として二葉亭を研究する人々にとつては、最も無益視され、遺憾がられる時代である。二十二年から三十年まで約九年間、四十六で死んだ二葉亭の生涯からいへば實に貴重な九年間であるが、その九年間は、彼の筆から文學として何も產み出しはしなかつた。それで多くの二葉亭研究は、この九年間を飛躍しがちである。然し私の考へでは、この九年間は、表面文學と關係がないやうに見えるが、二葉亭といふ偉大な文學者の完成には、相當大きな役割をしてゐるのではなからうかと思ふ。むしろ二葉亭の本質を捉へるには、この九年間の彼の足跡なり、仕事なり、生活なりを是非調べてみなくてはならぬのではないかと思ふ。

これは餘談めくが、私は、二葉亭自身が文學としてその作品より偉大だと思つてゐる。二葉亭の小說も、成る程、時代に照して、又他の文學者に比較していへば、偉いには違ひないが、世界的舞臺に持ち出したら果して何うであらう。私は、むしろ二葉亭の存在それ自身が偉大な文學であり、この存在の方が、彼の書かれた文學よりも偉いと思ふ、この二葉亭の書かれざる文學の方なら、世界的舞臺に出しても相當の位地を占め得ると思ふ。文學者の中には、眞の文學者、文學を生きる人、その生涯が直ちに文學となつてゐる人と、文學作家とがあらう。作家は、いろいろに工夫して文學を作る人で

あり、時間と空間に束縛されてゐる人々であり、その文學を作る場合必ずしも、それ自身文學を生きるとか、何とかいふことを問題にしない。むしろ文學に生きない人の方が文學を作るには都合がよからう。二葉亭や、國木田獨歩、北村透谷、木下尚江、德富蘆花、これ等は文學を生きた人々であり、文學を作つた人々ではない。書かれた彼等よりも、書かれざる彼等の方が一層偉大であり、純眞で、眞摯で、熱烈で、深刻である。此等の人々は、彼等の書いたものよりも、その生活が、それぞれ眞の文學を成してゐる。

二葉亭が官報局に入つたのは、勿論衣食の爲めであるが、彼が何故に文學で衣食せば出來得べきのをせずに、小役人になつたか。彼は果して文學を見限つたのか、もう此の時からして、文學は男子一生の仕事とするに足らぬと考へ始めたのか。正しい意味では、決してさうでない。彼は寧ろ眞の意味での文學を、男子一生の事業とするに足ると信じて、一意專心小說道に精進したのである。(一味の文學青年と共に冷雲社なるものを設けて廻覽雜誌もつくつたといふ)。精進した結果、彼は二つの結論を得た。自家の文學理想と時代の文學理想との間には大變な相違があること、文學で衣食するには時代の文學理想に妥協しなくてはならぬが、正直に文學に生きようとせば、これは不可能なこと、これだ。そこで止むなく、大切な文學を衣食の方便とすることを止めて、官吏生活に入つたのである。

二葉亭は尾張藩士の子といふが、江戸生れであり、江戸趣味や戲作趣味を解せぬ人間ではなかつた。

いな、少年時代、學生時代の彼は、『二葉亭四迷』追悼錄中の諸友人の追憶によると、この方面の耽溺的理解者であつた。だが、武士の血を承け、一方漢學塾で鍛はれ、時勢の影響に奮發した彼は、國家社會人類の爲めに生きるといふロマンチックな大理想をもつてゐた。彼が外國語學校に入つてロシヤ文學に讀み耽るにつれて、その文學に實現された世界が、當時の人々のいふ文學よりも、彼のロマンチックな理想に近いことを知り、そこに自家の文學理想を建てるに至つたことも、當然でなければならぬ。趣味としては兎も角、指導的な文學理想としては、ロシヤ文學から學び得た彼の所謂眞の文學は當時普通の戲作文學乃至戲作的新文學とは兩立しないものであつた。彼は眞の文學の偉大さを知れば知る程當時の所謂日本文學がいかに馬鹿々々しいものであるかに呆れたといふ。それをさういはずに、吾から卑下して通とか粹とかいふものに隨喜した文學に從ふことは、苦しくて仕方がなかつた。文學によつてさういふ苦しい生き方をするのは、正直な彼には到底出來ないことであつた。

彼が官報局に入つたのは、以上の如き動機であるから、決して多くを期待して入つたものではなからう。ところが、この頃の官報局の空氣は意外にも、靑年局長高橋健三の心意氣の反映として、正に國士養成所、豪傑合宿所の觀があり、從つて二葉亭に對して單に衣食の資を供したのみでなく、精神的にも多大な感化を與へた。高橋が、自身役人でありながら天下の處士の親玉を以て任じ、部下の豪傑連を集めて傍若無人に時政や社會を談論批判する、それが、少くとも、二葉亭のロマンチックな天

下國家の志を大に滿足させる。嬉しかつたらうと思ふ。その上、やる仕事が外字新聞（初め英、後露も）からの飜譯であるが、大體の監督は受けてゐたにしても、記事の選擇その他も彼の自由に出來たらしい、彼の眼光は、その天下國家的大所から、國家問題社會問題に配られ、さういふものを好んで譯載した。それは、今日官報の外國新聞の欄に寓目すると、直ちに氣づくことである。

二葉亭の擔任したのは初め英字新聞、後露字新聞も擔當したといふ、然しそれは英字、露字の新聞による外國記事の飜譯といふので、英國、米國、乃至ロシヤの記事にだけに限つたものではなからうから、今日官報から、確實に二葉亭の手になつた文章といふものを指摘するのは、さう容易でない、然し彼が在任中の官報を通覽して、彼が擔當してゐた欄をずつと見て行くと、そこには自ら二葉亭の手に成るものが多分に含まれてゐるわけであるから、これを讀むことによつて、此の頃の二葉亭の自己敎育的過程を推察することが出來ると考へる。

官報といふものは、あらゆる新聞中最もドライな、最も面白くないものだ。だからこれを、たとひその一部でも、約十年間讀み通すといふことは、大變な努力であり、當時の購讀者を別とせば、二葉亭研究家でこれをやつた人はなからう。私も、かういろいろと大言を吐くものの、實は眞の一二年間分を走讀したまゝ、すつかり中絕させてゐる。然し何うにも氣になつて仕方がないから、その中大奮發して（吾々の大奮發といふのは文字通りの大奮發で、何ヶ月間かの兵糧を支度することを指す）一

通りは片づけたいと思つてゐる。

だが、私が走讀した一二年間分の官報によつても、此の頃の二葉亭が如何に自己教育しつゝあるかといふことが、略ぼ分る。彼は、こゝで國士、人道主義者、社會思想家、その他、一口にいへば官報局以後、卽ち後半生の二葉亭に強くにじみ出してゐる經世家的風格を、次第次第に作り上げつゝ（或は仕上げをかけて）あるやうに思はれる。官報そのものは面白くないけれども、それを通して二葉亭の心的生長を辿る仕事は、これ又第一義的に文學に觸れることで、最も大切なことである。誰かが我慢してやり通さなくてはなるまい。これをやり通さぬうちは、眞實大きな顏をして二葉亭のことなど語れぬのではないかと、私は思ふ。妄想だと笑はれるやうな氣もするが、この試練を經ぬうちは、二葉亭についての色々の知識が、何うも肝心なところで空白になつてゐるやうでしやうがない。

かうはいふものの、確かにこれは大仕事だ。經濟的に非力な私などにやり通せるか。何うか、自信はない。今かうやつて、南來の薰風に沐してこの原稿を書きつゝ、悠然下町の車塵熱鬧を見下してゐると、別に金持ちも羨ましいとは思はないが、フトかういふ大きな仕事（明治文學研究にもまだかういふ大仕事がいろいろある）のことを考へると、緑雨のいひ草ではないが、岩崎のやうな伯父さんをもつてゐたらと、さもしい氣になる。御木本さんがラスキン主義につぎ込んだ百萬圓など、實に勿體ないことだと、他人のことだが、今更らしくそのつかひでが考へ出されるのである。

二葉亭が官報局をやめたのが明治三十年といふ。官報局以後の彼が、所謂文學者として生きずに經世家として生きようと努めたのは、官報局時代の自然的發展で、少しも不思議はない。だが、境遇は彼を驅つて、結局文學に衣食するを止むなくした。彼は文學に對して高い理想をもつてゐたので、文學を衣食の資とするのはイヤであつた、文學に衣食するのは、彼としては理想に反した生き方であつた。それは衣食の資にされる文學は、彼の文學理想からいへば、全くイヤな文學だつたからである。だから衣食のために小說を書かされると、必ずひどい神經衰弱になつた。彼からいふと、社會の强ひる衣食文學は、道樂文學であり、彼の理想の文學でない、彼の文學理想の實現ではない。その結果、文學をイヤなものだと思ひつめて來る、さうなると、時々は、文學（衣食文學、道樂文學）なぞ男子一生の事業とするに足りないといふ激語も吐き度くなるではないか。これは一種のパラドクスだが、境遇の如何でさういふ心理も生れて來る。道樂文學でない眞の意味の文學をば、二葉亭が決して輕視もせず、又かゝる文學には寧ろ大に野心があつたことは、前述新著月刊の記者への談話の中にもチヤンと出てゐるのである。

（二）『平凡』解題（改造文庫）

二葉亭四迷は明治文壇に於ける偉大なパラドクスであり、懷疑的ケーオスの大團塊であり、未成品

の巨像である。明治の文壇で彼程複雜な性格をもつた人がない。彼は明治の初期すでに『浮雲』を著した程の近代心の理解者でゐながら、終生江戸式の戲作者氣分をもつてゐた。人生、社會、文學、その他に對し科學的に徹底した見識をもつてゐながら、幾多未解決の煩悶に轉輾しつゝ懷疑の子として逝つた。『あひゞき』の一篇で明治文壇に新しい自然の見方を敎へ、『浮雲』の一作で眞の意味で日本近代小說の基礎を置いたといはれる程の文學的成功を遂げながら、最後の最後まで文學者と目されることを拒み續けた。世人の喝采が加はれば加はる程、彼は過去の自分を唾棄して顧みなかつた。

初めは軍人を、轉じて外交家を志した國士型の人物が、境遇に制せられて文學に赴き、そこに安住が出來ずに官場に隱れ、哲理科學に沒頭して大悟の眼を開かうとしたが、何を感じてか實業界に飛出さうとして意を得ず、敎師、新聞記者と轉々した揚句は元の大嫌ひな文學者となりかけた刹那、ふとした機會からその國士的本懷を達するに近い理想的適所を得た。だが間もなく、病んで巨木の如く倒れ、その一生を依然パラドクスのまゝ、ケーオスのまゝ、未完成のまゝに遺した。

小說『平凡』の作者は大體かういふ人間であつた。『平凡』はいはゞ此の偉大なるパラドクス的存在が置土產的に吾等の前に無雜作にどさんと抛げ出して行つた最後の創作である。此の小說で語らうと狙つたのは何であつたか。彼自身の言葉を借りていへば「それは色々の人が人生に對する態度だな、人間そのものでなくて、人間が人生に對する態度……つまり具體的の一個の人ぢやなくて、ある一種

の人が人生に對する態度だ。而してその一種の人とは卽ち文學者…必ずしも今の文學者ばかりぢやなく、凡そ人間在つて以來の文學者といふ意味も幾分か含ませたつもりだ。」此の試みの結果については、彼は滿足しなかつた。「ところが題材の取り方が不十分だつたから、試驗もとう／＼達しなくなつてしまつた。十分に達しなかつたといふのはサタイヤ（諷刺）になつたからだ。」

だが世間の歡迎は意外であつた。彼が欲したにせよ欲しなかつたにせよ、從來文人として報はれることの遲く且つ薄かつた彼は、此の一作によつて一躍して第一流の創作家として遇されるに至つた。

慾をいへば、彼の或る批評家のいふ如く、この作には可成り深酷な「精神的及び物質的苦悶に富む彼の半生の生活から生れた徹底した近代的悲痛が現れて來なければならないのに」それが現はれずに稍や不徹底な、捨鉢氣味な、平板な葛藤によつて、彼の酸いも甘いもかみ分けた苦勞人的面影だけが見えてゐるので、幾分の不滿がある。だが彼の伸々した自由な半面がよく出て居り、人生に對する豐富な經驗が伺はれ、技術慾に超然とした入神の文章、大膽に突込んだエロチツクな描寫、「荒削だが活々した淸新な氣」のある點などで、文豪として彼の最後を飾るに足る作だといつて可からう。若しそれ、平凡人の生活に完全な徹底した藝術價値を認めたといふ一點に至つては、彼の今一人の批評家のいふ如く、『平凡』は正に日本の自然主義運動乃至リアリズムの基礎工事に重要な一石を下ろした先驅的所産として劃期的に不朽に生きるものであらう。（昭和四年六月）

『少公子』の譯者著松しづ子

『少公子』の譯者 若松しづ子

『少公子』の譯者若松賤子女史は本名を巖本嘉志子といつた。岩代若松の士島田勝次郎の女で、元治元年(一八六四年)の一月そこに生れた。丁度此の年が甲子の年であつたので、幼名を甲志と呼ばれたが、後に嘉志と改めた。雅號の若松賤子(初めはしづ子)は生郷の名にちなんだものである。生れて數歳、戊辰の戰禍に逢つて父と別れ、母の愛によつて僅かに身を全うしたが、間もなくその母も歿したので、東京の人大川甚兵衞に養はれ、次いで米人ミス ミラアに依つた、明治二年のことである。翌三年七歳で横濱のフェリス女學校に入り、十四歳(十年)卒業して、同校の助教となり、勵精幾年、女教師として令名があつた。明治二十年二十四歳のとき、女學雜誌社の社長で明治女學校の校長をかねた巖本善治氏と結婚した。だが双棲十年にみたず、明治二十九年(一八九七年)二月十日、宿痾の肺患が重つて逝いた、丁度三十三歳の厄年であつた。墓は北郊染井にあるといふ。女史の著譯には此の『少公子』の外に、文集『忘れがたみ』、『祝ひ歌』、英文集『巖本嘉志子』がある。

女史は早くから英語英文に親しみ、英文學の素養が深かつたばかりでなく和文の才能も秀でてゐた。だが多年教師として教化的方面に沒頭して來ただけ、その理想は家庭改良、社會の改善、より良い人

生を作らうとする努力にあつて、決して意識的に文學に依つて名を殘すなどとは考へはしなかつた。いな、むしろ、その筆を執り始めたのも、この理想の實現に幾分でも貢獻したいといふ努力からだつたといふ方が可い。二十二年の十月女學雜誌に「お向ふの離れ」(短篇小說)をのせてから二十九年十月二月號にのつた絕筆の「おもひで」に至るまで、樣々な雜誌に發表した飜譯、雜文、小說など幾十を算するが、いづれも皆、いい意味で此の理想を具現させたいといふ心くばりが、何處かに見えてゐる。だが女史の異常な文學者的天分は、その意識無意識にはかゝはらず、いつの間にか女史の名を明治時代第一流の閨秀文學家のうちに伍させてしまつたのである。さうしてそれに與つて力のあつたのは此の『少公子』の飜譯であつた。

『少公子』は原作を『リツトル・ロード・フォーントルロイ』といふ、米國の女流作家バーネツト女史の傑作で、版を重ねること幾十百、一時米國の讀書界を風靡し、つひに全米良家の子女の間にフォーントルロイ型といふ一種の流行を生んだと傳はる。若松女史の譯は明治二十三年八月から二十五年一月迄女學雜誌に揭げられ、女史の永逝後、明治三十年一月出版された。その前篇(第六回迄)が二十四年十一月に單行されるや、當時文壇の大家中の大家たる坪內逍遙、森田思軒などがその見事な出來榮を推賞した。當時飜譯王とまで世人から許されてゐた思軒は報知新聞紙上(同年十一月十三日)で、譯者の英文に熟達せること、語意を捉むに明白透徹してゐること、會話の條の巧妙なこと、譯文が平

易でしかも原文に忠實なこと、その譯文に用ゐた言文一致體が自然で、信實で二葉亭主人の『浮雲』と双璧をなすことなど、幾箇條かを擧げて大いに紹介につとめた。女史の逝くや、思軒は哀悼の語をのべて、『少公子』は明治以來第一等の善良な飜譯に屬する旨を語り、自分は若松賤子の何人かを知らぬが「併しこの唯だ少公子の飜譯者としてのみの若松賤子君だけでも、明治文學世界が長く忘るゝ能はざる所である」といつてゐる。これは名譯『少公子』を讀んだ人の誰しも感ずるところだと思ふ。

（昭和四年六月、改造文庫『少公子』解題）

鏡花作品の讀み初め

一

兄の二人が、何ういふものか鏡花が好きであつたらしく、私の家には鏡花の作を載せた雜誌がいろいろあつた外に、單行本の『照葉狂言』などもあり、鏡花は私が早くから愛讀した作家の一人である。長兄は、兄といつても大分年が違ふから、その文學愛讀も先づ三十四五年頃までで、從つて諸家の文學書もその頃までのが多かつた。鏡花も勿論さうで、讀み初め頃の私は、新小說の「高野聖」以後は暫らく知らなかつた。後で、いつか話したやうに、貸本屋が頻繁となつた頃、『通夜物語』とか『婦系圖』とか、『湯島詣』とかを讀んだ。

讀み初めの頃は、『照葉狂言』と「誓之卷」が大好きで、幾度讀んだか知れない。短い物では、國民之友の「琵琶傳」といふのも、强い印象を殘してゐる。大體は二十年代から、三十年代の初めのものが多く、鏡花が一番純な主觀詩人として一心に書いてゐたころのものだつたが、これが私には大變鏡花を好きにさせた。『湯島詣』とか『婦系圖』とか、あゝいふ新派悲劇じみたものから接したら、今日

私は決して鏡花の愛讀者を以て自任する勇氣が無い。

それだけに、後年『照葉狂言』が、鷗外の『卽興詩人』の影響に成つたのだといふことを、何かの本で讀んだときには、大方ならぬ幻滅を感じたものである。

鏡花は、主觀的な作家であり、客觀的技巧は長所でない。從つて、彼の長編小說は、皆まづい、殊に構想に新味がなく、いつもいつも草双紙の厄介になつてゐるところなどは全く困りものだと思ふが彼をして純詩境に沒入させるやうな主題のもの、例へば、『照葉狂言』や「誓之卷」の如きものになると、彼の藝術は初めて淸新な、純な、生きたものになる。私が好きなのは、この詩境の鏡花である。

この詩境は、いはゞ二十年代の靑年鏡花のものだ。三十年代の中期以後、妙に氣取つたポーズを取り出す『通夜物語』、『婦系圖』式の鏡花は、時としてヘドの出るやうなイヤな氣がする。

鏡花は不思議な人で、恐ろしく高い純な藝術の天分と、鼻もちのならぬやうな卑俗陳腐な思想をもつてゐる。この天分には遺傳の血が可成り作用してゐると思ふが、卑俗性は、その文學的敎養の低俗無見識によるものであらう。彼の人氣のある長編小說には、よく此の二つの分子がこんがらかつて出てゐるが、鏡花が意識的に、例へば社會惡といふやうなものに正義感をもらさうとかゝればかゝる程私はその時の鏡花がイヤになる。時勢も知らず、文學も知らぬ非力な戲作者が、場外れの力味方をして何になるか、全くノンセンスだと思ふ。ところが今一方、『照葉狂言』、「誓之卷」のやうな、無邪氣

な詩境に沒入してゐる鏡花は、實に好きだ。近代ロマンチシズム文學の逸品として不朽のものだと、いくらも高く買ひたい氣になる。

戲作者といへば、鏡花の文學と傳統の戲作文學とは、到底離れられないものをもつてゐる。鏡花の文學に一種の反抗精神があるのは誰しもいふところであるが、この反抗精神は、戲作文學で養はれたものが相當あり、いはゆる町人的反抗で、これの現れ方に、よく現れるときと、厭味に出るときとがあるが、三十年以後には、妙に厭味な時が多い、殊に花柳物に多い。「白羽箭」のやうなのが、いゝ方だといひ得やう。

鏡花の反抗精神に今一つの根源から出るのがある。それは、藝術家とフヒリスチニズム、俗人に對する反抗だ、いはゞ詩人がブル根性を憤る氣待ちだ。これには、遺傳的なものが多くあるやうに思ふ。これの現れたのには、いゝ作が多い。私の好きな『照葉狂言』、「誓之卷」みなこの精神の現れである。戲作文學の町人的反抗は、時勢への強い反省が伴はぬと、東京の中央で、白日、長兵衞さんがイキナリ六方をふむやうなもので、氣の毒でもあり、イヤ味でもあり、可笑しくもあり、何とも申やうがない。その申樣のないところが、一番人氣のある長編小說に多い。

『照葉狂言』が『卽興詩人』の影響下に成つたとしても、私はこれを明治文壇の一傑作と推すに躊躇するものでないが、「誓之卷」も好い。自傳的分子の多いだけに稀な眞實さがあり、人物に西洋女性

が出るだけ、エキゾチシズムもあり、宗教的な高さ、少年の無邪氣さ、人情の美しさ、さういふものが、渾然と鏡花の詩の世界に融け合つて、讀む者の心を心底から動かして涙せしめる。

二

私は研究的に鏡花を扱つたことがないからよく知らないのだが、水上さんの年表をみると、處女作、少くとも處女長編は、明治二十六年に作つた『冠彌左衞門』といふ小説だとなつてゐる。この小説はその後單行本になつてゐるが、私はこの單行本の方を、貸本屋時代に確かに讀んだ。その時は、面白くない小説だと思つて讀んだ。これは今日讀んでも恐ろしくマヅい、面白くない小説である。單行本は比較的少ないやうだが、今日全集があるから、讀むだけは樂に出來る。何も筋を語るまでもないが、話の序に一寸述べて置かう。

例によつて筋は下手だ。百姓一揆とお家騷動を二つくつつけたやうな筋であるが、戲作文學や草双紙から多分に借り物をしてゐることは勿論だ。人物も勿論さうだらうと思ふ。鎌倉中心の話で、いつとも時代がはつきりしないが、德川以前のやうにもあれば、幕末時代のやうにもある。鎌倉長谷に石村五兵衞といふ强慾な大町人があり、百姓をたばかり、領主の惡家老岩永武藏をとりこんで、長谷郷

の田地を皆自分のものにする。これに對する百姓の反抗が一つの筋、これには靈山の卯之助、猿の傳次などといふ義人俠客が働く。一方岩永は主家押領の陰謀を逞くする。それに忠臣沖野新十郎等の奔走がある、これが一つの筋、この二つの筋をまとめるのが、冠彌左衞門である。彌左衞門は佛師、卽ち藝術家であるが、こゝが面白い。然し天性の大膽不敵、英雄型の偉らもので、いはゞ『三國志』の諸葛孔明に關羽・張飛を加へ、我が朝の楠公と眞田幸村と一緒にしたやうな人物である。これが義人、忠臣を應援して、石村五兵衞を亡し、又岩永をとつて抑へる。然かも功成つて行くところを知らずといふ飄々振りである。

小說としては、今もいふ如く、極くマヅいもので、讀んでも筋の通らぬところもあり、鎌倉を描きながら何處の田舍か分らぬところもあり、隨分下手な小說だが、たゞ一つ、この藝術家の反抗兒冠彌左衞門といふ存在は、鏡花の文學からいへば、大に意味がある。處女長編に出る人物だけに、餘程頭を捻つたものであらう。

此の冠彌左衞門といふのは、鏡花の創作かも知れぬが、冠彌右衞門と名乘る人物が百姓一揆の大將として働いた事件が、鎌倉の近く、相州眞士村にあつた。明治初年のことであり、この騷動を書いた草双紙などもいろ〳〵あるから、勿論鏡花もこれを見たらう。私は必ずしも、鏡花がこの小說をかりに草双紙から眞似たものと斷言はしないが、事件が事件であり、人物の名といひ、旁々、何うも此の

か眞土村の騷動の冠彌右衞門を、鏡花流に戲作文學化したのが、處女長編の冠彌左衞門ではなからうかと思つてゐるが、然し別に鏡花翁に訊ねてみたのでなし、そこは保證は出來ない。何うも然し、その方が自然だといふ氣がする。事實は何うにしろ、たゞこの冠某を、佛師にしたところが私としてはまことに面白いと思ふので、藝術家型の町人的反抗兒といふ存在が、鏡花藝術からいつて、その根本の一つの型になつてゐるだけ、それだけ此の『冠彌左衞門』は、マヅいながら、鏡花の小說としては、注意して讀まるべきものだといふ氣がする。（昭和十二年九月號「解譯と鑑賞」）

筑水金子先生

（一）批評家第一期

（序）批評家としての金子先生、殊に明治批評文學史上に於ける先生の業績の幾分をまとめて書けといふお話であるが、纒めるには論評がましい文句も入ることであり、裁論的言葉も弄しなければならぬことになり、先生御逝去後一月を越えぬ今日、さう無遠慮な歴史的扱ひも何うかと思はれる、出來る出來ぬは別として、只今は功罪の論評がましき事は避けるを禮とする。そこで、その點を考慮に入れて、先生の活動中、もつとも支障の少ない部分卽ち初期早稲田文學時代から洋行まで頃のことを批評家としての先生の第一期と見、その邊のところを少し書くことにする。それも眞の記憶を新たにする程度のものといふだけに止めて、餘りの深入りは避けて置きたい。

一

性格の點から見た金子先生は、表面見たやうな溫厚篤實一點張りではなく、相當に複雜なものがあつたのではないかと思ふ。この點は今後研究すべき興味のある問題であるが、それはそれで別として

今日金子先生の性格を云々すると、誰の評でも溫厚篤實、眞面目の一口につきることになる。表面的には極めて單純である。何うして內部の複雜ないろいろなものが、表面にさう單純化されて表現されたかといふと、これ又一問題だが、私の考へるところでは、先生は、終生坪內逍遙といふ偉大な存在にくつつき過ぎてゐた點がありはしないか。寧ろ逍遙的意識に支配され過ぎはしなかつたか。逍遙の一生は所謂不眞面目から眞面目への努力の一生であり、金子先生などはその不斷の努力を傍にゐて見過ぎたので、人生はあゝならなくてはならぬといふ強い意識に支配されて、それが先生固有の分子と相俟つて、いふが如き「眞面目」なる筑水先生を生じたのではなかつたか。逍遙に加ふるに、先生の師事した大西操山も亦、眞面目の點では逍遙にまさるとも劣らぬ人格であり、何方を向いても、さういふ空氣、さういふ意識が強かつたので、筑水先生も一生さういふ方に引ずられたのではなかつたかといふ氣がする。勿論先生自身、それがいゝと思つてのことに違ひないが、何だか四方に枝の出る樹を、主人の嗜好で何方か一方だけにのばして、あとの三方はポシビリテイ乃至ポテンシヤリテイのまま仰へつけた感じがしなくもない。

由來、信州人は決して單純な性格の持主ではない。才あり、略あり、熱あり、野心強く、ロマンチツクな分子に富み、ユーモアを解し、感情に動き、社會主義に立ち、詩趣を愛する。よく使へば治世の能臣たること受合だが、下手につむじを曲げさせると、亂世の姦雄になりさうな人物が多い。わが

筑水先生だけ溫厚篤實、眞面目一點張りで割切れると思つたら、少々見當が違ふ。腹を打ち割つたら先生はそんなことで割切れるものではなからう。そんなことで割切れる人間なら、ゲーテ、シルレル、ノファリスのロマンチック文學にあれ程傾倒しはしない、況んやニイチェへの嘆美をやだ。

先生の一生は、非常に苦しい、窮屈な一生だつたと思ふ。偉い先生、偉い手本を見習ふことはいゝには違ひないが、先生の場合、いろいろな事情から、偉い先生の眼を仰ぎ過ぎたかの觀がある。

今にして思ふ、抱月はこの窮屈さに我慢がならずして跳ね出したものであらう、筑水先生はつひにその窮屈さを、一生忍んで生き通したのだ。

明治二十三四年の交、逍遙を中心に四五の文學愛好者が集り、各自文章を書き、それを雜誌風のものにして逍遙の文學的指導を受けてゐた。筑水先生もその一人だつた。雜誌を葛の葉又は延葛集といふ。聞くが如くば、この頃の先生は、哲學論もするが、英文學史の飜譯もする、紀行文もかく、近松研究もやる、滑稽批評もかく、小說さへ書いた。然るに逍遙は、君の文はユーモアや小說に向かぬ、これは止め給へといつたので、以後專ら眞面目な批評文章のみ書くやうになつたといふ。

勿論これだけで先生一生の眞面目主義が定まつたとはいへぬが、この後先生はユーモア的文章や小說を書かなかつた。師言を遵奉する先生の態度だけは、それで分るのである。一生を通して、かういふ態度で師言師恩に對する以上、筑水先生のやうな眞面目一點張りの生涯となるのは勿論のことであ

る。文學者として、今少し己れを生かしても好かつたのではないかと思ふが、時期が遲かつた。

何うも眞の書き出しのつもりで性格論をして、長々とやつてしまつたが、これから批評家としての先生のことに移る。

二

先生は今日では哲學者、思想家といふ分類に入るが、その活動の本質は、「學者」といはんよりも「批評家」であつたらう。早稻田時代の學問も批評家的學問であり、純哲學者としてではない、むしろ文學者的といふべきだ。第一期の活動といふのは、主として二十六年早稻田文科卒業後三十何年洋行する頃までをいふのだが、この間の先生の文學活動は、大部分は批評文學であり、それに外國文學紹介者として、可成り活動してゐる。外國文學紹介者としての先生については知らぬ人が多いが、帝國文學の刊行以前、早稻田文學が外國文學の新知識供給者となつてゐたころは、先生はなかなかよく勉强したものだ。例へば十九世紀の英文學、フランスの現代文學についての纏つた紹介、メレヂス、ロゼツチ、ホイツトマン、トルストイ、イプセン等は、纏つたものとしては、最初の紹介だと思ふ。勿論哲學や美學方面の論述もある、「希臘美學」、「カントの美學」「ショーペンハウエル」等は主なものであらう。アレンの『生理的美學』の紹介も、先生が最初であらう、その他美と眞の關係、近代詩人と人生の意義等、文藝批評の根本問題にふれた紹介もある。

三

批評文學として取り上ぐべきものは、卒業論文の「詩才論」（二十六年七月以後）で始まり、「歸納的批評」（二十七年三月）、「美の道德的價値を論じて文學者の責任に及ぶ」（二十七年六月）、「『透谷集』をよみて」（二十七年十月）・「國民文學と世界文學」（二十八年一月）、「櫻痴居士の美論」（二十八年三月）、「ローマン派の世界觀と文學」（二十八年七月）、「所謂社會小說」（三十一年二月）等がその主なものである。二十八年以後數年間あまりいゝものを書いてゐないのは、中學教育（早稻田中學創立）に盡力してゐたせゐだらうと思ふ。それで三十一年にはその筆が文學を去つて漸く教育方面に向つて來るのである。間もなく（三十三年か）洋行となり、三十七年歸朝後は哲學者的批評文章が多くなつて、時代時代の文學とはさうひどく密接な交渉をもたず、今日に及んだといふわけである。

「詩才論」は今もいふ如く卒業論文だが、在學數年間の讀書と思索を傾注して書いた代表的なもので、これを讀むと先生の批評方法が典型的に出てゐる。卽ち問題の要約、問題發生の條件、問題の吟味、先人の說、その吟味、自家の理想、希望、判斷となつて來る。先生の批評はいつでも獨斷を避けて、問題を客觀的に吟味することを忘れず、それでゐて、理想主義的な判裁を下すところからいふと所謂科學批評ではない。「歸納的批評」はモウルトンの科學批評を論じたもので、特に面白いものであるが、これでも、科學批評は判裁批評の準備工作だとしてゐる。逍遙がモウルトンの科學批評に隨喜

してから三四年で、こゝまで日本の批評文學は進步したわけである。勿論先生のかういふ批評的立場は、逍遙の科學的沒理想的文藝批評と、これに反した鷗外の（乃至操山の）理想的哲學的文藝批評を合一調和せしめて、この立場をつくつたものに違ひない。この二派の調和といふところに、先生の第一期批評文學者としての特異な位地があるわけである。島村抱月は、この立場に立つて更に一進展を試みて大成したものといふことが出來やう。先生は先驅だけに多分に啓蒙的であり、島村氏は集成者だけに多分に創造的である。その他種種な點で面白い對照をなすが、今こゝでは述べずに置く。

「櫻痴居士の美論」そのものゝ當否を別としても、歷史的に極めて面白い文獻だ。舊批評家櫻痴を新批評家筑水が、新らしい學的美論を根據にして攻擊してゐるので、こゝに新舊批評家の交代期の一兆證が見られると共に、日本の批評文學が、應用美學といふところまで高まつて來たといふこと、一般に學問と批評との關係、學問が批評の根柢となるを要するといふ根本的な發展段階を示したものである。

『透谷集』の批評は、先生の透谷觀であるが、先生の文章としては稀に見る熱のあるもので、透谷に同情した論である。「國民文學と世界文學」は、保守的な國民文學派に對して、眞の國民文學は畢竟眞の世界文學たるべく、徒らに保守的なものは國家の進運に伴はぬといふ論で、今日でも尙ほ考へさせるものがある。「所謂社會小說」は、先生の批評中最も有名なものゝ一つで、當年進步主義的文學者

たる先生の面影を髣髴とさせるものである。勿論歴史的には極めて貴重なものだ。

さて此れより前に列擧せし社會小說の主要範圍を吟味せんに、第一、近世の社會主義は、現時の社會問題中、主要なるものゝ一なり、下は勞働社會資本家の問題より、上は平民對貴族の關係、被治者對治者の關係、幼者對長者の關係、弱者對强者の關係、無敎育界對有敎育界の關係等一々枚擧に遑あらず。（中略）勞働社會對資本家の境遇を畫くも可なり、無敎育界對有敎育界の事態を寫すも可なり、要は廣く社會の歷史上、社會主義の現るゝ原因、勞働社會と資本家と鬪爭するに至る所以の動機、有敎育者と無敎育者と分かるゝ所以の人世觀等に着眼するにあり。作家必しも豫め想を構へて事を作するを要せざれど、讀み行うちに、社會主義の起こる動機を讀者に感得せしむるを、此の種の小說の上乘なるものとすべし。

これは今日からいつても、テクニクの議論を別にせば、大綱論として決して軌道を外れたものではない。この批評の如き、他日先生の批評家としての業績を詳論するときに、可成り細かく吟味されて然るべきものであらう。

段々長くなり過ぎる恐れがあり、私も忙しいから、先生の批評家第一期はこの位ゐにして止めるがやゝ取りとめない饒舌の羅列に終始したのは恐縮な次第だ。（昭和十二年七月、早大「明治文學」第二號）

(二)あゝ金子先生

わたしは文科でも英文學専攻といふ方で、哲學専攻の方ではなかつたから、金子先生からいへば、傍系なり、又は外様なりの弟子になる。勿論文學部長としては、別にさういふ區別がないわけで、従つて今日でもわたしどもが普通にいふ「おん大」とか「親玉」といふ語が直接の親しみをもつて口に上される所以がそこにあるのだが、教室の先生としては、學校卒業と共に緣が切れたことになる。ところが、私は仕事の關係で、一時は學校時代より近しい個人的接觸をもつにことになつたので、どうも外樣の弟子でなしに、氣持だけは直參弟子のやうな氣がするのだ。然しその意味はいつも面倒な執筆ものや何かを先生のところに持ち込み、拜み倒してその執筆を承諾していたゞくといふのであつたから、何うも迷惑至極な弟子であつたに違ひない。だがそれでも、その度に「困るね」を連發されながら、結局は口說落されて苦笑ひしてゐたところを見ると、何うやら弟子扱ひはして下さつたものであらう。神經質な先生だが、弟子が困るから賴むといふのを、無下に斷はるのも、何うかと思ふと、いふやうな親分らしい氣持から引き受けて下さつたらしい仕事がいろいろある。それを思ひ、これを思ふと種々相濟まぬことをしたと、冷汗が出る始末である。

もつともこの直參弟子らしい氣がする今一つの理由は、わたしは英文科でゐながら哲學科の連中と可成り親しく交際してゐたせゐもあらう。中でも、最近まで先生の私設祕書官らしい信任を得てゐた香原一勢老人などとは特に親しかつたものだから、餘計さういふ氣がしてゐたのかも知れない。

それはそれとして、敎室での先生のことを一つ二つ追憶記風に書いてみよう。

大學部三年の間に、先生の筆記講義として聽いたのは、心理學だけだつたらう。敎科書を使つての方は、ゲーテの『ファウスト』とニイチエの『ツァラトウストラ』の二つを敎はつた。この方は半分は輪講風にやつたと思ふ。敎科書のゲーテなりニイチエなりは、何れも英譯であつた。『ファウスト』はエヴリマン叢書に收まつてゐるもの、『ツァラトウストラ』は英譯全集版から、紫紺といふか濃紺といふか、濃い碧色のクロース表紙の菊判の本であつたと思ふ。『ファウスト』は第一部だけであつたがニイチエは何うやら卒業したやうな記憶がある。然し少々アヤフヤだ。先生はいつも獨逸語の原本をもつて來て、英譯で解釋が十分につかないところがあると、その方をみて說明して下さつた。講義は深切で解說も丁寧で、その點はよかつた。獨逸留學中ニイチエの生家を訪うたお話、生家や生地の印象とニイチエの學說との對照など面白かつたといふ記憶がある。『ファウスト』の第一部の終りのところで、グレーチェンが「ハインリヒ！　ハインリヒ！」とよぶ、あの聲は「千年に一度きかれる聲だといふんですがね」と云つて、いつもの澁い笑ひを洩らされたのも、今にはつきりと覺えてゐる。た

だ解釋のはつきりしないところでは、例の愼重いやしくもせぬ態度で諄々と說明されるのだが、何でもはつきりした事の好きな學生達には、それがもどかしく思はれたらしい。わたしなども、「さうなのか、さうでないのか」、もう少し思ひきつてズバズバやつてのけても可かりさうなものだが、と思つたことが一度ならずあつた。

心理學で思ひ出すのは、いつかの試驗のことだ。何でもヴントの心理說と外に一題、二題きりだつたが、兎も角も書いて敎場から出た。出てから皆にきくと、可笑しいことには誰にきいてもその中の一題が正反對になつてゐる。これには皆があわてた。何しろ二題だけのことで、一題違ふと、點が半分になるのだから、あわてるのも無理がない。よくよく聞いてみると、先生の講義が、普通の講演流の講義と違つて、座談式であつたので、語尾が消えることが度々あつた。この問題の相違も、さういふ座談式講義の語尾の筆記の誤りから生じたものであることが分つた。

勿論その後、先生に何方が何うと伺ひもせぬので、この問題はイエスかノウか、いまだにそのまゝになつてゐる

文學史上の功績は、何といつても、日本の批評を、一種の應用美學といふところまで、高めたといふ點であらう。事實哲學者で文壇的知識を背景にして批評の筆をとる人は、先生の外にあまりなかつた。『藝術の本質』などは、日本人が書いた藝術論としては永久に殘るものゝ一つであらう。批評とし

ては、何れかといへば、第一期の早稲田文學のものが面白い、文章の齒切れもいゝし、態度にも覇氣があつて、讀んだ肌ざはりは後年のものとは大分違ふ。

眞面目で、ゴマかしがなく、手固い一方、華やかなるゼスチュアは一切抜き、從つて世間的人氣とか何とかいふものは考へたこともなかつたらしいが、然し恐らく「逍遙講座」の藝術哲學講義を擴大して最後の美學的、乃至藝術學的著作を遺して行かれるつもりではなかつたかと察せられるから、それだけは心を殘して逝かれたかと思ふ。つゝしんで合掌する次第である。(十二、六、四)

(昭和十二年七月號「早稲田文學」)

明治文壇・忘れられた人々

（昭和十年十二月十五日　明治文學談話會席上）

忘れられた人々を取り上げる理由

どうも態〻お集り下さいましたのに有益な纒つたお話が出來さうもありませぬ。それに忘れられない人を話すなら大に張合ひがあるのでありますが、今日は明治文學に關係のある人で既に忘れられてしまつた人に就てお話し致すのでありますから、どうも面白くないことゝ思ひますが、是から約一時間ばかりさういふ話にお耳を拜借いたしたい。忘れられない方の人に就ては皆樣平生色々御研究になつたり、文學史なんかで始終お讀になつて居るから、かういふ機會に忘れられた人のことを想起して載きたい。それが又自然忘れられない人への供養といふやうなことになるのであります。恰度年の暮も段々迫つて來、餘日もないといふ時に、非常に暢氣な話で甚だお氣の毒でありますけれども、暫く忘れられた人の方にお耳を拜借したいと思ひます。

評價の公平

大體文學史に限らず、歴史なるものは英雄崇拜主義で、偉い人のことは書くなと言つても、我も我もと言つて皆書くのですけれども、その時代、その人相應な貢献をしたのに比較的認められぬといふやうな人に關しては假令これを正しく認めて歴史上にもつて來ても、餘りパツとしないやうな傾向がある。隨てさういふ派手でないことは餘り誰もやりたがらない。さういふ傾向は文學史にも多分にあると思ひます。例へば夏目漱石、芥川龍之介などのことになると、非常に研究して仕甲斐があるやうな氣がして研究する。然し餘り大した人でもないと、どうもさう一生懸命に調べて見ても大した意味がないといふ風に考へられる。勿論これには材料とか機會とか色々の問題も混入して來るのでありますが、大體の考へとしてはさういふ傾向があるのではないかと思ひます。然し私は別にこの種の英雄崇拜主義を根本的に全部いかんといふのではありませぬ。歴史には評價といふものが入る以上は、大きい功績を立てた者が多く語られ、功績の少い者は少しゝか言はれないのは當り前でありませう。その際小さい方の功績が小さいなりにも小さくそれ相當に認められゝばよいのですが、全然認められない、全然忘れられてしまふ事が多いのであります。是は甚だ不公平でよくないと思ふ。例へば一の建

築を論ずる時、釘の功は釘だと認めればそれでよい。それはそれで立派な正しき認識である。所が釘の役をしてゐるのに、何の役すらもしてゐないかの如く見る場合が多いのであります。今申上げる英雄主義を極端に止めろとか、全然大家も小家も平等にしてどうとかいふのではないが、唯文學の方で言へば、所謂大家は、その功績を過大に認められ勝ちであるに反し、所謂無名の作家、中以下の作家といふやうな人は、その小さい功績を益々小さく認められる傾向がある。その邊の所を多少でも補ふことがかういふ機會にでも出來はしないかといふやうに思つて居るのであります。

文學者と環境

私は政治小說の專門家のやうに言はれて居りますが、その方面の人々を擧げると、忘れられた人は無數にありますけれども、それは餘り偏しますから、今省略致します。又政治小說といふやうな特殊なものになりますと、その小說に一種の目的をもつて居るのでありますから、その目的さへ達すれば忘れられてもよい譯です。隨てさういふやうな立場から政治小說の方の人は申上げませぬが、一般文學史的な立場から忘れたやうな人を二三申上げませう。

是は普通にあなた方の周圍の生活、吾々の周圍の生活から申しましても分ることですが、文學青年

といふものがあります、英國の文人の誰かゞ言つた言葉でありますが、「人間は一生の中で或る一時期だけは必ず天才である時期がある。」と言はれて居るのです。そこで私はこの天才的な時期が文學青年といふ言葉で現はれるのではないかと思ひます。それが將來文學者になるかならぬかは別として、兎に角非常に純な文學青年的な氣持が人間の一代の中の或る時期にあるのであつて、有ゆる意味で非常に天才的な時期と言ひ得られます。さうしてこの際環境に惠まれて文學者となる人はその才能を出し、なれぬ人はその才能を葬られてしまふ。さういふ風に葬られる人々も澤山居ります。

境遇に惠まれなかつた偉才

是は吾々の周圍の生活の中にも經驗することでありまして、例へば最近私は國劇向上會から賴まれまして、坪内先生の傳記を書いて居ります、その關係で色々調べて居るのですが、先生の非常に若い頃の友達でやはり文學青年が隨分あつたらしい。その中で先生が非常に感心して居る人が一人、二人ある。先生は名古屋の人と言はれて居るが、實際は美濃の人です。ところで同じ美濃の人に後藤齋吉といふ人があつた。この人は先生と同じやうに今の帝國大學の前身である開成學校に入りました。親父さんが醫者であつたらしく、どうしても醫者にするといふので、その方面に進みました。然し非常

に文學的な才能に富んで居つた。故八代海軍大將が坪内先生とは名古屋の學校時代から親友でありますが、後藤氏はこの八代さんの紹介で坪内先生と知り合ひになつた。この人のことを、文學にかけてはその頃稀に見る天才だと坪内先生は書いて居ります。それは此の人が十八九歳の時でした。先生は若し後藤が實際文學の方へ入つてゐたならば、新興文壇に於て非常な大立物になつたであらうとまで言つて居る。この人は十八歳の折に水滸傳風の小説を書いて、八代さんと坪内先生がそれを讀んで非常に感心した。然しどうしても文學者になることを許されないで、醫學部に進みましたが、途中病氣になり、色々面白くない爲か、結局中途退學して、田舍に歸り、當人としては極く詰らない田舍醫者みたいなことをしながら明治の末年に亡くなつたさうでありますが、斯ういふ人のことを考へて見ますと、そこに一寸したチャンス、環境といふものに惠まれてゐたならば、單なる文學青年でなしに、立派な文學者になれたことだらうと思ふ。

又高田早苗先生などが書いて居られるので名前だけは知られて居る人に丹乙馬といふ人がありますが、この人も文學の方の才能が非常に優れてゐて、殊に外國文學に對する理解にかけては實に立派なもので東京大學生中第一といふ程であつたが、やはり境遇に惠まれないで、文學の方に向はれず、後に横濱の領事館へ入り、到頭それなりで終つてしまつた。

赤井雄、伊豫の人だと思ひましたが、この人も坪内先生と同じやうに大學の文學部に入つたのです

が、非常に文才のある人で、開成學校の寄宿舍に居る頃廻覽雜誌を拵へた。その時に小說欄の受持は赤井雄で爲永春水張りの人情ものを非常によく書いた。そして坪内先生は赤井の小說の挿繪を描かされて居つた。この赤井も中途から家庭の事情で理學部へ行き、後横濱の正金銀行に入り、到頭この文學青年も文學者にならずに死んでしまつたといふやうに、斯うした例は隨分あるのであります。ですから何時か文壇の文人祭といふものがありましたが、今度は一つ文學青年祭をやつてやると隨分浮ばれる人があるのではないかと思ふ。私が金でもあればやりたいが、追々かういふ人を何十人か集め、何かの雜誌を借りてやつてもよいと思つて居ります。文學青年はその心には慾も得もない。これを書くと一枚十圓になる、二十圓になるとかなんといふことは少しも考へない。一文にならないことを承知で唯好きで好きで堪らないから書くといふのでありますから、實に純なものです。

和田竹秋、前田夏蔭、前田香雪

今までは文學的才能があつても出られなかつた人のことを一寸述べたのでありますが、次に本題に入つて文學史上でその名を忘れられて居る人のことを述べて見たいと思ひます。先づ第一番に和田竹秋であります。この人は著書は澤山ありませぬけれども、小說で『鴛鴦春話』(明治十一年)といふ明治

で一番最初　新しい型の小説を書いた人であります。それは單なる實錄ばかりでなしに兎に角創作です。文章はその頃非常に清新と言はれた『花柳春話』あたりの文章です。普通『世路日記』が新しい小説の最初と言はれるがこれは十五年に刊行され、完成したのは明治十七年ですから少々後になります。和田竹秋は名は瀧次郎．土佐の人でありますが、履歴は全然分りませぬ。私も少しこの人のことを調べたいと思つて居るのですが、どうも手掛りがない。その中何か出て來るかも知れません。唯さういふ人が明治の文壇で——文壇といふのも可笑しい位の時代ですが、最初に新しい小説を書いたといふことだけ注意して載きたいのであります。

それからずつと後二十年近くになりますと、饗庭篁村が出て來る、この人は文學史上にあつては非常に有名な人でしたが、それと同じ頃ですが、饗庭さんや、須藤南翠なんかの先生株にされて居つた人が二人ある。その中の一人は前田香雪（健次郎）で、最初の新聞小説「金之助の話」を書いたといふのは間違であるが、兎に角色々の小説を澤山書いて居る。この人の親父は前田夏蔭で、清水濱臣の弟子か何かぢやなかつたですか、非常に有名な人です。幕府の末井伊掃部頭が國學者達に廢帝の先例を調べさせたといふ噂が立つた。是は誤解から來て居るのですが、その結果塙保己一の孫か何かに當る塙次郎が九段あたりで殺されて居る。又勤王家である國家者鈴木重胤も誤解から殺されて居る。その點から見れば現代は大分よろしい。この重胤は、後に勤王家として從五位か、正五位を贈られて居る

が殺した人は伯爵とか侯爵とかになつた人もあらう、そこは甚だ矛盾したことになつて居りますが、鈴木に位をやるなら殺した者に罰を加へて行かなければならぬ。維新史上にも随分自分勝手な例が多いらしい。徳富さんの本にも出て來るが、例の十津川の義擧で名高い中山忠光卿は長州で殺されてゐる。さうして殺した人はその當時手柄顏に色々威張つてゐたのだから、人はよく分つてゐたらしい。然しあの方は、明治天皇の叔父御さんになるお方ですから、明治維新になると長州では非常に恐縮してこの事實を全部隱蔽してしまつて、誰が殺したか分らぬやうにしてあるといふことである、所が古い書物から色々調べて見ると大抵分つて居るさうです。その後忠光卿の神社が急に拵へられたが、その神主さんなどはこの事を非常に憤慨して代々の政府に責め立てたのださうですけれども、政府では狂人だといふことにして受付けなかつたさうです。さういふ譯で前田夏蔭も廢帝の例を調べたといふので狙はれたのですが、どうにか殺されずに濟んだ。然し是はあべこべの話なんで、朝廷と幕府がかういふ風に離れるのは非常に遺憾だといふので、公武合體の實を擧げるべく、それには先づ國學の方の研究からやらなければいかぬといふことを、井伊の懷刀で有名な長野主膳――是は相當な男で國學も和歌も出來るのでありますが、――この男の獻策に依つて、國學の學校を立て國學を振興させて以て朝廷と幕府の接近を圖るといふにあつた。それで塙次郎、鈴木重胤等といふ人々に命を下して、詰りさういふことを調べさして居つた。それを何故か祕密にやつてゐたので、一方から見れば、あゝ

いふ物騷な世の中であつたから、或は廢帝の例を調べさせて居るのだと考へられるのも無理のないことでせう。だから歷史は中々面倒です。

益々脫線しますが、例へば、孝明天皇がお薨くなりになつたのは、幕府が醫者を上げて毒を盛つたのだといふ。幕府の醫者の石川某が診てから間もなくお薨くなりになつて居るから、石川某が毒を盛つたのだらうといふ噂が傳はつて居る。所が明治になつてから、石川某が醫官になつた時、今の話が出たのですが、石川が云ふには、それは飛んでもない話である。自分は將軍から命を受け朝早くから起きて齋戒沐浴して、さて是から參內しようとする時に、只今御崩御になりましたといふ通知があつたので、自分は到頭參內も出來なかつたと言つてゐる。だから石川某は行つてゐないことになる。然し石川が行つて毒を差上げたのだらうといふので首を狙はれてゐた。かういふ點は歷史なんかといふものは非常にデリケートなものです。

さて前田夏蔭は非常に有名な學者でありましたが、その子の健次郎も亦非常な國學者で、早くから源氏物語等の講義の會などを開いて、高畠藍泉、饗庭篁村とかの連中を集めて講義をして居つた。種々の點でその頃の文學者には非常な影響を與へた人です。最初東京繪入に入り、その後繪入朝野といふ新聞の主筆になつてそこで非常に綺麗な古典的なよい文章で盛んに小說を書いて居ります。その中の一部分が後に春陽堂で出しました「小說萃錦」にあります。普通の本には「華錦」となつてゐるが、

あれは間違です。あの中に二三入つて居ります。非常に面白いものです。饗庭篁村はよく其積の衣鉢を受けたと言はれるが、寧ろ前田香雪のさういふ風な新しい意味の叙事の系統を受けて居る。又今日まだ現存の三品蘭溪（昭和十二年歿）といふ人は高畠藍泉の門人であるが、寧ろ前田さんの方を先生と言つて居る。兎に角當時の文壇に對して非常に大きな勢力をもつてゐた人です。それが唯文學を職業にしなかつたといふだけで、文學史には殆ど名前も何も書かれてゐない。前田さんはあの頃は全く大家扱ひにされてゐて、坪内先生も初めは前田さんに原稿を頼んで買つて貰つた位です。勿論この人は後に美術學校の圖案か考證かの先生になりましたから、物質的には別に困りは致しませぬでした。

小宮山桂介

それから前田さんと同じ頃やはり篁村とか南翠とかに先輩視されてゐた人に、例の小宮山桂介（卽眞又天香）といふ人がありまして、これ又文學的に非常な勢力をもち、尊敬されてゐました。水戸の人で藤田東湖の先輩の有名な小宮山楓軒の孫に當ります。無論國學も出來、漢學も出來、文章は擬古的な文章で以て新聞の論説から小説に至るまで自由に且つ美事に書いた。數は少ないが飜譯もあります。この人も立派に小説家の方からは先生株、兄貴株にされてゐました。然し小説の數は餘り多くあ

りませぬ。小說として一寸纏つた大きなものに『聯島大王』がある。是は明治二十年頃我國の國力が充實して來て、餘剩の國力を大陸に向けて發展するか、或は南洋の方へ向つて進出するかに迷つてゐた頃、南洋發展の熱が國民の間に相當强くなつて來ました、その傾向を現はしたのがこの『聯島大王』といふ小說なのであります。壯士がボロ汽船を買つて南洋貿易をやり、巨利を得同時に無人島か何かを發見して王になるといふ內容で空想的な物であるが、書き方は實際らしく書いてある。南翠も『朝日の旗風』といふのを書いて居るが、是は小宮山氏の作に比較すると割に下手です。それからもう一つ有名なのが『看護婦人』で、明治七年の臺灣征伐のことを材料にして書いて居る。卽ち臺灣で日本婦人が活躍するといふことを書いて居るが、この小說も一寸面白いものです。この人は、新聞記者としても非常に偉い人でありまして、今の東京朝日があの位大きくなる基礎を築いた人です。隨て死んだ村山龍平なども非常に尊敬して措かなかつたといふことであります。後に小宮山さんに頭を抑へられて困つてゐた記者達が、小宮山さんを怒らして無理にゐなくなるやう仕向けたのださうで、それ以後小宮山さんは世の中から隱れまして、所謂陋巷に住み風月を樂しんで昭和五年に亡くなりました。杉浦重剛さんは非常な親友で、よくその住居を訪ねたが、御飯時になつてもお通しするものがなく、もり蕎麥を取つて二人で食べ合つたといふことです。この人は歌は勿論漢詩も非常に上手、それから隨筆も非常にうまい。だからその頃の文壇勢力から言へば、文學史で多少の頁が割かれてよい筈である

が、別に名前も載つて居りませぬ。

日置海鶴

是までは文壇から言へば老大家と言はれる方の人ですが、若手の所謂新進作家のやうな人では日置海鶴（政太郎）があります。出生ははつきりしないが、富山縣出、學校は中村敬宇の同人社で英語を學び、更に大學の古典講習科で學んで卒業して居ります。都新聞の主筆となり新聞小說を書いた。所が非常な傑作で、而も突然デビューしたので皆驚いた。それでその頃大阪每日新聞で改革があり、渡邊治といふ人が、その改革に當つて居りますが、どうしてもこれを改革するには文藝新聞にしないと駄目だといふので、色々文藝新聞にするプランを立ててゐる。その中に若手で現代小說を書く者は日置海鶴の外にないと言つて居ります。是程當時重く見られてゐたのですが、二十二年か三年に肺病で死んで居ります。隨て作品も本になつたものが一つか二つしかない。今記憶して居るのに『大和撫子』『海島王』があります。この人はやはり古典講習科を出て居る位ですから、文章が非常に上品でうまい。それに觀點も多少新しい。全體としてはその頃の才子佳人小說ですが、一寸讀むと何か知らぬ新しい印象を與へるやうな小說を書く人です。然しこの人は若くて死んだ人でありますから、文學史な

どで取上げないのも無理はないのですけれども、兎に角一時大にもてはやされたといふことだけ御記憶を願ひます。

中村雪後と本吉欠伸

硯友社からは随分澤山の新進が出て居るが、その中で中村雪後（名は壯）は、普通の小説はさう大したものではないが、探偵小説を書いた先驅者として大衆文學の歴史を調べる人の先づ擧げなければならぬ人であります。然しよく探偵小説の歴史なんか書かれたものを見ても、この中村雪後のことなんか何にも知らないと見えて載つて居りませぬ。この人は又花痩と號してゐましたが、それには一挿話があります。當時紅葉館には京都から連れて來た有名な美人女中が多く居つた。今日で言へば女給と藝者の合の子のやうなサービスをして居つたのでありますが、文學者は勿論政治家も所謂この美人女中を目指して皆ワンサ〳〵と押掛けて行き、銘々勝手に相手を見立てゝ熱を吹いてゐたものであります。その中にお花といふのがゐて、このお花を紅葉は非常に好きであつて、お花を思つて痩せると言つてゐた。所がその後金のある實力派にお花を取られたので、大に憤慨していふ所から自ら花痩と言つてゐた。中村は喜んで花痩と言つた。同人中で以後花痩なんといふ號はつけず、これを中村にやつたのです。

も譯を知つてゐた人々は笑つてゐたさうでした。後或る事件で入牢したり、又此の紅葉一件が分つたりしたので、この恥を雪ぐといふ意味で、今度は雪後とつけ變へたのです。

それから、堺枯川の兄の本吉欠伸ですが、碎けた文章には欠伸生としてあります。關西の文壇で相當有望な若手で、一時は紅葉露伴の長を合せたといふ程の評判となつた人であります。『むら雲』『幻』その他澤山の面白い小説を書いて居る。紅露の長を合せたかどうかは兎も角として二十一二の青年が書いたものとしては仲々立派だと思はれる程の小説を書いて居ります。唯非常に酒を飲んで放蕩してしやうがなく、遂に東京へ流れて來て、新聞記者として小説を書いて居りましたが、日清戰爭後に三十何歲で死にました。

宇田川文海、淡島寒月

この本吉欠伸は關西の文壇人ですが、總體に關西文壇は文學史的に非常に不遇です。例へば宇田川文海は南翠、篁村と較べて決して遜色のない、寧ろ先輩株になるでせう。それから文海の門下の岡野半牧、槇野半醉、是は皆半がつきますが、文海は半痴とも號してゐた所からして、皆半をつけてゐるのです。さういふ連中は硯友社その他が段々頭を出して來るに從つて驅逐されたのですが、その前には

相當勢力をもつて居つた。岡野半牧の息子さんの岡野養之助氏は大阪朝日で今幹部級の所に居る人であります が、兎に角大阪文壇は總體に明治文學史から非常に虐遇されて居るといふことは大に訂正の必要があると思ひます。

それから最後に淡島寒月、この人は西鶴の紹介者としては非常に有名であつて、西鶴張りの『百美人』といふ小說を書いて居る 百人は書かなかつたけれども、）この人は西鶴張りの文章を書いて居る點から、何か國粹保守的の人のやうに誤解されて居りますが、實際は非常なハイカラ好きな人で、西鶴を調べたのも、西鶴には非常なエキゾチシズムな所があつて、阿蘭陀西鶴と言はれた、その西鶴が好きであつたからです。さうして結局西鶴の俘虜となり、木乃伊取りが木乃伊になつたやうに、西鶴の研究に入つてしまつたのであります。彼は初めから珍しいものゝ好きな人で、所謂國文學好きな人ではなかつた。又基督教をも信心して居る。さうかと思ふと禪宗の坊さんについて何處へでも出掛けるといふ非常に自由な人です。この人が『馬加物語』を書いて居ることは餘り知られて居りませぬ。馬加は千葉縣にある土地で、八犬傳の中にも馬加大膳といふのがあるが、その馬加です。その『馬加物語』は非常に面白い小說でありまして、馬加の田舍の敎會の留守番をしてゐた時の色々な周圍の見聞を書いたものであるが、その中に前に宣敎師としてそこに來てゐたミス・ジョンソンといふ瑞典生れの西洋人のことが出て來る。そしてその西洋人が如何にあゝいふ田舍で——今日では多少開けて居る

が、その頃は酷い田舍であつた―如何に傳道の爲めに苦しんだかといふこと、その後ミス・ジョンソンが日本を去つてシカゴで病死したのでありますが、死ぬ前に手紙を寄越して自分は死の床でも馬加で敎へた頑童達を想起し、涙を浮べて神樣に祈つたといふ、さういふやうなことを書いて居るが、如何にもハイカラ寒月らしい小說だと思ひます。是は新小說に載つて居るから一邊讀んで御覽なさい。明治三十四年か、五年までは行つてゐない、その頃のもので、又長くはない。あの頃の小說としては文章も面白いし、如何にも外國趣味といふ風な寒月の本領を出した小說として、是非一見すべきものであらうと思ひます。

まだ擧げれば無數にありますが、さう大した人でもないのを矢鱈に竝べ立てては時間の際限がなくならうかと思ひますから、此の度はこれ位に致して置きます。(拍手)。

「西洋雜誌」と鳥山啓といふ人

一

「西洋雜誌」といふと、直ぐ柳河春三の西洋雜誌を聯想させさうであるが、これは、全然別の「西洋雜誌」で、鳥山啓の纂輯に成るものである。柳河の西洋雜誌よりもズツと後の、明治六年（紀元二千五百三十三年）の刊行であるが、珍らしい點では、この方が珍らしく、品もずつと少ないらしい。只今のところ、私は自藏本以外に所藏してゐる人を知らない。柳河のも完全に揃つたものは、勿論さうザラにあるものではないが、往々所藏の聲を聞くし、又古書目錄などにも見受けることがある。だが鳥山啓の「西洋雜誌」の方は、まだ何處の古書目錄にも見かけたことがないやうに思ふ。

先日書齋を片づけてゐるうち、久しぶりでこの雜誌を手にしたが、その時、ふと忘れないうちに、この雜誌と、纂輯者の鳥山啓のことを一寸書きつけて置かうと思つた。ところでこの暑いのに、勉强して敢て一文を草したわけである。

二

此の「西洋雜誌」は、雜誌とはいひ條、いはば纂輯者鳥山氏の讀書雜記といふ體裁のもので、その事は凡例に見る鳥山氏の言で知られる。

此書は余洋藉を讀む間に心のとまる條々を拔出でたるが已に一小册子ともなしつべき程になりければ書肆の謂ふにまかせて之を櫻板に上したり猶第二集第三集と相續ぎて刊行に及ばんとす。

第二集第三集は、卷末の豫告に見えるが、これはつひぞ見たことがない。恐らく出來なかつたものではなからうか。この種のものについては一概に斷言が出來ぬが、第一集さへかう稀本になつてゐる位ゐであるから、二集三集とも刊行を疑問とするが當然であらう。

書友社藏版とあるが、此の書友社とは中川藤四郎、中西嘉助といふ二軒の本屋の合同社名である。何うも京都か大阪か、あの邊の本屋らしいが、餘り聞いたことがない。奥附に、飾磨（しかま）縣御用上木所小川金助とあるが、これは書友社と何ういふ關係になるのか、これはたゞ印刷製本だけを引き受けた男か。卷中の挿繪は、松川半山、彫工は由良重兵衛（京都の人）とある。

第一集、序二葉、播磨の人八木貢といふ人の序であるが、別にこれといふ程の見識もない。次に凡

例、目錄、各一葉づつ、本文二十一葉、だが、凡例から丁附がしてある、外に奥附二葉ある。每頁九行、一行十三字詰、木版の文字は、漢字は楷書であるが、假名は變體の行體に近いものを用ひてある。これも此の頃のものとしては普通である。

目錄は、——

天體の名義
西洋十二月の名義
紙書物等の名義
トレードウインドの名義
スノードロップの事
ユーニコルンの事
各國の古傳并土人未來想像の事
人幼稚より絕て人間に交らざれば智力少しも增さざる事
西洋の女子胸部細小なる事
萬國言語の事
西洋文字の事

西洋にて啞者或は聾者に文字を知らする手様の事

洋詩の事

本文二十一葉に十三項の記事があり、多少の挿繪が加はつてゐるのであるから、一項の記事の長さも略ぼ推測されるであらう。最後の「洋詩の事」は、西洋の詩の韻律を論じたものであるが、私がこの雜誌を比較的高價に買つたのも、この一項がある爲めであつた。こゝには、詩祖ホメルの像と稱して、十六七世紀あたりの文人か學者の肖像が木版彫刻で入つてゐるが、まことにお愛嬌である。斷つて置くが、西洋の詩の韻律を說いたのは、此の「西洋雜誌」の記事が最初ではない。もつと早くから、それがあり、而かも一二にして止まらない。

三

「西洋雜誌」の纂輯者たる鳥山啓のことを簡單に書いて置く。もつとも簡單に書くだけの材料しかないのである。

鳥山啓は、和歌山縣の人といふ。何ういふ學問をした人か只今のところは私は殆んど知らぬのであるが、國學和歌にも秀で、洋學も出來、博物學にも達し、文章をも書いた人だといふことは、その一

生の仕事から推測される。彼をたゞの歌人とか國學者と見るのは間違ひで、寧ろ明治初期によくある啓蒙學者の一人といつた方がよろしい。現に彼の著として『究理問答』(明治五年)、『窮理早合點』といふものがあり、又譯書に、『天然地理學』といふものが見える(十五年)。その他にも、この種の啓蒙的雜著がまだまだあるらしい。

最初は教師か官吏であつたらしいが、明治二十一年には華族女學校教授になつた。華族女學校では何を教へたものか、恐らく博物地理の類ひではなかつたらうか。下田歌子の日記をみると女史やその他の人々と鹽原に紅葉見になど出かけて歌をよんでゐる。歌といへば今日よく唱はれてゐる軍艦マーチの歌詞「守るも攻るも鐵の、浮べる城ぞたのみなる」といふのは、この鳥山啓の作と聞く。眞下飛泉が「ここはお國」で碑を建てられる今日だから「守るも攻るも」の作詞者にも何かあつていゝのだが、この方は一向誰も何ともいはない。知つていはないのか、知らずに默つてゐるのか、恐らく知らないものであらう。三十九年、華族女學校が廢されて學習院女學部となるに及んで、退官した。

大正三年二月二十八日歿す。死亡廣告には從五位勳五等とあるが、これは、華族女學校時代の功勞に對する報酬であらう。

附言。鳥山氏の名の啓は、普通ケイとのみいつてゐるが、下田女史は、はつきり「ヒラク」とよんでゐる。この方が正しい訓み方なのかも知れない。（昭和十二年九月號「書物展望」）

高畠藍泉傳

一　明治文壇と高畠藍泉

明治最初の文壇小說家は高畠藍泉だ。

これは一つの結論である、私が相當長い時間をかけて藍泉のことを調べた結果到達した一つの結論である。それを今この研究の前置に借りるのだが、それには一寸簡單に說明を加へて置く。

從來の文學史では藍泉は所謂幕末遺老の小說家の一人にされてゐるが、これは研究疏漏の致すところの間違ひで、私の調べによると藍泉が文壇の人となつたのは、明治十年前後からのことである。卽ち幕末遺老の間に伍してはゐたが、明かに明治文壇になつてから小說家になつた人で、而かもその點で藍泉程早く明治文壇にデビューした人は、今のところ見當らない。これ卽ち冒頭の如き結論のある所以であり、又明治小說研究に先づ藍泉硏究を必要なりとする第一の理由でもある。

從來明治初期の代表的作家小說家といへば、爲永春水といひ、萬亭應賀といひ、條野採菊といひ、假名垣魯文といふが、藍泉を擧げて答へる人は少ない。然し此等の幕末文學界の遺老は要するに遺老

であつて（その點で又それだけの研究價値はあるが）魯文以外代表的の名に値しない。然しその魯文も明治七八年頃までは代表的といひ得るが、それ以後は文壇の第一線から引退つた形である、春水、採菊も同樣に先づ隱居と見て可い。應賀に至つてはいふまでもない。元來明治文壇が、幕末の大破壞の後兎もかくも見られるやうに步調の整つて來るのは、明治十年以後である。明治十年前後から、十六七年、南翠、篁村の擡頭となり、春の屋朧の出現となるに及んで明治の新興文學の基礎が定まるとされるのは、いつもいはれる通りであるが、明治十年以後、南翠篁村の擡頭まで明治文壇の代表的作家たる位地を占めるものは、高畠藍泉である。藍泉の明治初期文壇に於ける位地は決して輕いものではない。これ、私が藍泉研究を必要とする第二の理由である。

藍泉をもつて明治十年以後の文壇文學の代表的作家と見るのは、一時の思ひ附きや妄斷によるものではない、種々私の調べた結果からいふのだが、先輩諸氏にも旣に此の論がある、內田不知庵の『現代文學』（明治二十四年十一月——二十五年一月「國民之友」）は明治文學史論として最も早いものゝ一つであり同時に最も注目すべきものゝ一つであるが、その第四に明治十年以後の文壇を語つていふ——

當時の小說に到つては、其作家素より馬琴種彥等の餘唾を舐つて滿足せしなれば評せざるも其價値を知るに容易ならむ。其壇上に立つて隱然盟主の位置を保ちしものを高畠種彥とす。假名垣の花やかなりしも野分に吹かれて倒るゝの姿を現したりき。

尙ほ伊原靑々園氏の回顧的文章の中にも、略ぼ同樣な記事があつたと思ふ。今そのノートを散佚さしてこゝに引用出來ないのは遺憾である。

藍泉等の代表する文壇文學は、幕末以來の通語によつて戯作といはれてゐるが、これは創作態度の上からさういはれるので、內容的にはいはゆる戯作とは違つた、明治新興文學に先行するだけの幾分の新し味をもつてゐる、これを最も的確につかむには藍泉のいはゆる戯作小說を調べるのが便利である。これ、私が藍泉研究を必要とする第三の理由である。

明治文壇の生長はジャーナリズムの發達と相俟つところがあつたのは、今更いふまでもないが、藍泉自身、時代の最も有力なジャーナリストの一人であり、明治文壇とジャーナリズムとを密接せしめる契機として相當大きく役立つたと考へられる、私は必らずしもこれをもつて藍泉研究を必要とする第四の理由とせぬが、この事實は藍泉の明治文壇に於ける輕からぬ位地を語るものとして、指摘して置きたい。

二　藍泉傳の筋書

前置の次に傳記を述べる、その次に作品を解題するとなると、いさゝか陳腐の臭味がつくかも知れ

ぬが、研究報告としては止むを得ない獻立である。以下それに從つて傳記を語るのであるが、これは叙述の簡潔を期する上から、大體年譜風の筋書にしたい。筋書といつても事實の精確は期するが、必要のない箇所には考證めいた長文句を避けることにしよう。

天保九年（西紀一八三八年）

五月十二日、高畠藍泉、江戸淺草元鳥越の地に生る（註）。

父母　父は高畠求伴、母は金子氏、醫師金子長圓の女。高畠家は世々幕府のお坊主衆で御本丸奥勤といふ役であつた。求伴、文學の嗜みあり、俳句を能くし、一葉舍蓮雨と號した。文久三年歿。

兄弟　求伴三子一女あり、長は金座役人辻氏を繼ぎ、傳右衞門高直といふ（傳說）。次は女子でおいく、お坊主仲間の鈴木宗林に嫁す。次は卽ち藍泉である。弟一人あり、友吉といふ。

本名　初名は瓶三郎、諱は直吉。家督後に求德と改む。慶應の末年更に政と稱す。明治五年の布令以後、畫號の藍泉を通稱とした。

號　藍泉が初め畫號であつたことは上記の如し。別に一葉舍、甘々坊、甘阿、凹得、紫翠山房等の號がある。又明治の初め轉思堂と戯號し、轉々堂と改め、久しく轉々堂藍泉と號した。明治十五年一月柳亭種彥の戯作名を嗣ぐと共に、愛雀軒、足薪翁等の別號をも襲うた（足薪翁は前

から使用）。最も晩年に聽香樓主人と號したことがある。

天保十三年　此の年藍泉五歳

「五六歳の頃より和漢の小說稗史を好み雜書は觀ざるものなく」（岡田龍吟「三世柳亭種彥傳」）

「野生は幼かりしより四條派風の畫を好みて米澤の人高橋波藍翁の門に入りて描き畫學の修業中呉景文が花鳥を殊更に愛で」云々（十六年三月二日東京繪入、藍泉自記）

「四條風の畫を學び後に南宗の繪に移る」（「三世柳亭種彥傳」）

安政元年　此の歳藍泉十七歳

此の頃柳亭種彥の作を眞似て戲作物語二部作る、（一部は上中下三冊物、一部は上下二冊物）。これは挿繪文章とも藍泉の手に成つたものであつた。（遺族金子益三氏談話、それは大正十二年九月一日の震火災で燒失す）。

安政四年――文久二年　藍泉二十歳――二十五歳

「壯年に至りて戲文を草し云々茶は谷村氏が直指傳の門下俳諧は其角堂の高弟にして一方の英傑たり常に風月を愛すれども閑のみに偏せず客に接することを好みければ雅友其門戶を訪ひ音信る者絕ず頗智秀才にして幕政の末路辻某が發起にて興畫合せといふ事江戶市中に流行し市井の才子爭ふて此連中に加はれり翁（藍泉）も又此道に遊び興畫の趣向意表に出で高點を得て連

中の人々を驚かせり」（岡田龍吟「三世柳亭種彥傳」）

右の文中谷村氏云々は幕府の茶坊主谷村家でつまり、彼の竹馬の友たる谷村春育卽ち後の南新二の家を指す。

「演劇を好み花柳に沈醉す」（隅田了古「新聞記者奇行傳」）

文久三年　此の年藍泉二十六歲

父求伴歿す、辭世の句に曰く

飮喰ひのかぎりや腹もくされ市

藍泉家督を襲ぐ、求德と改名せしはこの際か。又幕府の士で普請作事方に關係のあつた三里金次郞の女うらと婚したのも此の前後か（子なし）。

「所謂務め嫌ひにして遊蕩怠惰いふべからず、故に同僚親戚に疎まるれども更に意とせず」云云（「新聞記者奇行傳」）

此の「務め嫌ひ」は、然し藍泉の神經質な、意地の强い、負け嫌ひな、人間的氣骨を多分にもつたその性格からも來てゐたらしい。お坊主なんて、目に見えない金はもうかるが、頭をぺこぺこ下げてゐなくてはならない、おれはそいつが大の嫌ひだつたと後々までいつてゐたといふ（金子益三氏談）。

慶應元年　藍泉二十八歳

「慶應の初畫工となつて力食せんと實弟（友吉）に家を繼がしめ壯年にして隱遁す」（「新聞記者奇行傳」）

明治元年　藍泉三十一歳

此の前々年前から天下が次第に騷々しく幕府も瓦解に迫つて來たので、流石お坊主くずれの藍泉も血性多感の身が繪筆をもつて濟して居れず、多少幕府のため奔走するところがあつた。

「戊辰の役佐幕の士東北に脫して官軍に抗戰せんと欲すれども銃器に乏し時に君憤然として起つて名を政と改め陸軍奉行松平太郎君と謀り單身四方に馳て御用達たる者を說諭し巨萬の金額を募集するに毫も暴言剛强の氣を顯さず却つて渠等をして落涙せしむ」（「新聞記者奇行傳」）

此の時に彼の風雅の友に富豪が多かつたことが、大に役立つたものらしい。

「銃砲を函館へ廻漕せしが諸道の脫兵潰るゝと聞きて大に落膽し再び畫工となつて諸方を遊歷す」（「新聞記者奇行傳」）

事實は諸道の幕兵が降伏したので、藍泉は一時身の置處を失ひ、上總地方へ逃れたのである。この上總地方の漂泊生活が何れだけ續いたものか知れぬが、隨分辛い目をみたといふ。自作の半折とか扇面とかを路傍で賣つたり、又見物の前で注文をうけ、卽座に繪を描いてそれに贊な

り語なりを書き加へ、僅かに一枚一二錢に代へたりして生命をつないだといふ。（歌川國松氏書翰）。

明治二年　春頃江戸に歸る。始め兩國藥研堀に居り、後金杉村に移る。畫技によつて生活す。主として横濱の知人に頼まれて外人向輸出の扇面や團扇の繪を數でこなして描いてゐたのである。窮乏甚しく、或は萬八樓で書畫會を開き、又妻女に俄天麩羅店を開業させて生活の資を補つたといふ、（金子氏及び三品蘭溪氏談話）

明治三年　金杉村にあつて依然畫工として生活す。此の頃の號は轉思堂藍泉である。

「風雅でもなく洒落でもなく詮方なしの侘住居に描き畫を以て營業とし諸君の愛顧を蒙りぬ」（藍泉著『蝶鳥筑波裾模様』）

貧乏なことも依然たるもので、夏など一枚きりの浴衣を洗濯すると、それの乾くまで裸體でゐた程であつたといふ。この時隣家に上野宮家の士堀内要三郎がゐたが、この人の二男益三が貰はれて藍泉の母方金子氏を嗣いだ、（益三氏昭和十二年夏歿）。

藍泉はこの前後何の縁故か知らぬが、畫技か鑑定かのことで、維新の元勳木戸孝允の知遇を得ることになつたらしい。

此の年閏十月弟友吉死去。是れより先き友吉はお坊主から撒兵隊組か何かに入り、德川家靜岡

へ移封の時これに從ひ、馬廻りを勤めてゐた。それが時疫のため沼津にて死去したのである。藍泉夫妻は沼津に赴いて弟の死後の始末をし、舊幕府の玉藥奉行間宮將監の三男三男三郎を貰つて高畠の家を繼がしめ、瓶三郎の名を襲はしめた。藍泉夫妻はそのまゝ沼津に隱遁生活をすることに定め、茶道や發句の宗匠をしたり畫を描いたりしてのんきに暮す。これが明治三年より四年、五年に及ぶ。

明治五年　三月東京日々新聞創刊、藍泉沼津より上京、日々新聞の記者となる。發起人にその舊友が多かつたので引出されたといふが、彼の兄辻傳右衛門が日々の株主の一人りであつたことが與つて力があるといふ。これで藍泉はやゝ生活の安定を得、畫工としての足を洗つて文筆の天分を發揮する機會を得たのである。

この頃から轉々堂主人と號す。始め淺草の正定寺、次に了泉寺、それから三筋町と轉々移居したからといはれてゐるが、事實は藍泉が平生至つて子供好きなところから子供のデンデン太鼓の音（テンテンドンドン）になぞらへたもので、（金子益三氏談話）、現に新聞の投書や錦繪類の書入れ文句などに轉々堂鈍々と署名をしたのが幾らも見える。

明治七年　この大久保利通が臺灣事件の善後處置のため支那へ行き、兎もかくも支那と談判して償日々新聞に執筆の他に、横濱毎日、讀賣、郵便報知などの投書家として文名を馳せる。

金五十萬兩を取つて歸つたので大人氣であつた。藍泉はこの事件について昔の吉備大臣の事績を假りて趣向を案じ、新聞に投書したところ、河竹新七（古河默阿彌）がこれによつて「吉備大臣支那譚」を書き下ろし、大當りをとつたといふ。錦繪類の書入れも內職として盛んにやつた。揃つたものに「英名二十八衆句」、「競勢醉虎傳」、「東京日々新聞」、その他の新聞錦繪、「見立たいづくし」、「見立橋づくし」、少し遲れて「新柳二十四時」、「機嫌くらべ」、「皇國二十四功」その他一枚物二枚物三枚物等片々たるものは數へ切れぬ程多い。彼はこの錦繪の書入れ文句では初代花笠文京に服してゐたといふ。

明治八年　一月、東京日々に「社友藍泉より」とあり、既に閑職にもあるもの丶如し。四月「平假名繪入新聞」創刊。落合芳幾が社主でいはゞ東京日々の子分新聞とも見るべきもの。藍泉はこれに關係し、編輯長となる。彼の舊友前田夏繁（健次郎。號香雪）を推薦して入社せしめた。

「這回銀座一丁目拾番地ニ於テ平假名繪入新聞社ヲ設ケ名義ノ如ク專ラ平假名ニテ綴リ總テ耳遠キ發語ヲ用ヒズ平坦簡易ヲ要シ且ツ理會シ易クシテ餘興アラン樣ニ每號繪入リトシ勉メテ幼童婦女ノ覽ニ供セント做ス由則開社ヲ自祝シテ第一號ヨリ第三號マデ弊社愛顧ノ諸看官へ無賃ニテ晋呈シテ閱ヲ賜ランコトヲ托セラル何卒眷愛ヲ賜リ引續キ御求メ御子樣方ノ遊嬉ノ餘閑ニ備エラレナハ無稽ノ稗史等ニ勝ルコト萬々ナルヘシ弊社モ亦附托ノ意ニ負カズ感謝ニ堪ヘズ候

仍テ廣告候也

但本月（四月）十七日發兌候事　日報社」（八年四月十六日、東京日々廣告）

この頃の藍泉の新聞記者としての人氣は次の寄書（讀賣新聞、二三一號、八年十月二十五日）で知られやう。

「是はおめでたいお產が有りましてしかも三人とも男のお兒で夫はそれ梅松櫻の三ツ揃ひ、彼の八葉の御車も、引けは取らぬと三人が心合せて世の中の、人の開くも朝夕に、心筑紫の筆の先、千里の外へ響かする。其兄弟の虎の門、松の操の住吉か、貴賤上下の讀賣は、正雄かならで國へ忠、中の兄には四方八方へ光り輝く銀座町、繪に各國の珍說や、よい評判の高畠、ご藍泉かと讀む紙も、飛んだ一夜の梅王に、のつと生れる三番目、小春に花の返りざき、名も假名讀の新聞紙、薰も香ほる櫻丸、車も橫に橫濱で、當り外さぬ神奈垣が、假名のかの字の角立てず、丸く書出す一ト趣向手習鑑の敎訓を、三人兄弟むつまじく、ともに力を盡されて、世に澤山な涎ぐり、夫を開化へ導いていづれおとらぬ本舞臺、片眼千兩鈴木田と、また高畠假名垣が一番威張つて世の中を眼あきの世界に賴みます。

紙は賣れ話は絕ぬ世の中に何とて人は買はなかるらん

「重寶よろこべ御布令がおやくに立たぞやイ

横濱出生當時は琴平町住居銀二郎」（岸田吟香か）

だが藍泉は編輯方針のことで社主芳幾と意見の扞格を來したので（思ふに藍泉の開化主義と芳幾の守舊主義との衝突）、十二月退社、直ちに讀賣新聞へ轉じた。繪入の方へは藍泉の代りに染崎延房即ち二世爲永春水が入社。

「繪入の高畠さんは是れまでの美事な筆さきで當社の編輯をお助け下さります」（讀賣新聞、二、八二號八年十二月三十日）

明治九年　一月四日讀賣新聞二八三號に正式に藍泉入社の辭あり、「鈴木田に誘はれて」云々。

四月、藍泉は鈴木田正雄と議して、自ら編輯長となり、同じ日就社から「小學雜誌」を刊行。名は雜誌といふも事實は隔日出版の小學生新聞である。藍泉は自作の改良手まり歌を載せたりなどして大分熱心に盡力した。

「此は幼童に學業を進むるを專らとして各地學校試驗の節々及第生徒の姓名年齡を揭げ其他雜記投書の類に至るまで敎訓の一端となるべき事を平假名の俗文にて解り安く記したる小學生徒の玩弄物なれば必ず御購求併せて美事を報知し賜はんことを冀ふ」（東京繪入、一二五〇號廣告、九年四月二十二日）

六月二十八日の有名な新聞施餓鬼には讀賣新聞を代表して出席す。

十一月（十一日）南新二、高橋（後に鈴木）得知等の友人と通三丁目壽屋に書畫古器玩弄會を催す。

明治十年　五月「小學雜誌」一六二號にて廢刊。藍泉はこれと同時か、これより後間もなく讀賣新聞を退社す。

十一月、獨力で「東京每夕新聞」創刊（日昌社）。

「高畠藍泉先生が東京每夕新聞といふのを近日發兌されますとの事是は其日の事を其日の中に記載せて配達されるのださうですが斯ういふ早いのは實に無類飛切でありませう」（東京繪入、七二一號、十年十一月八日）

「東京每夕新聞發行

〇一枚一錢〇一ヶ月卄錢〇三ヶ月五十錢

西洋のエブニングニュースに倣ひ御布達諸相場面白きはなしとも其日に聞込たる事を記載して每夕配達仕候間御愛顧奉希上候也

東京銀座四丁目壹番地　日昌社」

（東京繪入、七二二號廣告、十年十一月九日）

此の新聞は、時代の先驅的試みの運命に背かず、經營不如意で數ケ月で藍泉の手を離れ、翌年

六月「眞砂新聞」と改題されて普通の新聞となつてしまつたといふが（外骨氏新聞年表）、然し日本に於ける夕刊新聞の嚆矢として日本新聞史上に特筆すべきものであるといふ。それだけ藍泉の新聞記者としての着眼も時俗を拔いてゐたと見える。

明治十一年　四月下阪、大阪新聞に入社。

「今度弊社におゐて有名なる東京の高畠藍泉先生を招聘し昨日已に着阪になりましたから以來は筆を執つて編輯に從事せられますれば猶一層の御贔負あらんことを希望す」（大阪新聞、一五八號、十一年四月十三日雜報）

而かも當時の入社祝文に「東京に雷鳴も高畠なる」とか「名に高畠」云々とかあるを見れば、名記者としての名聲漸く籍甚なるものありしならんか。着阪早々肺炎を病み、十餘日病床に呻吟す。

元來此の行は大阪新聞入社が目的ではなく、折柄京都に西京博覽會があつたので「東京毎夕」の失敗慰藉を兼ねて上京見物にでかけたところ、舊友宇田川文海が大阪新聞を主宰してゐて是非助勢せよといふので、滯在費稼ぎかたがた入社となつたものである。從つて一應の見物がすむや、さつさと歸京した。

七月、「東京曙新聞」に入社し、印刷人に署名す。

此の年より芳譚雜誌に寄稿、この雜誌は次第に彼と縁の深いものとなり、後に柳亭派の機關紙の如くなる。

明治十二年　一月より九月迄、印刷人の署名あり、十月曙新聞改號より署名なし。然し在社は確實である。此の年五月刊行の「月とスッポンチ」第二十九號に東京諸新聞社の名譽七福人といふものを掲げてあるが「東京曙新聞社高畠藍泉」とある。

此の年よりして彼の所謂戲作小說が續々單行本となる、小說作家としても名聲が定まつて來たものであらう。

明治十三年　一月より三四月迄曙在社。

一月六日の曉新聞に、關新吾から古鏃を貰つたのを謝する藍泉の詩が見える。拙いものだが見本として左に出す。

折鏃依然銹未磨。稜々古色時人多。
新年剩喜歸吾手。捧向春風代破魔。

四月「妙法新誌」を編輯すといふ。この前後曙新聞を退社か。

八月「讀賣新聞」へ再入社、印刷長と署名す。同新聞一六六六號（八月七日）に「歸社の辭」あり。

「（中略）小生も本社の編輯に從事して幸ひに諸君の愛顧を蒙りしが蘆かちる浪花の友に招かれ新聞編輯のいとまに畿內の名所を見巡らんとて本社を辭ひ去たる後今はや思へば五年を過ぬ云云今や本社の招に應じて云々」

藍泉の諸友新二、得知、夏繁等は競つて入社祝文を贈り、鳴物入り芝居がゝりにて囃し立つ。

「以前當社の編輯長たりし高畠藍泉氏はひとたび讀賣新聞日就社に入り故ありて引退かれし後は專ら投書家たりしが再度入社せられて盛に筆をふるはれますからお手揃ひの上一層花をそへます面白い事であります」（東京繪入、一五四九號記事、十三年八月十一日）

明治十四年　「讀賣」印刷長

三月「東洋自由新聞」發行の際、讀賣を代表して招待さる。

この年より「人情雜誌」に寄稿す。

明治十五年　一月、諸友の勸めにて柳亭種彥の號を嗣ぐ、印刷長の署名を辭す。然しなほ暫らく在社。

「弊社の印刷長高畠藍泉儀此たび故柳亭種彥の戲號を嗣候に付ては雜書編輯の事務繁忙にて印刷事務を擔當致し兼るに付印刷長は加藤瓢乎氏へ讓て社員小野湖北を編輯長とし藍泉も是迄の通り日々出社して筆を採りますれば猶一層御愛顧を願ます」（讀賣新聞、二〇九四號、十五年一

月十八日）

一月二十九日、日本橋の柳屋に於て柳亭嗣號披露會を開く。

「皆さん御存じの當時小說家で有名なる轉々堂高畠泉藍先生は今度柳亭種彥の號を嗣がれ其名弘めとして來たる二十九日吳服橋外の茶亭柳屋にて祝宴を催されます先生は文人劇場其他とも交際を廣くされるから嘸盛會でありませう」（諸藝新聞、五八號記事、十五年一月廿二日）

「去る二十九日（一月）は前號へ記した通り二代目柳亭種彥翁の嗣號會にて尤も前日の大風に引換一天雲もなく所謂日本晴にて三月頃の氣候なれば早朝より吳服橋外の柳屋へ寄り來る客は引きもきらず先生は平生交際の道廣き故御膳上等を始め文人墨客、俳諧連、諸藝人、劇場連は六二、水魚、見覺の諸連、新聞記者、投書家其他粹客通子數多にて一々記すにいとまあらず偖座の模樣は樓上床の間へ初代種彥翁の肖像に眞跡の短册を表裝せし一軸をかけ供物花等を備へ滿座は諸方より送られたる繪ビラ大凡百枚ほどにて美々しく列ねしは一段の景況なり偖お酌には亭號に因む柳ばし猫を迎へたるは鳥渡御趣向そこで會主種彥翁は頓て席に着き柳亭嗣號の演說をされ夫より夜の八時頃目出度解散になりたり」云々（諸藝新聞、六〇號記事、十五年二月五日）

此の年より一二年間は藍泉の全盛時代である。藍泉四十五歲。

猶ほ右の柳亭の號について、藍泉自身は二世柳亭と稱したが世人は三世と稱した、卽ち初代歿後種彥を名乘つて遺族の爲めに取消された高橋種彥が二代と名乘つたことがあるからである。

三月、東京曙新聞が「東洋新報」と改題さる、藍泉、讀賣を去りて東洋新報に關係す。

四月、龍池會繪畫展覽會（第三回）、藍泉有力會員の一人たり。

八月下阪、有馬溫泉に遊び、大阪に廻つて大東日報に聘され、編輯に從事、この時の月給八十圓は當時としては破格の巨額なりしといふ。傍ら此花新聞に助筆す。

藍泉は此の年五月雨頃から坐骨神經痛に惱み、夏避暑をかねて箱根熱海の溫泉に浴し、久し振りで靜岡へ赴くつもりであつたが、靜岡縣下に惡疫の盛な由を聞き、有馬に赴いたものである。この年八月十七日大東日報一一四號から東京柳亭種彥と署名し「有馬紀行」なるものが連載されてゐるが、その書出しの文句に「靜岡縣下惡疫盛ときゝて有馬に赴く、客舍の雨の徒然に書あつめたる一二話を戲れに貴社に寄す幸ひ餘白を塡めらるゝや否哉」云々とあるを見れば、最初から大東日報へ入社する約束で下阪したものではないらしい。

「今般當府へ來遊候ニ付辱知諸君を可奉窺候處旅中より足痛にて步行不自由に候間新聞を以て奉報知併せて不敬を謝す

中之島五丁目旅舍土橋方止宿　柳亭種彥拜」（大東日報、一一三號廣告、十五年八月十六日）

「東京柳亭種彥先生在阪中著述文章雜俳點删御依賴の方は萬事拙家に於て引受周旋仕候間御來談可被下候也

大阪鹽御堂筋南に入　豐　秋　堂

和田喜三郎」（大東日報、一三八號廣告、十五年九月十四日）

和田某は今日のいはゆるマネージャアなるものであらう。

此の年春、柳條華亭彥入門す（三品蘭溪氏のこと、昭和十二年歿）。

明治十六年　六月歸京。

「高畠藍泉氏、本社の編輯人たりし同氏は昨日神戸港出帆の汽船にて東京に歸れり」（大東日報三五六號、十六年六月十三日）

藍泉歸京後、殆んど後を慕ふが如く、宇田川文海東上、日光その他に遊ぶ。八月藍泉、文海の西歸を新橋驛に送る。何故となく淚とゞめ難し、「停車場の淚」なる一文章あり（東京繪入二四五四號、十六年八月十六日）。宇田川には又東上の機あるべく、自分は明年月ケ瀨高野に遊ぶつもりなれば再會の機が遠くもないのにかく悲しき心地のするは何ぞや、といふのである。然し藍泉の希望は實現されず、この時が二人の生別となつた。

歸京後の藍泉は、小說の寄稿を乞ふ新聞や書肆が漸く多くなつたので、別に定つた新聞社に入

らず、社友乃至寄稿家として執筆。彼の小說なり雜文なりを載せるものは、「繪入朝野新聞」、「東京繪入新聞」、「芳譚雜誌」、「歌舞伎新報」等に及び、時の文壇を風靡する概があつた。

明治十七年　九月、京橋南鍋町より北豐島郡千束村（今の淺草千束町）に移る。

「然るに近年屢々病に犯さるゝを憂ひ居を轉ずるに如かずと人の勸めによりし」云々（「三世柳亭種彦傳」）

秋、松本觀阿、平木某等と謀り、吉原遊女街の祖庄司甚内を祭る。

此の年柳葉亭繁彦（中村邦彦）、柳塢亭寅彦（右田寅彦）、柳崕亭友彦（片山友三郎）入門す。これより先、此花新二（田村岩三郎）、彼を慕ひて大阪より上京、門人となる。

藍泉は移居後も每日不快を押して小說を執筆してゐたが（代筆をも用ふ）、心密かに萬一再起せざるかを慮り、養子甁三郎宛の遺言狀を作つて藏つて置いた（九月二十三日封ずとあり）。

明治十八年　春夏の候より病勢が募り、ずつと臥床の身となる。醫師は動脈瘤といふ（背部）。

（六月より病日に重く床上に臥して頭をあぐるを得ず餘儀なく筆を執ざること三ケ月餘翁平日いふ我大家の名を嗣しもなす事なく此儘斃るゝは先人にも愧ぢ且つ殘念なりと言れしが去九月より、病苦を押へ少しく心宜き日は重き枕をあげ机に寄て我社（東京繪入）へ送る原稿を草す（「三世柳亭種彦傳」）

なほ、後になつては多く柳塢亭寅彦が口授をうけて筆記した。

十一月十八日午後二時死す、年四十八。此の日は月が變るが初代種彦の命日であるといふ。辭世の句

源氏の君たちのみまかり玉ふは多く秋なりといふ故翁の辭世に倣ふて

我も秋見のこして行く莵道の巻

（この句を作つた時には藍泉はまだ必らずしも死を分としてゐなかつたと見えて、この句の後に、「此句もし今年不用とならばよろこび何事か是にしかむ」と附記してある）。

彼は生前自分の戒名を選び、戲墨院柳譽藍泉居士といつた。

越えて二十日菩提所なる淺草松葉町正定寺に葬る。

前年十月三十日、成島柳北の死するや、諸友會葬した。藍泉も會葬者中にゐたが、久しぶりで友人達と會つたので、葬式後種々噂話をし合つた。然るに座に居合せた福地櫻痴は、藍泉の顔をみて戲れていふ、顔の長い點で行くと今度は君の番だらうよ、と。諸友皆この好謔に一笑を催した、藍泉も笑つて顧みなかつたが、然し事實はその通りになつたのである。

（註）藍泉の生地は異說紛々で、或は淺草七軒町組屋敷といひ（「名人忌辰錄」）、或は下谷鳩組といひ（「三世柳亭種彦傳」、淺草三筋町といひ、一定してゐないが、私は藍泉自身の語に從つて淺草元鳥越の產と記し

て置く（明治十四年十一月十四日東京繪入、「庄司甚右衞門傳」第一回の序によるもの）。尤も地理そのものでいへば何れも接近してゐて、格別飛び離れてゐる譯でないから、何れをとつてもさしたる間違ひではなからうと思ふ。

三　撮要せる人物論

藍泉の生活

藍泉の維新前の生活については、勿論これを詳にする材料はないが、然し（二）の傳記中に擧げた乏しい事實によつてみても、その如何なるものであつたかの推想はつく。花柳に沈醉するとか、務め嫌ひとか、若隱居とか、一見たゞの遊惰な太平時代の逸民らしく見えるが、然しそこには、聰明な武士インテリの消極的な反抗氣分がなくはない。腐敗崩壞しかけてゐる幕府にすがつて生きていかうとする氣を止めて、廣く世間に出て一私人として生きようとする、その反抗氣分はこの位のはかないもので、むしろあきらめといつた方が當つてゐる。さればとつて勤王運動に投じて自ら機運をつくる程の氣力はない。時の制度組織から慣習に至るまで、改革を要しないものがない、然し先祖代々の無爲依他的生活のため、自らそれを改革するといふアクチヴな動機を起し得ない、そこで現狀に不平をも

ちながらも獨善的に逃避して、その生活を時の流すまゝに流される。若隱居の藍泉の心境も、恐らくかういふものであらう。朝廷と幕府が正面衝突を始めかけた刹那、藍泉が（といふのも少々大袈裟かも知れぬが）いさゝかヒステリカルに奮起して幕府のために奔走したといふ、然しこれとて藍泉の腹の中に入つてよく吟味してみると、必ずしも此の奔走の結果何うなると、冷靜に打算して動いたのではあるまい、自分の不平の原因であり、そのために自分を獨善的に逃避せしめさへした德川幕府の制度組織が壞れて、その重壓が頭からも肩からもとれ、始めて手足が自由になつたものが嬉しさのあまり、お先眞暗に駈け廻つたものであらう（勿論藍泉自身は主家の爲めとか同志のためとか何とか考へてゐたのであらうが、然しこれはたゞ意識の表面にさう浮んでゐたゞけといつてよかつたのである）。兎もかくも、この奔走で彼は漸く或る生き甲斐を感じた。然しかゝる夢中の奔走の結果、意外な危い立場に流れつかうとしてゐる自分を發見して、彼はハツとその奔走を振り棄てた。と同時に彼には別種のあきらめの生活が始まつた。前の不平がちな逃避的なものではなしに、今度は自足的なあきらめおれはこれでいゝのだといふ眞のあきらめの生活である。藍泉は、何かしら違つた道を通つてだが、多年自分が望んでゐた明るい自由な廣々とした場所に出られたやうな氣がしたであらう。不平は晴れたが、然しそこには、何かしらお前などは何うでもいゝのだと背中をどやされたやうな、無緣といつた感じもなくはなかつたらう。これも、そのあきらめの氣持にはある。

こゝに維新後の藍泉の生活態度の基調があることを注意しなくてはならない。維新後の藍泉の生活がこの自足的あきらめを基調として萬事に動いて行くからである。從つて彼は積極的な時代の謳歌者ではなく、一種のさとりと氣不精さとから時代に順應する人間、時代に追隨する人間の一人である。それで、時代の新趨向たる文明開化には喜んでついて行かうとしたが、然しこれを更に政治的に急激に徹底させようといふ自由民權運動には關心しなかつた。況んや國會願望や政黨結成の議論には尙ほ更であつた。

此の文明開化について行くことも、實は三十一歲で維新の改革に會つた藍泉には、內心多少迷惑でないこともなかつたのであらう。然し彼は少くともこの生活の表面に於いては、能ふ限り文明開化に從ひ、これを採り入れて、文化人として時世に取り殘されぬだけは心がけた。舊士族出のインテリたる彼は、一躍して新時代の耳目たる新聞記者になつた。率先して銀座の煉瓦家根に住まつた。好んで洋服を着け、洋食を喫した。文明開化の利器は成るべく多く利用し、その恩惠になるべく多く與からうとした。彼が、來客の前でジンジンビヤ（ラムネ）を調合してすゝめるのを得意とし、客がその沸騰に驚くのを見て我意を得たといふ顏をしてゐたといふ逸話も（金子氏談）、又病中好んで牛乳をのみ洋菓を食つたといふのも（同）、この文化人意識の現れと見るべきである。兎もかくも、藍泉はその生活の表面に於いては、意識的に時代の文明開化と辻褄を合せた。さうして內心迷惑と思つても、それ

は決して生活の表面には出されなかつた、それは、これが時代順應者、現狀追隨者の態度として他に仕方がなかつたからである。彼はかく時代の文明開化にバツを合せるといふ點では、案外眞面目で一生懸命であつたらうと思ふ。何故なら聰明な彼は、時の力が如何に恐ろしいことをするか、從つて時にとり殘されると何ういふことになるかをよく知つてゐたからである。

然しこれは彼の生活の表面のことである。勿論表面と內心とさう確然と離れたものではない以上、表面の變化は多少は內心にも影響する筈である。從つて文明開化はイデオロギイ的にも多少彼を動かすに至つたと見て可い（現に動かしてゐる）。然し人間の根底的思想は三十までには略ぼ定まるものであらうから、藍泉がその生活の心核から新時代を謳歌出來なかつたのは無理もない。いゝものだとは思つても、何處かに勝手の違つたところがあつたらう。これを把握するとか我が有とするなどといふことは、到底封建武士的敎養と江戶趣味に生きて來た彼に出來る藝ではなかつた。いはば、藍泉の理性が文明開化を肯定しても、その一皮奧の感情生活には何處やらこれとそぐはない、或る時は反撥し合ふやうなものをもつてゐたことは事實である。新しくはなりきれぬ、といつて舊いまゝでは居りきれぬ、吾等は新舊時代の過渡期的存在の一典型として藍泉の生活を見る、さうしてこゝには何かしら悲劇的運命じみたものが纒はつてゐるやうな氣がする。

敎養

藍泉は當時の輕格の武士階級としては、十分の敎養をもつてゐたらしい。和歌和文俳諧は一通り乃至(物によつては)それ以上の造詣があつたらうし、漢詩漢文に於いても人並程の知識はもつてゐた。現に彼の作つた漢詩も漢文も殘つてゐる位である。だから維新前の彼は士族として並々以上の敎養をもつてゐたといつて可い。だが時勢のあまりに急テンポな變化のために、かゝる敎養は一時に舊式とされるに至り、彼を舊時代に維いで思ひきり新時代に進み出ることの出來ぬやうにする邪魔物視されるに至つた。彼は內心、自分が敎養上時代の舊人たることを知つてゐた。これが、藍泉をして時代に對して積極的態度をとらしめなかつた一因でもあらう。藍泉の心的生活が大部分は回顧的であり、隱心なり興味なりが多くの古文學古書古器に向ふのも、以上によつて當然と認められる。彼は同時代の文學では古雅な味ひのある種彥を愛した。さうして種彥から溯つて其磧自笑に行き、西鶴近松の元祿文學をも愛玩した、然し何よりも愛讀したのは源氏物語であつた、彼は明治初年早く元祿文學研究會といつたやうなものを設けて同志と西鶴などを讀んだばかりでなく、進んで源氏の研究を始め、前田夏繁を先生として友人四五輩と輪讀會を開いたりしたものであるといふ(金子氏談話)。又その作家生活中は、毎夜寢につくに先立つて、必らず燭を剪つて源氏の一卷乃至幾葉をよんだ。さうして作家としての冥加はこの篇につきるといひいひしたといふ。時代としていへば確かに舊式趣味である。然し單に當時の文學界だけでいへば、藍泉の敎養は作家として相當以上のものであり、その趣味眼も寧ろ

拔群としなくてはならぬ。且つは例の文化人意識から洋書のことにも多少關心をもつてはゐて、門下などにも「今時パーレーの萬國史位讀まぬ者はない」杯と語つてゐたといふ。然しかゝる心的生活の傾いてゐる藍泉が、よくその趣味に溺れずにゐられたのは、全く生活手段として新聞の仕事に、卽ちジャーナリズムに從事して時代の現實に觸れたおかげでもあるといつて可い。

藍泉の文學

この邊で文學者としての藍泉を語らう。文學者としての藍泉の諸方面については、後でも自然語らなくてはならぬと思ふが、それはそれ、これはこれ、重複してもいゝものとして、先づ一通りのことを語るとしよう。

藍泉は前代の小說家では最も初代柳亭種彥に私淑した。これはすでに若年時代からであるといふが明治十五年一月初代の門下遺老達の世話で遺族から承諾を得て二代柳亭種彥と名乘り、盛大な披露會をしたことは、前記の通りである。以つてその私淑も並々ならぬものであつたことが分かる（作風の模倣その他のことは、後で觸れよう）。彼は何故にさう種彥に私淑したか。これは若年の藍泉が、初代種彥に於いて最も自分に近いもの、或る懷しみ、親し味、自分の內心にもつものゝ再現を認めてゐたからであると思ふ。第一身分の點が似てゐる（大體的にいつて）、御家人とお坊主である。花柳に沈醉するところが似てゐる。而かも兩者ともこれを時代制度に對する消極的反抗心の安全瓣としてゐる。

而かも、一旦幕府非常時を悟るや、從來の自己の戲作者的町人的心事を恥ぢて自殺したといふ初代種彥と、われと自から家督をすてゝ畫筆と俳諧に遊んでゐた身が、幕府瓦觧ときいて、ハツと起ち上つて亡命同志のために奔走したといふ藍泉も似てゐる、これは何れも多年消極的反抗意識の底に潜在してゐた武士階級の階級的プライドが我にもなく迸出したものと見ても可い。この點もよく似てゐる。それから源氏物語への愛著、古器古物を玩ぶ心、凡て高雅を尙び俗惡を陋しむ趣味、雜學考證に對する嗜癖、等々似たところが多い。これは、或る程度まで藍泉の方で模倣した點があるとしても（事實確にあるが）、單にそれだけではかういふ結果にはなるまい、やはり環境なり敎養なり先天的要素なりの上で、二人相通ずるものがあつたからに違ひない。かうして先天的要素と意識的模倣が相加はつて若年の藍泉は初代種彥に私淑するに至つたわけであるが、彼は、いろいろな意味で一生種彥の影響を脫せずに終つた。

　藍泉には積極的に文學者となる意志はなかつたらしい。これは武士階級に通有な文學輕視の考へも多少あつたらしいが、小說家としての才分に自信がなかつたのが主な理由であらう。さもないと、彼程小說家になる可能性をもつてゐたなら、維新前に於いて疾くに作者の部類に入るべきであつた。彼自身も「生は瓦解士族の產業なき儘に操觚者として稼ぐ中云々」といつてゐるが、正しくその通りで衣食のために仕方なく小說を執筆するに至つたものに違ひない。つまり、文學的自信のあるなしに係

らず、生活の必要上、時勢の波にのつて小說家に化けさせられたのである。從つて、その作物が多く模倣的であり、獨自の主張とか、氣魄とか、熱とか、信念とかいふものの少ないのは止むを得ない。聰明な彼は、自分に最も近い種彦に手本をもとめ、そのテクニクを極力模倣し、先づこれをマスターして自分の創作的才分の利益を補はうと努めた、さうして或る程度まで成功した、その上、意識的か無意識か知らぬが、初代種彦の傳統的インフルエンスを利用することも忘れなかつた（必らずしも利害打算からのみ出たとはいへないが）。彼は遂に自己の模倣的才能（いはゆる器用さ）と案外ねばりある勉强によつて、種彦張りの格に入つた表現技術をかち得るに成功した。こゝまで來るには彼の敎養、雜學的蘊蓄が彼を助けたこと、勿論であらう。表現技術に九分の重點を置いて作品の價値を批判するといふ舊風のぬけなかつた明治初期の文壇は、こゝに至つて、彼の成功にいさゝか驚き、容易に大家をもつて許したわけである。尤も彼が大家として文壇から許されるに至つた明治十五六年は、丁度舊新文壇の交替期で、幕末の作者の遺老は殆んど悉く屛息したといつてよく、而かも新人といふ新人は未だ修練時代で、頭角が出てゐない。かくて文壇の覇權は熟柿の落つるごとく時代順應者たる藍泉の手にころげ込んで來て、不知庵氏のいはゆる「其壇上に立つて隱然盟主の位置を保ちしもの」云々となつた。此の點で藍泉は一種の幸運兒といへぬこともない。

藍泉の文壇的地位を考へるに必要な、今一つの分子は、當時の文壇とジャーナリズムの間に至密な

關係があつたことである。明治文學の何の時代に於いても、多少はさうであらうが、ジャーナリズムを離れて明治文學といふものは殆んどないといつても可い、これは今日に於いても大に肯定出來ることである。然るに、明治初期の文壇に於いては、ジャーナリズムとの關係が特に緊密であつたものであつたもので明治新文壇の再建は全くジャーナリズムの勃興に負ふものであり、從つて文壇即ジャーナリズムとなつてゐる位で、文壇人といふ文壇人は殆んど皆ジャーナリストたらざるはない。此の頃は、或る意味でジャーナリストとしての Value が文壇人としての Value を定めたものといつて可い。その例は成島柳北の如きを見ても分かる。柳北は初期の明治文壇に絶大な威を張つた一人であるが、然らば今日文壇人として彼を觀察して何れだけの Value があるか、今の若い明治文學研究家には疑問とされるであらう。それは文學といふ語の定義の差にもよるが、やはり文壇即ジャーナリズムといふことを考へに入れてからでないとはつきりしないと思ふ。そこで藍泉の場合にも同じ原則が作用してゐるので、藍泉が文壇人として勢力をもつに至つたのは、彼がジャーナリストとしての名聲も與つて力があるわけである。彼はジャーナリストとしては、二世春水の染崎延房よりも古いこと勿論であるが、この道に於いて最古參の一人たる假名垣魯文よりも或は一歩先んじてゐる。且つ(二)の條を見ても分るが、當時のジャーナリストとしては、相當眼先きも利き、頭も動き手も動くといふ點で次第に大記者の一人にされて來てゐる。此の際矢張り彼の利器乃至看板となつたものは、矢張りその教養と文體で

あらう。種彦から脫化した彼の文體は、魯文ほど拈つたものでなく、春水ほど濃情的ではない、淡泊平明で一種の雅味香味があり當時啓蒙時代のジャーナリズムの文章としては最も格好のものであつたかに見える。少くとも最も一般向きの要素を備へてゐたとはいひ得やう。ジャーナリストとしての藍泉については、細論すれば又いろいろと述べられるのであるが、この稿の目的から一寸逸出した形になるのでそこまでは立ち入らぬこととし、こゝでは、彼が明治初期のジャーナリズムに案外大きな足跡をつけてゐること、さうしてこの事實が又、明治初期の文壇に於ける彼の位地勢力を定めるに大に役立つてゐることを、合點していたゞけば可い。

藍泉の文學上の主義は先づ漠然たる勸善懲惡主義である、といふより仕方がない。この點は初期の文壇人の誰でもが同じことであつて、前代のイデオロギイを繼承してゐるわけであるが、然し仔細に見て來ると、同じ功利的な勸善懲惡主義でも、前代のものと明治初期のそれとは、何やら相違するところがあるやうに思はれる。前代の勸善懲惡は、專ら封建武士階級を中心にして、彼等の倫理觀の基本たる支那の儒教の德目を基準としたもので(仁義禮智忠信孝悌とその反對の如き)ある、明治初期の勸懲主義にもさういふ分子がないではない、いな多分にある、然しそれが唯一の規準ではないので寧ろそれよりも重要な規準がある、それは卽ち明治新政府の諸施設の結果たる新文明、いはゆる「文明開化」なる語で表明される社會現象に關心をもつかもたぬか、これを喜ぶか喜ばぬか、これに感謝

するかせぬか、乃至はこれを促進させるに與るか與らぬか、といふ點である。その言動が文明開化に合するを善とし、反するを惡とする、これが明治初期の勸懲主義の中心的規準となつてゐる。舊道德の採用もこの規準からなされてゐる。又この規準乃至その他のものを讀者に示す態度も、前代のはいはゞ理窟も何もない注入主義であつたが、明治初期のものは、合理的啓蒙主義となつてゐる。これだけの相違があることは、注意しなければならぬ。今藍泉だけについていへば、藍泉の勸懲主義もかゝる合理的啓蒙主義の最も明瞭な現れの一つであるといひ得る。かゝる合理的啓蒙主義は、時代思潮一般から來てゐるものには違ひないが、然し文壇に即していへば、矢張りこの點に於いても當時のジャーナリズムとの至密な關係を語つてゐる。それは、かゝる合理的啓蒙主義を宣傳普及させるに與つて力のあつたのは、當時のジャーナリズムだつたからである。

かくて藍泉の勸懲主義は、一般的には前代のものよりも內容に於いて又態度に於いて新しいものとはいひ得る、又進んで藍泉の名に此の種の勸懲主義の創造者乃至代表者の一人といふレッテルを張つても差支へがないと思ふが、然し藍泉の生活態度の消極主義がこゝにも出てゐて、その小說的作物に於いてはかゝる新しい特色が意識的に支持主張されず、可成り漠たるものになつてゐる。彼の作物を讀む人は、こゝを宜しく斟酌すべきである。

小說家としての藍泉乃至藍泉の小說については後に十分述るつもりであるから、此の項の記述と對

照して讀んでいただかう。

文壇上の柳亭派

明治初期の文壇に於いて、藍泉を中心とした一ブロツク、いはゞ藍泉の羽翼的作家とその門下とを一括して、柳亭派なる名で呼ばれてゐる。藍泉は新聞記者生活が長いだけに、記者仲間その他に知合が相當多かつたといふが、然し本來は神經質的な文人型の性格で、圭角も多く、自分に寛大な割合に他に對して喧しい人であつたので、眞の交友といふものはさう多くはなかつた。然しその少數の交友との友誼は相互的に極めて堅い厚い美はしいものであつたらしく受け取られる。最も堅い友誼といふ裏には有形無形多少の利害關係も絡んでゐたものと見てよく、藍泉はそのジャーナリストとしての勢力を利用して彼等の面倒を見、彼等の方でもその代り、文壇における藍泉の羽翼としてがつちり組み合ひ、柳亭派なるものゝ中心を形作つてゐた。これ又、一面文壇に於ける藍泉の地位を有利にしたものであつたに違ひない。明治初期にはこの柳亭派程固い文壇ブロツクはなかつたのである。

記者としての交際仲間は、福地櫻痴、成島柳北等硬派大新聞の主將から、鈴木田正雄、假名垣魯文、條野採菊、宇田川文海等小新聞界の大物に至るまで皆一應の交際はあつた。然しかゝる人々は(宇田川以外)交際があつたといふのみで、さう深い關係はなかつたのであるから、交際があつたといふ以外、今こゝでは何も述べないことにし、いはゆる柳亭派の全貌だけを明白にして置く。

藍泉の友人で柳亭派の羽翼的作家の位置にある人々は、先づ前田夏繁、南新二、幸堂得知、饗庭篁村、外に此の派の故老としては柳屋梅彦（四方新次郎）、二世柳下亭種員（有山新兵衛）、柳水亭種清（櫻澤堂山）があるが、此の故老たる人々は藍泉が柳亭種彥の名を嗣いだといふ點でのみ文壇的つながりをもつものであり、藍泉個人とはそれ程深い關係がないので、柳亭派ブロックのうちにはかゝる人々も入るといふことを知るだけで足りる、柳亭派の羽翼作家の中堅は前記の夏繁、新二、得知、篁村の四人である。この四人は、それぞれ各別に多少の研究に値する人々であるが、こゝでは極簡單に暗示を與へることにして置かう。

前田夏繁は、舊幕府に仕へた和學者前田夏蔭の子で、藍泉とは相當古い友人である、維新後、藍泉と共著で彰義隊辯護の書物『松の葉』一名『東臺戰記』を公にしたこともある。甚だ多能な人で、和漢文學から有職故實、美術のことまで詳しく、晩年は美術學校教授として終つたが、日本畫再興には實に功の多い人である。明治の初め夏繁は、藍泉の手引でジャーナリストの仲間に入り、明治八年以後東京繪入の主筆格として名を馳せ、十六、七年に繪入朝野に轉じて一層手腕を示した。夏繁は文筆の人としても多才で、戯文、狂文、雜記、小說、何でも書いて相當の技量を示した。夏繁の主筆となつてゐた繪入朝野が、實に藍泉派の最も有力な原稿市場の一つであつた。

南新二、本名は谷村要助、前名春育といふ、矢張りお坊主衆仲間であるが、茶道の宗家である。藍

泉の最も古い友人で、眞の竹馬の友だといふ。幕府瓦解の時に坊主頭に髮を伸して撒兵組に入り、鐵砲を擔いだ連中の一人である、維新後歸商したが、それがうまく行かず、やはり藍泉や夏繁のすゝめでジャーナリストの仲間に入り、東京繪入から、やまと等に執筆したが、黄表紙系の輕妙な戲作に於いて有名であつた。もつとも本職の記者になつたのはやゝ晩いが、その前から投書家中の尤なるものとして喝采を得てゐた。

幸堂得知、本名は鈴木利平、もとは高橋氏である。生家は上野山内の用達であつたといふ。維新の後三井組に入り、銀行事務に關係したが、故あつて引退し、中外電報、東京朝日等に出入した。此の人もその記者となる前から投書家寄書家として有名であつた。その書くものは滑稽諧謔で南新二の流亞であつたが、非常に古書古物の好きな人で、この點で早く藍泉と交つてゐたのである。

饗庭篁村については更めて語るまでもない。篁村は初め讀賣新聞の校正方であつた、藍泉が同社に入社するや、直に彼の好學と文才とを認め、引立てゝ同社の記者の列に入れたが、果して記者として名を成し、岡本勘造、古川魁蕾と並んで文壇三才子の目があつたといふ。篁村は何れかといへば、最初藍泉に師事兄事してゐたらしいが、藍泉は彼を友待し、此の少年はよく長者に交るから今に偉くなるぞといつてゐたといふ(金子氏談話)。果して然りで、藍泉歿後、一時初期文壇の覇權を須藤南翠と二人で分つたのは此の篁村であつた。

門下生に至つては、藍泉はあまり惠まれてゐないが、然しこれ又柳亭派の勢力を維持する上には肝腎な要素となつたものである。藍泉の門生中一番古い人は、柳淵亭藍江といふ。此の人は同じお坊主仲間で倉田恭英といふのであるが、門生の贄をとつたのは、明治十二三年であるらしい、藍泉が小說家になりたての門生である。然し作物としては一二、芳譚雜誌に見えるのみ。次は大久保紫香（源兵衞）といふ人らしく、これも同じ雜誌に一二の小說が載つてゐるが、これは日本橋駿河町の吳服屋の主人でたゞ道樂から戲作を弄したものである。第三が柳條亭華彥、卽ち三品藺溪氏（昭和十二年歿）。この人については私は先年愛書趣味に書いたことがあるので、こゝでは詳しく繰返さないが、矢張り舊幕の士、一時工部大學まで入つたが耳疾を患へて廢學し、平生嗜好のあつた文筆で衣食することになつた。氏の入門は明治十五年であるといふ。氏は芳譚雜誌を振り出しに、記者として東京大阪の間を往來し、遂に東京朝日に腰を落つけて、つひ先年まで在社してゐたのである。藍泉が十五年から十六年へかけて在阪した間に門生の數に加つた人に此花心二と號した田村岩三郞がある。十六年藍泉が歸京するや、彼の後を慕つて上京し、改めて入門の禮を取り、これ又芳譚雜誌を振り出しに、地方めぐりをした後で大阪へもどり、大阪日報から、大阪新報、大阪每日の記者となり三四年前物故した。最も晚い門人は柳塢亭寅彥、柳崕亭友彥の二人である。寅彥は右田氏、豐後臼杵の人、始め法律家にならうとし、後轉じて柳亭の門下生となり、いはゆる戲作者仲間に入つた人である。柳門に入つた時に

もう一かどの戲作家となる才筆であつたといふ。氏の文致が最も藍泉の氣に入り、藍泉が病臥後の代筆は多く寅彥の筆になつたといふ。藍泉の臨終の時、初代以來相傳した柳亭の印を讓られ、四世(藍泉からは三世)柳亭と名乘るやうに遺言されたのは、此の人であつた。氏は後に朝日新聞にゐて、劇作家として盛名があつた。柳哩亭友彥は、本名は片山友三郎氏、備後鞆の津の人、內閣統計局の吏員であつたが、文學癖から寅彥と共に柳亭門下となつた。後に都に入り、更に黑岩淚香を助けて萬朝報を起した。その外に柳葉亭繁彥と名のつた中村邦彥がゐる、これは江戶の人、舊幕人の子弟であらう。入門は明治十七年一月であるといふ。藍泉の引立で芳譚雜誌から繪入朝野、繪入自由等に執筆、その後地方新聞の記者となつたまゝ杳として消息がない。が、一時はひと廉の才筆といはれたものである。

此等門生中、柳條亭華彥(三品氏)、柳塢亭寅彥の如きは、明治初期文壇の有力な若手作家として別に單獨の調べを要する人々であるから、作品等も擧げるべきであるかも知れないが、今はその餘裕がないから止めて置かう。(前半完)

(昭和九年二月「明治文化研究」第一輯)

【附錄】自傳的文章

（一）わが身の上

一

いまゝで、先輩のことや故人のことは、隨分詮索立てをしたが、自分のことはツヒ考へて見たことがなかつた。だが十年たてば十歳になるといふ格で、いつの間にか此の道の古顔とされて、我ながら少し驚いてゐるうち、此の程人の悪い若いワセダの先生連中が老先達に物を聽く會の中のプログラムに僕まで押し込んで、「君は如何にして明治文學研究家となつたか」、「後學の爲めに伺ひたい」と開き直られたには、全く以て面喰つた。それも少なくとも年齢の點で、僕よりも若い先生方だけなら、煽て氣分につられていゝ氣持ちで、有りもせぬ「文學的自敍傳」とか何とかいふのを一席やつたかも知れないが、その若手の間には吉江喬松、山岸光宣などといふ文字通りの先生達が、ワザと鹿つめらしい顔をして手を拱いて謹聽してゐるのだから、何うにも話せるものではない。イクラ豪傑の僕だつて、大テレにテレざるを得ない。わけの分らぬ事を何だか彼だかだらしがなく一時間ばかりしやべつて退却

したが、全く近來にない大汗だつた。

あとで考へてみると、先方は、自分の身上話なら突然でも差支へがなからうといふのであゝいふ問題を出してくれたらしいのだが、僕はその問題を出される間際まで、自分についてさういふことを考へて見たことがなかつたのだ。だから僕がテレたのも、一つには不意を突かれてあはてたからでもある。そんな事を訊かれたことは、いまゝでなかつたし、從つて考へて見たこともなかつたからだ。然し此の事がいゝ經驗になつた。

その後、仕事が暇になつて頭の輕くなつた時々ポツリポツリ自分のことを考へて見てゐるが、案外面白いものだ。或る人々に聞けば、自分の過去を振り回るのはイヤなものだとか苦しいものだとかいふが、僕のは、明治文學との關係といふ點からだけの追想であるせゐか、なかなか面白い。まるで自分のことでなく、なにか面白い本でも讀んでゐるやうな氣がする時がある。

かうして思ひ出したことに、最初の愛讀書、環境、遺傳、貸本屋などといふ題目がある。そのうち一つ二つは、先日誰かに賴まれて話したり書いたりしたから、今日は、遺傳めいたことゝ環境の感化(といふのも大袈裟過ぎるが)とを話さう。

かうした好い機會にさういふ題目のことを書いて置くと、後で樂だ。何か同じやうな「問題」を出されたときに、あゝその事なら何々雜誌の何號を見てくれ給へで濟まされるからだ。それればかりでな

く秋の日にさういふ昔物語りを書くこと自身が、僕にとつて何だか妙に珍らしく、樂しい氣がするからでもある。

二

遺傳めいたものは、いろいろある、そのうち最も强いものは、母方からうけてゐるらしい。母方の祖父は、先づ一個の町學者だつたといつて可からう。

此の祖父は伊香（イカウ）氏、多は八太郎、諱は敬興（タカオキ）といふのだ。町人で名字帶刀御免、それにいかめしい諱などがあつたのだから、たゞの町人ではない。家業は酒造業で、藩侯津輕家の御用達を兼ねてゐた時代もあつたらしい。伊香といふ姓も珍らしいが、これは先祖が近江の伊香郡から出だからで、俗にいふ近江源氏、佐々木氏の一族だ、伊香系圖といふものがあつて、何でもハツキリ書いてあつたやうに思ふが、四郎高綱ではない、太郎定綱だか三郎盛綱だかから分れてゐたやうに思ふ。乃木大將の家も佐々木氏の支族から出てゐるといふから、或は手繰り手繰つたら、乃木家と伊香家と何等かのつながりが出て來まいものでもないかも知れない。さうなると、乃木大將と柳田泉が、第何十何番目かの遠い遠い親類緣者となるといふ理窟だが、それはまづまづ夢のやうなものだらう。

伊香家は祖父の子で男系が絕え、僕の二番目の兄が家を繼でゐる。この兄は文學とは緣の無い工學をやり、蒸汽機關だか瓦斯機械だかを研究して、長いこと大阪の方にゐる。工學士伊香志朗なるもの

がそれだ。

そこで近江源氏の末孫たる自慢はこの位にして置いて、祖父のことに還らう。この祖父は若い時から學問が好きで、國學、殊に平田派の神道説に熱衷した。昔は階級が喧しいから、町人が學問するといふだけでもいろいろな迫害があつた。祖父の場合もさういふことがあり、大金を出して江戸から取り寄せた珍書奇籍を、「町人の癖に生意氣だ、おれが借りて遣はす」といふので士族連に體よく取り上げられたことが度々あつたといふ。平田哲學には可成り凝つたものと見えて、藏書の大部分は岩木山麓高岡神社の神庫に納めたといふに拘はらず、今でも國の方の藏の中に、筆寫したものや講義筆記めくものが簞笥に二棹ばかりある。和歌もやつた。勿論一家を成したとか何とかいふ程のものではなからうが、田舍町の造酒家の主人にしては感心だといふ程には詠んである。詠草は、別に蟲もくはずに今僕の抽出の奥に入つてゐる。

伊香家からは此の祖父の一二代前にも、葛年と號した俳人が出てゐる（これは本名を忘れたが、やはりその頃は風格の變つた風流人として知られてゐたといふことだ）。

祖父は僕の生れぬ中に死んだのだから、その直接の影響は別に與へられてはゐないが、書物に對し學問に對し、文學に對する愛好渇仰といふ一種の血、血といつてわるくば空氣乃至氣分は確かに遺傳されてゐる。祖父の娘、卽ち僕の母（田鶴）は、その頃の習慣で教育らしい教育など受けはしなかつ

たのだが、妙に本が好きで、草双紙物を始終讀んでゐた（今も讀んでゐるかも知れない。今年八十一で、あたゝかさうに樂しさうに生きてゐる。僕はこの母から神佛とか宗教といふ觀念も得た）。

それから祖母だ、この祖母は（名はじゆんといつたと思ふ）、祖父の繼室て僕と血の縁はないが、祖父の感化か、或はその家族の傳統か、眞に本好き、これも母同樣むづかしいものは讀めなかつたが、小說か、講談、和歌の本ぐらゐは始終讀んでゐた。

僕の親父の方は、庄屋上りの田舍インテリで、政治家で　自由民權で可成り産をスツた方だ、文學や學問などは餘りやらなかつたらしいが、人から好いと勸められることは何でも聞くたちだつたから祖父（卽ち母の父）から勸められて、妙な書物を大分買つて持つてゐた。（『三才圖繪』、又は『名所圖繪』など）。

だが讀書癖の遺傳としては、父方のそれは誠に薄かつたらうと思ふ。

三

その次は環境の感化だ。

これも、上に述べたところで、僕が生れた當時の僕の家の空氣が、書物や文學と縁のあるものだつたといふことは大體分かると思ふが、僕が特に明治文學研究とつながるところを知つてもらふには、この環境の說明がいる。

この方の感化もいろいろあるが、先づ第一は兄の文學好きだ。これは長兄の方で、專門學校時代の早稻田の卒業生、政治家になるつもりで卒業後も東京で勉強してゐたが、親父が割に早く死んだので遂に志を抛つて田舍に歸り、俳句いぢり、土いぢりで、好々爺の地主としてのんきに年をとつた。(井泉水氏主宰の『層雲』をみたまへ、殆んど毎號柳田流矢なる名でぢみな田舍風の句を寄せてゐる。これがその兄だ。)この兄はなかなかの文學好きで、藏書中に明治の二十年頃から日清、日露戰爭頃へかけての著名な文學者、文學雜誌、新體詩などをシコタマもつてゐた。恐らく大部は出版の都度都度買つたものと見える。だから僕は早くから兄の藏書の洗禮を受けた。もつともまた十代の子供だから兄が好んでさういふ文學書を讀ませるわけがないが、勝手にコツソリと持ち出して讀んだもので、「國民之友」の附錄、忍月の『露子姫』、「帝國文學」の海外文學紹介、「早稻田文學」の雜錄などといふものを、譯がわからぬながらメチヤメチヤに讀んだ(外に讀むものがなかつたら)。雪嶺の『日本人』や蘇峯の本もいろいろあつたが、これは難しかつたからタヾカヂつただけで止めた。

兄の藏書を讀む前に、母の讀みふるした草双紙を讀んでゐた。これは小學校に入る前あたりからだから、初めは本式に讀めたのではない、祖母か誰かに聞き覺えの文字をたよりにして讀むのだから、拾ひ讀みだ。江戶式の草双紙は繪だけ見て降參してゐたが、東京式、卽ち漢字入りルビ式のものは、繪面と相照して大意が何うやらわかつた。『川千鳥天網船』だの『思案橋曉(あかつき)天奇聞』だのといふものを

ボンヤリと不思議な氣持ちで讀んだものだ。

文字は『百人一首』で習つたやうに思ふ。これは美濃判で、松葉散しか何かの表紙の肖像入りの本だ、たしか『丹鶴百人一首』とか何とかいふ題であつたやうに思ふ。丹鶴といふ字があつた記憶がある。

それから、特に僕の明治文學に關する知識を大に增加さしてくれたのは、貸本屋だ。これは弘前の町（本町二丁目）にあつて、伊香の家の何代か前の分家だつたらしく、矢張り伊香を名乘つてゐた。勿論元來は矢張り酒造家だか醬油屋だかをやつてゐたのが、當主の長男たるなにがし（僕等は二丁目のアンサ＝兄サンとよんでゐた）といふ自由思想家が、本が好きで貸本屋に轉じたのだ。當時同業が少なく、而かも城下町として讀書人が可成り多かつた弘前のことだから、最初は相當にいゝ商賣だつたらしい、今考へても田舍町にしては珍らしく大きな貸本屋であつた。種類は小說、講談、それも明治時代の小說が多く、千部以上もあつたらしい。

此の貸本屋は親類だから極く子供の時から遊びに行つてはゐたが、然し貸本と知り合ひになつたのは、全く祖母のおかげだつた。

祖母は、僕が學齡頃から、半身不隨めく病氣で年中床の中にゐた（半身不隨ではなしに、腰か脚の立たない病氣であつたかと思ふ。）それで元來の本好きが一層ひどくなり、いくら讀む物をあてがつ

ても憎らしい位ゐ早く讀んでしまふ。讀む速度はさう早くはないのだが（大きな蟲目鏡でユツクラユツクラ讀んでゐた）、休みなしだから卒業が早いのだ。それで何か何かとせがむのが少しうるさくなると祖母掛りの僕は、手當り次第何でも宛てがつた。今考へても可笑しいのは、あまりうるさいので、『小學用文作例』とかいふものを、知らん顏で二度も三度も讀ましたことがある。勿論さういふものを宛てがつても、始から終まで一字殘さず、半ば小聲で音讀して讀んだものだ。

この祖母は、僕を度々その二丁目の貸本屋に使ひにやつていろいろな小説を借りさせた、それは主として僕の高等小學校から中學時代へかけての話だが、學校は弘前の町にあるので、學校の戻り、少し迂回して貸本屋に寄つて何か四五冊仕入れて歸り、それを讀終ると又別のを仕入れるといふ風であつた。借料は、親類ダケに只であつたらしい（或は誰かゞまとめて拂つてくれてゐたものか、それは知らぬが）。勿論その本の選擇は僕の自由だ。祖母は何でも讀みさへすればいゝのだから別に文句をいはない。僕はそれをいゝことにして、紅葉、露伴、天外、蘆花、水蔭といふ連中の小説を片端から貸りて、祖母に渡す前に貪るやうにして讀んだものだ。町から家まで何町かの野道がある。我慢の出來ない時は、野道にかゝると、野道から少し引込んだ小さな森かげか、田の畔かに腰を下して一二冊讀み通して日が暮れるのに驚いて歸つたものだ。貸本ものゝ中で一番面白かつたのは（今も覺えてゐるといふ意味で）、蘆花の『思出の記』、『不如歸』、天外の『緣不緣』などがある。

環境の話は、ずつと中學時代へも續くが、それは自ら別の趣致を帶びるので、今日はまづこれだけにして置かう。（昭和十一、十二、「解釋と鑑賞」）

（二）中學時代

一

ほかに書くものもなし、今のところ書きたいものもなし、自分のことを書いてみる。先月か先々月か或る雜誌に書いた「わが身の上」といふものゝ續きと思つて讀んでいたゞきたい。

小學校頃までのことは「わが身の上」といふので大體話したから、こゝでは高等小學校から中學時代のことをホンの少し書かう。

もつとも、これを自傳的にいへば、小學時代の末期に叔父の手許に養はれたりして、大袈裟にいへば流離坎坷の感傷的物語もあるんだが、それはおあづけとして、主として「讀書」の方面からだけ話をすゝめよう。

二

いまぢやそんな事が馬鹿々々しくて誰もやつてゐないが、その頃は小學から高等小學、そこから中

學に入るものと段々がきまつてゐた。高等小學の三年あたりから中學に飛び入りは出來るのだが、それは極めて稀れで、大抵は高等小學四年を卒業してから中學の試驗をうけたものだ。僕などはそれをクソ正直にやつたので、大分損をした。だから大學豫科ではいさゝか晩學先生とならざるを得なかつた。

ところで、その頃の高等小學といふのは、馬鹿に出來なかつた。僕の讀書力の基礎は全くこゝで出來たものだ。僕等の高等小學は、村ではなく弘前の市中にあつた。それは市の周圍の十何ケ村が共同して建てた學校だから、通學者の位地の便利を考へてのことだつたらしい。學校の名は「玉成」といふのだ。今でも弘前の古城の濠端、龜甲町に近いところに立つてゐる筈だ(久しく見ないから、何うか知らんが、恐らく立つてゐるだらう)。「玉成」の名は然し正確に發音されたことは少なく、多くは土地訛りで「ギョクセイ」とよばれた。今日では學生は校章のある帽子をかぶつてゐるから何の學校の生徒かすぐわかるが、その頃田舍町の高等小學生、而かも農村出身の少年には帽子などかぶつてゐるのが少なかつた。タダ袴だけは、叱られるから皆穿いてゐるが、それもボロボロのが多かつた。そこで帽章代りに「玉」といふ字を四角の中に入れた(國といふ字の略字めいた恰好の)肩章といふのを衣服にぬひつけたものだ。成績のいゝ生徒のは朱印、普通のは墨印であつた。

そこで讀書力の方の話になるが、この高等小學は學生の恰好こそ金太郎が山から出たばかりといふ

のが多かつたが、然し學科はなかなかハイカラで、英語の正科があり、英習字もある。又正科ではないが『日本外史』などを教へたりした。英語は此の學校で文法の一斑から、讀本は『チョイス』だつたかを二三冊讀んだ、後で中學に入つてこの英語の知識が大變役に立つたものだ。又『日本外史』は他の級でやつてゐたが、僕は勝手にそれにまじつて『外史』を習つた。習つたといつても、主として素讀だ。然しこれも、中學に入つて非常に役に立つた。これには今でも感謝してゐる。

正課の外に讀書を奬勵した。若い理想家型の先生が多かつたせゐか、生徒も皆活き活きとその指導に從つた。僕等の方の受持の先生は館山德太郎といつた。これは青森師範始まつて以來といふ秀才で文字通りの白面の青年であつたが、この先生に大に文學趣味があり、僕等はその意味で特別指導をうけた。蘆花の『自然と人生』を讀まされたのも、俳句の作り方、歌の作り方を敎はつたのも皆此の先生だ。僕が七五調の新體詩に手をのばして、大に賞讃されたのも此の先生だ。今覺えてゐるのに、たしか「蓑蟲賦」といふのがあつた。勿論稿を留めずだから、內容や文句は殆んど記憶してゐない。

この先生は後に、まことに氣の毒な事情で世間から隱れたが、僕等からいへば忘れられぬ人々の一人だ。僕等を集めて「理想」といふことを話して聞かしたり、寫生文の講話をしたり、文學上實に有益な新しい話を度々聞かしてもらつた。

三

そこで中學時代の話に移るが、その頃弘前には中學が二つあつた。一は縣立であり、他は市立で東奥義塾中學といふのだ。歴史はあるし、名は聞えてゐるし、内容も義塾の方が立派さうなものであつたが、然し事實は縣立に押されて（且つ經濟上の事情もあつたのであらう）僕等が入つた頃は一段下のものに見られてゐて、甚だ振はなかつた。勿論僕も最初は縣立に受驗したのだが、妙な羽目で入學を許されなかつたから、義塾に入つたのだ。妙な羽目といふのは、試驗の二日目、作文の科目が早く出來たので場外に出てもいゝかと試驗官の先生にきいたら、あまり早いから待てといつて叱られた。僕は少々不平だつたと見えて、席に歸つて待つてゐたが、足拍子をとつて唱歌か何かをうなつたといふ。勿論人の邪魔する程度のものではなし、長い時間やつてゐたのでもなからう。然しその時試驗官が、僕をジロリと睨んで、答案に何やら書きつけた。その場はそれで濟んだが、自分では試驗の出來は惡くなかつたと思つてゐたのに、意外にも入學不許可となつた。そこで田舍でも何處でもよくある手をつかつてこつそり探つてもらつたら、試驗官の意見で、コイツはものは出來るかも知れんが、敎師を敎師とも思はん生意氣な奴だから、イカン、後で敎師に厄介をかけるヤツで、學校の爲めにならんといふので、遂に不許可にしたのだといふ。

四

そこで仕方なく今一方の義塾に入つたわけだ。

義塾に入つたことは、その當時としては一種の屈辱らしく感じもしたし、又事實往來で縣立中學の生徒と會ふ度に白眼視されるのが癪にもさはつた。それでナアニ貴樣等に負けるものか、今に見ろといふつもりで、手當り次第讀書に熱中した。

義塾は學校としては、設備も教師も、とても縣立中學には叶はなかつたらうが、二つ程いゝことがあつた。それは、あまり學科をやかましくいはぬこと、すぐ隣りが市立圖書館であること、だ。僕等は朝、晝、放課、何でもかまはず圖書館へ通つた。まるで自分の家のやうに出入りしたものだ。それは僕だけでない、多勢さういふ生徒がゐた。こゝで僕が讀んだものは、歷史、地理、傳記、さういふものが多かつた。吉田東伍氏の『日韓古史斷』を、よく分からぬながらもよんだ。又佐藤傳藏氏と山崎直方氏共著の『大日本地誌』とかいふものも、可成り大分のものだが、遂によみ通した記憶がある。傳記物は圖書館中のものは大抵讀みつくしたと思ふ。(もつともイクラもあつたのではない、高々五六十、多くても百を越えてゐなかつたらう)。文學や小說は「わが身の上」で書いたやうに、別に供給口があつたから、圖書館ではあまりよまなかつた。それに家から學校まで一里餘もあるのだから、歸宅時間の關係上、さう長く館に入つてゐられないので、何もかも讀むといふわけにはいかなかつた。

漢文の本も、『史記』や、『大日本史』は、やはりこの圖書館で拾ひ讀みをした。僕はこゝでも大分漢文を讀む力がついた。

義塾は舊津輕藩校稽古館の後身だけに、學校の書庫たる土藏には、國學、和歌、漢文、歴史などの本が山のやうにつんであつた。勿論これは學校のものではなく市の所管だつたから、勝手に見られはしなかつたのだが、都合のよいことには、學校に出張して來てゐた市の書記の石鄕岡某といふ人が、僕の叔父（といつても叔母婿）の友人だつたのと、敎師中に兄の親友や知己がゐたのとの關係で、僕はこつそり貸してもらつていろいろなものをカジつた。今覺えてゐるのは、『吾妻鑑』の大きな活字本と、古渡りの唐本『三國志』だ。（『三國志』といつても、演義小說のではない、陳壽の書いた正史の『三國志』だ。）十六や十七の少年に唐本『三國志』など、今から考へると、丸で何といつていゝか、無茶な讀書の仕方だが、僕は然し此の『三國志』が面白くて寫しとつた。たしか半分以上寫しとつた。『吾妻鑑』も十卷ばかり寫した記憶がある。『吾妻鑑』の異樣な文體には大に驚いたものだ。殊にあの文體の特徵の一つだが、「者」と書いて「テイレバ」とよましてある。これは「といへば」といふ程の意味なのだつたらうが、その頃はその「テイレバ」が何のことかわからぬ。國語の敎師に質問したが、敎師も知らぬ、何の本にあるかといはれて、『吾妻鑑』だといつたら、敎師は目をまろくして何ともいはなかつた。それだけ此方は內心得意でゐたなども、今から考へると馬鹿々々しい話だ。

此の敎師は然し別の意味で僕の文學開眼者の一人になるので、柴田某氏といつた。これが又『自然と人生』愛好癖をもつた人で、宿題にして每日あの本の中の一文づゝ暗誦させる。作文の時間にそれ

を書いて出さす、黒板に書かせる。出來ないと次の時間に又やる。夏休み冬休みには十篇位づゝ暗記させられたものだ。これには誰も恐れ入つた。然し教師先生自身、全卷を暗誦しての上のことだから何とも文句のいひやうがなかつた。學殖はさう大してなかつたらしいが、いかにも熱心な、「情熱家」といつたやうな人であつた。

此の義塾は僕等が、三年生になつたとき一時廢校となり、校舍は縣立工業學校となつた。僕はこゝに二年間しか通はなかつたが、その二年間に僕の知識や讀書力が、實によく生長した。その意味で、（勿論完全な意味でゞはないが）僕の心の故郷は、この義塾であつたといひ得よう。

三年から縣立青森中學校へ轉校したが、この學校は商業地のせゐであつたか、校長（栗原英之助）の好みから出たものか、英語が實に盛んであつた。義塾でも勿論英語は普通の中學校並にはやつてゐたのだが、青森中學は、それどころではなかつた。だから轉校當時は毎日この英語で苦勞したものだ。英語の課目だけでも義塾の倍位ゐあつたらう。此の英語勉强から僕の早大英文科入りとなるのだ。

青森中學へ移つてからもいろいろな話があるのだが、それは又、いつか書くことゝして、この邊でやめて置く。（昭和十二年一月「讀者感興」三ノ一）

評書五篇

宮島新三郎君著

「改訂・明治文學十二講」

宮島三郎君の『明治文學十二講』が、頁を倍加した改訂版となつて更生した。

宮島君の此の書は今日ではかゝる類書のうちでやゝ古典的な不朽の位置を占めてゐる。明治文學研究史上では、さう大規模なものではないにせよ一のエポックを形づくる名著として既に斯道の研究者同志の間の公認をかち得てゐる。友だちの本を、改まつた文句でかう賞めるのも可笑しなものだが、然し正直なところ、それに違ひないのだ。宮島君は舊版の方の序言で此の書をかくについての自分の態度を宣明して——

「在來の單なる記述的文學史を書かうとしたものではなく、文學を論じつゝ自らにして文化の推移が分り、時代の變遷が分るやうにと思つて取扱つた」といつてゐるが、かく文學を通じて社會を見、社會に依つて文學を明かにするといふ研究法は唯物史觀が明治文學と甚しく接近して來た今日では極

めて普通の事のやうに思はれるが、然し當時では、それが光輝ある華やかなアドヴェンチュアであり、明治文學の觀方としては正に一のいき〱としたクリエーションであつた。

……◯……

宮島君は此の改訂版を出すについて、入門書としては依然いくらかの價値があるかと思ふ云々と謙遜の辭をのべてゐるが、いくらかどころか、手頃な纏つた、新しい觀方の明治文學史入門としては、今日依然此の書以外にない。その意味で、宮島君がもつと早く此の新版を出さずに長い間讀書子や研究家に待ちぼうけをくはしたことを、僕は大變な怠慢だと責めたいくらゐのものだ。

此の書は初めから小説方面に力點を置いてゐることは、小説が明治文學の主潮だから當然のことでもあるが、その他に大きな理由がある。それは、此の書が元來宮島君の企圖した大プランの一部分をまとめたものだといふ點にある。宮島君は元來可成大がかりな明治文學史をかくつもりで、その案を立てた、さうして先づ小説の事を書き、次に戯曲、新體詩・その他の散文、韻文方面にも行く筈であつた。だが、いろ〱の故障からそのプランがそのまゝ實行されず、最初着手した小説の部分だけがまとめられることになつた。これが根幹となつて出來たのが此の『十二講』なのだ。そこをのみこんで讀んでもらひたい。

……◯……

その代り、本書の不足をみたさせることは遠からず出來やう。宮島君は今新に『明治文學概論』を書きつゝある。これは文學と社會の關係をみる點に於いて一層進んだものであり、その一端はこの改訂版にも示されてゐる。『概論』はもう書かれつゝあるのだから、さう僕等を待たせはすまい。

何れにせよ、此の『十二講』改訂版の出現は、久しく閉ぢられてゐた明治文學研究へのゴールデン・ゲイトが新に開かれたことを意味する。僕の此の拙文が一人でも此の門に入る人を多くする角笛の役が出來れば、何より結構である。(東京出版社發行　定價二圓)

(昭和七年七月十一日時事)

宮島新三郎君著

「遺稿・明治文學概論」

宮島君の遺稿の評を執筆するに當つて、私は若干の逡巡を感ずる。それはこの「遺稿」が殆ど私の手で纒められ、私の手で剪裁されて出來たものだからだ。然し一面又何うしても執筆しなければならぬといふ氣持もある。これは同じ理由で、自分のやつたものだけに、此の書の類書に優れた點を讀者にすゝめるのが一つの義務でもあるやうに思ふからだ。考へてみると、この逡巡の氣持には無理に押し

通さなくてはならぬ理由はないのだが、義務感の方は何うしたつて一度は果さなくてはならない。そこで思ひきつて威勢よく先づ隗から始めるとする。

「遺稿明治文學概論」には題名の遺稿の外に、「日本文學に及ぼしたる西洋文學の影響」、「明治文學思潮」、「早稻田文學及び早稻田派」の三篇が收まつて居り、何れも宮島君の明治文學研究の業績を記念すべきもので、遺稿とはいへ、いはゞ明治文學遺著全集といふ方が內容的にふさはしいものである。

書中の過半を占めるものは「明治文學概論」である。これは昭和六年宮島君の第一回發病後、今でも明治文學研究の方ではエポツクメーキングの名著として賞賛されてゐる「明治文學十二講」を完全に書き改めて、舊著に數倍する大著としようといふ意圖で始められたものであつた。宮島君は或はこの時から自分の健康がさう續かないのだと覺悟したらしく、不朽の仕事を殘すつもりか何かで恐ろしい意氣込みでこれに着手した。そのために相當大掛りな準備もした。元來が負け嫌ひの宮島君のことであるから、勿論他人の研究の結果だけを寄せ集めた屋上屋的な著作に甘んじてゐられなかつたのは當然であるとしても、「明治文學概論」を書く支度がこれ程に大掛りなものだあつたとは、今度君の死後その藏書の整理に當つて始めて知つたわけだ。例へば明治初期の部分でいふと、初期の立物假名垣魯文の研究には野崎氏の「假名反古」があり、從來の研究家はこれで間に合してゐる。然るに宮島君はそんなことでは滿足が出來ず、一々魯文の作を買ひ集め、自分でそれを讀んで結論をつくつた。松

村春輔の如きもさうだ。これも一々彼の作を讀んで何等か新しい意味を發見しようと骨を折つた。又飜譯文學の如きは、私のやつたものが相當詳しいものがあるからそれを使つたら濟むだらうにと思ふところでも、一々本を買つて自分で讀んでみなくては承知しなかつたらしい。病後の宮島君としてはこゝまでやることは大抵な努力ではなかつたらう。それで遂に初期以後に及ばぬうちに病氣を再發させ、たうとう完成を見ずに逝つたわけだ。從つて「概論」も、丁度本舞臺に入るところで中絶のやむなきに至つてゐるが、史觀の確實といひ、背景の吟味といひ、思潮の探求といひ「明治文學十二講」とは又別な意味で研究的進境を示してゐる。特に注目されるのは「明治文學十二講」が文化史的立場から書かれてゐるのに對し、「概論」の方は一歩進んで明白に社會學的立場に據らうとした痕が見えることである。たゞ惜むべきは、宮島君は病氣後であまり明治文學や明治文化研究の會合に出席されなかつたので、かゝる研究の最新の成果を利用出來なかつたやうなところが二、三見える。然しその代り又宮島君のズバ拔けた頭惱のよさを示した獨自の研究に成るところも少くない。彼の「哲烈禍福譚」に對する政治的解釋の如き、かゝる鋭い見方の一つとして正に推稱すべきである。

その他の諸篇についていへば、「日本文學に及ぼしたる西洋文學の影響」は批評中心といふ副題がついて居り、自ら明治批評略史となつてゐる。短い割合に纏まつて居り、文章にも光彩があり、宮島君の興味の集中されてゐた問題だけに、全く「君ならずば」といひたいものがある。吉江喬松博士の如

きも此の一篇をもつて宮島君の才能の最後の光輝と評したことがあつた。殊に面白いのは明治批評に對するアーノルド移入の經路、明治批評文學に屬する大西操山の貢獻、沒理想論の意義について語つたあたりである。

「明治文學主潮」は本來は「明治文學概論」の異稿とでもいふべきもの、異稿といふのが變であれば第一稿乃至第一案といつても可い。「早稻田文學及早稻田派」に至つては、近く改造社の日本文學講座に掲載されたものであるだけに知つてゐる人、讀んだ人も多いと思ふから、こゝでは贅しない。

いはゆる研究といふことを文字通りに解すればこの遺稿集一卷こそ、宮島君の明治文學研究に捧げた全努力の結晶といつてもふさはしいもので、讀者はこの一卷で宮島君の明治文學に對する造詣なり見識なりを窺ふに十分である。宮島君の晩年の大仕事が未完成で終つたのは是非がないが、その大仕事の礎石ともいふべきこの書は、永く研究學徒の一指針として愛重されることを疑はない。

裝釘の瀟洒簡素と本文のゆとりある組み方は此の種の本として如何にも恰好であり、これ又讀書子の好感を惹くに十分であらう。（菊判二百餘頁、定價一・六〇、東京出版社）

（昭和九年六月二十一日「時事」）

戯曲「西園寺公望」(木村　毅君著)

これは戯曲の形をかりた西園寺公望傳だ。成る程木村君は種々工夫して戯曲と宣言しただけの形を取りつくらうとはかゝつてゐる。然し腹の底を割れば、勿論これが大歌舞伎に上場されると思つてゐまいし、これで天晴れ舞臺効果とやらを收めて劇評家たちから、これはお手際とほめられたい豫算でもなかつたらう。要するに戯曲形式をかりた傳記文學なのだ。木村君の腹をいへば、西園寺公のことは是非書きたい、だが傳記がもう二つも三つも出たあとだし、小泉さんの權威的なものが出るしするから傳記の形では書きたくない、一つ形を代へて往けといふのだ。だが小説には前に一度書いたし、今度は何うしても戯曲となる。そこで杜子美君の所謂苦心慘澹經營裡といふヤツで、この五幕十一場のレーゼ・ドラマとなつたわけだ。

×

だが腹の中がイクラさうでも戯曲といふ發表形式をとつた以上、その制約には從はざるを得ない。且つ作者としては上場を豫期しなくても、何んな名優が「是非これを」と所望して來ないとも限らない、その邊の用心もある。それで腹稿を變へた。それは木村君から漏らされてもゐるし、今この戯曲

を讀んでもそれがわかる。例へば、第二幕のパリコンミユーンのところで、本當は西園寺公の心裡の感激といつたものをもつと露骨に出す筈だつた。又この戲曲にはたうとう出ずにしまつたが、たしか政友會總裁乃至總理大臣としての西園寺公が一幕あつた筈だ。その外、西園寺公を主題にしたといふだけで大きな德をしてゐるところもあるが、戲曲として意外な損をしてゐる點も見える。つまり戲曲としては史實に正直すぎはしなかつたか。例へば第三幕の星旗樓のところでも、史實はこの通りであるにせよ、戲曲としては矢張り俗傳のやうに西園寺公のヤンチヤ振りにした方が面白かつたらう。

×

だが、戲曲といふ形式を離れて、傳記文學として讀むと、近來こんな面白い讀物はない。西園寺公望といふ存在が明治から大正昭和へかけての日本に何れだけの政治的意義をもつか、それには自ら異論もあらう。然し文化史的にいへば、この存在は立派に代表的なものである。日本的東洋的なものものゝうちに西洋的ないゝものを攝取して渾然と自の風格に磨き上げたその姿は、實にいゝ、教養の權化だ。立派に近代日本文明の進度を批判する標準になる。木村君はこゝを狙つた。近眼何度とかいふが、それを操つて世界的に動いてゐる眼（ジヤーナリ眼とでもいふか）には狂ひがない。この意味で戲曲「西園寺公望」は西園寺公の口をかりた近代日本進化の文明批評なのだ。

×

後半の文献解題は「西園寺學」の基礎を成すもので、有益且つ貴重である。尙、裝幀に就て特筆すべきは、最近良心出版を以て本旨としてゐる書物展望社のことゝて、背は青竹に組紐を以てメめ、題名は一々彫刻して居り、ヒラはそれを承けて筍皮を用ゐてゐる。裝幀もこゝに至つては或は一部からは凝つては何とやらの評も飛び出すかも知れないが、そこは齋藤老のことだから、單に奇拔をねらつたり、お向ふの拍手を期待したりしての結果ではない。これは勿論園公の雅號「竹軒」に因み、且つ公の愛杖にも關聯さしたもので、盛られた內容とシツクリ合致さしたものである。それに書物と竹との古い關係もあることであれば、決して奇を衒つた考案ではない。齋藤老にしてシテのけた裝幀であり展望社にして初めて出版される書物であり、正に書籍裝幀史上世界的記錄を創つたものと云つていい。近來の珍中の珍としても過賞ではあるまいと思ふ。（定價二圓五十錢、書物展望社發行）

（昭和八年六月二十一日「時事」）

「續福澤全集」第一卷

告白といふ程でもないが、私も初めはこの全集の「續」の一字に妙な遠慮を覺えた一人である。「欲しいのは欲しいが、續だけで正がなくては仕方がない」――この全集の題を見ると誰しも一寸さう感

じさうだ。だが愈々第一卷を手にするに及んで、そんな遠慮が全く無用だと分かつた。この全集はこれだけで立派に獨立してゐる。內容的には「續」の字に些も煩はされてゐない。よく世間にある「續何々集」のやうに正集に較べて格段價値の落ちる續集とは違ふ。私は豫期しない大きな興味をもつて第一卷を卒讀した。

この全集の成立、總體の內容については、林先生の序もあり、編輯主任石河先生の刊行の辭もあることだからこゝで繰返すことはせぬが、特に第一卷についていへば、これは時事論集即ち時事新報の創刊以來福澤先生が同紙に寄稿した論文雜記漫言を年代順に整理したもので、第一卷はそのうち明治十五、十六、十七年の三年間分がギツチリ收まつてゐる。何より有難いのは編輯振りの親切なことである。每年度初めに概說があつてその年度の論文の內容の要項を教へてくれる。更に必要な事項は本文の註として掲げてある。又正集と相對照したらと思はれるところは正集のその條を掲げてある。痒いところに手が屆くといふか、嚙んでふくめるといふか、讀者本位の骨折りは、實に此種の編纂として理想的たるに近い、想ふに、時事新報の創刊された明治十五年前後は、政治的に、經濟的に、外交的にその他あらゆる點に於いて日本の新國家が劃期的な動搖と混迷を感じた時代である。發展前の一時的現象といへばいへるが、それにしても當時の日本國民は屹然前途を指示してくれる指南車を求めてゐた。福澤先生が時事新報なる一大炬火を手に街頭に躍り出されたのはまさにこの時である。先生は大

膽に卒眞に細心に、而も空論に走らず迂遠に陷らず、よく國家當面の問題を捉へてこれを論評し、常に國民の向ふべきところを暗示した。先生の暗示は大抵の場合卑近な實例と平易な言辭によつてゐるが、最後にズバリ痛快な結論を投げ出すのである。先生は決して遠慮しない。曖昧の言を弄しない。言ひたいことをハツキリといふ。眼には公侯も大臣もない。唯日本民衆と國家の前途あるのみである。この集を讀んだ私は、始めて先生の眞面目の一端にふれたやうな感じがした。先生は世の所謂學者先生教授先生と違つて、火のやうな fighting spirit をもつてゐられる。一見諄々と說いて倦まないやうな長論文の影にも、この火のやうな魂を感じないではゐられない。十五年は從來甚だ進步的だつた明治政府が民間の政論の勃興に怯えて漸く保守反動の政策を執り始めた轉機である。福澤先生は容捨なく反動の精神や政策を呵責され、却つて日本社會の文明的進步を急行に改めよと絕叫された。先生はあくまでもその日本文化の先驅的使徒たる使命を持續された。

殊に私が驚いたのは　先生が日本の將來のみならず、世界列强の將來に對して豫言的眼光を投げてゐることである。獨逸の東洋進出はいふまでもないが、殊に米國の軍國主義とならざるを得ない點を論じたところには、我ながらハツと思つた程である。(「米國の前途如何ん」)

第一卷を通覽して、先生の論敵となつたのは東京日々の福地櫻痴であり、よく二人で遣り合つてゐるが、福地は往々手ひどく打ち込まれて參つてゐる。この時の福澤先生のやり方はソクラテス流で、

福地に散々言はした後で、前に福地の論じた文句を引用して今度の論旨との矛盾を責めて福地を狼狽させるのであるが、その論法が、讀んでゐても、福澤先生の案外イタヅラらしい眼光がチラチラする程面白い。

漫言は文字通りの漫言で本格の論文ではないが、論文では道破出來ないやうなことが諧謔の筆から滲んで來る。ジャーナリストとしての福澤先生を知るには好個の資料であらう。製本裝幀の點もかゝる書物としては申分なく佳、單に日本文化發展史の文獻的參考書としてのみでなく、巨人の眼光を潜つた時代の活寫眞として、讀んで實に津々たる興味がある。敢て第二卷以下の配本を待つ。（岩波書店△豫約、全七卷、一册四圓）

（昭和八年七月四日「都」）

後藤　宙外氏著

「明治文壇回顧錄」

この書の內容は「藝術殿」に連載されてゐたころからチョイチョイ讀んでゐたから、全部が初對面といふのではないが、今度大學新聞からこの書について何か書いてくれまいかと賴まれて、初めて通讀した。かうして纏めて通讀してみると、雜誌で讀んだ時とは違つた意味で、更に面白く讀まれた。

雜誌で讀んだ時に、資料意識が强かつたせゐか、大變參考になるものだといふ印象の方が先に立つてゐたが、今度平心で通讀してみて文學資料としては勿論好參考書だが、それよりも讀みものとして讀んでも興味津々たるものがあることを知り、實に卷を惜くに忍びない氣がして、讀後、燈下に表紙を撫してしばらく瞑目したものだ。

「宙外後藤寅之助」の名は、われ等にとつて大きな名だ。自然主義以前、寫實小說時代の花形作家として、いはゆるエポツク・メーカアの一人として、明治文學史上不朽の印象を止めてゐる。早稻田文學科の生んだ創作家として、文壇的に力量を識認されたのは、恐らく氏を以て第一とする。全盛時代の氏の名聲には、抱月といへども一歩讓つたかもしれない。その文壇の飛將軍が、時事の非なるを悟つて筆を折り、壇を下つて、さつさと故鄉に引退し、我と自ら半隱半俗的生活に韜晦した。それももう古い。「宙外」の名が、持主と離れて全く歷史的になつてしまふ程長く續いた。遂にはその名さへも、記憶してゐる人々が稀になつた。早稻田の人々でさへがさうであらう。だが畢竟、氏の名前は決してさう忘却に委ねていいものではない。それはこの「回顧錄」を一讀せば、すぐ氣付くことだ。

とはいへ、「回顧錄」そのものに自己辯護的な過去の glory に感傷するやうな分子があるといふのではない。この書の追憶はむしろ極く素直な、誇張のない、諦念的なものだ。淡々とした風懷、簡淨な文字、それが却て讀む者をして低回去り難い思ひをさせるのである。

×　　×

この書の内容は二十項、第一から第六までは著者宙外氏の早稲田文科（この頃は專門學校といつた氏は實に第二期文科卒業生だ）在學時代から、丁酉文社に據つて新著月刊を發刊し、文藝倶樂部、新小說と旗鼓相當つた時代のことで、殊に自叙傳的文字が多く、宙外氏を中心とした早稲田派文學史とも見得る。第七から十二までは紅葉、柳浪の印象が中心となつてゐるが、文學史的に早稲田派と硯友社との關係を辿ることが出來る外、紅、柳二文豪に關する逸話逸聞が多く、二家の功罪を評定する際の參考となるものが多い。殊に氏自身の見た二家の性格のスケッチなど、實にしみじみと懷かしい感じがする。第十三から第十八までは、主として新小說主筆時代の回顧である。この時代の條では啄木と、の關係も創聞が多く面白いが、私個人として殊に懷しかつたのは甲山大塚壽助なるものゝ存在を高調してゐる點だ。私自身、新小說の雜錄で此人の詩や雜文を讀み、實に同情に堪へなかつたものだ。私は啄木のことは、可成り後まであまり知らなかつたが、大塚甲山のことは中學生時代、或はもつと前から知つてゐた。宙外氏の回顧は全く功德だと思ふ。啄木と詩才を比較してみたら何うかと思ふが、貧窮に呻き死んだ一個の詩魂として、強く人の胸をうつものがあるのだ。

その他、子規、古白、綠雨などについても、珍らしい資料があり隱れた半面が語られてゐる。

第十九は抱月の印象、氏の文藝上の立場は抱月とは反對であつた。抱月の自然主義に對し、氏は非

自然主義を以て對抗した。さうして敗れた。この事は氏自身潔く認めてゐる。だが一面二人は學校時代からの親友であつた。それだけに氏の抱月觀は　却つて抱月贔屓の人々では描破出來ない深酷なところがある。

第二十の文藝革新會の活動は、自然主義全盛時代における反面の文壇的動きを語るものとして文學史的に貴重な資料だ。今日、氏あたりから伺つて置かぬと、この運動の眞相も埋沒してしまはう。全くいゝ時に書いて下さつたとお禮を申したい。雨聲會の記事も、これだけ纒まつたものは他にあるまいから、矢張り長く研究家の典據とならう。

×　　×

全篇に亘つて、かういふ回顧談にあり勝ちな記憶の錯誤が甚だ少ないことも氏の頭惱の强健を示すものとして祝すべきであらう。然し一二誤記らしいものがあることはある。（一四一頁）の柳浪の詩は津田三藏の時のものではなく、恐らくはずつと前明治十四年に露帝が虛無黨の爆彈に崩殂した時のもの、それでないと詩意がメチヤ〳〵にならう。又（一六二）二宮撫松は孤松だ（問題の新聞は「二宮孤松傳」に詳しいから）、尙ほ一二、年時代の誤記かと考へられるのもあつた。

「宙外」の名の懷しさの余り、つい無遠慮な文字を書き陳べたが、氏よ後生の妄言に怒らず、更に大規模な、更に詳しい自叙傳を惠んで欲しい。今日、明治文學史の研究も大いに盛んになつたが前半

分が明白になつて來た割合に後半分、即ち日清戰爭以後、日露戰爭までの間が、まだまだ暗黑時代の觀がある。これを照す燈臺ともなるべきものとして、今のところ、あなたや鏡花氏などの自叙傳的文章に俟つことが多いからだ。何卒もう一度ふんばつして頂きたい。（岡倉書房發行、定價二圓）

（昭和十一年六月三日、早大新聞）

昭和十三年八月一日第一刷印刷
昭和十三年八月五日第一刷發行

續 隨筆明治文學

【定價】二圓五十錢

版權所有

春秋社

著作者 柳田泉
東京市小石川區西丸町二五

發行者 神田龍一
東京市日本橋區吳服橋二ノ五

印刷者 本間十三郎
東京市牛込區矢來町卅六

印刷所 濤揚社
東京市牛込區矢來町卅六

發行所 春秋社
東京市日本橋區吳服橋二ノ五
振替(東京)二四八六一

發賣所 株式會社 松柏館
東京市日本橋區吳服橋二ノ五
振替東京三九七一六 電話日本橋二六二四